

聖徒の道 1 1983

第152回半期総大会報告



1

1983

January

第27巻
第1号

○第一五二回半期総大会報告

●——目 次

第152回半期総大会報告	2
10月2日(土) 午前の部会	
主は義を求めておられる	スペンサー・W・キンボール…4
羊に命を得させる	ゴードン・B・ヒングレー…8
すべての人を愛しなさい	デビッド・B・ヘイト…14
「私の身も心も聖文を喜ぶ」	J・リチャード・クラーク…19
信じる人と行なう人	マーク・E・ピーターセン…24
10月2日(土) 午後の部会	
教会役員の支持	ゴードン・B・ヒングレー…29
「走れ、少年よ走れ」	トーマス・S・モンソン…32
末日聖徒の讃美歌——音楽による礼拝	フランクリン・D・リチャーズ…37
信仰——生きる力	レックス・D・ピネガー…41
神に心を向ける	レックス・C・リーブ・シニア…45
「監督たる者は責められる点がなく」	L・トム・ペリー…49
7人のキリスト	ブルース・R・マッコンキー…54
10月2日(土) 神権部会	
アロン神権者の活発化	C・フレデリック・ピンゲル…60
僕たちの活発化	ミツシエル・ニコラス…64
アロン神権者に新たな活力を吹き込む	ロバート・L・バックマン…66
息子の心を備えよ	H・バーク・ピーターソン…72
アロンの神権	ゴードン・B・ヒングレー…76
神の神権	マリオン・G・ロムニー…82

10月3日(日) 午前の部会

神への感謝.....マリオン・G・ロムニー.....86
 聖典.....ポイド・K・パッカー.....90
 成熟の意味.....デレク・A・カスパート.....95
 決意の時は今.....ハワード・W・ハンター.....100
 家族を永遠のものとするために.....エズラ・タフト・ベンソン.....104
 高価なる真珠.....J・トーマス・ファイアンズ.....108

10月3日(日) 午後の部会

清い信心.....マービン・J・アシュトン.....112
 喜びをもって生きなさい.....ニール・A・マックスウェル.....117
 救い主の友、僕、息子となる.....ロバート・E・ウエルズ.....123
 いかにかすかな光であろうと.....ボーン・J・フェザーストーン.....127
 「わが喜ぶ愛子を見よ」.....ジョージ・P・リー.....132
 愛と親切の手を差し伸べよう.....ゴードン・B・ヒンクレー.....137
 与えられた勧告を実践する.....N・エルドン・タナー.....141

10月2日(土) 福祉部会

明日に備える.....ビクター・L・ブラウン.....143
 教会福祉の原則の応用——家庭における
 様々な問題を解決するための鍵.....バーバラ・B・スミス.....149
 家族が共に働くことによりもたらされる祝福.....ディーン・ジャーマン.....154
 経済的な試練に立ち向かう人に与えられる祝福.....ジェームズ・E・ファウスト.....158
 日の光栄に至る自立の本質.....マリオン・G・ロムニー.....164
 ローカルページ.....170

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スベンサー・W・キンボール
 N・エルドン・タナー
 マリオン・G・ロムニー
 ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
 マーク・E・ピーターセン
 リグランド・リチャーズ
 ハワード・W・ハンター
 トーマス・S・モンソン
 ポイド・K・パッカー
 マービン・J・アシュトン
 ブルース・R・マッコンキー
 L・トム・ベリー
 デビッド・B・ヘイト
 ジェームズ・E・ファウスト
 ニール・A・マックスウェル

顧問

M・ラッセル・バラード
 ローレン・C・ダン
 レックス・D・ピネガー
 チャールズ・A・ディディエ
 ジョージ・P・リー
 F・エンツィオ・ブッシュ

編集長

M・ラッセル・バラード

国際機関誌

編集主幹：
 ラリー・A・ヒラー
 編集副主幹：
 デビッド・ミッチェル
 子供の責編集：
 ボニー・ソングダース
 デザイナー
 ロジャー・ギリング
 制作：
 ノーマン・ブライス

1983年1月号 聖徒の道 第27巻第1号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-440-2351

制作・配送 東京ディストリビューション・センター

東京都世田谷区上用賀4-9-19

電話 03-427-4311

印刷所 株式会社 精興社

定 価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)

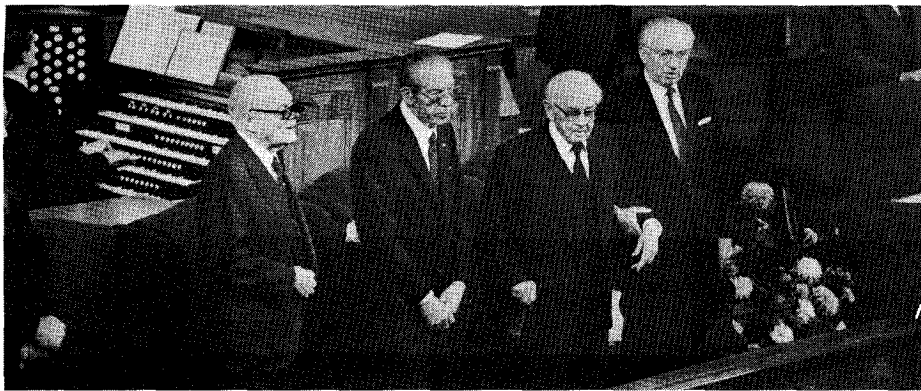
半年予約1,100円(送料共)

1部180円, 大会号350円

International Magazine PBMA 053AJA Printed in Tokyo, Japan.

© 1983 by the Corporation of the President of the Church of J. Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

定期購読は、「聖徒の道用予約申し込み用紙」でお申し込みにな
 または現金書留か振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教
 東京ディストリビューション・センター 振替口座番号/東京
 41512)にてご送金いただければ、直接郵送致します。注:お届
 の変更がありましたら、早急にTDCにご連絡下さい。



左よりマリオン・G・ロムニー第二副管長、N・エルドン・タナー第一副管長、
スペンサー・W・キンボール大管長、ゴードン・B・ヒンクレー副管長

末日聖徒イエス・キリスト教会 第152回半期総大会報告

1982年10月2, 3の両日、ユタ州ソルトレーク・シティー、テンプルスクエアのタバナクルにおいて催された大会の説教とその模様。

スペンサー・W・キンボール大管長は、10月に催された今大会の開会に当たり、次のような説教の原稿を準備された。

「兄弟姉妹の皆さん、福音をさらに多くの国々や人々に携えて行く日がやって来ました。私たちは自分の都合よりも、このメッセージを分かち合う義務について考えるようにしなければなりません。主の召しに都合のよいものなどめったにありません。犠牲を教会における重要な一要素としなけれ

ばならない日が来たのです。……伝道期間が短縮された今、一層多くの宣教師が求められています。」

この召集のラッパを響かせながら、現代における主の予言者は、「善を行なうのに倦み疲れてはならない、歩みを速めなければならず」と教会員を激励している。

また、キンボール大管長は社会状況にも言及している。「危険に満ちていながらきわめて重要なこの時代は、広く悪に汚染され

ているように思われます。しかし、私たちはあらゆる混乱のただ中にあっても、内なる平安を得ることができます。……教会の指導者は、主の目から見て赦されないことに対して、絶えず反対の声をあげているのです。心と体と環境の汚染に反対し、俗悪、盗み、虚言、詐欺、高慢、冒瀆、飲酒に反対し、姦淫、同性愛、墮胎、その他神聖な創造の力のあらゆる乱用に反対し、殺人とそれに類するすべての行為に反対し、そしてあらゆる種類の退廃と罪に反対するのです。」

こうして第152回半期総大会は、マリオン・G・ロムニー第二副管長と、ゴードン・B・ヒンクレイ副管長の司会の下に、幕が開かれたのである。

大会は6つの部会に分かれ、土曜日には早朝の福祉部会、午前、午後の部会、夜の神権部会が、また日曜日には午前と午後部会が開かれた。教会幹部は十二使徒定員会会員のリグランド・リチャーズ長老を除き全員が出席した。リチャーズ長老は快方に向かっているとのことである。

今大会では教会の進展を示すふたつの大きな出来事が発表された。内、ひとつは十二使徒定員会会員のボイド・K・バッカー長老により発表された。彼は十二使徒定員会の聖典出版委員会のメンバーの任にある。ここ数年の間に行なわれた末日の聖典の新たな編集に関し、彼はこう述べている。「また、御存じのことと思いますが、幹部の兄弟たちの指示により、今後モルモン経には『イエス・キリストに対するもうひとつの証』という副題がつくことになりました。」

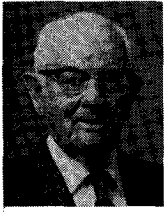
主イエス・キリストの使命と教えに関して、これほどの量の情報が聖典から集められたことは、世界史上例を見ないことでした。」

第二の重大な進展は、アメリカ全土に散在する404のステーション部で衛星による中継放送が受信できるようになったことである。この結果、およそ25万人の教会員が、総大会の模様をテレビの生放送で見ることができるようになった。なお、1982年4月の総大会では、約90の衛星中継設備が使用されていたに過ぎなかった。

また、アメリカの民間放送局85局、有線放送局1,300局、ラジオ局は55局以上が大会の全部会またはその一部の模様を伝えた。カナダでは55局以上のテレビ局が、全大会またはその一部を放映した。また、1,770の礼拝堂では、神権部会を英語のまま有線回路を利用して生放送で放映した。有線回路を利用した礼拝堂の内訳は、アメリカとカナダが1,646、ニュージーランドとオーストラリアが114、韓国とフィリピンが10である。

また、大会後直ちに、スペイン語、ポルトガル語、デンマーク語、フランス語、ドイツ語、スウェーデン語、ノルウェー語、フィンランド語、イタリア語のビデオテープが準備された。





主は義を求めておられる

大管長 スペンサー・W・キンボール

(秘書D・アーサー・ヘイコック兄弟の代読)

愛する兄弟姉妹の皆さん、主の教会の総大会で再び皆さんにお目にかかることができ、心から感謝しています。私は総大会をいつも心待ちにし、そこから力を得ています。また、主の靈感の下に与えられる勧告と指示をひたすら受けたいと願っています。そこで話されることを注意深く聴いて実行するならば、私の生活は豊かになり、内なる霊は生命のパンによって養われるからです。

ただ今歌って下さった素晴らしいタバナクル合唱団は、総大会の霊的な雰囲気高め、喜びをもたらしてくれます。タバナクル合唱団は先頃、半世紀以上にわたって放送している「ミュージック・アンド・スポークンワード」が、自由世界で最長のラジオ番組になったのを記念して、記念行事を行いました。タバナクル合唱団とオルガンの奏でる美しいメロディーを聞くと、天上にも美しい音楽があるに違いないという思いが湧いてきて、慰めを感じます。そのことに私は心から感謝しています。来世には音楽はないと言う人もいますが、それなら音楽として通る何らかの音があるのではないのでしょうか。

この6カ月間、キンボール姉妹と私は、あまり活発に動き回りませんでした。皆さんも御存じのように、年老いてきたために私共は多少体が不自由になりました。私は今

になって、最後まで耐え忍ぶことの本当の意味がわかってきたように思います。自分のしたいと思うことが存分にできないのは、本当につらいものです。しかし、それでもまだ私はたくさんのことを行なっています。ほとんど毎日のように教会本部で幹部の兄弟たちと集会を開きます。そして毎週木曜日には神殿で、大管長会と十二使徒評議員会の集会に出席します。

その上、予定外の活動も幾つか楽しみました。夏には、キンボール姉妹と一緒にソルトレークバリー・ダンスフェスティバルに出席し、開拓者記念日にも出かけてロデオを見ました。また先週の土曜日には、新しく拡張されたプロボのBYUスタジアムで、BYUと空軍大学のフットボール試合を65,000人の人々と観戦しました。

私は献身的に働いて下さるタナー副管長、ロムニー副管長、そしてヒンクレイ副管長に感謝します。これらの方々日々差し伸べて下さる愛と忠誠心を考えると、私は晩年のモーセのことを思い出すのです。イスラエルの民はアマレク人と戦っていました。「モーセが手を上げているとイスラエルは勝ち、手を下げるとアマレクが勝った。

しかしモーセの手が重くなったので、アロンとホルが石を取って、モーセの足もとに置くと、彼はその上に座した。そしてアロン〔モーセの兄〕とホル〔モーセの姉ミリアムの夫〕が、ひとりはこちらに、ひと

りはあちらにいて、モーセの手を支えたので、彼の手は日没まで下がらなかった。」

(出エジプト17:11-12, 欽定訳より和訳)

しかし、モーセといえども、私が今、副管長の兄弟たちから受けているほどの助けは得られなかったと思います。私はまた、ベンソン会長と十二使徒定員会の方々に、その他の教会幹部の方々に、そして主のぶどう園で勤勉に働いているすべての方々に感謝します。ただ、愛する友のリグランド・リチャーズ長老がこの場におられないことを残念に思います。リチャーズ長老は1938年以来、ずっとこの席に座ってこられたのです。

私は世界中の至る所で教会が発展していることに満足しています。今年の4月に総大会を開いて以来、50近くの新しいステーク支部が認可または組織されました。また5



カ所の神殿用地で鋳入れ式が行なわれました。これらはすべて、王国の発展を表わす重要な指標です。私は主の教会が数字の上だけでなく、霊的な面でも発展するようにいつも願い、祈っています。

兄弟姉妹の皆さん、危険に満ちていながらきわめて重大なこの時代は、広く悪に汚染されているように思われます。しかし、私たちはあらゆる混乱のただ中にあっても、内なる平安を得ることができます。私たちは豊かに祝福されているので、感謝すべきことがたくさんあります。これらのことについて静かに考えると、次の主の言葉が心に浮かんできます。「多く与えられた者からは多く求められる。」(ルカ12:48) 主が私たちに求めておられることは、主の戒めを忠実に守ることです。なぜなら、主は御自身の命を惜しみなく捧げて、私たちに豊かな祝福を与えて下さったからです。罪悪が全地に蔓延し、悪魔はこの世で自分に残された時間を最大限に利用しているようです。ですから教会の指導者は、主の目から見て許されないことに対して、耐えず反対の声を挙げています。心と体と環境の汚染に反対し、俗悪、盗み、虚言、詐欺、高慢、冒瀆、飲酒に反対し、姦淫、同性愛、墮胎、その他神聖な創造の力のあらゆる乱用に反対し、殺人とそれに類するすべての行為に反対し、そしてあらゆる種類の退廃と罪に反対するのです。

末日聖徒として私たちは心しなければなりません。個人と家庭が悪魔の放つ矢や石投げ器から飛んでくる石を防いで主の大いなる日に備えるには、しっかりと鉄の棒を握り締め、大いなる信仰を表わし、罪や欠点を悔い改め、地上における主の王国、すなわち末日聖徒イエス・キリスト教会の業

にいそしむことです。ここにこそ、天父のすべての子供たちの唯一真の幸福があるのです。世界中のすべての善意ある方々が、末日におけるこの神聖な贖いの業に加わるようにお勧めします。

家族を尊重して、幸福な家庭を築きましょう。家庭と家族についてお話するにあたり、皆さんの愛する人々の安全と幸福に関して、2、3勧告をしたいと思います。私たちの国では、子供の誘拐^{誘拐}という犯罪が増加しています。そのために掛け替えのない子供を失ったすべての方々に、心からの愛とお悔やみの言葉をお伝えします。私はシオンの父親と母親の皆さんにお願いします。どうか子供たちから目を離さないで下さい。そして、ますます巧みになってきた悪の手と陰謀に気をつけるように教え、子供たちの幸福のために祈って下さい。悪魔は死んでもいなければ、眠ってもいないのです。

救い主は幼な子^{幼な子}を愛されました。しばしば幼な子について語り、幼な子たちを小羊のようにみそばに呼び寄せて、祝福をお授けになりました。そしてこう言われました。「しかし、わたしを信ずるこれらの小さい者のひとりをつまずかせる者は、大きなひきうすを首にかけられて海の深みに沈められる方が、その人の益になる。」(マタイ18:6)

私は、いかなる理由や目的があろうとも、幼い子供を母親の手から引き離れたすべての人々に、悔い改めて、私の嘆願に耳を傾けるように訴えます。愛する者の涙と願いが彼らの心を和らげて、彼らが悲しみに沈む家族の下へ子供たちを返さずにはいられなくなるように心から祈ります。

兄弟姉妹の皆さん、福音をさらに多くの国々や人々に伝える日は、きょうこの日で

す。私たちは自分の都合よりも、このメッセージを分かち合う義務について考えるようになるべきです。主からの召しで都合のよいものなど減多にありません。犠牲を教会における重要な原則とすべき日が来たのです。私たちはさらに献身的に働いて、主が望んでおられる業を行なわなければなりません。伝道期間が短縮された今、一層多くの宣教師が求められています。しかし、求められているのは、伝道に出たいという願望を持ち、家族や教会の様々な組織を通して十分な訓練を受け、備えられた宣教師です。若い男性は、両親から励ましを受けて、早くから貯金を始め、福音に関する勉強と祈りを行ない、セミナーやインスティテュートに出席して伝道に備えるべきです。そして最も重要な備えは、清くふさわしい生活をする事です。主は昇天の直前に、使徒たちに次のような言葉を残されました。「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。

信じてバプテスマを受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる。」

(マルコ16:15-16)

私たちは善を行なうのにためらったり、倦み疲れたりしてはなりません。歩みを速めなくてはなりません。私たち自身の永遠の幸福だけでなく、まだこの真の教会の会員でない多くの兄弟姉妹の永遠の幸福も私たちの肩にかかっているからです。1842年9月6日、予言者ジョセフ・スミスはノーヴーから教会員に手紙を送りました。それを読むたびに私は胸の高なるのを覚えます。「われらまことに偉なる大義に向って進まざらんや。進み行きて退くことなかれ。奮い立てよ……進み進みて勝利に至れ。」(教義と聖約128:22)

さて、愛する兄弟姉妹の皆さん、世の中には、私たちがキリスト教会ではなく、つまり異端であって、救い主イエス・キリストよりもジョセフ・スミスを礼拝していると誤って伝える人々がいます。何と真理からかけ離れていることでしょうか。どこが異端でしょうか。主はこう宣言されています。「わが教会は、末の世に於て須らく末日聖徒イエス・キリスト教会と称えらるべし。」(教義と聖約115:4)

私たちはキリストに希望を抱くものです。主は私たちの罪のために亡くなられました。主と主の福音のお陰で、私たちの罪はバプテスマの水の中で洗い流されます。罪も憎むべき行ないもあたかも火で焼かれるように、私たちの心から焼き尽くされるのです。そして私たちは清くなり、清い心を持ち、理解を超えた平安を得るのです。

私たちは、「全能の主キリストの御名によるほかには世の人に救いを与えることのできる名も道も方法も一切ない」(モーサヤ3:17)ことを信じています。これは私た



ちの証であり、私たちはこのことを世の人に宣言します。

また私たちはこのことを知っています。そして証し、世の人々に宣言します。「過去現在未来を通じて、救いは身代りの贖罪をなしたもう全能の主なるキリストの血に由って与えられることを信じなかったならば、その人は身も霊も救いを受けることができない。」(モーサヤ3:18)

「私たちはキリストのことを話し、キリストのことを喜び、キリストのことを説教し、キリストのことを予言し、また私たちの子孫にどこに罪の赦しを求めらるかを知らせるために自分たちが予言したことも書くのである。」(IIニーファイ25:26)

主の教会が回復されてから1世紀半、予言者ジョセフ・スミスを初め、末日の神の予言者たちは権威と真理をもって明快に語り、この大いなる末日のみ業の神性と、イエス・キリストの福音の贖罪の力について証を述べてきました。

これらの力ある人々に加えて、私も証を述べたいと思います。イエス・キリストは生ける神の御子であり、世の人々の罪のために十字架におかかりになりました。イエスは私の友であり、救い主であり、主なる神であられます。私は、聖徒の皆さんが主の戒めを守れますように、主のみたまが皆さんと共にありますように、そして日の光栄の王国で主と共に永遠の受け継ぎにあずかれますようにと、心を尽くして祈ります。

この大会を始めるにあたり、主が祝福と承認を与えて下さいますように。皆さんの上に主の祝福がありますように。私は主の僕として皆さんを祝福します。イエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。



羊に命を得させる

副管長 ゴードン・B・ヒンクレー

兄 弟姉妹の皆さん、ただ今有能で忠実な秘書のD・アーサー・ヘイコック兄弟によって、キンボール大管長のメッセージが読まれました。私は皆さんを代表して、キンボール大管長に感謝の意を表わしたいと思います。

ありがとうございます、キンボール大管長、あなたの勧告に感謝します。特に、永遠の父なる神と私たちの救い主、贖い主であられる御子に対する証に感謝します。私たちは大管長の証に私たちの証を付け加えたいと思います。神は生きておられます。神は宇宙の創造主であり統治者であり、天の御父であられます。イエス・キリストは肉における神の独り子であり、ユダヤのベツレヘムで約束されたメシヤとしてお生まれになりました。イエスは奇跡の御方であり、この世に生きた唯一の完全な御方です。また十字架にかけられ、全人類の罪のために命を捧げて下さいました。そして、その偉大な贖いの業を通して全人類の贖い主となられたのです。イエスは3日目に墓からよみがえって、「眠っている者の初穂」(1コリント15:20)となり、その後エルサレムの周辺で多くの人々の前にみ姿を現わされました。この西半球でも、多くの人が復活されたイエスを見、その体に触れ、教えを受けたことを証しています。私たちは聖きみたまの力によって証を授かりました。その聖きみたまの力によって、これらの類

なき偉大な真理について証します。そして、もうひとつこの証を付け加えたいと思います。それは、この「時満ちたる神権時代」(教義と聖約112:30)は、聖典に記されているように、真理を捜し求めるすべての人のために御父と御子の輝かしい訪れによって開かれたということです。

キンボール大管長、全世界の教会員があなたのために捧げる祈りが天父のもとに届いています。ここであらためて美しい讃美歌を歌いたいと思います。これは、エバン・スティーブンスがウイルフォード・ウッドラフ大管長の90歳の誕生日を祝って書いたものです。

私たちはいつも祈ります。愛する予言者のために、
神が慰めと励ましをお与えになるように。
年老いて額に刻み込まれた深いしわ、
しかしなお内なる光は今も輝いている。

(Hymns, no. 386)

祈りと言え、私は全世界の教会員の方々に感謝します。皆さんがすべての教会幹部のために祈って下さっているからです。私たちは自分たちに大きな、そして絶対的な信頼が寄せられていることを承知しています。また、私たちはこの偉大なみ業を押し進めていく上で、自分たちが力の足りない者であり、神の助けに頼らなければならないということを知っています。この大義が約束された将来を目指して進んで行くと

て監督は私が伝道に出る時がきたと判断し、私たちは再び両親と話をしました。貯金は1,000ドルありました。監督は父に、残りは長老定員会が援助しますと言いました。するとしばらく黙っていた父がこう言いました。『自分の息子のことです。それは私がします。』私は書類を作成し、1961年の5月に召しを受けました。

日本に召された私は、日本人を愛し、そこで素晴らしい経験をしました。同僚と私は何人かの人にバプテスマを施して教会に導きました。伝道から帰ると、再び宣伝部で働きました。そこで働いている時に、昼休みになると、いつも通りで見かける若い女性がいました。私と同じ地域で働いているようです。どこかで会ったような気がしましたが、思い出せませんでした。その頃、伝道中の同僚のひとりが伝道から帰ってきましたが、しばらくしてから、私たちは一緒にあちらこちらへと出かけるようになりました。もちろん私は目が悪かったので、車の運転はいつも彼の役でした。ある晩のことです。彼と一緒にデートに行こうと電話をかけてきました。それで私はデートの相手を探すために大変な苦勞をしました。私たちはパーティーに行きましたが、彼が連れてきた相手はだれだと思えますか。そうです。日本にいたことのあるマリリン・ジョーンズ姉妹です。私は日本で彼女に会った時のことを思い出しました。数カ月の間、道で会いながら、どうしても思い出せなかったあの女性です。

このパーティーの後で、私は2週間、家族と一緒にカリフォルニアへ出かけました。そして家に帰ると、例の友人が、私がパーティーに連れて行った女性とデートをしていることを知りました。私は彼に仕返しを



するつもりで、マリリンをデートに誘いました。車の運転ができないことがどんなに大変なことかおわかりでしょうか。私は妹に車の運転を頼み、ほかに8人の男の子を連れてフットボールの試合を見に行きました。これでは若い女性であればだれだって、二度と私とはデートをしたくないと思うでしょう。しかし私は、家族がキャニオンにチョークチェリーの実を採りに行く時、もう一度彼女を誘ってみました。

やがてふたりだけでデートをする時がやってきました。父が私を乗せてマリリンの家に行き、それから父を家まで送り、ふたりにデートに出かけます。そして帰りには私の家に寄り、父に運転してもらって彼女を家まで送り、それからようやく自分たちの家にもどるのです。その次のデートで私は彼女に結婚を申し込みましたが、断られました。そこでデートを重ねてから、さらに2回ほど結婚を申し込みました。そして、もうひと押しすれば何とかかなるという確信を得たのです。私は自分の選択に間違いはないと考え、頑張り続けました。デー

トを始めてから6カ月後に、私たちはヒンクレー長老の司式の下にソルトレーク神殿で結婚しました。

ヒンクレー長老、私はその当時も彼女を愛していましたが、17年後の今、その愛が自分でも想像できなかったほどに強いものとなっていることがわかります。我が家には現在、5人のかわいい子供がいます。

私は教会でたくさんの責任を果たしてきました。指揮者、アロン神権アドバイザー、長老定員会のすべての責任、ワード部書記補、七十人会長、幹部書記、そして今は副監督を務めています。

私は今もデパートの宣伝部で働いています。13年ほど前に小さな家を買いましたが、家族が多くなったので、ずい分狭くなりました。何とかしなければと思い、家を増築して2倍の広さにすることにしました。そして3年少し前に作業に取りかかり、今までかかりましたが、素晴らしい出来栄です。

ところで、驚くようなニュースがあります。2年前の6月に、新しい眼科医から眼の検査を受けた時、運転免許証にはどのような条件がついていますかと尋ねられました。私が免許証を持っていないと答えると、その医者は、あなたの視力ならおそらく大丈夫ですと言いました。

私は驚いて座り込んでしまいました。妻が『夫は運転免許証を取ることができるのですか』と尋ねると、医者は『もちろんです』と言いました。翌日、妻は私を運転手訓練コースに登録させました。コースを終了した私は免許証を受け取りに行き、そこで視力を調べられました。私は医師から視力の障害状態と、夜間は運転しない方がよいという診断書を書いてもらっていました。検査官が指した文字を私は正しく読みあげ

ました。その検査官は責任者と相談してもどつてくると、わずかな制限を加えただけの免許証を発行しました。

ヒンクレー長老、主は身にあまる祝福を与えて下さいました。人々は、私の目がそこまでよくなったのは本当に幸運なことだと言います。しかし私は、主がそうして下さったことを知っています。私がこれまで主に仕えようと努力し、地上に主の王国を築くために全力を尽くしてきたので、祝福して下さいたのだと思います。主が私に失望されることもあると思います。必ずあると思います。しかし、私は全力を尽くすよう努力し、主が私や家族に下さる祝福にふさわしくなりたいと思います。」

手紙の最後には感謝と証が記されており、その下に彼のサインがあります。このように時間をいただいてこの長い手紙を読ませていただいたのは、この手紙が素朴ながらも雄弁に主のみ業について語っていると思ったからです。

人の心を動かさずにはおかない主からの信頼の下で、私たちイエス・キリストの教会の会員は贖いの業に携わっています。それは、助けを必要としている人々を引き上げ、救うという業です。また、自分が大きな可能性を持っていることに気づかない人々の目を覚まさせる仕事です。私たちは自立し、幸福な家庭を築き営む責任があります。父親と母親が互いに愛し尊敬し合い、子供たちが平和と感謝の雰囲気の中で成長できるようにするのです。

今読んだ手紙を思い返してみ下さい。この男性は16,7歳の頃、目的のないままに押し流され、同年代の多くの若者と同じように、危険な状態にありました。滅びに至る広い道を歩んでいたのです。そのことに

って終わることも、時の流れによって効力が失われることもないということを知っていました。ふたりは最善のものを求めました。ですからほかの何をもってしても満足できなかったと思います。そして、主の宮で交わした神聖な誓約を互いに忠実に守ってきました。立派なことです。

結婚して、ふたりは5人のかわいい子供を授かりました。彼らは、互いに愛と感謝と尊敬の気持ちを示し合う家族です。彼らは自立の精神をもって生活してきました。増築した質素なこの家では、親子が共に集い、互いに助言し、学び合っています。聖典を読み、家族の祈り、個人の祈りを捧げ、奉仕についての教えと模範が示されているのです。それは質素な家庭、気取らない家族です。裕福ではないが、平安と優しさと愛にあふれています。子供たちは「主の36薫陶と訓戒」（エペソ6：4）の中で成長し、父親は忠実に教会の責任を果たしています。彼は何年もの間、与えられたあらゆる召しに応えてきました。同様に母親も、女性と子供のための組織の中で働いてきました。彼らは地域社会、また国家の善良な市民であり、隣人と仲良く暮らしています。彼らは主を愛し、人生を愛し、互いに愛し合っています。

そして、彼の視力が回復するという奇跡を経験しました。これは慈悲深い神の恵みによるものです。これも福音に不可決なものです。神の存在を認め、感謝することに伴う癒しと回復の力です。これが主のみ業のすべてではないのでしょうか。救い主はこう言われました。「わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである。」（ヨハネ10：10）この世のものには恵まれなくても、この私の友人たちは豊かな生活をしています。彼らのような人こそ教

会の力なのです。彼らの心には、穏やかながらも微動だにしない確信があります。神は生きておられる、私たちは神に対して責任がある、イエスはキリストであり、道であり、真理であり、命であられる（ヨハネ14：6参照）、この業は主のみ業であり真実である、喜びと平安と癒しは、教会の教えの中で述べられているように、神の戒めに従って歩む時にもたらされる（教義と聖約89：18参照）という確信があるのです。

ジャックのふたりの監督が、彼の身に起こったことを知っているかどうかはわかりませんが、もし今の彼について知ったら、心に快い満足感を覚えるに違いありません。そのような監督が何千人もいて、再活発化という偉大な業に日夜務めているのです。そして、この教会にはジャックのような人が何万人もいて、深い関心やそれとなく示される愛、監督や他の人々からの奉仕のチャレンジによって、心を動かされ、教会に再び活発に集うようになっているのです。しかし、そのような関心を心要とする人はほかにも大勢います。

これは偉大な贖いの業です。私たちは皆、もっと努力しなければなりません。なぜなら、さらに素晴らしい永遠の成果を得ることができるからです。これは御父のみ業です。天父は私たちに、困っている人々や弱っている人々を捜し出して力づけるように命じておられます。私たちがそうする時、人々の家庭は豊かな愛で満たされ、国家はそれがどこであろうと、人々の徳によって強められるでしょう。そして教会と神の王国は、神の定められた使命を果たすべく、威厳と権威をもって進み行くでしょう。これらのことをイエス・キリストのみ名により証し、祈ります。アーメン



すべての人を愛しなさい

十二使徒定員会会員 デビッド・B・ヘイト

この歴史的な大会の壇上に立ってお話
するに当たり、天の祝福があるよう
祈っています。

私たちはキリストの証人として、キリス
トに望みを託しています。私たちの救いは
キリストによりもたらされます。この地上
に神の王国を建設したいという望みやその
ための努力は、すべてキリストの聖きみ名
に負っています。

ヨルダン川に近づいて来られたイエスを
指して、「見よ、世の罪を取り除く神の子
羊」(ヨハネ1:29)と言ったバプテスマの
ヨハネの言葉を、私たちも引き継いで世に
宣言します。

彼はすべての人は永遠の生命を得る祝福
にあずかることができるというキリストの
福音の原則を教えられました。

キリストの福音を広めるという神聖な責
任を果たそうとする時、私たちにはキリス
トの民に約束されたすべての祝福、すなわ
ち信仰、証、忍耐、従順、慈悲、知恵、キ
リストのみ言葉を信じる信仰が必要です。

天父は人の心に特別なものを植えつけ
られました。それは、人を天の事柄に向けさ
せる力を持っています。福音を分かち合い、
新しい会員に真心からの関心を示したいと
思っている人や、求道者の心に触れたいと
思っている宣教師には、この特別な力が働
いて助けてくれます。私たち一人一人に与
えられているこの特別なものは、私たちに

大きな喜びをもたらします。それは恐れ、
周囲からの圧力、憎悪、利己主義、邪悪な
などを、また罪をも克服することができます。
この特別なものを小さなからし種のように
養い育てるならば、どんな言葉よりも力あ
るものとなります。大いなる戒めについて
尋ねられた時に、救い主は次のように教え
られました。

「……『心をつくし、精神をつくし、思
いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。

これが一番大切な、第一のいましめである。

第二もこれと同様である、『自分を愛する
ようにあなたの隣り人を愛せよ』。

これらの二つのいましめに、律法全体と
預言者たちが、かかっている。』(マタイ22:
37-40)

天父が下さったこの特別なものとは、愛
です。愛は私たち自身と天父、家族、隣人
との完璧な関係について、また天父のみ業
を成し遂げる方法について教えてくれます。

かつてユダヤ人の教師たちは、神を愛す
という戒めと人を愛するという戒めを別
個に教えていました。しかしイエスはこの
ふたつをひとつにまとめ、人を愛すること
の大切さを強調されました。そして御自身
の模範を通して、神を愛し人を愛すること
を福音の真髄とされました。イエスはこ
う言われました。「互に愛し合うならば、それ
によって、あなたがたがわたしの弟子であ
ることを、すべての者が認めるであろう。」

(ヨハネ13:35)

神を愛することのほかに、私たちにはもっと難しい戒めが与えられています。それは、たとえ敵であっても、すべての人を愛し、人種や階級、あるいは家族関係の壁を乗り越えなければならないという戒めです。当たり前のことですが、自分に親切にしてくれる人や親しい人に親切にするのはたやすいことです。

しかし神が私たちに求めておられるのは、地上のすべての人々と真心を通わせ、親族のごとくに交わることではないでしょうか。のけ者にしてよい人などひとりもいません。また、隣り人に対する偏見、物欲、あるいは人種差別といったキリストが戒めておられる行為から抜け切れず、キリストと自分はかけ離れた存在だと悲観する人もいるでしょう。しかし、愛には境界も限界もないのです。

ある律法学者が、「先生、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか。(律法には)神を愛せよ、また自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ、とあります(が)」とイエスに尋ねました。それに対してイエスはこのように言われました。「その通り行ないなさい。そうすれば、いのちが得られる。」すると、律法学者はさらにこう尋ねました。「では、わたしの隣り人とはだれのことですか。」(ルカ10:25-29)これに続く救い主の次のたとえ話は、愛の本質を見事に描いています。

「……『ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った。

するとたまたま、ひとりの祭司がその道を下ってきたが、この人を見ると、向こう

側を通って行った。

同様にレビ人もこの場所にさしかかってきたが、彼を見ると向こう側を通って行った。

ところがあるサマリヤ人が旅をしてこの人のところを通りかかり、彼を見て気の毒に思い、

近寄ってきてその傷にオリブ油とぶどう酒とを注いでほうたいをしてやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。

翌日デナリ二つを取り出して宿屋の主人に手渡し、「この人を見てやって下さい。費用がよけいにかかったら、帰りがけに、わたしが支払います」と言った。

この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか。」

彼が言った、『その人に慈悲深い行いをした人です』。そこでイエスは言われた、『あなたも行って同じようにしなさい』。(ルカ10:30-37)

この3人の決定的な違いは、サマリヤ人は思いやる心があり、他のふたりは利己主義であったということです。当時ユダヤ人はサマリヤ人をさげすんでいました。しかしユダヤ人であった祭司とレビ人は傷を負って倒れていた男の人を助けようとはしませんでした。彼らこそそうすべきであったのです。

ジョン・A・ウイツォー長老は次のように言っています。「私たちは、愛の本質を完全に理解することはできないかもしれませんが。しかし愛を見いだすことはできます。

愛は常に真理の中にあります。……偽り、欺き、そのほかあらゆる不道徳な行ないの中には、愛はありません。不実の中にも愛はありません。……したがって、愛する人に偽りを言ったり、真理に背くような行な

いを強いる人は、本当にその人を愛してはいないのです。

また、愛は人を怒らせたり、危害を加えたりしません。……愛が真理なら、残忍な行為は不実以外の何物でもありません。

……

愛には人を積極的に行動させる力があります。愛する者を助け、必要とあらば、その要求を満たそうとします。弱きを強きに変えるのも愛です。……助けを与えようとしない愛は、偽り、もしくは一時的な愛と言えるでしょう。

愛を測るさらに大いなる尺度があります。それは、真の愛とは愛する者のために自らを捧げられるということです。……これが愛の究極の姿です。キリストは、私たちのために御自身とその生命を捧げられ、血肉の兄弟姉妹に対する愛を示されました。(An Understandable Religion, Salt Lake City: Deseret Book Co., 1944, p.72)

愛の必要性を知っただけでは十分ではありません。愛する思いを行動に移して初めて、私たちは天の祝福を受けることができるのです。イエスは次のように教えられました。

「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。」(ヨハネ15:13)

今年の初め、ワシントンD. C. 近くのポトマック川に飛行機が墜落する事故がありました。その際名前もわからないひとりの乗客が、見知らぬ友のために自らの生命を捧げました。水中に投げ出された乗客を救出するためにヘリコプターから救命具が下ろされるのを見物人は固唾(かたす)を飲んで見守っていました。その人は救命具をつかむと、それをそばにいた人にゆずりました。ヘリ

コプターがもどってきて、再び救命具が下ろされた時にも、彼は自分のことはかまわず、それを別の人に渡したのです。「なぜ自分が助かろうとしないんだ」と叫ぶ声がありました。しかしその人は、周りの人々を助けた後、ゆっくりと凍りつくポトマック川の中に消えていきました。

マハトマ・ガンジーは、「ひとりの人間による最も崇高な愛ある行ないは、幾百万の憎しみを帳消しにするに足るものである」と言っています。(ハーマン・ハガドーン、Prophet in the Wilderness: The Story of Albert Schweitzer, N. Y.: MacMillan Co., 1948, title page)

神が私たちを愛して下さるのは、私たちが愛すべき者であり、好ましい人格や良識やユーモアのセンスを持っていたり、あるいは非常に親切だからだというわけではありません。私たちがどんな者でも、また何をした者でも、神はその愛を注いで下さいます。愛すべき者でなくても、神にとっては大切な存在だからです。

マザー・テレサをたたえたある大学の式典で、半生を世界中の貧しい者、病める者、またみなしごのために捧げた彼女はこう言っています。「清い心でお互いに愛し合おうではありませんか。……貧しい人々はパンに飢えているわけではありません。愛に飢えているのです。」(The Salt Lake Tribune, 31 May 1982, p. 4—A)

ジョセフ・スミスは、「神の愛で満ち満ちた人は、自らの家族の祝福だけで満足せず、これを全世界に広げ、全人類に祝福が及ぶようにと考える」と記しています。(History of the Church, 4:227)

私たちはどうすれば神の愛にあずかることができるのでしょうか。救い主はこう教

えられました。

「もしわたしの戒めを守るならば、あなたがたはわたしの愛のうちにおるのである。それはわたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるのと同じである。」(ヨハネ15:10)

愛は神の賜です。神の律法に従い、真心から人々に仕えるならば、私たちは日常生活の中に神の愛をはぐくむことができます。

神の愛は、ふさわしい生活をして世に打ち勝つことができるよう、限りない神聖な力を私たちに与えてくれます。

この偉大なみ業を推し進めるに当たって、救い主はこの世的な方法を用いられません

でした。主はお金を持っておられなかったので、お金で力を買うということもなさいませんし、宣伝ということも、主は一切行なわれませんでした。また、武力に訴えることは主のみむねに反していました。そして国民は主を自分たちとは無縁の者と言って拒んだのです。主の理想を心の内に育てたのは、ほんのひと握りの人々に過ぎませんでした。彼らはみな貧しかったのですが、主のもとに集まり耳を傾け、祈り、主の言葉に従った人々でした。彼らは主の教えに従って、人々の中に出て行き、強制ではなく、偽らない愛と友情にあふれた行ないと言葉により、新しい理想を伝えました。それで主のみわざがこのように広まったのです。

主は人々の心をうるおし、そのみむねを遂げられました。予言者ニーファイの言葉は、このことを理解する手助けとなります。「……その木は神の愛であって人の心をあまねくうるおすものであるから、どんなものよりも好ましいものである……。」(Iニーファイ11:22)

神の私たちに對する愛の深さは、ヨハネの次の言葉に凝縮されています。「神はそのひとり子を賜わたしたほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネ3:16)

宣教師として、カナダのハリファックス伝道部へ召されたウィルズ・チーニー夫妻は、北端のニューファンドランド島のキャンブルックへ行く前に、伝道部長にこう言われました。「行って支部を強めて下さい。集會が開けるような建物を探して下さい。そして親善の使者となして下さい。」

主に忠実なこの夫婦は、多くの人々の人生とかかわりを持ちました。チーニー兄弟



の報告は、おびたしい数の改宗者を得ることができたことに触れ、そして彼の愛する同僚への賛辞で締めくくられていました。

「多くの模範を示すことができたこと、また私たちがこのように成功を取めることができたのは、チーニー姉妹の助けがあればこそなのです。彼女の伝道は愛の奉仕そのものでした。庭造り、かん詰めの作り方、縫い物、キルティングなどを教え、献身的に働きました。彼女は妻として、母として、あるいは友達として多くの優れた模範を示したので、すべての人から愛されていました。」

さらに彼はこう続けています。「私たちは礼拝堂を入手するのを手伝いました。また27人の新会員が教会に入り、多くの不活発会員が戻ってくるのを目にしました。」

この素晴らしい夫婦は、主に対する愛と、遠く離れた所で見いだした隣人に対する愛を実践したのです。

「愛は動詞である」という言葉があります。愛は行ないに表わさなければなりません。口先だけや、心の中にとどめておくだけのものではありません。私たちが何をするか、どう振る舞うかによるのです。愛は言葉と行ないで表わすものだからです。

主と特に近かった愛弟子ヨハはこう記しています。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。

愛する者たちよ。神がこのようにわたしたちを愛して下さったのであるから、わたしたちも互に愛し合うべきである。」(Iヨハネ4:10-11)

主は私たち一人一人のために罪の負債を

支払って下さり、私たちが望むなら、主は私たちを天父のみもとへと導いて下さいませ。私たちが歌うこの言葉は、私たちの気持ちを如実に語っています。

主イエスの愛にただおどろく
恵みの深きにわれ惑う
罪びとのため十字架にて
流されたる血に身はふるう

ああ、わがため主は死にたもう
くしきみわざ
ああ、くすしき主のみわざ

おごれるわれを救うために
みくらを降りし主におどろく
かかるわれにまで愛の手を
主はさしのべて救いたもう

つき刺されし主の手を思い
その愛と恵み忘れ得ず
みくらの前にひざまづいて
主のみめぐみをたたえまつらん
(讃美歌76番)

神の明らかにされたみ業と栄光、すなわち「人に不死不滅と永遠の生命をもたらす」(モーセ1:39) み業の祝福にあずかることができるよう、最後まで私たちすべてが自分の務めを十分に果たせますように。そのためには完きに近づくよう努力し、福音の律法と儀式に従順に従うようにしなければなりません。私たちはみな、神を愛し隣人を愛するという大いなる戒めを守ることにより、自らを強めなければならないのです。これが神のみ業であり、神はすべての人々を愛して下さることをイエス・キリストのみ名によって証し、お祈りします。アーメン。



「私の身も心も聖文を喜ぶ」

管理監督会第二副監督 J・リチャード・クラーク

モルモン経の中で、最も美しく霊的な一節に、「ニーファイの詩篇」と呼ばれている箇所があります。それは次の感動的な言葉で始まっています。「……私の身も心も聖文を喜ぶので、私が心にそれをよくよく考えて私の子孫たちの学問と利益とになるようにこれを書き誌するのである。ごらん、私は身も心も主に関する事を喜び、……」(Ⅱニーファイ4：15-16)

この言葉は私にとって特別な意味を持っています。私は小さなモルモンの町のよき末日聖徒の家庭に生まれ育ちました。そして主を愛し、主のみ名を尊び、祈りを通じて主と話をするように教えられてきました。また、幼い頃から、天父と御子がジョセフ・スミスに現われたことを学んできました。私は子供心にそれを信じ、大人になった今も疑ったことはありません。

私は海軍に入隊して初めて、モルモンを見たことのない人やモルモンの教えを聞いたことのない人に大勢出会い、非常に驚きました。そして、自分の福音に関する知識がいかに限られたものであるかを痛感したのです。教会に関してかなり難しい質問をされて、答えるのに四苦八苦したこともあります。部隊の中でモルモンは私ひとりでしたので、人に助言を求めることもできませんでした。その時私が持っていた聖典といえば、軍隊用の小型のモルモン経一冊でした。お恥ずかしいことですが、リーハイ

とその家族を文字通り荒野に置き忘れたことも幾度となくありました。

私は活発会員として歩んできたにもかかわらず、聖典や予言者の教えについて学ばなければならないという切羽詰まった気持ちになったことはありませんでした。ですから、質問をされたり、私自身や教会に対してひどい嘲笑が向けられたりしても、私にできることと言えば家族や教師から学んだ個人的な信条を述べることだけでした。自分の信ずる所を公言したからには、その良き模範となることで知識不足を補おうともしました。

海軍を出てから私は伝道の召しを受けました。それでも福音の知識を得たいという強い気持ちは強まりませんでした。聖典に通じることが良き末日聖徒となることであるという理解がまだなかったのです。ソルトレーク^{ソルト}の古びた伝道本部でしばらく訓練を受けた後、伝道地である南アフリカに行く船が着くまで、同僚と私はテキサスで2、3週間ばかり伝道用のチラシを配り、多くの人々の前に立つことになりました。その時得た経験が、その後2年間の良き指針となりました。私はその短い期間に謙遜になることの大切さを思い知らされたのです。

運命のいたずらとでも言いましょうか、ケープ・タウンに着いた時には私の人生は大きく変わっていたのです。予定では28日間で航海を終えることになっていましたが、

赤道を通過する頃、ボイラーに故障が起きました。ブラジルのレシフェに寄港しようとしたのですが、船は暗礁に乗り上げ、船体に穴を開けてしまったのです。引き船が私たちを救助してくれましたが、結局ケープ・タウンに着くまで、84日間を船上で過ごさなくてはなりません。私は恵まれて素晴らしい同僚のロイ・スティーンズ長老と同じ船室で過ごすことができました。彼は実に熱心な福音の研究者でした。彼の父親は帰還宣教師で、彼のために教会の書物を大きな箱に詰めて持たせてくれたのです。この一種の監禁状態の中で、福音の知識というまったく新しい世界が眼前に開けたのです。

この84日間というもの、私は勉強し、考え、祈りました。標準聖典をすみからすみまで読みました。そのほか「基督イエス」を初め、教会の書物を数冊読みあさりました。この船上での勉強の結果、私はモルモン経が神の言葉であり、イエスがキリストであるという証を主によって得ることが



できました。私はこの時初めて永遠の真理についてもっと深く知りたいという強い欲望に駆られたのです。このことに今まで気づかなかったことが悔やまれてなりません。軍役に服している時も、まったく無為に日を過ごしてしまいました。何と貴重な今にまで気づかずにいたのでしょうか。自分に任された時間をどのように使ったか、責任を問われる日が必ず来ると、私は確信しています。

私たちは若き予言者ジョセフ・スミスが示した模範からも多くを学ぶことができます。彼は祈りをもって聖書を学び続けた結果、天の神に導きを求めずにはいられなくなりました。そして、主自らがこの世でみ業を行なわれた時以来の、最も偉大な啓示が与えられることになったのです。彼は予言者として聖典をじっくり研究し続け、ついに聖典に対する深い理解を得るに至りました。

もうひとりの青年スペンサー・W・キンボールは、14歳の時ステーク部大会でスーザ・ゲイツ姉妹の話の聞きました。彼はその時のことをこう語っています。「彼女は聖典を読むことに関して、心に訴えかけるような話をしました。彼女は話の途中でこう尋ねました、『皆さんの中で聖書を通して読んだ方は何人いらっしゃいますか。』

私は自分自身を問い詰めました。『おいスペンサー・キンボール、お前はまた聖書を読み通したことがないじゃないか。どうしてなんだ。』私はこの聖なる書物を読んだことがないなんて私ひとりではないかと思ひ、おそろおそろ辺りを見回しました。すると、そこに集っていた1,000人ほどの中で、誇らし気に手を挙げているのはほんの5、6人に過ぎませんでした。その集會が終わった



後、私は『僕も絶対に読み通してみせるぞ』と一大奮起して、家に飛んで帰ったものでした。」

家に着くと、彼は石油ランプを片手に階段を上り、自分の屋根裏部屋に閉じこまりました。「私はそこで聖書を開きアダムとイヴの創世記から始めて、大洪水やアブラハムに至るまで、夜になったのも気づかず読み続けました。」(President Kimball Speaks Out, Salt Lake City: Deseret Book Co., 1981, pp. 92—93)

その後彼は毎晩少しずつ読み続けました。読んだ部分をすべて理解できたわけではありませんが、彼はとにかくやり抜こうと自分で決心したのです。その年の暮れまでに彼は聖書を読み終えました。以後聖典を毎日読むことは、彼の習慣となったのです。キンボール大管長のお話や著書などから、大管長が聖典に対する深い洞察力を長い時間を費やして身に着けられたことがよくわかります。

私は幼い子供も含めあらゆる人々が聖典を愛するようになると確信しています。2、3年前、私は大会に出席するためにコロラド・スプリングズへ行った時、ブルース・R・マッコンキー御夫妻のお子さんであるマーク・マッコンキー兄弟を訪問し、どのようにして聖典が好きになったか尋ねたことがありました。彼はその時こう答えました。

「最初は母親から聖典を好きになることを教えられました。母はアイロンかけをしながら、聖典についてよく話してくれたものでした。予言者について話す時の様子から、母がどんなに聖典を愛しているかがよくわかりました。大きくなってからは、私は聖典の録音を聞くようになりました。私は父のように聖典について詳しくなりたと思っていたのです。録音を聞いていると父はよく私の部屋に入ってきて、たちまちこの聖句を聞いていたのか当ててしまうのです。私もそのようになりたいと思いました。」

ロムニー副管長が息子さんと一緒にモルモン経を読んでいた時に経験した素晴らしい出来事を覚えていらっしゃる方もあるかと思えます。ロムニー長老はこう述べています。

「私は息子がまだ小さかった頃、息子に聖典を読んであげた時のことを覚えている。……私たちはニーファイ第二書の最後の3章を声を出して交替で読んでいた。息子の声は風邪をひいたようにかすれてきたが、最後の章まで読み終えた。そして読み終えるや、こう尋ねてきた。『パパ、パパもモルモン経を読んで泣くことある?』

『あるよ、時には主のみたまがモルモン経は正しいと強く証をするんだ。その時は泣くよ。』

『ああ、そう。ほくも今そのように感じたんだよ。』(Conference Report, Apr. 1949, p. 41)

それからは私は寝る前に末息子のブランドンと、ジャック・ロンドンの本を読むようになりました。私はロムニー副管長の話を思い出し、今まで標準聖典を子供たちと一緒に読んでやらなかったのが、素晴らしい経験を逃してしまったのだと後悔しました。私は、息子が伝道に出る前に聖典の中の偉大な英雄に親しみ、彼らの模範に見習ってほしいと願っています。それで私と息子は毎日聖典を15分ずつ、あるいは1章ずつ読み始めました。どんなにか貴い経験ができることでしょう。私はぜひ皆さんにもこの経験をなさるようお勧めしたいと思います。

私たちが今持っている聖典は、多くの犠牲の上に今日存在することを忘れてはなりません。聖書が征服と迫害という烈火に耐えてきたことを考える時、それが完全な形

かどうか、あるいは正しく翻訳されているかどうかなどということは大した問題ではありません。大切なことは聖書が今まで継承されてきたという奇跡なのです。主が私たちの救いのために聖書を守って下さったことに疑いの余地はありません。

レーバンの命が主のみむねによって取り去られたのは、ニーファイの民の「信仰がなくなって亡び」ないようにするためでした。(I ニーファイ 4 : 13) 子孫のために彼らの記録を守り続けたニーファイ人の予言者の苦勞がどれほどであったか考えてみて下さい。また、印刷や翻訳の技術がなかったため、あるいは政治的弾圧や文盲などの理由で聖典と親しむ機会を断たれていた何百万という人々のことを考えてみて下さい。私たちがこの聖なる書物が自由に手に入るこの時代に住んでいることは、なんと大きな祝福でしょうか。1981年だけで、国際聖書協会は4億4千4百万部にも上る聖書を世界に配布しました。また1982年の末までには、モルモン経の全巻やその一部が57カ国語で出版されることになっています。

私たちはこれらの多くの犠牲による恩恵に浴しているのです。それなのに、この祝福を感謝して受けないで良い理由があるでしょうか。兄弟姉妹の皆さん、私たちは聖典の専門家になる必要はありません。ただ主を愛する気持ちが大切なのです。

主はニーファイの民に姿を現わされた時、この聖なる記録の大切さについて次のようにはっきり教えられました。「……われは汝らにこれらの聖文を熱心に研究せよと命ず。……汝らもわが言葉に心を留めてわれがすでに汝らに告げたることを書き記せ。……これらのことを証する予言者多ければ、予言者たちの言葉を研究せよ。イエスは……

ニーファイ人がすでに受けた聖文をことごとく説き明かしてから『われは汝らが今まで持たざる別の聖文を書くことを汝に望む』……『さらば、多くの聖徒よみがえりて多くの人々に現われ、これに導きと恵みを与えしことを書かざるは何故か』……そこでニーファイはまだこれを書き記していないことを思い起した。……イエスがこのことも書き記しておけと言いたもうた。……さてイエスはニーファイ人が造った聖文をことごとく一つに合わせて説き明かしたもうたから、その説き明したことを民に言い伝えよと弟子たちに命じたもうた。」(III ニーファイ23: 1, 4-6, 11-14)

私はロムニー副管長が1973年にセミナリー・インスティテュートのコーディネーターに与えた助言に心から共鳴します。彼はこう述べています。「私は標準聖典から学んだ以外の福音については多くを知りません。小川の水を飲むとしたら、私は牛の通り道などになっている下流の水でなく、地面から湧き出ている所から直接飲みたいと思います。他の人々の解釈も確かに助けとなりますが、福音に関する限り主が教えられたことを直接聖典から学ぶべきです。……モルモン経や教義と聖約を努めて読みましょう。自分の考えを立証するためにでなく、何が書かれているのか、またそれはどういう意味なのかを見いだすつもりですべての聖典を読んでみて下さい。そして主がどのような思いを胸にこの聖なる書物を記されたのか祈り求めて下さい。」(Address delivered at Coordinator's Convention, Seminaries and Institutes of Religion, 13. Apr. 1973)

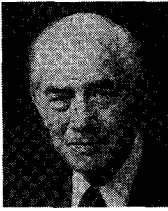
福音に対する証を得るのに、絶ゆまぬ努力を怠っている末日聖徒があまりに多いの

ではないかと懸念しています。そのような人たちは、神からの啓示について祈り、深く考える人々の光に頼っているだけではないでしょうか。証は個人の努力の結果得られるものです。神は私たちに救いの方法を備えて下さいました。けれども私たちがその祝福にあずかれるかどうかは個人の努力にかかっているのです。

最後に、予言者ジョセフ・スミスによる1832年の説教を引用して、このお話を終えたいと思います。

「聖典を調べなさい。書物として公にされている啓示を研究し、真理が明らかにされるよう御子イエス・キリストの御名により天父に願ひ求めなさい。疑わずに主の栄光のみを仰ぎ見てこれを行なうならば、天父は聖きみたまの力によって、あなたにこたえたもうであらう。そうしてあなたは他人によってでなく、自分で知ることができる。かくしてあなたは神の知識について人に頼らなくてすむようになるであらう。また推測する必要もなくなるであらう。天父からの指示を受け入れる人には、天父がどのように救って下さるかがわかるからである。重ねて言う。聖典を調べなさい。予言者の言葉を調べ、それらの内あなたと19世紀の人々にかかわりのあるものを学びなさい。」(Teachings of the Prophet Joseph Smith, comp. Joseph Fielding Smith, Deseret Book Co., 1938, pp. 11-12)

この言葉に私の証も付け加えさせていたきたいと思います。聖典は神のみ言葉です。神について知りたいと思うなら、神の言葉を学ばなければなりません。私たちが素直な心で聖典を読む時に、主は自らを表わされることを証します。イエス・キリストのみ名によって証致します。アーメン。



信じる人を行なう人

十二使徒定員会会員 マーク・E・ピーターセン

➤ こに再び機会が与えられて、主イエス・キリストについて、また主が神の御子であられることについて証できることを感謝します。まことに主は天父の愛する独り子であられます。

さらに主が私たちの救い主、贖い主であられることを証します。主は天と地の創造主であられます。

しかし主は私たちの最もかけがえのない友でもあられます。主は私たちのために死なれました。これは私たちに対する深い友情の最高の表われではないでしょうか。

そして主は死からの復活を備えて下さいました。これは地上に生を受けるすべての人に無償で与えられます。

何と輝かしい贈り物でしょう。何と素晴らしい友でしょう、何と力ある御方でしょうか。

しかし、復活がどれほど素晴らしく、死からの勝利がどれほど喜ばしいものであろうと、神の王国における救いは、まったく別の事柄です。それは主の戒めに忠実に従い、主のすべての儀式を受け入れる人々にのみもたらされるのです。

皆さんは福音が人々を救う過程について考えたことがあるでしょうか。もちろん最初に来るのは信仰、悔い改め、バプテスマです。しかしそれだけではありません。さらに多くのことが必要とされます。

本当の意味での救いとは、言葉と思いと

行ないにおいて救い主のようになるということです。救いへの進歩の度合いは、キリストにどれだけ近づいたかによって測られます。もし毎日の生活の中でキリストに似た者になっていかなければ、救いに向かつて進んでいることにはなりません。

キリストのようになるということは、日日の霊的成長にかかわる問題です。種が生長して花になり、小さな子供が育って成熟した大人になるように、私たちは毎日霊的に成長して、やがてはキリストのような人格を具えることができるのです。

ある詩人は次のように書いています。

ただの一飛びで 天には届かない
だからはしごをかけて登って行こう
この低い地上からはるかな天へ
一段一段 その頂きを目指して

(ジョサイア・ギルバート・ホーランド、
“Gradatim” in *Masterpieces of Religious Verse*, ed: James Dalton Morrison, N. Y. Harper and Brothers, 1948, p.443)

救い主イエス・キリストは、私たちがどのようになるべきかについて最高の模範を示されました。

「汝らはいかなる人物にてあるべきか」主はこの質問に自ら答えておられます。「まことに汝らはわれと同じ人物ならざるべからず」(Ⅲニーフай27:27)

主のようになることは一夜にしてできることではありません。それは生涯をかけた

永遠の過程にほかなりません。私たちは日
日主ようになるためにたゆまぬ努力をし
なければならないのです。

それではどのような方法で行なうのでし
ょうか。主が具えておられる特質を私たち
自身の中にはぐくむことによるのです。

福音を勉強するだけでは不十分です。パ
ブテスマを受け、神権を授かって、ある
いは神殿職員として奉仕しても、それだけ
では主にはなれません。もちろんど
れも欠くことのできないものですが、それ
だけでは不十分なのです。

何にも増して私たちに必要なことは、キ
リストのような心を養うことです。私たち
は心の奥底から変わらなければなりません。
予言者アルマは次のように教えています。

「……天下の万民は男女を問わず、あら
ゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の
民、あらゆる人々にいたるまでみな新に生
れざるべからざることを怪しむなかれ。人
はみな神によりて生れ、その墮落したる肉
欲の有様より義しき有様に移り、神に贖わ
れて神の息子または神の娘とならざるべから
ず。

かくて人は新なる者となる。しからざれ
ば決して神の王国に住むことを得ず。……」
(モーサヤ27：25—26)

最後の部分に注目して下さい。「しから
ざれば決して神の王国に住むことを得ず」
これはすべての人に向けられた警告です。

もし私たちがこのように心を改めず、救
い主の教えに従わずにいるならば、教会の
儀式を通して受けるはずのあらゆる祝福は
私たちの罪のゆえに取り消されてしまおう
でしょう。

聖典には、キリストのような生活をする
ための方法が明確に記されています。です

から私たちは絶えず聖典を読む必要がある
のです。

例えば、こころを貧しくするように、つ
まり謙遜になるように教えられています。
また柔和になることも教えられています。

(マタイ5：3、5参照) 利己心や高慢、尊
大などはキリストの徳ではありません。

また主を愛し、「義に飢えかわくように」
教えられています。(マタイ5：6参照) こ
の意味がおわかりでしょうか。主は完全な
義の御方です。私たちは主のようになりた
いと願っています。しかし、その願いは実
際に飢えかわくほど強いものでしょうか。

主の道を歩みたいという私たちの願望は
実際にどれほど強いものでしょうか。それは
私たちの改宗の度合によって測られます。
願望！まさにこの言葉、願望！私たちの心
の中の義に対する願望の強さはどれほどの
ものでしょうか。

キリストのようになることは、親切にす
ることであります。主が不親切にされた
ことがあったでしょうか。親切や思いやり
に欠けていたら、私たちは主に似た者であ
ると言えるでしょうか。

主のようになるために私たちが理解しな
ければならないもうひとつの大切な律法は、
黄金律です。人々からして欲しいと望むこ
とは、人々にもその通りにしてあげるのです。

この律法に本当に従って生活している人
が何人いるでしょうか。この律法を実践せ
ずに救われるでしょうか。マタイによる福
音書の第25章にその答えが記されているの
で読んで下さい。

この律法は、自分がして欲しいことを人
人にすることだけを意味するのでしょうか。

私たちは他の人々から虐待されたいと思
うでしょうか。もちろん思いません。だま

されたいと思うのでしょうか。うそをつかれたり、自分のものを盗まれたりと思うのでしょうか。では、私たちは人を欺いたり、人の物を盗んだりするのでしょうか。いかなる形であれ不正直は、卑しむべき下劣な行為です。どうしてキリストの徳と言えるのでしょうか。私たちはこの同じ口を通して不正直を語ることはできません。なぜならそれはキリストに反するものだからです。

主は私たちに平和を作り出す者になって、怒りや不和、論争などを避けるように教えておられます。(マタイ5：9参照) 私たちは周囲の人々と仲良く暮らすために真心から努力すべきではないでしょうか。特に自分の家族に対してそうすべきではないでしょうか。

妻と口論してはなりません。また口論の原因になるようなことを妻にしてはなりません。さらに聖典に命じられているように、子供を怒らせてはなりません。(エペソ6：4参照) もし家族の中に争いが起こったら、穏やかなクリスチアンの精神でそれを鎮める必要があります。

救い主のようにするには、キリストの真の愛も欠くことはできません。使徒パウロは愛について何と言っているのでしょうか。

「たといわたしが、人々の言葉や御使たちの言葉を語っても、……たといまた、わたしに預言をする力があり、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、……たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、(家族と隣人に対するキリストの愛がなければ) いっさいは無益である。」(Iコリント13：1-3)

事実パウロは、愛がないならば私たちは

無益であって、やかましい鐘や騒がしい鏡鉢と同じであると述べています。(Iコリント13：1参照)

救い主はこう言われました。「心の清い人たちはさいわいである、彼らは神を見るであろう。」(マタイ5：8)

心の清い人のほかに神を見る人が、すなわち神のみまえに帰れる人がいるのでしょうか。汚れた人にそれができるのでしょうか。

主は汚れたものについて何と言われたのでしょうか。「……不潔なるものにたずさわることなかれ。……主の器を持つ者よ、清くあれ。」(IIIニーフアイ20：41) これは主が語られた言葉であり、主のみこころを表わしています。

これは神の戒めです。皆さんがキリストを信じるならば、不潔なものにかかわりを持つてはなりません。

肉欲や貪欲は私たちに破滅に導きます。性的な罪は救いにかかわる重大な結果をもたらします。酒に酔うのは悪徳であり、むさぼるのは悪魔の業です。利己心はあらゆる不正をもたらします。これらのものは私たちの身と霊を汚し、道徳的に低下させます。キリストのような生活とは真つ向から



反対するものだからです。

それでは清さについて主は何と言われたでしょうか。

主は祈りの中で、主に従う人々が義しい行ないにより主と同じように清くなることを願って、こう言われました。「父がわれにいます如くわれもかれらに在りてかれらと一つになり、かれらによりてわが栄光を示さんことを願う。」(Ⅲニ一ファイ19:29) 考えてみて下さい。もし私たちが清ければ、私たちの義が主のみ名に栄光を加えるのです。

主はそのほかにも教えておられます。もし人に対して悪い気持ちを抱いているなら、その人と和解すべきであって、悪い気持ちをそのままにしておいてはいけません。

皆さんは次の言葉を戒めとして考えたことがあるでしょうか。

「……祭壇に供え物をささげようとする場合、兄弟が自分に対して何かうらみをいだいていることを、そこで思い出したなら、その供え物を祭壇の前に残しておき、まず行ってその兄弟と和解し、それから帰ってきて、供え物をささげることになさい。」(マタイ5:23-24)

このことから考えると、もし人に対して悪い気持ちを抱いていたり、だれかを不公平に扱っているとしたら、私たちの礼拝は神に受け入れられるものとなるでしょうか。

時々私は思うのですが、供え物を祭壇に残して和解を求めるということは、主の晩餐である聖餐について言っているのではないのでしょうか。もし私たちが人に対して不正を行なっていたら、何の良心の咎めも受けずに聖なる象徴にあずかることができるでしょうか。

主は次のように教えておられます。

「もしも、あなたがたが、人々のあやま

ちをゆるすならば、あなたがたの天の父も、あなたがたをゆるして下さるであろう。もし人をゆるさないならば、あなたがたの父も、あなたがたのあやまちをゆるして下さらないであろう。」(マタイ6:14-15)

罪に汚れた状態で、神の聖なるみもとへ帰ることができると思いますか。

主はさらに偽善について警告しておられます。二心のある人や、行ないに裏表のある人は、キリストに似た者ではありません。主はこう言われました。「あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない。」(マタイ6:24)

毎日の行ないは些細なことに思えても、いかに私たちの身と霊を形作るかわかりでしょうか。

主の簡潔な律法が厳しすぎると思いませんか。難しすぎて従えません。しかし、主の律法を無視すればどういうことになるでしょうか。

主がお持ちの特質について主御自身の記述を読むと、霊的に鼓舞されます。主は以下のものをあげておられます。

「神の栄光をまごころもて仰ぎみて、信仰、希望、慈悲、仁愛……徳行、知識、節制、忍耐、兄弟の親切、敬虔、慈悲、謙遜、勤勉」(教義と聖約4:5-6)

これらは主イエス・キリストの特質です。これらの特質を自らの中に築くために、私たちはどれほど熱心に努めているでしょうか。

主は私たちに、天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさいと命じておられます。(マタイ5:48参照)

いい加減な生活の中から、完全さを得ることができるでしょうか。不完全な方法によって完成に到達できるでしょうか。主が

なぜ厳しい御方で、私たちがなぜ心を尽くし、勢力を尽くし、思を尽くし、体力を尽くして仕えなければならないのか、おわかりになるとと思います。(教義と聖約4:2参照)

福音に従って生活することは、易しいことではありません。しかし、そうしなければ祝福を受けることはできません。何事であれ、完全になるのは難しいことです。それには献身、忍耐、持続性、自ら捧げる犠牲、絶えず集中することが要求されます。不完全は不完全なものしか生み出しません。

姉妹の皆さんは調理法に従わずにおいしいケーキを焼けるでしょうか。兄弟の皆さんは必要な方式や原理を無視して家や道路を建設したり、時計を作ったり、人間を月へ送ったりすることができるでしょうか。

医学部で規定の学問を修めずに、医者になることができるでしょうか。工学の原則を無視して技師になれるでしょうか。

それでは、主が定めて下さった道に従わずに、全能の神のように完全になれるでしょうか。

福音は、従わないのなら何の益ももたらしません。

たとえ教会員であっても、戒めを守らなければ救われません。

また不承不承に行なう人は、救われないばかりか、罪に定められるでしょう。主は教義と聖約の第58章の中ではっきりと宣言しておられます。(教義と聖約58:29参照)

古代の偉大な予言者の中に、レーマン人のサムエルがいます。私はサムエルの教え方が好きです。彼は簡潔で単刀直入な話し方をします。遠回しな言葉は使いませんし、話の意味について人々を困惑させることもありません。



サムエルはゼラヘムラの城壁の上から、ニーファイ人に悔い改めを説いた時、もし彼らが福音に従って生活しなければ罪に定められ、しかもその責任は彼ら以外の何者にもないと率直に語りました。

「それであるから記憶せよ。……およそ亡びる者は自分から亡び、悪を行う者は自分で悪を行う。」(ヒラマン14:30)

さらにサムエルは、人には自由意志が与えられているので、善か悪か、生か死かを自由に選ぶことができるが、最後には自分の選んだことの報いを受けると述べています。

私たちは福音にどの程度従って生活しているか吟味すべきではないでしょうか。また、この現世での生活が試しの時であり、私たちが将来刈り取りたいものが何であれ、その苗を植える時であることを肝に命じるべきではないでしょうか。

今こそ私たちがゲツセマネの教えに学んで、主と共に次のように言う時ではないでしょうか。「わたしの思いではなく、みこころが成るようにして下さい。」(ルカ22:42)

イエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。



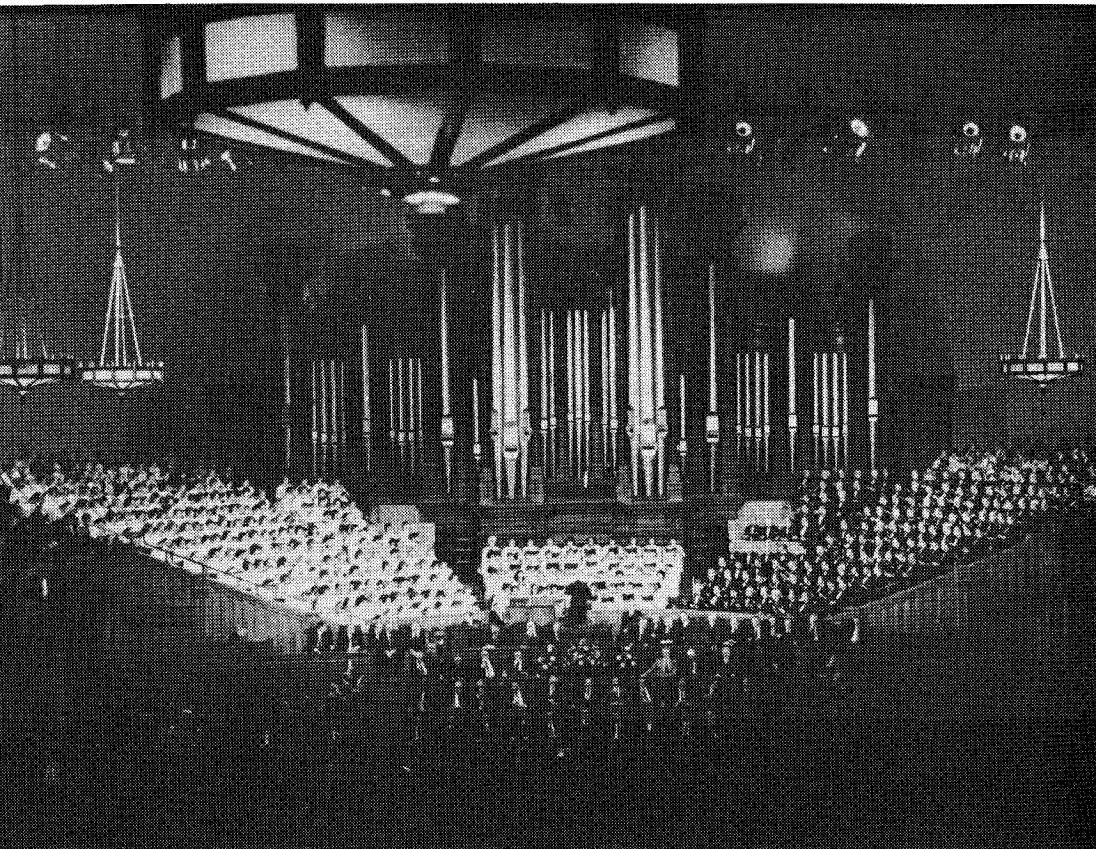
教会役員の支持

副管長 ゴードン・B・ヒンクレー

前 回の総大会から教会幹部の異動がありませんので、教会幹部ならびに中央管理役員を現状のまま支持して下さるよう提議致します。

この提議を支持して下さる方は挙手もってその意を表わして下さい。

もし反対の方があれば、同じようにその意を表わして下さい。





「走れ、少年よ走れ」

十二使徒定員会会員 トーマス・S・モンソン

1982年6月8日、火曜日、ロンドンでは明るく澄んだ夜明けを迎えました。歴史に残る一日の夜明けです。人々の心は期待にあふれ、辺りは興奮に満ちていました。その日、訪英中のアメリカ大統領が議会で演説をすることになっていたのです。そのために大勢の人々がつめかけ、どの通人も人で一杯になり、近くの公園にまであふれていました。警察官が群衆の整理にあたる中、有名なビッグベンから時を告げる鐘が厳かに鳴り響きました。

私は妻のフランセスと群衆のただ中に立っていました。とその時、議会の扉がさっと開くと、英国首相とアメリカ大統領が姿を現わしました。両国の首脳は群衆の歓声に手を振って応えると車に乗り込み、車の行列を従えて走り去って行きました。群衆がそれぞれの方向へ散っていく中を、私たちは陽の当たる大通りを後に、薄暗いが安らぎのあるウエストミンスター寺院へと向かいました。

世に名高いこの寺院に一步足を踏み入れるや、そこは静寂と敬虔の世界でした。ここは、国王の戴冠式や皇族の結婚式が行なわれ、国を治めた者がその使命を終えて安息に就く所なのです。私たちはゆっくりと歩を進めながら、有名人の墓石に刻まれた碑銘を読んでいきました。彼らの業績や勇氣ある行ないに思いをはせ、世界歴史に及ぼした影響を考えていました。無名戦士の

墓の前に来た時、私は足を止めました。第一次世界大戦の時フランスで命を落とした戦士のひとりでした。名もない墓から、この若き戦士の遺体は、その榮譽を永遠にたたえるために、ロンドンに運ばれてきたのです。墓石にはこう刻まれていました。「神とその国家のために尽くした兵士、歴代国王とともに眠る。すべての人、キリストによりて生くべし」

出口の方へと進んでいくと、まだ先ほどの群衆が公園に残っているのが見えました。その時、詩人キップリングの不滅の言葉が心に浮かんできました。

ざわめきとかさいは消え去り、

王と頭は世を去れど

汝が犠牲、謙遜なる心

へりくだりたる心は

変わることなし、

万軍の主、われらとともにおりたまえ
主を忘れんために、忘れんために

(讚美歌、英文77番)

もうひとつ最後に訪れて、読んでおきたい墓碑銘がありました。私はボーイスカウト団員として、その創始者であるベーデン・パウエル卿に捧げられた墓碑銘を見に、アメリカからやって来たのです。堂々とした大理石の墓石に私は見入りました。「ロバート・ベーデン・パウエル、1857—1941年、ボーイスカウト創始者 全世界の友」

この日、ボーイスカウトの75周年、そし

てその創始者の生誕 125 周年を記念するに当たり、私は「これまで一体何人の少年が、ベーデン・パウエル卿によって始められたボーイスカウト活動によって祝福を受け、命を救われたことだろう」と考えてみました。このウエストミンスター寺院に眠る他の人々と違って、ベーデン・パウエル卿は栄光の荒海を航海したこともなければ、戦いで大勝利を収めたわけでも、巨万の富を築いたわけでもありません。少年たちの組織を作って、彼らが人生というレースをどう走り抜き、勝利を得るかを教える、これが彼の行なったことです。

少年は大人へと育つ

だれも少年にどんな価値があるのか知らない。

待ってみなければわからない。

だが、気高い地位にある人も皆、

かつては少年であったのだ。

(スペンサー・W・キンボール大管長が、1977年4月の総大会で引用「聖徒の道」1977年10月号、p.464)

これがまさしく真実であることは、有名なミュージカル「キャメロット」の終わりの部分に楽しく描かれています。アーサー王の円卓は人々のねたみや妃の不貞、過去の過ちの発覚、すなわちモードレッドの件などによって壊されてしまいました。夢を奪われたアーサー王とその下臣は、ランスロットの軍と戦う準備を始めました。しかし、王のかわいがった者たちはみな姿を消し、幻想が暗い影を投げかけ、彼を絶望へと追いやるのです。

そこに登場するのが若き密航者、ウォーリックのトムです。トムの心は若き希望にあふれ、この戦いで王を助けるためにやって来た王に告げます。そして、自分は騎

士になりたいことを打ち明けるのです。アーサー王の質問に対して、トムは円卓のことを知っていると言え、よく口にされた理想を繰り返しました。「正義には力を、正義には正義を、すべての人には公平を」

アーサー王の顔に自信がよみがえってきました。すべてを失ったわけではなかったのです。アーサー王はこの少年にキャメロットの理想と栄光を告げ、正式に騎士の爵位を授けます。

こうして戦場を引き上げ、イングランドに戻ってキャメロットの夢を新たにし、成人して年を重ね、備えのできたトムは、武器を片手に、真理の教えを身にまとい、「走れ、少年よ走れ」という王の命令に耳を傾けるのです。この日まで大事にとっておかれた少年、守られた理想、よみがえった希望がそこにはありました。

このウォーリックのトムが想像もつかないほど多くのことを、ボーイスカウトに加入する少年たちが習得します。「そなえよつねに」というモットーの下に、「日々善行」を実践します。またスカウティングでは、技術を高めることに努力した人に技能章が与えられます。単に暮らしを立てる方法ではなく生き方を教えるのがスカウティングです。1913年に末日聖徒イエス・キリスト教会が、合衆国で最初にスカウトの育成団体になったということは、何と喜ばしいことでしょう。

私は、スペンサー・W・キンボール大管長が世界各地の教会員に語られた次の靈感あふれる言葉を大切にしています。「末日聖徒イエス・キリスト教会は、一層積極的にスカウティングの支援を推し進めると共に、少年たちがその家族や教会と親しむための助けができるように、指導者を提供したい



と思います。それが、スカウティングで言われているように、少年たちの市民としての品位を高め、性格と人格を高めてくれるからです。……私たちは今なお、この少年のための一大運動を、またその中心にある『ちかいとおきて』をしっかりと支援しています。」(1977年4月総大会、「聖徒の道」1977年10月号, p. 464)

では、スカウトの「ちかい」とは何でしょうか。

「私は、名誉にかけて次の三条の実行を誓います。

- 一、神(仏)と国とに誠を尽し“おきて”を守ります。
- 一、いつも、他の人々を援けます。
- 一、体を強くし、心をすこやかに、徳を養います。」(「ボーイスカウトハンドブック」初級, 日本連盟, p. 68)

大戦の英雄マッカーサー元帥はこれと同じことを強調しています。栄光に輝く働きを終え、若き日の輝きは消えて老いの影が忍び寄る中で、彼は少年たちにこう述べました。「夢の中で私はいまだ、大砲のひびき、銃声、戦場の悲惨なうめきを耳にする。しかし、私の記憶の奥をたどるといつもウエストポイントにたどりつく。そこで学んだ義務、名誉、祖国の3つの言葉が何度も何度も私の耳元でこだまする。」

プロテスタントのハリー・エマソン・フォスティック牧師は、言葉こそ違いますが同様のことを言っています。「人は金のために精を出す。そして、人のためにはもっと力を出し、何らかの目的のためにはその全力を尽くすものである。義務を喜びに変えて初めて、徴集兵としてではなく、愛国心に燃えた一国民として国家のために戦うようになる。義務は、喜んで力一杯行なおうという人の手によらない限り、立派に果たされることはない。」(*Vital Quotations*, Comp. Emerson Roy West, Salt Lake City: Bookcraft, 1968, p. 38)

南軍の最高指揮官ロバート・E・リー將軍の言葉を引用しましょう。「英語の言葉で義務ほど崇高な言葉はない。すべてにおいて自分の義務を果たしなさい。人はそれ以上のことはできない。またそれ以下のことをしようと思うべきでもない。」

キンボール大管長の言われたスカウトのおきてについて考えてみましょう。スカウトのおきてを思い出すたびに、私は神のおきてを知り、これを守った御方、まさに主イエス・キリストの生涯を思わずにはいられません。スカウトの12条のおきてには主の福音と相通じるものがあります。

1. 「スカウトは、誠実である。」

主は何と言われたのでしょうか。「わたしは、わたしにさせるためにお授けになったわざをなし遂げて……」(ヨハネ17:4)

2. 「スカウトは、忠節をつくす。」

「サタンよ、退け。」(マタイ4:10)

3. 「スカウトは、人の力になる。」

「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい。」(ヨハネ5:8)

4. 「スカウトは、友誼に厚い。」

「あなたがたはわたしの友である。」(ヨハネ15:14)

5. 「スカウトは、礼儀正しい。」

「だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。」(マタイ7:12)

6. 「スカウトは、親切である。」

「『幼子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。』……そして彼らを抱き、手をその上において祝福された。」(マルコ10:14, 16)

7. 「スカウトは、従順である。」

「わたしが天から下ってきたのは、自分のところのままを行うためではなく、わたしをつかわされたかたのみこころを行うためである。」(ヨハネ6:38)

8. 「スカウトは、快活である。」

「勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。」(ヨハネ16:33)

9. 「スカウトは、質素である。」

「持っているものをみな売り払って、貧しい人々に分けてやりなさい。そうすれば、天に宝を持つようになる。そして、わたしに従ってきなさい。」(ルカ18:22)

10. 「スカウトは、勇敢である。」

「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままには

なく、みこころのままになさって下さい。」

(マタイ26:39)

11. 「スカウトは、純潔である。」

「汝ら、主の器をもてるものは潔くあれ。」(教義と聖約38:42)

12. 「スカウトは、つつしみ深い。」

「天にいますわれらの父よ、御名があがめられますように。」(マタイ6:9)

このような靈感された教えが、献身的な指導者から将来を担う貴い少年たちに伝えられる時、その影響は少年たちのこの世だけの生活にとどまらず、永遠にまで及ぶことでしよう。「あなたのパンを水の上に投げよ、多くの日の後、あなたはそれを得るからである。」(伝道11:1) ボーイスカウトも同じです。

数年前、サクラメント市の近くにある山の中で、ボーイスカウト指導者のための訓練会が行なわれました。指導者たちもボーイスカウトと同じようにキャンプをして生活するのです。実に楽しい経験です。指導者たちも自分で食事を作り、食べます。指導者でも玉子をこがしてしまうことがあります。年相応に険しい山道を歩き、ごつごつした地面の上に床を作り、星を幾度となく眺めます。

こうして数日間、不自由な生活を強いられた後、彼らはキャンプの終わりに加わったギリシャ人の一流コック長の手によるもてなしを受けたのです。みんながなれない経験で疲れ果て、空腹に耐え、やや意気消沈していた時でした。ひとりがそのギリシャ人のコック長に、なぜいつも幸せそうに見えるのか、また毎年きまってこのボーイスカウトの訓練会に、手の込んだごちそうをふるまってくれるのかと尋ねました。フライパンを横に置き、ふとった体を飾って

いる白いエプロンで手をふきながら、このディミトリウスというコック長は自分の経験を話し始めました。

「私はギリシャの小さな村に生まれ育ちました。第二次世界大戦が始まるまでは、本当に幸せな毎日でした。ですが、戦時中ギリシャはドイツのナチスに占領されてしまったのです。自由を愛した村人たちはこの侵入者を快く思わず、破壊行為を行いませんでした。

ある夜、村人たちは水力発電所を破壊し、祝杯をあげ、それぞれ自分の家に引き上げました。

翌朝早く、村に続々と入るトラックの音で私は目を覚ましました。カッカツという兵士のくつ音が近づいたかと思うと、ドアをたたく音がし、子供も大人も男はすべてただちに村の広場に集まれという命令が叫ばれました。私はあわててズボンをはき、ベルトを締めると外にとんで行きました。十数台ものトラックのヘッドライトに照らされ、何百もの銃口を向けられて私たちは立たされました。ナチスは発電所の破壊行為に激怒して、嚴重な罰を下すと宣言しました。1から5の番号を打ち、5番目に当たる者を射殺するということでした。ひと

りの軍曹が1, 2, 3, 4, 5と運命を決める数を数え上げ、最初のグループがつかみ出され、目の前で射殺されました。」

ディミトリウスさんは真剣な面持ちでこう続けました。「やがて私の立っている列の番になりました。自分が5番目に当たるとわかった時にはぞっとしました。兵士が私の前に立ったので、ぎらぎらとしたヘッドライトの光がさえ切られました。兵士は私のベルトのバックルに目をやり、じっと見つめていました。それにはボーイスカウトの記章がついていたのです。ボーイスカウトのちかいとおきてを暗記した時にもらったものでした。背の高いその兵士はバックルを指さすと、右手をあげてボーイスカウトの敬礼を私にしたのです。その時、彼の言った言葉を、私は一生忘れません。『走れ、少年よ走れ!』私は死にもの狂いで走り、今こうして生きているのです。このようにボーイスカウトのために奉仕するのは、少年たちが夢を抱き、それをぜひとも実現してもらいたいと願うからなのです。」

ディミトリウスさんはポケットに手を入れ、そのバックルを取り出して見せました。ボーイスカウトの記章がいまだにきらきら輝いていました。言葉はありませんでした。皆が涙していました。そしてボーイスカウトへの決意を新たにしましたのです。

「大人が少年に与えることのできる最大の贈り物は、少年と喜んで時を共にすることである」と言われています。少年たちの心に橋をかける指導者の皆さん、御両親、そして全世界のボーイスカウトの皆さんに、ボーイスカウト75周年に当たり、敬意を表するとともに、天父の豊かな恵みがありますよう、イエス・キリストのみ名によりお祈り致します。アーメン。





末日聖徒の讚美歌—音楽による礼拝

七十人第一定員会会長会 フランクリン・D・リチャーズ

愛する兄弟姉妹の皆さんと共に、この総大会の靈的な雰囲気味わえることをうれしく思います。今また、みたまの導きがあるように祈っています。

聖典を見ると、救い主は使徒たちに主の晩餐である聖餐について教えられた後、賛美の歌を歌ってから、「オリブ山に出かけて行った」(マタイ26:30)とあります。この聖句から、賛美の歌を歌うことは、当時の礼拝行事の一部であったことがわかります。

今日でも、会衆が歌う讚美歌や、美しい聖歌隊の合唱は、重要な礼拝行事のひとつです。私たちは礼拝行事をいつも讚美歌と祈りによって始めますが、そうすることによって、敬虔な雰囲気が生まれ、美しい心の交わりを感じることができるようになります。きょう私は、礼拝の時の賛美の歌がどれほど重要で価値あるものかという点について強調したいと思います。

私たちは「末日聖徒讚美歌」を手に、主に賛美の歌を歌い、祈り、偉大な真理を唱えるのです。これは力強い説教と言えるでしょう。それによって、私たちの霊も精神も鼓舞され、高揚されるのです。

ヒーバー・J・グラント大管長はこう語っています。「教会で独唱する時や聖歌隊として歌う時、その歌詞は福音の真理に添ったもので、歌う人の心からの賛美でなけれ

ばならない。言い換えれば、私たちの歌う賛美の歌は、まさしく『主への祈り』でなければなりません。』(Improvement Era, July 1912, pp. 786—87)

スペンサー・W・キンボール大管長は、讚美歌を歌うことに関して次のように述べています。「これまでなされた最も偉大な説教の幾つかは、歌による説教でした。素晴らしい歌が数多くあります。……それらを残らず歌おうではありませんか。」(New Zealand Area Conference Report, 20-22 Feb. 1976, p. 27)

教会が設立されて3カ月後の1830年7月、ひとつの啓示が予言者ジョセフ・スミスを通して、妻のエマ・スミスに与えられました。その中で主はこう言われました。「すべて心の歌は、われ^らの悦びなり。然り、義しき者の歌はわれ^らに対する祈りなり。彼らの頭に祝福を与えてその^らの応えとなさん。」(教義と聖約25:12)

この啓示により、エマ・スミスに教会で使う讚美歌集を作る責任が与えられました。また印刷の面で援助し便宜をはかるために、今日の神権時代における偉大な讚美歌の作詞家のひとりウィリアム・W・フェルプス兄弟が任命されました。こうして90曲の讚美歌が選ばれ、1835年に初版が発行されたのです。

私たちの讚美歌に含まれている教えや予言、そして大いなる靈感を説明するために、その幾つかを引用してみましょう。

「主は生けりと知る」(108番)は最初に讚美歌に組み入れられた90曲のうちのひとつです。サミュエル・メドレイによって作詞されました。

主は生けりと知る
そは幸^{さい}を与う
死にし主は生きて
永遠に生きたもう
愛にめぐみつつ
願ひ聞くために
また饑えたる霊を
救わんと生きたもう
ああ喜びの言葉

「主は生けりと知る」

この讚美歌について、J・スペンサー・コンウォールは、こう解説しています。「献身的な末日聖徒の会衆が歌うこの美しい讚美歌を聞くことは、まことに霊のバプテスマである。」(*Stories of Our Mormon Hymns*, Deseret Book Co., 1968, p. 108) まさしくその通りです。これは最も広く知られている讚美歌のひとつであり、これを歌うことによって、救い主イエス・キリストの贖いの犠牲に感謝を示すのです。

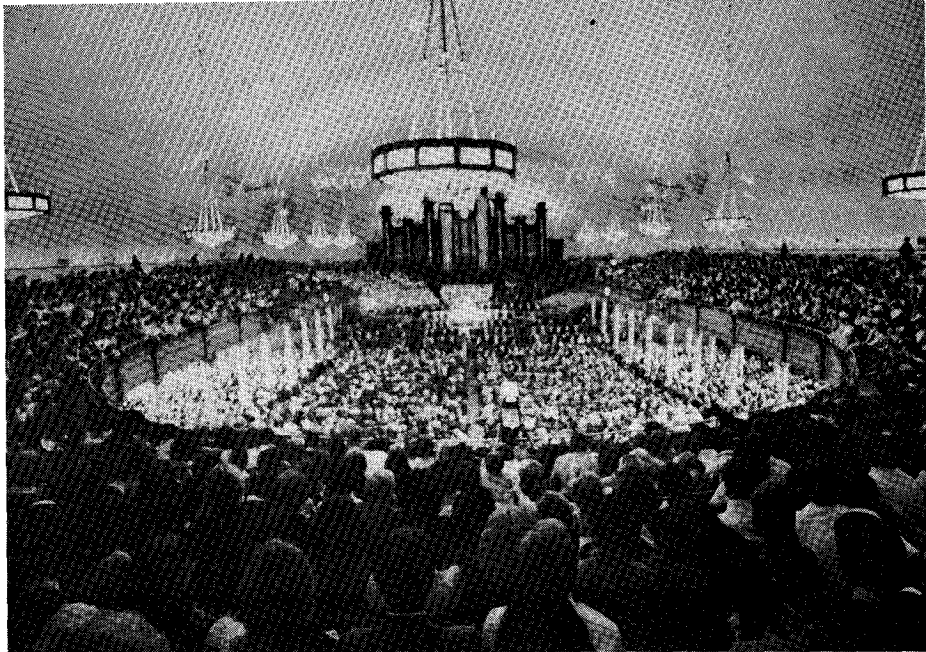
ウィリアム・W・フェルプスが靈感により書いた「たたえよ、主の召したまいし」(144番)は、予言者ジョセフ・スミスへの限りない賛辞です。この美しい讚美歌は喜びと予言的な要素を含んでいるだけでなく、「天の恵み〔をもたらし〕いけにえ」と歌って、基本的な教義にまで触れています。犠牲の律法はイエス・キリストの福音の重

要な部分であり、信仰や愛など多くの徳をはぐくむ上で欠くことのできないものです。次の行には、「目覚めよ義のたたかいに ジョセフを世はまた知る」と歌われていますが、何と予言的な言葉でしょう。フェルプス兄弟がこの讚美歌を書いた頃、教会員は実に数えるほどしかいませんでした。それが今では何百万人という人がジョセフ・スミスが神の予言者であることを知っています。この先さらに何百万人という人々がこの証を受け入れるようになるでしょう。私はこの讚美歌を歌うたびに、胸の高なるのを覚えます。

「感謝を神にささげん」(170番)は、ウィリアム・ファウラー兄弟の作詞で、1863年に讚美歌の仲間入りをしました。この讚美歌は、福音が完全な私たちで回復されたことや、末日にあつて私たちを導いてくれる予言者のいる主の教会が設立されたことを、天父に感謝するものです。この美しい讚美歌は世界中の末日聖徒に愛唱されています。

「恐れず来たれ聖徒」(23番)は、1846年4月15日にウィリアム・クレイトンによって作られました。1921年出版の「扶助協会誌」(*Relief Society Magazine*)に、この讚美歌のできたいわれが載っています。

「ブリガム・ヤング大管長はイスラエルの民のキャンプ内に様々な不平があるのを見て、ひどく心を痛めていた。そこでウィリアム・クレイトン長老を呼んで、こう言った。「クレイトン兄弟、みんなが毎晩キャンプファイアーを囲んで歌えるような讚美歌をひとつ作ってくれませんか。励ましと助けを与え、旅の苦難や訓練を忘れさせて



くれるような歌をお願いします。』

クレイトン長老はキャンプを抜け出すと、2時間後に『恐れず来たれ聖徒』として知られる讃美歌を手にして戻ってきた。彼自身の証によれば、この讃美歌は『主の助けと靈感によって書き表わされた』ものである。」

讃美歌にはこう歌われています。

わが定めをなげくや いな、善きなり
たたかいは厭うなら 報いはなし
勇みて進めや 神は守ります
やがて話されん すべては善し

多くの痛ましい開拓者たちの話の中に、この讃美歌に心を動かされ、そこから大きな勇気と慰めを得たことが語られています。

アメリカ南部の伝道部でのことです。ある少女が友達と家に帰る道々、「恐れず来たれ聖徒」をハミングしていました。すると友達が「まあ、きれいなメロディー、何の歌？」と聞いてきました。少女はその歌に

ついて説明し、教会の集会に連れて行くことを約束しました。何度か集会に出席した後、その友達は宣教師を家に招いて家族に福音を教えてもらうことにしました。やがて家族全員がバプテスマを受け、毎日楽しく神の王国建設のために頑張っているということです。

この素晴らしい讃美歌は、私たちの先祖である開拓者の偉大なる信仰と勇気を集約したものと言えます。そして、今の時代においても、開拓者としての働きを進めていく人には、先祖たちのような信仰と勇気をもたらしてくれるのです。

「高きに栄えて」(140番)は、エライザ・R・スノー姉妹が、1843年にノーヴーで作詞しました。これも末日聖徒の讃美歌として特に優れたものです。この詩には、私たちが前世において霊の父母と共に住んでいたことが描かれています。最後の部分を読んでみましょう。

この身を横たえ 世を去るときに
父母と高きにて われは会えるや
仰せのみわざみな 成しとげしとき
受入れみそばに 住ませたまえ

この讃美歌はまさに、回復されたイエス・キリストの福音によって明らかにされた永遠の生命という一大ドラマを展開しているのです。この美しい讃美歌を歌う時、私たちは永遠の父なる神が文字通り私たちの御父であることをさらによく理解するようになるでしょう。

「主のみたまは火のごと燃え」(175番)

は、ウイリアム・W・フェルプスのもうひとつの作で、これも最初の讃美歌集の中に組み入れられていました。この讃美歌を歌う時に起こる心の高揚と霊的な力強さは、1836年3月27日に行なわれたカートランド神殿の献堂式で最も顕著な形で表われました。以来この讃美歌は、末日聖徒の神殿の献堂式のたびに歌われているように思います。もちろん、ワード部やステーキ部の教会堂を献堂する際にも歌われてきました。

この讃美歌は、福音が回復され、地上をおおっている幕が裂けて天使がこの地にくだることを告げています。合唱の部分は大きい喜びの叫びです。

天の群とともにうたわん

ホザナ ホザナ 神とみ子

高きみくらにさかえあれ

末 とこしえに アーメン アーメン

素晴らしいタバナクル合唱団とモルモン青少年合唱団は、長年にわたり、これらの讃美歌を初めとする数多くの賛美の歌を歌って、末日聖徒だけでなく、教会外の大勢

の人々にも靈感を与えてきました。

ワード部やステーキ部の聖歌隊による合唱も、礼拝行事においてきわめて重要な役割を果たしています。その場に集う何千人という会員たちが、その歌声を聞いて大いなる喜びと霊的な力を受けているのです。

ここに重ねて、礼拝する者がひとつとなって讃美歌を歌うことの大切さを強調したいと思います。礼拝行事の中で歌っていない人を見かけますが、そのような人は美しい霊的な経験を逃してしまっているのではないかと思います。

讃美歌の霊的なメッセージを歌う時、父なる神と救い主イエス・キリストに対する私の証は強められます。

また、私たち末日聖徒の讃美歌は、父なる神と御子イエス・キリストが予言者ジョセフ・スミスに現われたもうたこと、またジョセフ・スミスは偉大な予言者であり、彼を通して完全なる福音が回復されたことを証しています。

「感謝を神にささげん、予言者の導き……」と歌う時に、愛する予言者スペンサー・W・キンボール大管長への感謝の気持ちが一層強まるのを感じます。主の恵みと助けがいつもキンボール大管長の上にありますように。

讃美歌を歌う時には、その美しさと詩の意味を心に留めるようにしましょう。そうする時に、歌声は魂を揺り動かし、私たちが聖きみたまに近づけ、証を強めてくれるに違いありません。イエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。



信仰——生きる力

七十人第一定員会会員 レックス・D・ピネガー

きょう私は、人生のチャレンジに立ち向かう力を求めておられる方々にお話したいと思います。

先日、大学に通うために家を離れている娘から手紙をもらいました。心の込もった感謝の言葉の後に、ひとり立ちすることの大変さが書いてありました。それでも娘は家庭にあって何不自由なく生活し、問題がある時には家族の助けと導きを得ていました。そんな娘が家族と離れて、人生の難しさを感じ始めたのです。

娘の手紙を読んで、私は過去数カ月にわたる教会の大勢の人々との交わりを思い起こしました。私にはその人たちが次のような質問を投げかけてくるような感じを受けていました。「人生の苦難にどう立ち向かったらよいでしょうか」と。

人生は生易しいものではありません。人生自体がひとつのチャレンジです。いくつになっても試練はあり、苦難はついてまわります。大人になるのも大変です。人に悪く思われたり、拒絶されたと感じて心を痛めることもしばしばです。また、教育を受けるために、経済的、精神的、能力的に極限に追い込まれることもあるでしょう。伝道に出るのも易しいことではありません。伝道では、霊的にも肉体的にも献身することが求められます。そして、結婚や育児、家族を養うこと、病気や老い、死との戦いなど、これらに伴う問題は人生にあって避

けることのできないものです。それなのに、私たちにはこういった問題に対処する備えがあまりできていないように思います。

このような障害は人生につきものであることを理解すれば、これらのチャレンジを解決する時に、もっと前向きで勇気を持って立ち向かうことができるでしょう。

C・S・ルイスはこう書いています。「もしできるなら、いやなことを人生の障害物として考えないことである。障害物と呼ぶものこそ、神が日々与えて下さる貴い人生そのものだからである。」(*They Stand Together: The Letters of C. S. Lewis to Arther Greeves*, ed. Walter Hooper, London: Collins, 1979, p. 499)

アジアの古い物語に、城の中で人生の苦難を何ひとつ味わうことなく育てられた王子の話があります。その王子は病人を見たことも、老人や死人を見たこともありませんでした。

大人になった王子は、自分の統治する国の中を見て回りたと思いました。かごに乗って城を出た王子は、生まれて初めて老人を見ました。歯が欠け、しわだらけで、腰の曲がった老人の姿を見たのです。

王子はお付きの者に言いました。「待て、あれは何だ?」

お付きの者が答えました。「あれは年を取って、腰の曲がった老人です。今あなたは若くてたくましい姿をしておいでですが、や

がて年を取るとあのように腰が曲がってくるのです。」

王子はがっかりしてしまいました。老いることは彼にとって何とも耐え難いことだったのです。王子は城に引き返すように命じました。

数日、慣れ親んだ城の中で過ごして元気を取り戻した王子は、また城の外に出てみようと思いました。一団の人々の側を通り過ぎようとした時、その中のひとりの男が地に倒れ、熱を出し、けいれんを起こして苦しんでいるのを見ました。

「あれは何だ。」王子は尋ねました。

「病人です。今あなたは若くてお元気ですが、病気になるって苦しむことがあるでしょう。」

王子は悲しくなり、すぐに城に引き揚げてしまいました。ところが数日すると、王子はまた外に出てみたくなりました。

城からあまり行かないうちに、王子は柩ツツを墓に運ぶ人々に出会いました。

「あれは何だ。」王子は尋ねました。

死とは何かを聞かされた王子は将来が真っ暗になり、安らぎの城にすぐに帰ってしまいました。それからは二度と城の外に出ようとしませんでした。

王子は、人生を悪意に満ちたわなだと思いついてしまったのです。なぜなら、人が何をしようと、どのような人であろうと関係なく病気や老い、死を経験しなければならないからです。

私たちの中にも、この話の若い王子のように感じている人がいるのではないのでしょうか。人生は残酷で、不公平であると思い、自分の囲いの中に閉じこもって世の中に出て行きたくないと思っているのかもしれませんが。しかし、そのようにすることは、人

生が私たちに与えてくれる成長の機会を自分から捨てることになるのです。

主は、私たちにこのようなチャレンジを成長の機会に変える力を与えて下さり、使徒ペテロが述べている、信仰が試されて金よりもはるかに尊いものとなるということの意味がわかるようにして下さい。(Iペテロ1：7参照)

数年前、早朝セミナーのクラスを教えていた時のことです。年度末にこれまでモルモン経から学んだ福音の原則を復習していました。するとひとりの女の子がモルモン経の中にあるアーノルド・フライバーク作の絵を開いて見せました。それはヒラマンの2千人の若い兵士の絵でした。(アルマ53：22参照)それから彼女は真剣な面持ちでこう言ったのです。「ピネガー兄弟、どうして今の若い兄弟たちはこのようではないのですか。」

モルモン経の時代の若者が、アーノルド・フライバークの描いたような若者たちであったのか、私にはわかりませんが、少女の質問からこんなことを考えさせられました。「この若い兵士たちの力の源は何か」と。

モルモン経を読んだことのある人なら、ヒラマンの息子たちのこの話はよく知っていることでしょう。(アルマ53、56—58参照)彼らの父親たちは、福音に改宗した時に、二度と武器を取らないと主に誓約しました。ところが敵が攻めてきて、父親たちは戦うかそれとも死ぬかというところまで追い込まれました。その時です。その誓約を立てていなかった2千人の若者が立ち上がり、親と家とを守ってくれたのです。

ある予言者は2千人の若い兵士たちについて次のように述べています。「かれらはみな青年であって筋骨たくましく活発な勇士

であったばかりでなく、いついかなる時でも委ねられたことを忠実に行った。……また疑いを抱かないならば神が必ず自分らを救いたもうとその母から教えを受けていた。まことにかれらは神の限りない力を得たかのように戦った。人がこのように不思議な力で戦ったことはいまだかつて例のないことであった。かれらはレーマン人も驚くばかりの大きな力で攻撃した……」(アルマ 53:20; 56:47, 56)

ヒラマンの息子たちにこのような強さを与えたものは何でしょうか。「不思議な力」「驚くばかりの大きな力」を生み出したもの、それは、神に対する彼らの信仰です。

有名なロシアの文豪トルストイは、「信仰は人生の力なり」と言っています。トルストイは人生の大半を人生の目的を理解するために使いました。彼は名声、地位、財産を手に入れました。良い結婚をし、子供にも恵まれました。世の秤で測ると、あらゆる面で成功を収めた人と言えるでしょう。

彼は人生の意義を求めて、科学や哲学、そのほかあらゆる分野の知識をあさりしました。しかし、知識を得、名誉を築き、多くのことを成し遂げたにもかかわらず、どれも永続する満足感を与えてはくれませんでした。彼にとって人生は依然として無意味なものだったのでしょう。絶望のどん底にあったトルストイはこう自問しています。「われはいかに生きるべきか。」「神の律法により生きる。」これが答えでした。

そこでトルストイは、「論理的な知識」のほかに、「生けるすべての人には理論では説明できない知識があり、それが生きる力を与えている。これがすなわち信仰であり、信仰は人生の力である」ことを認めざるを得ませんでした。(How I Came to Believe,

Christchurch, New Zealand: The Free Age Press, 1901, p. 40)

人はこの世の快樂と喝采を得たいと思えばいくらかでも得ることができるものの、神への信仰がなければ、人生はその人の理性、感情、そして魂に対しても重荷となることを、トルストイは見いだしたのです。

時として、他人の問題は自分のそれよりも楽に見えるものです。また、もう少し豊かであったら、社会的地位があったら、人人に認められていたら、人生はそれほどつらくはない、と思っている人がいるかもしれません。ある人は、結婚していたら、本当に幸せだろうと感じているかもしれません。逆に、結婚という責任から逃れ、それによって人生のチャレンジが少しでも緩和されると考えている人もいるでしょう。

チャレンジは皆が皆、物質的なものではありません。しかし、対処する時の力の源は同じです。神への信仰と変わらぬ忠実さがそれです。神を信じ、神の律法に従うことによって、様々なチャレンジがもたらす試しを克服する力が得られるのです。

サウスカロライナの私のある友人は、神への忠実な信仰によって多くの問題にも打ち勝てるということを実証してくれました。

ローリー・ボークは小人症という病気で、とても小さな体の人です。生まれた時から、チャレンジの人生でした。学校に入る年になった時、彼は他の子供たちにおくれずについていくために、三輪車に乗って走りまわりました。脚が短いため、一緒にゲームや運動をすることができない彼は、将来の仕事への備えに専念しました。就職するには、たゆまず努力を続け、自分の能力を行動で示さなければならないことを知っていたからです。ついに就職のチャンスが訪れ、彼は

仕事を愛することによって人生に喜びを見いだしました。

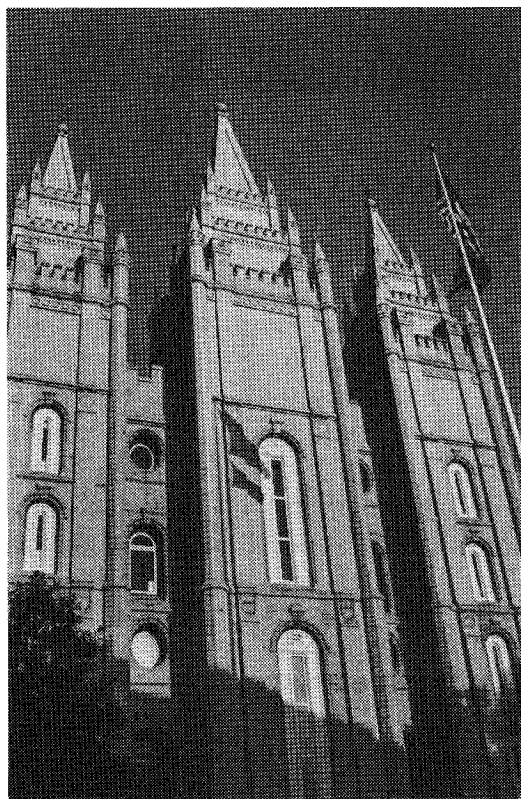
またチャレンジがやって来ました。ローリー・ポークは体の運動機能が著しく減退していましたが、今度は片目の視力を失ってしまいました。やがて不自由な短い脚がきかなくなってきました。そして、試練がまだ足りないともいうかのように、もう片方の目の網膜がはく離し、とうとうまったく見えなくなりました。

ローリー・ポークはこのような絶望と暗闇から立ち上がる力をどこから得たのでしょうか。神への信仰を通して、彼は人生の意義を知ったのです。1メートルにも満たない彼の体に、ヒラマンの若い兵士たちにも勝るとも劣らない力があふれていました。この力によって、彼は直面するチャレンジを克服しただけでなく、生きる喜びを見つけていったのです。神の教えに則した生活をし、同胞のために働くことで、いかなる問題も解決できるということを、彼は知っているのです。ローリー・ポークはこう言っています。「主の助けがあれば、問題など何もありません。チャレンジがあるだけです。」彼は現在、サウスカロライナのチャールストンステーク部の大祭司グループリーダーを務めています。

私は自分が人生の中で味わってきた苦しい経験を通して、神への信仰は神への愛をはぐくみ、それは必要な時に祝福となって返ってくることを学びました。初めて経験することばかりのチャレンジに満ちた毎日を送っているすべての方々、そして私の娘に向かって、こう言いたいと思います。人生のチャレンジを恐れなくて下さい。神への信仰を持って忍耐強く取り組んで下さい。そうする時に神は、忍耐する力だけでなく、

日々の困難や失望、試し、人生の戦いに打ち勝つ力をもって、私たちの信仰に報いて下さいます。神の律法に従った生活をしようと熱心に努力するなら、世の方法や世の誉れに左右されて永遠の道を踏み外すようなことはなくなるでしょう。

神への信仰を強めて、人生の戦いに「神の限りない力……不思議な力……驚くばかりの大きな力」(アルマ56:56)で対抗し、勝利を得ることができるようになります。そして、心から望んでいる幸福を人生に見いだすことができますように。イエス・キリストのみ名によってお祈りします。アーメン。





神に心を開ける

七十人第一定員会会員 レックス・C・リーブ・シニア

毎日のニュースの見出しは恐ろしい限りで、暴力や不安は絶えず身近に存在しています。そんな世の中にあっても、人々や国家が神に心を開け、神に従って歩むならば、解決不可能に思われる個人の、あるいは国家の問題でも、容易に解決されていくことでしょう。そう難しいことはありません。

神はまさしく私たちの霊の父です。全人類の父であります。そして私たちはその子供です。神は私たちのことをよく御存じであり、私たちを愛して下さっています。神は私たちの行ないをすべてよしとされるわけではないかもしれませんが、それでも神はその子らを愛しておられます。これは疑う余地のないことです。神は確かに慈愛にあふれた御父であり、実在の御方です。

私たちの生きているこの美しい世界や宇宙の神秘を毎日眺めると、何とも言えぬ慰めと安堵の気持ちで一杯になります。ほかに例を見ない秩序正しい天体の動き、優美な花や樹々、そのほか命あるものの中に、私たちは神のみ手を見ることができます。これらは皆、もの言わずとも神の存在を証しています。

主のみ手を心に思いつつ、必要な時には主の助けを求め、朝夕神に祈り、主の愛をかみしめながら主を身近に感じる時、私た

ちの心は何と高められ、励まされることでしょう。命と光の源に近づき、謙遜に願い求めることによって力を得、思いを新たにできるとは、何という祝福でしょうか。

悲劇の最中にも神はおられます。苦しいチャレンジが訪れ、命が大秤にかけられ、また立ち直り得ないほど傷つき、行く末も暗く、かすかな希望しか持つことができず、時が果てしなく長く思われる時にも、神はおられます。「私はここにいる。心配することはない。あなたがよく耐え忍ぶなら、それはあなたのためになるであろう。私を信頼しなさい」という神の励ましの言葉が聞こえてくるようです。

主は、私たちの父祖アブラハムに語られた時、人を地上に送る目的を告げられました。

「われら降り行かん。かしこに空間あればなり。而してこれらの材料をとりて、これらの者の住まうべき地を造らん。

而して、これによりて彼らを試し、何にてもあれ、主なる彼らの神の命じたまわんすべてのことを彼らが為すや否やを見ん。」
(アブラハム3：24—25)

まさにこの世は試しの時です。報いの時ではありません。報いの時は後にやって来ます。私たちはこの地上にあつて試されるのです。今、その試しが行なわれているのです。

主は、私たちが自分自身心の内に何を思っているかを感じているかを、はっきりと認識するよう望んでおられます。主はこう言われました。「人となりはその心に思うそのままであるからだ。」(箴言23：7 欽定訳より和訳)

「彼らは唇をもてわれに近づけど、その心はわれに遠ざかれり。」(ジョセフ・スミスの著2：19)

私たちの心が正しくなければ、主はみたまを注いで下さいません。「彼ら心中に悪を求めたれば主なるわれわが『みたま』を取り去りたり。」(教義と聖約64：16)

主は、人が願うことに応じたもうのです。(アルマ29：4 参照)

「汝ら神の役務に出で立たんとする者は、終りの日に臨みて神の前に咎なくして立たんため、すべからく心をつくし……て神の役務をなせ。」(教義と聖約4：2)

捧げ物について、主はこう言われました。「イスラエルの人々に告げて、わたしのためにささげ物を携えてこさせなさい。すべて、心から喜んでする者から、わたしにささげる物を受け取りなさい。」(出エジプト25：2)

捧げ物自体が問題なのではありません。

「心から喜んでする」ことが大切なのです。

裁きの日には、皆さんが何をしたか、どこで奉仕したかというようなことではなく、心から喜んで仕えたかどうか、主を第一としたかが問題とされることでしょう。

礼拝も心からのものでなければ本当の礼拝とは言えません。

もし人々が、そして諸国民が真心から神を仰ぎ見るならば、戦争はなくなるでしょう。

う。神の愛を心に満たしていれば、自分の霊の兄弟を殺そうとは思わないでしょう。

神の愛が心の内にあれば、不正直はなくなります。神を第一に考える人は、自分を愛するように隣人を愛し、人から奪うよりも与えたいと思うことでしょう。

家庭の中で、両親の心に、また夫婦の心に神の愛があり、神を第一に考えるならば、利己心はどこかへ消えてしまい、家庭の不和はなくなるでしょう。そして、家庭の崩壊を招く自己主張や欲求にとって代わって、相手の立場を考え、相手のために自分には何ができるだろうかという気持ちが湧いてくるでしょう。

家庭というのは、夫婦間の思い、すなわちお互いのことについて、神についての思いという基盤の上に築かれるものです。家庭は単なる家ではありません。家はあっても家庭はなくなってしまうこともあるのです。

諸国民諸国家が心から神を仰ぎ見る時、安息日は聖日となります。そして人々は神を愛し、神に仕え、神を敬い、ほめたえたいと望むようになるでしょう。

礼拝はまさしく心のものなのです。



「しかし、その所からあなたの神、主を求め、もし心をつくし、精神をつくして、主を求めるならば、あなたは主に会うであろう。」(申命4:29)

イエスは次のような質問を受けました。「『先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか。』

イエスは言われた。「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ。」(マタイ22:36-37)

私たちは父なる神とその御子イエス・キリストを敬い、愛するようになる必要があります。私たちがそう望み求めるならば、そのような人になれるでしょう。ただ待っているだけでは実現しません。私たち一人一人が自ら自由意志によって望み、祈り求めなければなりません。そしてそれは、心の奥底から湧き上がってくるものでなければなりません。

主は言われました。「あなたの宝のある所には、心もあるからである。」(マタイ6:21)

教会の素晴らしい若い男性の皆さん、主に心を向け、主を第一として下さい。皆さんが主のために、自分自身のために、そして家族のためにできる最高のことは、宣教師となって、福音を聞いたことのない人々に教えを宣べ伝えられるよう、自らを備えることです。

宣教師として働くことは、他の多くの人々に恵みをもたらすだけでなく、自分自身にとっても祝福となります。皆さんは主とその子らに対する愛を深め、自己を高く評価できるようになり、自信と思慮分別を増すことができるようになるのです。また、主を一段と身近に感じ、主の聖なる力を生

活の中でどのように使ったらよいかができるようになるでしょう。

そして伝道から戻ってきた時には、神権指導者として、また義なる父親として仕える備えがよくできていることでしょう。それは皆さん自身と他の人々の生活に祝福をもたらすために、皆さんにできる一番素晴らしいことです。心を主に向け、主のことを第一にし、宣教師となって主に仕える備えをしましょう。

教会の愛らしい若い女性の皆さん、主のことを第一に考え、主に心を向けましょう。神は神の娘である皆さんに、大いなる信頼をおいておられます。神殿結婚の準備をして下さい。その目的のために計画を立てて努力しましょう。それは皆さんの生活に恵みをもたらすだけでなく、多くの人々が皆さんの望みと模範によって祝福を受けるようになるのです。主のことをまず第一に考え、行なうようにしましょう。

父親母親の皆さん、主のことを第一に思い、行なうようにして下さい。子供たちに主について教え、皆さんが主のことを第一にしているということを感じさせるようにして下さい。また、主の愛について教え、主の宮居に入りたいという望みを持ってそれにふさわしく生活するならば、主は大いなる祝福を備えておいて下さることを教えて下さい。家族がどんなに素晴らしいものかを感じ取らせて下さい。そうすれば子供たちは永遠に家族でいたいと願うことでしょう。もし両親が心にこの神聖な気持ちを抱き、子供たちが表情や言葉や行ないにそれを感じ取るならば、字の読めないうちから神について知り、神とそのみ言葉を、そし



て予言者を愛するようになるでしょう。

親である皆さんが子供のためにできる最良のことは、互いに愛し合い、生活の中であって神を第一にすることです。そうすれば、皆さんの家庭は強くなり、家族を安全に守ることができるでしょう。

独身で様々なチャレンジに直面している皆さん、主のことを第一として下さい。主は皆さんを愛しておられます。神を仰ぎ見て、心を向けるなら、皆さんが直面する試みに立ち向かう強さと信仰を得ることができるでしょう。主はチャレンジを取り除かれはしませんが、力を与えて皆さんが重荷を背負い、試みに立ち向かうことができるようにして下さいます。神は生きてまします。皆さんを愛しておられます。

また、この回復された福音の祝福を味わっておられない良き友人の方々、心を主に向け、主のみ声に耳を澄まして下さい。皆さんが主を求める時、皆さんの心に静かにささやかれるでしょう。

神はこの時代に再び人に語りかけられました。天は開かれ、¹⁴¹²古の時代と同様、神は

予言者を通して人々に語っておられるのです。神は神権の権能すなわち人が神に代わってそのみ業を行なう権能を回復されました。また御自身の教会をも回復され、人は再び救いの儀式にあずかることができるようになりました。

皆さんは私たちの言葉をうのみにする必要はありません。神は皆さんが自分でそれが真実であるかどうかを知る方法を備えておられます。

時を超越した主の福音はあなたの人生に真の目的と新たな意義をもたらし、ほかでは得られない豊かさや平安を与えてくれることでしょう。毎月何千何万という人々が主の福音を探し求め、見いだしています。皆さんもぜひ探求し、見いだされますように。もしお望みなら、私たちは喜んでお手伝い致します。

国家や個人が直面しているすべてのチャレンジや問題に答えや解決策を得たければ、心を神に向け、主を第一に考え、主の戒めを守ることです。そうすれば、厳しくて大変に思われる試しでも、万事が私たちのためになり、生活に多大な恵みがもたらされるでしょう。

神に心を向け、主のことを第一に考え、行なうようにしましょう。

神は実に生きてまします。私たちの父であられます。神はその子らを愛しておられます。イエスはキリストであり、私たちが心の中に、そして生活の中であって主を身近に思う時、主は私たちのそばにいて下さいます。これらのことをイエス・キリストのみ名により心から証致します。アーメン。



「監督たる者は責められる点がなく」

十二使徒定員会会員 L・トム・ペリー

今回の大会は、教会の通信機関という点で、新しい時代の到来を告げています。衛星中継の導入により、総大会の様相が以前よりもさらに大勢の教会員の元に届けられるようになりました。

私には、いつの日か総大会で話してみたいと思っていたテーマがあります。今回の大会は大勢の教会員が聴いて下さっていますので、そのテーマについて話すよい機会だと思います。数年前、私は監督の人事異動に関するすべてを扱う委員会の一員に召されました。私たちはその委員会で推薦状を作成し、それを大管長会と十二使徒評議員会が、神殿の中で開く集会で検討することになっていました。その仕事を進めながら私は、健康や家族、職業上の問題で解任を求められる監督が多いことに驚きました。その数は全体から見れば大した比率ではありませんが、私にすれば、どんな数字であっても高すぎると思いました。なぜなら、これらの立派な兄弟たちは、この聖なる召しに伴う喜びや満足感をもって、監督の責任を全うすることができなかつたからです。

私はこの監督という職に、いつもこの上ない称賛の目を向けてきました。そして、私の生活において、いつも監督は身近な存在でした。私が生まれて6カ月の時、父はワード部の監督に召されました。それから

私が18歳になるまで監督を務めました。私は結婚してわずか数年で、監督会の一員に召されました。そこですぐに感じたことは、監督会が協力して働く時、その中に愛が生まれるということです。副監督になって3年ほどたった時、ある仕事に就く機会が訪れました。それは私にとって格好の仕事に思いましたが、そのために監督会から抜けなければならないというのはとてもつらいことでした。引越しの前夜に、パーティーが開かれました。皆にお別れを言うのがつらかったので、私たちはパーティーが終わる前に会場から抜け出し、その晩お世話になることになっていた友人の家に向かいました。やがてパーティーが終わると、一緒に働いてきた監督ともうひとりの副監督が訪ねてきました。ふたりは一晚中起きていて、朝早い私たちの出発を見送ってくれたのです。お陰で、あいさつをせずにこっそり出発することができなくなりました。私はのどをつまらせながらふたりの兄弟に別れを告げて、新しい責任の待つ地へと出発しました。

それから数年後に、私は再び副監督に召されました。そこでも、ワード部の様々な事柄を押し進めるためにしばしば集会を開く中で、愛がはぐくまれていきました。1年が過ぎた頃、ステーキ部長会が変わること

になり、監督と私は、その異動を行なう教会幹部から面接を受けました。教会幹部の方は最初にこう尋ねました。「監督とはうまくやっていますか。監督は優れた指導者ですか。」そこで私は喜びをもって、監督に対する自分の愛と感謝の気持ちを述べ、監督がワード部のためにしてきたことを説明し始めました。と、その時私はこの面接の目的がわかりました。教会幹部は監督をステーキ部長会に召そうとしている、そうすれば私たちの交わりも終わりになる……。私は彼の大きな働きをほめるのを急にやめると、少し間をおき、笑みを浮かべてこう言いました。「ただひとつ監督にもよくない点があります。精神的に抑圧されると、家に帰って奥さんに暴力を振るうのです。」すると教会幹部は椅子にもたれて言いました。「何とも奇妙ですね。彼はほんの数分前までここにいて、あなたのことを、指導力はあるが、やはりひとつ欠点があると言っていましたよ。あなたは時々納屋のかげでたばこを吸うそうですね。」私の作戦は見やぶられ、結局私が新しいステーキ部長会に召されたのです。

私は監督として働いたことはありませんが、私の兄弟の内ふたりが現在この特権にあずかっています。ひとりには太平洋岸の北西部で監督を務めています。また、合衆国北部で監督の召しを果たしている甥もいて、よく連絡を取り合っています。監督として召された人々の役割を観察し、見守り、理解する機会に恵まれた私は、身も心もこの偉大な召しに感嘆するばかりです。

パウロはテトスへの手紙の中で、監督の職に召される人の難しい条件を幾つかあげ

ています。

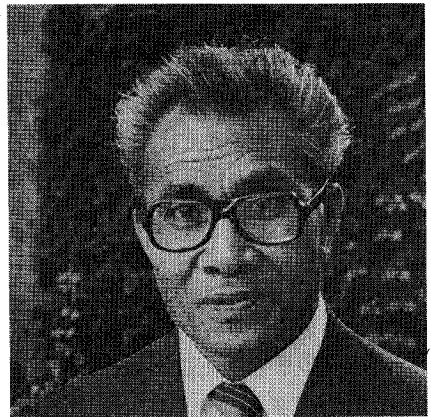
「監督たる者は、神に仕える者として、責められる点がなく、わがままでなく、輕輕しく怒らず、酒を好まず、乱暴でなく、利をむさぼらず、かえって、旅人をもてなし、善を愛し、慎み深く、正しく、信仰深く、自制する者であり、教にかなった信頼すべき言葉を守る人でなければならない。それは、彼が健全な教によって人をさとし、また、反対者の誤りを指摘することができるためである。」(テトス1：7—9)

主は啓示により、これらの責任に加えて、監督を判事に任命しています。教義と聖約を開いてみましょう。

「^{なんびと}何人といえどもこの使命に立つ者は、^{いにしへ}古えの時代に在りし^{ごとく}如くイスラエルの判事に任命せられ、神のゆずりの地を神の子らに分つなり。

而してこの人はまた正しき人々の証詞と彼の副監督らの助けとにより、神の^{まこと}予言者らの与えたる王国の律法を以てその民を^{さだ}審くなり。」(教義と聖約58：17—18)

予言者たちも監督の役割の重要性について



て勧告しています。ジョージ・アルバート・スミス大管長は次のように述べています。

「教会における役職の中で、監督の職ほど人々に大きな祝福をもたらすものはない。ただし、それには監督の職を尊重し、管理を任された群れの本当の父親になる必要がある。忘れないでいただきたい。……主から期待されるだけの時間を捧げて群れの世話をし、主の民を教え、彼らがみ業を行なえるように備えさせた監督で、その働きに対して100パーセントの祝福を受けなかった人は今だかつてひとりもいない。しかもそれらの祝福は時代を越えて永遠に彼の上にとどまるのである。」(Conference Report, Oct. 1948, pp. 186-87)

この場で時間を割き、監督の役割と使命について話し、監督の皆さんに負担を感じさせる気は毛頭ありません。その代わりに、大きな責任を負った監督を、私たちはどのようにしたら支持し助けることができるかについてお話したいと思います。

第1に、監督の奥さんにお話したいと思います。皆さんの夫が監督として召される前に、皆さんが夫をどの程度助けることができるか、慎重な評価がなされます。はっきり申し上げますが、監督としての責任は、夫や父親としての永遠の召しに次ぐものです。夫が成功するために、皆さんは夫を全面的に支持しなければなりません。これが皆さんの負担になることは承知しています。電話をかけたたり、郵便局に行ったり、応待係を務めたり、また夫が急用で呼び出された時には、家にいてその穴をうめなければなりません。時には、たまたまそこにいたために、内密事項を知ってしまうこ

ともあります。そのような時にはその情報を自分の心の内にとどめ、だれにも口外しないようにしなければなりません。監督の妻が偶然耳にした、あるいは目にしたワード部の内密事項を人に話してしまうことほど、監督の信用を失わせるものはほかにないと言えるでしょう。

監督の妻は、夫と協力して、ワード部の若人や若い夫婦の模範になる責任があります。理想的な結婚生活を営み、会員たちがその模範に従って努力できるようにして下さい。皆さんの助けは深い感謝と理解をもって迎えられます。夫を支持する妻の助けほど、監督を不安や重荷から解放できるものではありません。

第2は、監督の子供たちに向かってお話したいと思います。皆さんは時々、周囲の目にさらされた金魚ぼちの中で生活しているように感じていることでしょうか。何か悪いことをしたり、言ったりしないかと観察されているように思えるでしょう。また、ワード部の急用で、せっかくの休暇や計画していたことが台無しになった時に、皆さんの心の中に怒りが込み上げることもあるでしょう。

私は、父が監督を解任される前夜に大切なことを学びました。その時初めて、私は父の涙を見ました。父は家族を集めると、監督として奉仕する期間の終わったことを告げました。そして涙でほおをぬらしながら、時には重荷に感じ、多くの時間を取られはしたが、その召しを解任されることがどんなに寂しいことか話しました。父は教会の奉仕がもたらす真の喜びを、身をもって教えてくれました。私はその時初めて、

父の肩にかけられた監督という外套がいとうにより、家族がどれほど祝福を受けてきたかを理解したのです。

子供の皆さん、監督はその重い責任を果たすに当たって、母親に次いで子供である皆さんの支持と協力を必要としています。

第3に、神権定員会の皆さんにお話したいと思います。定員会は特異な役割を担っています。主は主の組織の中にあるひとつの機構を明らかにされ、それを通して神権者が教会員を見守り、強められるようにされました。定員会の指導者は、定員会会員の家を訪れて、優れた点をほめ、必要に応じて祝福と励ましを与え、福音を教え、家族全員が戒めを守って義しい生活ができるよう励ましを与えます。また、ワード部の各家庭がホームティーチングプログラムを通して、毎月最低1回ホームティーチャーの訪問が受けられるように手配します。

ホームティーチャーは、定員会会長を代表し、定員会会長を通して監督を代表する

ために召されています。したがってホームティーチャーは、定員会指導者を助けて、父親や家族を初めとする定員会会員を見守り、強めるために召された神権の代表者なのです。

神権ホームティーチャーの務めについて次のように記されています。「各会員の家庭を訪れ、彼らが声を挙げてもしそかに祈りをなし、またすべて家庭の務めにいそしむように勧め、……常に教会員を守護し、……また教会員の中に邪曲よこしまなきよう、互いの間に頑固がんこなることなきよう、また虚言、陰口かげぐち、悪口あくぐちなどもなき様注意すべきものとす。

また教会員のしばしば集会することをはかり、またすべての会員にその義務をつくすようになさしむ。」(教義と聖約20:47, 53-55)

父親は家族の管理役員として支持されます。父親には、家族に王国の基本的な教義を教え、家族が王国建設の手助けをするように見守り、家族を永遠の生命へと導く責任があります。

このようにホームティーチングプログラムが行なわれると、家庭の問題点がすぐに発見でき、早めに手を打つことができます。こうして、監督の手を煩わづらわせることなく問題を処理することができるのです。これによって監督の重荷は軽減し、その時間を監督として人に委任できない事柄に充てることができるようになります。定員会は担当する会員の世話をするという責任を十分に果たさなければならないのです。

第4に、一般の会員の方々にお話したいと思います。皆さんに理解していただきた



いのですが、ほとんどの監督は精神科病医ではありません。またケースワーカーでも、熟練した経済アドバイザーでもありません。しかし監督はワード部の会員である皆さんに仕えるために、主の靈感によって召されています。

私たちは自分が監督にどれだけ時間的な負担を課しているか考えてみる必要があります。そうすれば、監督は与えられている責任を完全に果たせるようになります。また十分な時間をとって計画し、準備し、^{かん}瞑想し、考えられるようになり、その重大な管理の職において主から靈感と導きを受けられるようになります。もし私たちが自分で解決できる問題を相変わらず監督室に持ち込むならば、監督は委任できない責任を果たすのに必要な貴重な時間を奪われることになります。監督に対して、教員が守るべきルールを幾つかあげてみたいと思います。

1. 監督の元へ行く前に、必ず靈感と解決策を求めて主に祈る。監督に問題という重荷を背負わせるために監督室へ行かないで下さい。しばしば教員は問題について話すためだけに監督室へ行き、その解決方法に耳を傾けようとしません。

2. ホームティーチャーや定員会が処理できることに監督を巻き込まない。

3. 監督やその家族の悪口を言ったり、うわさ話をしたりしない。この偉大にして重要な召しを尊重して下さい。

4. 福音にそった生活をして、監督から責任を与えられた時に、それを受けられるように自らを備える。召されたら、熱意と精力と活力とを發揮して、献身的に仕えて

下さい。また割り当てられた責任を忠実に果たして下さい。

5. 家族の祈りの中で、監督のために祈る。監督の上に必要な力と恵みが与えられ、その大きな責任を果たせるように主に祈って下さい。

監督の職には偉大な力が伴います。監督はワード部に平安と安全と幸福とをもたらすことができます。しかしそれには、監督が召されている責任に専念できるようにし、小さなことに^{わづ}煩わされないようにしなければなりません。監督が自分の時間を計画通り使えるようにしましょう。そして、責任を果たすための貴重な時間を奪わないようにしましょう。忘れないで下さい。監督もすべての家長と同じ責任を負っているのです。第1に良き夫であること、第2に良き父親であること、第3に、家族を扶養する責任を果たすことです。私たちは、監督が家族のために使う時間を邪魔したり、職場にあって成長し、達成し、成功するのを妨げてはなりません。監督は家族に対するこれらの責任を果たして初めて、監督として仕えることができます。

私は兄弟姉妹の皆さんにお約束します。私たちが監督を支持して助け、監督の福利に関心を持つようになり、すべての面で監督が成功できるように祈るならば、私たちは監督の下にあって靈感による指導を受けることができ、私たちの生活に恵みがもたらされるでしょう。

皆さんの上に神の祝福があって、これが監督との新しい関係の始まりとなりますように、へりくだってイエス・キリストのみ名により祈ります。アーメン。



7人のキリスト

十二使徒定員会会員 ブルース・R・マッコンキー

私は7人のキリストについてお話ししたいと思います。正確に言えば、み業とみ言葉を7つの方法で表わされたキリストについてお話ししたいと思います。

私たちは混乱と争いの時代に住んでいます。クリスチャンたちが「見よ、ここにキリストがいる」また「あそこにいる」、すなわち「見よここに救いの道がある」また「あそこにある」と叫ぶ時代です。

私たちの耳には、滅びの声と栄光の声が聞こえます。相対立する宗派の教義や信条が互いに争っているのです。そして、私たちにとても同意できないような教理を信じさせ、曲がった道を歩ませようとしています。

その話は耳ざわりで、くだらないおしゃべりが絶え間なく続き、伝えるメッセージは矛盾しています。最も狂信的で目先の見えない人にとっても、互いに対立する宗教的な見解がすべて正しいわけではないことは明らかです。

「この言葉の争いと信念の動揺の真最中に」(ジョセフ・スミスの著2:10)、私たちは真理に基づいた平穏な声を挙げています。それはラッパの音と共に告げられる声であり、みたまの力によって、罪を悔い改める人々の心の中にささやかれる声です。

またそれは、今ここで永遠の生命に関する言葉を語る声であり、来るべき永遠の王国において不死不滅の栄光を得られるように人々を備えさせる声です。

私たちは主の僕です。主が私たちを造ら

れたのは、すべての人々をキリストの下に招いて、主にあって完全になれるようになるためです。私たちは唯一まことのキリストについて、唯一まことの福音について、唯一まことの救いについて、証するために遣わされているのです。

すべての人々が私たちの証に耳を傾け、心を留めるようにお勧めします。私たちが教え、証するキリストは、以下の7通りの御方として知られています。

第1に、創造主としてのキリスト

天におられる神は、完全で清く、昇栄した聖なる御方で、全人類の御父であられます。神は聖なる御方で、骨肉の体を持っておられ、霊の御父であられます。

主イエス・キリストは長子であり、御父の継承者として、また御子として出て来られました。主は、霊におけるすべての兄弟たちと共に自由意志を授かり、律法に従われました。

従順と、義と、信仰とにより、長い年月をかけて、神の長子、私たちの長兄であられる御方は進歩と成長を重ね、ついに力と能力と支配と知恵において神に似た者になりました。そして、「現在この世を治めたまい、また無限の過去から無限の将来に亘^{わた}ってまします全能の主」(モーサヤ3:5)になられたのです。こうして主は御父の下で「無数の世界」の創造主になられました。

御父は神の福音と呼ばれる救いの計画を

定めて確立されました。これによってキリストを含むすべての神の霊の子供たちは、死すべき肉体を得て、試しの世で生活し、死を味わい、不死不滅の栄光のうちによみがえり、そしてもしすべてのことに忠実であるならば、御父が得ておられる輝かしい昇栄にあずかることができるのです。

また、御父から愛され、選ばれた御方が、救い主、贖い主として予任され、御父の偉大な永遠の計画におけるあらゆる条件を満足するために、贖いの犠牲を捧げることになりました。

第2に、私たちの先祖の神としてのキリスト

私たちにはただひとりの父なる神がおられ、ただひとつの永遠の救いの計画があり、ただひとつの天に帰る道があります。そしてイエス・キリストとは、「御父より賜わりたる御名」であり、この名によって人類に救いがもたらされます。すなわち過去、現在、未来の人々に救いをもたらす「天下に与えられる唯一の名」なのです。(教義と聖約18:23; モーセ6:52参照)

永遠の福音はただひとつであり、神と人との間の仲保者はただひとりであり、墮落した人をその創り主に和解させるために来られた御方もただひとりです。あらゆる時代のあらゆる人々が、同一の力、同一の律法、同一の救い主により救われるのです。そして、その救い主こそキリストです。

聖典にこう記されています。「イエス・キリストは、きのうも、今日も、いつまでも変わることがない」(ヘブル13:8)。イエス・キリストは主なるエホバであり、大いなる「われあり」の神であり、イエス・キリストの外に救い主はおられません。

キリストは、アダム、エノク、ノアを初め、洪水以前のすべての聖徒の神でした。また、アブラハム、イサク、ヤコブなど、すべてのイスラエルの民の神でした。主は

「イスラエルの聖者」であり、過去のあらゆる時代のあらゆる予言者の神でした。彼らは、主のみ名に対する信仰により、すべての力ある業を行なったのです。

キリストはジェレドの民とイスラエルの民とニーファイ人の神でした。モーセは「キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富と考え」(ヘブル11:26)、キリストに従う道を選びました。

キリストは、モーセの言葉通りに紅海を分けた御方であり、ヨシュアの言葉通りに太陽と月を止めた御方であり、エリヤの願いに答えて、やもめの息子を死からよみがえらせた御方です。

すべての予言者、すべての族長、すべての古代の聖徒たちは、主の聖なるみ名により天父を礼拝しました。それ以外に方法はなかったのです。

アダムから今日に至るまで、真の信仰を持つ忠実な人々や、信仰を通して義を行ない救いを得た人々は、すべて例外なく、キリストのみ名をその身に受け、心を尽くしてキリストに従いました。

キリストは私たちの神であり、私たち先祖の神なのです。

第3に、約束されたメシヤとしてのキリスト

アダムがエデンの園から追放された時代から、ヨハネがベタバラでバプテスマを施した時代に至る4千年という長い間、すべての予言者とすべての聖徒たちは、メシヤの降臨を待ち望んでいました。

彼らはキリストについて語り、教え、説き、予言しました。彼らの生活の中心と、あらゆる望みの中心は、キリストが降臨されるという約束にありました。

彼らは、キリストが神の御子としてひとりの処女からお生まれになり、無限無窮の贖いを成就されることと、キリストによって不死不滅と永遠の生命がもたらされるこ

とを知っていました。

すべての教義、すべての儀式、すべての礼拝が、主のみ名を御父御自身のみ名に結びつけていたのです。

モーセの全律法は、そこに示されているあらゆる象徴と予言とにより、主の民を救うために来られる御方を証していました。例えば、モーセの時代の大祭司は贖いの日に、一頭の山羊にエホバのみ名を負わせ、人々の罪のための犠牲としました。これはエホバ御自身が十字架につけられ、世の人人の罪のために殺されることを象徴しています。

第4に、死すべき肉体をもつメシヤとしてのキリスト

私たちの聖なる主は、ユダヤのベツレヘムでマリヤから生まれました。そうすることによって主は「おのれをむなうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた」(ピリピ2:7)のです。

キリストはひとりの人間として、完全な生涯を送られ、万事において天父のみこころに従われました。

福音を教え、教会を組織し、人々を教会の役職に召されました。

また、病人を癒し、死んだ人をよみがえらせ、多くの力ある奇跡を行なわれました。

そして人々から拒まれ、悪の力に支配された人々から罪の宣告を受け、十字架につけられて悲惨な死を遂げられました。

第5に、十字架につけられよみがえられた御方としてのキリスト

ここでは、死ぬためにこの世に来られたキリストについて、人々の罪のために十字架の上で亡くなられたキリストについてお話しします。また、死からよみがえられたキリストについて、さらには栄光に満ちた不死不滅の状態、私たちが主に従って生命と死とよみがえりを受けるように求めて

おられるキリストについてお話ししたいと思います。

ゲツセマネにおいて、キリストはだれにも耐えられない重荷を負われました。そして、悔い改めを条件に全人類の罪を負われた時、すべての毛孔から血の汗を流されました。

カルバリの丘で、3時間にわたってこの世で最後の苦難を受けられた時、ゲツセマネの苦しみが再びよみがえり、キリストは天父から与えられた杯を完全に飲みほされたのです。

ゲツセマネと十字架において、キリストは代価を支払い、贖いの業を完了されました。そして3日目の早朝、キリストは死のなわめを断ち切って墓からよみがえり、天と地におけるすべての力を受け継がれたのです。

主が私たちのためにして下さったみ業の素晴らしさを言葉で言い尽くすことはできません。現在、主は、私たちをとりなす者、仲保者として、天において永遠の住まいを得ておられます。

次のように語られる主のみ声が聞こえないでしょうか。

敬いあがめ	頭をさげて
救われし者	わがわが思え
血の汗をもて	十字架の上に
なんじらの罪	贖いにけり

(讚美歌67番)

第6に、今日のメシヤとしてのキリスト
私たちは、過去におけるキリストだけではなく、現在における、そして未来の世におけるメシヤについても証します。

また、昔の人々に知られていた亡くなられたキリストだけでなく、古代と同じように今日も主の民を導いておられる生ける救い主について語ります。

私たちは、古代において福音を知り、奇

跡を行ない、救いを得た人々について喜ぶだけでなく、今日の福音について、また先祖の人々に注がれたものと同じみたまの賜の中に栄光を得ている人々についても喜びます。

神に感謝します。回復の時代が始まりました。それは、古代のすべての予言者の語ったことが回復される時です。

神に感謝します。天の幕が裂かれました。そして御父と御子がジョセフ・スミス の元を訪れ、啓示と示現、賜、奇跡がまことの聖徒たちの間に豊かにみられます。

神に感謝します。現代において多くの人が御子のみ顔を拝し、非常に大勢の人々にみたまの賜が注がれました。

これは、まことのキリストの知識と、永遠の福音が人々に宣べ伝える最後の時代です。

また、大いなる神がみ言葉を送って、人の子の再臨に人々を備えさせる時代です。

さらに、末日聖徒イエス・キリスト教会が組織され、救いをもたらす聖なる福音を管理運営するという使命が与えられた時代です。

第7に、**福千年のメシヤとしてのキリスト**

私たちは厳粛な言葉をもって、主イエス、永遠のキリスト、あらゆる時代の救い主が間もなく再臨されると宣言します。

マリヤから生まれた御子が確かに当時の人々と共に住まわれたように、神の御子は確かに御父の王国のあらゆる栄光の中に再臨され、人の子たちを治められるのです。その恐るべき日に、現在の世界は終わりを告げるでしょう。邪悪はやみ、あらゆる腐るべきものは焼き尽くされます。そして、太陽が昇ってから西の空に沈むまで、主の栄光が一日中、すべての人々の上に輝きわたるでしょう。

人の子の再臨の日に耐える人々は、尽き

ることのない喜びと平安とを得るでしょう。忠実な聖徒たちは主と共に千年の間この地球を治め、その後、日の光栄の王国に入って休息を得るでしょう。

邪悪で不信仰な人々にとって、人の子の再臨は悪行の報いを受けて焼き尽くされる悲しみの日となるでしょう。

しかし、主を愛し、その律法に従って生活している人々にとって、それは平和と勝利と栄光と誉れの日であり、主が来られて「宝の珠を飾」られる日となるでしょう。(マラキ3:17参照)

さて、これまで語ってきたことをふまえ、みたまによる確かな知識に基づき、私たちは声をあげて主を讃美し、主イエス・キリストについて証します。私たちはその証人です。

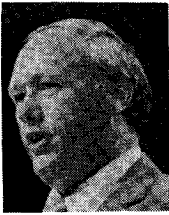
私たちの信仰は、生けるまことのキリストに中心をおいています。キリストは私たちの友であり、主であり、神であり、王であられます。私たちは主を礼拝しているのです。

キリストは全能の神の御子であり、福音を通して、生命と不死不滅をもたらされました。そして主を信じるすべての人は、生ける予言者を通して啓示されているように、御父の王国に主と共に救われるのです。

あらゆる場所に住む、あらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民、およびあらゆる人々にお勧めします。キリストの下に来て、キリストにあって完き人になって下さい。

主を代表し、主のために働く僕として、私たちは義の業を行なうすべての人々に約束します。そのような人々はこの世では平安を得、来たるべき世では永遠の生命を得るでしょう。

イエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。



アロン神権者の活発化

オハイオ州デイトン東ステーク部
ビーバークリーフ・ワード部監督 C・フレデリック・ピンゲル

兄 弟の皆さん、今晚私は皆さんと共に集う機会にあずかされたことを心から感謝しております。また、このような機会と経験をお与え下さった天の父にも感謝したいと思います。これから申し上げますことが青少年たちを強め、その人格を築きあげて行く上で皆さんの役に立つものとなるよう、祈るものです。

私は、自分のワード部での若いアロン神権者を活発にさせるために、どのようなことをしているかお話す責任をいただいております。

第1に、すべてのワード部がマクマナー姉妹のような人を必要としているということです。

マクマナー姉妹のことについてお話させていただきますたいと思います。彼女は私たちのワード部の若い女性会長をしています。監督の皆さん、皆さんのワード部にもマクマナー姉妹に似たような人がいらっしゃればと思います。マクマナー姉妹は、監督の最も大切な責任はワード部の青少年にあるということをはかて読み、それをその通りに信じました。私にそのことを指摘してくれましたので、私もそう信じていることを告げました。すると「でも、とてもそうは見えませんか」と言うのです。

「どういうことでしょうか。」

「だって監督さんは、青少年と一緒に何もして下さらないし、面接だってなされた

ことありませんわ。開会行事には一度もお見えになっただけで代わりには、始めから終わりまで成人の方々と面接をしていらっしゃるんですもの。」

そんなある日のこと、マクマナー姉妹が監督室の扉をノックして入ってきました。

「監督さん、はいっ、この本。監督さんに読んでいただきたいと思います。全部お読みにならなくても、私がアンダーラインを引いた所だけでも結構です。」それは、「素晴らしき世代」(*A Generation of Excellence*)と題した、ボーン・フェザーストン長老の本でした。

私はまず下線の引いてある箇所を目を通し、続いて全部を読みました。その本は私に大きな衝撃を与えました。時間をかけてこの本を著わして下さったフェザーストン長老に感謝したいと思います。と同時に、青少年を愛するがゆえに、「監督さんはこの本を読む必要があります」と言ってくれたマクマナー姉妹にも感謝したいと思います。

私はかつて、ひとりの素晴らしい老婦人のホームティーチャーをしておりました。彼女は思ったことは、はっきりと言う性分でした。ある晩私は、私にとって彼女が大切な存在であり、愛しているという思いを伝えました。すると彼女は、「言うはやすしですからね」と言い、私はやり込められてしまいました。考えてみると私は青少年に対しても、言葉だけの、実のない態度だった

のかも知れませんでした。

第2に、神権役員会と扶助協会を活用することです。

私たち監督会が青少年に目を向けるようになるにつれ、神権役員会や扶助協会の果たすべき責任やその影響力の及ぶ範囲は広がっていきました。特に長老定員会会長の場合がそうでした。私たちのワード部における彼らの貢献の度合は、過去2年間で家庭訪問が90パーセントを超え、ホームティーチングにしても着実な進歩を見せながらやはり90パーセントに達したことからもはっきりわかります。そうした助けなくして、監督会が青少年に対するプログラムを最優先させることはできなかったと思います。

第3に、青少年のプログラムに優れた人材を召すことです。

新しいワード部を組織するに当たっては、最も優れた人をまずスカウトマスターに召すとよく言いますが、私たちのワード部では、前監督がスカウトマスターを務めています。若い男性の会長には、元高等評議員が召されており、指導の任に当たる人は全員専任宣教師の経験を持ち、神殿推薦状を保持しています。監督の皆さん、この点で手を抜かないでいただきたいと思います。どこを手うすにしてよいということは申し上げられませんが、この点において手を抜いてはいけません。真に優れた指導者を青少年プログラムに召して下さい。

第4は、初等協会をなおざりにしてはならないということです。

どうか、初等協会をなおざりにしないで下さい。若い男性の組織同様、カブスカウトや開拓者指導者の選択に当たっては細心の注意と関心を向けていただきたいと思います。

少年たちがいずれ12歳を迎える時には、すでに神権についてある程度のことを学んでいます。さらに、カブスカウトプログラムによって、その上のスカウトへの下地もつくられています。彼らは11歳のスカウトとしてイーグル（訳注：日本のボーイスカウトで「富士」にあたる）への大切な一歩を踏み出したこととなります。

第5に、イーグルスカウトの伝統を守るように励ますことです。

小さな成功がさらに大きな成功を呼ぶものです。私たちのワード部におけるイーグルスカウトの伝統は、ワード部が初めて組織された時までさかのぼります。これは私が感謝して受け継いできた貴重な伝統です。

教師や祭司たちが各々のイーグルを目指して頑張っている姿を目にするのは喜ばしいものです。祭司定員会の第一補助のひとり、18歳の誕生日を迎える直前に、イーグルスカウトになりました。彼の努力のためものだったのです。感激的でした。私はイーグル賞の渡される名誉会議の場で彼らを抱きながら、「よく頑張ったね、立派だったよ」と言いました。その時だけは私の言うことを聞いてくれたようです。

第6は、専任宣教師として伝道に出るといふ伝統を強めることです。

イーグルスカウトになった人と伝道に出た人の数はほとんど同じです。もちろん、改宗してから一年半も満たない内に、専任宣教師として伝道に出ているダグ・プリンコー長老やカレン・ポーマン姉妹のような例外もありますが、伝道の精神は青少年プログラムを強化するのに大いに役立ちます。

第7に、それぞれの管理の職を見直すことです。

青少年の指導者に、自分の管理の職につ

いて報告する機会を与えるのは大切なことです。神権個人面接は、普通そのクラスまたは定員会担当の副監督が行ないますが、3カ月に一度は各定員会会長と管理の職、つまりその責任について私が話し合います。こうすることで、彼ら自身の成長の度合を知ることができると同時に、会長を強め、励まし、指導することもできるのです。また、会長を召したり、聖任するに当たっては、監督である私が自ら行なっています。

第8として、定期的面接を行なうことがあげられます。

ワード部内の青少年を知るうえで最も効果的な方法のひとつに面接があります。すべての青少年と、年に2回、質の高い面接を行なう必要があります。1回は監督が、残りの1回はその年齢層を担当する副監督が行ないます。いずれも、欠くことのできない重要な面接で、その中において彼らの目標や進歩の度合を知ることができます。必要な助言を与えることもできます。

不活発な会員に対してもためらわずに面接を行なって下さい。良い結果が出て驚いたこともたびたびありました。実際、この面接が活発化への重要な引き金となったことが何度かありました。

9番目として、セミナーへの参加を奨励することです。

イエスがキリストであるという知識を青少年にもたらす最も効果的な方法はセミナー以外にはないと私は確信しています。

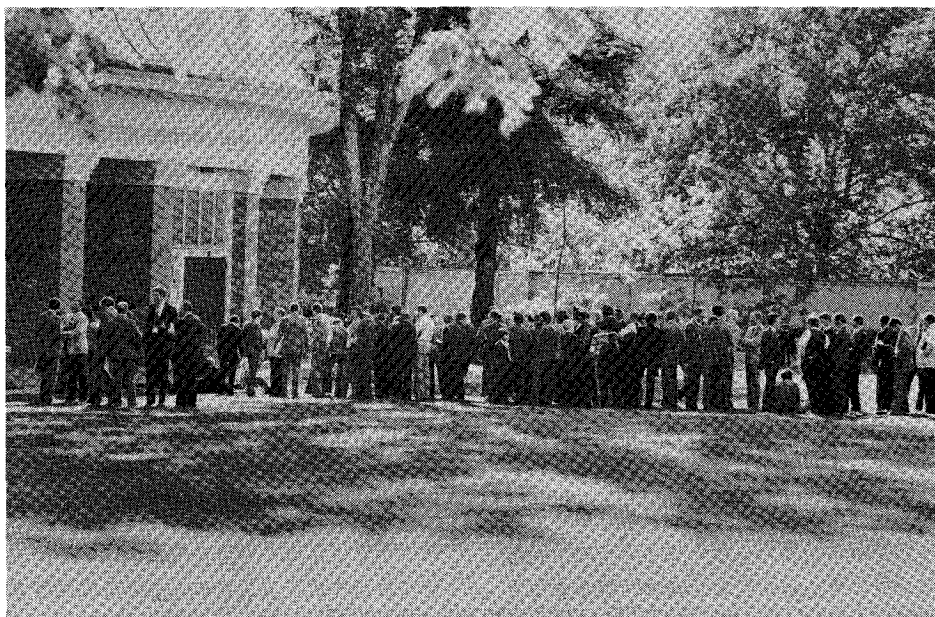
私の話の後で、マイク兄弟が活発化の鍵についてお話ししますが、その前にマイク兄弟に言いたいことがあります。私はあなたのことを心から誇りに思っています。また、ともに働く機会のあることに本当に感謝しています。この活発化への鍵とは、愛と、

関心と、忍耐——時にはかなりの忍耐を要求されることもあります——をもって、問題を抱えた若者の心と人生に触れることなのです。

この重要な活発化への鍵と共に用いることのできる手段は様々あると思います。今晚は、そのうちの幾つかをお話してまいりましたが、どのひとつを取り上げてみても、鍵そのものに代わるものではありません。私たちのワード部では良い活動に恵まれました。カートランド市からデイトン市への自転車旅行などもその一例です。1834年、一部の聖徒たちがカートランドの町からジャクソン郡へ進んだ時の道程を、危険の伴わない範囲で再現してみました。毎晩、その頃の聖徒たちの書いた日記を読んで話し合いました。一日80キロもの道のりをペダルでこいで行った彼らは、初期の頃の聖徒の苦労を身をもって感じたことと思います。

この体験によって、多くの成果が得られました。全員がチームワークの大切さを理解し、証を強めました。しかし、それ以上に意義深かったことは、これまで定員会の活動にあまり活発でなかった数人の少年たちが心から打ち解けたということではないでしょうか。

私たちのワード部では、それ以外にも、ちょっと変わったことを試みてみました。ふたりの祭司が日曜日の朝、なんとしてもベッドから起きられず、神権会に出席することを非常に難しく思っていました。もし、どうしても彼らが神権会に来られないと言うのなら、神権会の方から彼らの所に出かけて行くことに決めました。ふたりの内、まずだれの所に行くかを決めた後、私たちは教会を出て、最初の少年の家を訪問しました。



兄弟の皆さん、実のところ私は、こんなに大勢の少年たちが朝の8時から訪問して、その男の子の父親がなんと言うか本当に心配でした。実際、戸口で待っている間、前の晩にでもどんなことをする予定か父親に電話しておけばよかったと反省の念に駆られていました。

父親が戸口に表われ、私たちは訪問の目的を告げました。この父親は本当に親切でした。2階へ行くと、例の兄弟はぐっすり眠っていました。ベッドの周りに皆が集まっているのに気づいた時のその子の驚きようは決して忘れることのできないものでした。私たちはそこで、ビジネスやレッスン、活発化に関わる幾つかのまとめについての話し合いを含む、素晴らしい集会を持つことができました。

かなり効果的な活発化の方法を思いついたものだ、と味をしめた私たちは次の週に、

別の少年の家でもう一度同じことをしようと決めました。ところが、私たちの計画はその週の内に漏れてしまい、次の日曜日には、私が監督に召されて初めて、100パーセントの会員が神権会に出席したのです。この内のひとは現在専任宣教師として伝道に出ており、もうひとりの兄弟も間もなく伝道に出ようとしていることを付け加えておきたいと思います。

先程、私がホームティーチングをしている高齢の姉妹のことを述べました。「言うはやすし」と言ってくれたその姉妹のことです。兄弟の皆さん、言葉のうえだけで若い男性のことを言うのではなく、専念してみてください。活発化を進め、彼らと1対1の関係を築くのです。これこそ活発化への重要な鍵だと思えます。イエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。



僕たちの活発化

オハイオ州デイトン東ステーク部
ビーバークリーク・ワード部

ミッシェル・ニコラス

先月、監督が僕の家を訪問して下さいたのですが、まさか総大会でお話することになるうとは夢にも思いませんでした。その晩監督は、総大会で12分間のお話をするように割り当てられたことを話して下さいました。それを聞いて僕は、恐ろしいですねと言いました。すると監督は、その半分の時間だったらどうかとおっしゃるので、その方がはるかにいいでしょうと言うと、その分の時間を僕に話してほしいとおっしゃいました。僕は驚きの余りあんぐりと口を開けて、返す言葉もありませんでした。しかし、今晚このようにお話できる機会を心から感謝しています。

これから少しの間、僕自身のことや、監督、定員会のアドバイザー、そしてアロン神権定員会で活発化を促すために行なった幾つかの事柄についてお話したいと思います。

まず、僕たちの監督は大変忙しい人です。時には僕と一緒に楽しい時間を過ごして下さいます。特に面接の時間は楽しい時間です。定員会の活動にも参加してくれます。またピンゲル監督は、素晴らしいアドバイザーを時間をかけて慎重に召して下さいるので、とてもうれしく思います。例えば、コネル兄弟のようなアドバイザーです。

コネル兄弟は改宗したばかりでしたが、教師定員会のアドバイザーに召されました。

その時僕は14歳で、定員会の一員になったばかりでした。短気でかんしゃく持ちで、その性質を抑えるのは大変でした。しかし、そんな僕が会長に召されたのです。

ある時、僕たちワード部の若い男性は、家から約300キロほどの、インディアナ州にあるほら穴に探検旅行に行きました。10月の肌寒い気候の頃でした。僕はある事でもとも腹を立ててしまい、歩いて家に帰ると言い張って、長い道のりを歩き始めました。しばらく歩いて行ったのですが、僕たちのグループの車はみんな僕を追い越して行きました。僕の所を通過する時も、スピードも落としてくれませんでした。僕は啞然として「何てこった。みんな、僕を置いていく気なんだ」と思いました。その時うしろを振り返ると、コネル兄弟が追いかけてくるのが見えました。僕は、決まりが悪くて、もじもじしていましたが、立ち止まって、コネル兄弟が追い付いてくるのを待ちました。彼は、僕をひとりで家にかえすわけにはいかないから一緒についていってあげようと言いました。ふたりで8キロほど歩きました。その間にコネル兄弟は、僕が自分の興奮しやすい性質に気づき素直になれるよう助けて下さいました。前もって打ち合わせをしたらしく、一台の車が戻ってきて僕たちを乗せてくれました。この時から、

コネル兄弟と僕との素晴らしい友情が始まったのです。コネル兄弟はアドバイザーの責任にある間中、僕に短気を抑えることや、エネルギーを建設的なことに向けることを教えてくれました。また、彼の家の屋根の張り替えを手伝わせてもらったり、子守りをさせてもらったこともありました。コネル兄弟は、福音について、そしてどのように、他の人々に心を配るかについて教えてくれました。

ある時、会長会の集会で、コネル兄弟はひとり不活発な会員がいることを指摘し、どのようにして彼を活発にすることができると僕たちに問いかけました。僕たちはその会員を次回のほら穴探険旅行に誘うことに決めました。マイクは僕たちの誘いに応じ、みんなでとても楽しい時を過ごしました。また、僕たちはマイクをその外の活動にも数回招きました。彼は野外活動を一番喜んでいました。その後マイクはカリフォルニア州に引っ越してしまいましたが、今夜の話聞いてくれていると思います。

この夏、僕たちのワード部の執事定員会はふたりの会員を活発化し、3人の非会員を教会に導きました。また、シオンの陣営の通過した道をカートランドからデイトンまで430キロ、自転車走破しました。執事やアドバイザーを初め、監督や大勢の両親たちまでもが一隊となって土曜日にはカートランドに到着しました。翌日は教会の集会に出席し、教会の史跡を見学しました。夜にはファイアサイドをして、翌月曜日の朝には再び自転車に乗って帰途に着きました。デイトンまで戻するのに1週間かかりました。キャンプを張って一夜を過ごした

り、雨の中を走行したり、車と競走したりしましたが、中でも一番素晴らしかったのは、彼らの中に身体障害者の少年がひとりいたのですが、その少年が最後までグループと共に長い道のりを完走したことでした。

僕たちのワード部では早朝セミナーが開かれています。僕は毎朝5時15分に起きます。ですから学校で寝てしまうということのないように、夜は早く床に就かなければなりません。また、読書クラブがあるので聖典を読み、教会や予言者について学ぶ助けとなっています。僕の通うハイスクールには3年生が約750人ほどいて、モルモンは僕を含めてふたりしかいません。ですから毎朝セミナーで、ワード部の同年代の青少年と顔を合わせることは、僕にとって教会の標準を維持していくための大きな力となっています。また僕は、セミナーの会長会や定員会の会長会の責任を持つことによって、集会の司会の仕方も覚ええました。セミナーを初め、定員会活動、定員会アドバイザー、監督のお陰で、僕は自分の興奮しやすい性質を抑え、あり余ったエネルギーを建設的に使うことができるようになりました。こうしたことは、伝道期間中もその後結婚して、親になってからも役立つことだろうと思います。

アロン神権と若い男性のプログラムは人を動かし、変えるプログラムです。このプログラムによって僕自身の生活が変わりました。そして僕は他の若い男性の生活が変わるのを見てきました。以上のことをイエス・キリストのみ名を通して申し上げます。アーメン。



アロン神権者に新たな活力を吹き込む

七十人第一定員会会員 ロバート・L・バックマン

キンボール大管長は次のように宣言されました。

「アロン神権定員会を活発化し、メルケゼデク神権定員会を目覚めさせることにより、教会のすべてのプログラムに良い影響を与えることができる。」

ではどうすればアロン神権定員会を活発化できるのでしょうか。

まず第1に、定員会自体の援助手段について考えることです。

神権者はすべて、定員会に属する特権と、その活動に参加する権利を持っています。私たちはその権利を拒むことはできません。しかし手を差し伸べずにいるならば、その権利を拒んでいることとなります。

神権定員会が組織された目的は、兄弟愛をはぐくみ、奉仕を行ない、福音の原則や神権者としての責任を学ぶための場を提供するためです。私たちはこれらの目的について思いめぐらし、自分のユニットの定員会が正しく組織され、運営されているか問い正してみる必要があります。

会長会は正しく組織され、その責任についてよく教えられ、同年代の若い男性を導く責任を自覚しているのでしょうか。会長会は毎週集会を開き、意義のある定員会活動を企画し、実行しているのでしょうか。

「アロン神権定員会ガイドブック」は、定員会会長会とアドバイザーのための訓練用資料として出版されたものです。定員会

アドバイザーは、毎週開かれる定員会の会長会で、この10課からなるレッスンを教える必要があります。

会長会が各々の責任について自覚すると、定員会の会員と共にプログラムを企画して実行するようになります。その中には特別な助けを必要とする人々の活発化も含まれます。定員会の活発会員を使って良い意味での仲間意識に働きかけ、不活発な会員を愛といたわりをもって包むようにするのです。

活発化を促進するために、定員会会長会は特定の会員に、不活発な若い男性をフェローシップする割り当てを与え、その結果を報告してもらいます。賢明な会長会は、全員の興味を引くような活動を計画します。

また、定員会の若い男性の家庭を戸別訪問します。

「マーク・ピーターソンは今年の3月に執事に聖任されました。その日教会から戻ると、電話が鳴りました。執事定員会の会長からで、定員会の会長がマークと両親を訪問したいということでした。訪問の時間が決められました。約束の時間になると、玄関のベルが鳴りました。玄関には、会長会の4人が背広に白いシャツ、ネクタイという姿で、聖典を持って立っていました。

彼らはマークや両親と共に座ると、まず祈りを捧げ、それからアジェンダを手渡しました。

会長は聖典を開き、マークと父親に聖句

を読むように言いました。それはアロン神権の権能と執事の義務に関するものでした。

それが終わると、会長はマークの責任と義務について説明しました。服装や聖餐のパスの仕方、メッセンジャーとしての態度、断食献金の集め方などについて話しました。そして、何か質問がありますかと尋ねました。

最後に、マークを定員会に歓迎することを伝え、援助が必要な時には喜んで助けますといいました。彼らが帰ると、マークは目を皿のように大きく開いて父親に言いました。「素晴らしい人たちだね。」

実に、アロン神権定員会はいずれも強い兄弟愛で結ばれていました。だれもがこう言いました。「私には、私のことを本当に思ってくれる兄弟、私をかばい、支持してくれる兄弟、私の誤りを正してくれる兄弟がいます。」

第2に、アドバイザーを務める兄弟が、アロン神権者の人生にどのような奇跡をもたらすかということです。

若い男性とアロン神権アドバイザーとの関係がどのような状態にあるかにより、若い男性の生活にもたらされる結果の多くが決まります。この関係は、若い男性が神権昇進を受けるごとにますます大切になってきます。事実それは、祭司の年代の若い男性の宗教心と経験の程を最も的確に表わしています。

父親や家族から独立しつつある若い男性に、理想的なイメージを与えることのできる人をアドバイザーとして選ぶことは非常に大切なことです。

若い男性は、心から関心を示してくれる人に対して、一夜にして反応を示します。しかし、若い男性と親しい関係を築き、彼らの信頼を得、自分に従ってくるようにさ

せるためには、ある程度の時間が必要です。

アドバイザーは効果的な訓練を必要としています。「アロン神権定員会ガイドブック」には、監督会が施す訓練のための情報や資料、予定表などが記載されています。どうかアドバイザーの訓練を行なうようにして下さい。

第3に、主は監督をアロン神権の会長として召されたということです。キンボール大管長は監督に対して、この召しが第1の最も大切な責任であると勧告しています。すべてのアロン神権者は、主が監督を頭とし、また模範として召されたことと、何事においても安心して監督の模範に従うことができることを理解する必要があります。

監督はアロン神権の会長として、アロン神権者一人一人に個人的な注意を払う必要があります。自分はひとりぼっちで、だから相手にもされないなどと思う若い男性がワード部にはなりません。アロン神権者は、監督が近づきやすい、人の気持ちのよくわかる僕であり、信頼のおける人、尊敬できる人であることを知る必要があります。

監督は、教会という限られたわくの中だけでアロン神権者を知るだけでは十分ではありません。監督は、説教壇を降り、ネクタイを外して、アロン神権者たちを生の姿で知る必要があります。

私の親しい友人で、監督として立派な働きをした人がいます。彼が監督として在任中に、ステーキ部長が各ワード部から少年少女を呼んで、監督との関係について話し合いました。ステーキ部長が「何かとても深刻な問題があったら監督に相談しますか」と尋ねると、ほとんどの青少年が「しないとします」と答えました。その理由を聞

いてみると驚いたことに、「監督はまじめすぎる」というのです。一方——これは私の友人の名誉になることですが——友人のワード部の青少年は、「私たちの監督は違います。まじめなだけではありません」と答えたそうです。

監督が若人に与える大きな影響は、非公式な場や活動、スカウティング、奉仕、スポーツなど、ひとりの人間として知り合えるような場所で与えられることが多いのです。

最近、ステーキ部とワード部の神権指導者の主催でキャンプが行なわれました。私はある若い男性に、指導者についてどう思うか尋ねてみました。彼は次のように答えました。

「ぼくはステーキ部長や監督のそばに行くといつもびくびくしていました。どういう訳か、いつでも面接されているような気持ちでした。でもキャンプしながら一緒に生活しているうちに友達になりました。この次の面接の時は、キャンプの思い出について話します。」

主が、監督を祭司定員会の会長として働くように召されたことに注意して下さい。その会長会の特権として監督は、他の人には委任することのできない、特別な鍵を与えられています。監督は、一人一人の祭司と友人になり、彼らが個人としてまたグループとして何を必要としているかを常に察知し、祭司との間に兄弟愛と友情をはぐくむように求められています。監督がその鍵を行使して、教会の教義と標準を祭司に守らせるならば、横道にそれるような祭司はひとりもいなくなるでしょう。

デビッド・O・マッケイ大管長は監督に対し、注意深く言葉を選んで、祭司の会長と

しての召しと責任の重要性を次のように説明しています。「監督の皆さん。祭司定員会とは何なのでしょう。定員会の会長である皆さんにとって定員会は、ワード部内の友好的な雰囲気を見出し、皆さんが誉れと信頼と信仰の道に導かねばならない若い男性を、身の回りに引き止めておくためのものにすぎないのでしょうか。」

監督の皆さん、どうか各々の祭司と少なくとも年に2回、教師や執事とは少なくとも1回、ふさわしさと霊的成長を図るための面接をして下さい。目標を設定できるよう助けて下さい。メルケゼデク神権の誓詞と誓約が理解できるよう教えて下さい。伝道と神殿結婚の備えができるよう援助して下さい。不活発な少年とも面接をし、定員会に活発に参加するようチャレンジを与えて下さい。また副監督たちが、執事や教師と少なくとも年に1回面接するように手配して下さい。

面接を個人的なものにして下さい。意義のあるものとして下さい。あなたが思いやりを示して下さい。1対1の、心と心を通わせる機会は、若い男性を導くうえで計り知れない価値を持つものです。

皆さんの素晴らしい影響力が青少年に及ぶように願っています。皆さんが、青少年を愛するならば、その愛は彼らの心に永遠に残ることでしょう。

第4に、アロン神権定員会のプログラムは、教会の教義を学ぶだけでなく、神権の目的に添った、バランスのとれた活動を通して、教義を実践する機会を提供するということです。「アロン神権定員会ガイドブック」には、実りある経験をするために効果的な計画の立て方が教えられています。

若い男性の活動はすべて定員会が主体と



なったものでなければなりません。すなわち定員会が指導し、計画するのです。

これらの活動を定期的に行なうことが大切です。教会の手引きによれば、定員会は日曜日以外の日に毎週活動を行ない、また少なくとも月に1度若い女性との合同活動を行ないます。これらの指示に従うと良い習慣ができます。しかし活動が、時々あるいは必要な時にだけしか行なわれなかったりすると、プログラムの成功に欠くことのできない継続性が失われてしまいます。前もって計画して下さい。少なくとも3カ月前から、できれば1年前から計画を立てて下さい。慎重に行事予定を立て、十分計画を練ることにより、立派に事を行なう時間的な余裕が生まれ、若い人を引き付けることになります。

若い男性の持ついろいろな興味や、技術、性格を考慮に入れながら、すべての援助手段を利用して一人一人の少年に手を差し伸べることは絶対に必要なことです。

援助手段の中でも、スカウティングは、若い男性を教会に引き付けるプログラムとしてすでに多くの成果をあげています。ス

カウティングは少年たちの興味を引くものであり、イーグル（富士）の階級への道は価値ある目標を立て、それを実現する助けとなるものです。どういう訳か、イーグルの階級に到達する若い男性と伝道に出る若人との間には相関関係があるようです。

この夏アリゾナで行なわれた地域キャンプで、1,150人のスカウトの栄誉をたたえる会が催されました。その会で、イーグルのスカウトの一人一人が伝道に出るという決意を表明しました。

キャンプやハイキングや冒険は、若い男性が人との交流を楽しみ、成人指導者との健全な関係を築くうえで、素晴らしい機会となります。それは今日ではめったに経験できないものです。一人前になるにはただ年を取ればよいというものではありません。一人前になるには、若い男性にある男らしさを^真覚え、忍耐力を養い、世の中に挑み、そして自分にできると思っていたこと以上の成果をあげなければなりません。それが人格と男らしさを築くのです。

あるひとりの小柄なスカウトが、持ち上げるのも難しそうな重いリュックサックを背負って、山中の80キロハイキングに出かけました。彼は苦勞して進みながら何度かあきらめてしまおうと思いましたが、とうとう最後まで歩き通しました。ハイキングの後、彼は額に入った地図の前に立つと、自分の通って来た道を指でたどりながら叫びました。「おまえを征服したぞ！」

どれほどの若い男性が競技会を通じて教会に改宗しているのでしょうか。またどれほど多くの人がスポーツプログラムを通して不活発から救われているのでしょうか。若い男性が成長すると、教会で最も人気のある活動は、チームで行なうスポーツだそう

です。だからといって活動の日に成人の指導を受けずに、バスケットをしていいというわけではありません。スポーツ活動は、若い男性の興味に合わせて幅広く行なうことができます。例えば、バスケットボール、ソフトボール、バレーボール、サッカー、レスリング、ボクシング、サイクリング、水泳などがあります。スポーツを通して不活発な若い男性のほとんどの関心を引くことができます。また、定員会の会員がチームとして競う時に兄弟愛が築かれることになります。

若い男性の中には、同じ太鼓の音で踊らない人もいます。運動を好まないところから、仲間はずれにされる若人がいます。スポーツマンではないが演劇に優れた才能を持つ若い男性がいました。ワード部の劇やロードショーの時など、私たちはいつでもその少年マイクの優れた演技に期待したものです。

マイクは若くしてワード部の回転ステージ劇の演出に携わりました。現在彼は大きな大学で演劇を教えており、教会の忠実な会員でもあります。特別な人になり、何事かに秀でるあの機会がなかったなら、彼を失っていたかもしれません。故意にはありませんが、最近文化芸術がおそろかにされてきています。ワード部やステーキ部は教会本部から指示を受けるのではなく、自分たちで活動を選べるようになりました。これは教会の世界的な発展により必要になったことなのですが、中には文化芸術をもちや奨励しなくてよいと受けとった人がいるようです。ワード部やステーキ部の活動委員会は、監督会や定員会、若い女性のクラスが、監督会青少年委員会を通して企画された音楽や演劇、弁論、ダンスなどの文

化関係の活動を遂行するのを助けるためにあります。これらの文化活動もまた幅広く、アロン神権定員会の活動や兄弟愛を促進するうえで貴重な援助手段のひとつです。

どうか若い男性に、奉仕活動によって身と霊を強化する機会を与えて下さい。私たちはもてなすことばかりして、若い男性を観客としての役にまわしてしまうことが多いようです。彼らは活動に参加することによって成長します。奉仕を通して同胞に対する愛をはぐくむと同時に、自分の欠点やもろさを忘れることができるのです。若い男性は、意義ある奉仕に携わる機会が早ければ早いほど神権者としての責任を早く理解することができます。また真に兄弟を守る者となるために自分にどれだけの能力があるかを知り、永遠の幸福への鍵を見いだすことができます。奉仕することによって、すべての定員会の会員は自分が必要とされていることを知るでしょう。たとえ不活発な会員であっても、ほかの人の生活に祝福を与えるようにという招きには応じるでしょう。

これらの活動はすべて健全な環境を与えるものであり、そこから人間関係も確立されてくるのです。これは大切なことではないでしょうか。デビッド・O・マッケイ大管長は次のように述べています。「ワード部の霊性は、そのワード部の若人の活動に比例する。」

ここで費用について少し申し上げなければなりません。教会幹部の方々は、聖徒たちのお金の使い方について特に注意するようにと勧告しています。私たち、若人の活動に携わっている者は、ステーキ部やワード部の予算のかなりの額と家族が負担する教会関係の出費のうち、予算外の出費のほ

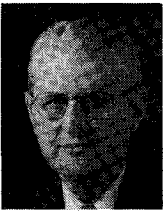
とんどが、競技会やスカウティング、ダンス、演劇、ユースカンファレンスなどの若人の活動に関係したものであることを知っています。事実、若人の活動にはお金がかかります。

かといって若人の活動をなくそうとする意図はまったくありません。もしそのようなことをしたら、私たちは大変な誤りを犯すことになります。この問題について、ヒンクレイ副管長は総大会で次のように述べています。「私たちはお金を惜しむものではありません。賢明に使いなさいと言っているのです。」1ドル費用をかけるごとに、若い男性の価値ということを是非考えて下さい。適確な判断力を働かせて下さい。若人の必要を満たすのに多額のお金を費やす必要はありません。たとえ高度な屋外活動であっても、豪華な、お金のかかる旅行をする必要はないのです。ユースカンファレンスだからといって、遠く離れた場所で開く必要もありません。スカウティングや競技会、その他のプログラムのための費用を若い男性にかせがせるのは、悪いことでしょうか。若人は働きながら、人生の現実について価値ある教訓を学んでいくに違いありません。デルワース・ヤング長老は亡くなられる少し前に、私たち若い男性中央管理会に対し、若人に何でも与えることの危険について話をされました。ヤング長老はテントやリュックサック、ストーブ、寝袋、食器などを作るための型紙を広げて、若人たちが自分の手でキャンプ道具一式を作ることにより、心の成長と誇りとを得たことについて話されたのです。

可能な限りあらゆる援助手段を利用して、アロン神権定員会に活気を与えるようにすれば、私たちは必ず若い男性と心が通うよ

うになります。さらに、このようにしっかりした若い男性がある年齢に達して、メルケゼデク神権に属ける誓詞と誓約を交わし、その信仰と献身と忠実さを長老定員会に伝えていくならば、メルケゼデク神権定員会が目覚めることになるでしょう。ひいては、教会のすべてのプログラムが良い影響を受けることになるのです。

教会の若い男性の会長会として、私たちはここで、ステーキ部長、監督、アドバイザー、成人指導者、定員会会長および定員会会員の方々に、現在不活発の定員会会員を3人選ぶようにチャレンジします。定員会が小規模の場合は、会員でない人を3人選んで下さい。これから1年間に3人、ということは4カ月ごとにわずかひとりということになります。あらゆる援助手段を使って3人の若い男性を活発化、あるいは改宗して下さい。来年度、ひとつの定員会から3人とは、定員会一つ一つを取りあげてみたらわずかなことかもしれませんが、教会全体から見れば、現在定員会の助けなくして暗やみでつまづいている約10万人の若い男性が活発になり、定員会に参加することになるのです。私は若い男性の会長に召された時「この世代の青少年を救い主の再臨に備えさせるプログラムを計画するように」というチャレンジを受けました。私は成人指導者と若人の皆さんに、同じチャレンジをしたいと思います。青少年という世代は、特別な任務を負った素晴らしい世代であることを証します。私たちがこれらの高貴な若人に十分な時間と関心と思いやりを注いで、彼らを前途に横たわる様々な経験に、とりわけ伝道に備えさせることができますように、イエス・キリストのみ名を通してお祈りします。アーメン。



息子の心を備えよ

管理監督会第一副監督 H・バーク・ピーターソン

神 権者の皆さん、今宵まず初めに、数年前首都ワシントンのダウンタウンからダレス空港までタクシーで向かった時の貴重な経験をお話してみたいと思います。御存じの通り、短い距離ではありませんので、かなりの時間、運転手と話をすることになりました。

この黒人の運転手から忘れ難い教訓を得たのです。がっしりとした体格で100キロはゆうにあるというこの人は、14歳を頭に3人の息子の父親でした。郵便局に勤めている彼は、家計の足しにと仕事が終わるとタクシーの運転をしているということです。「これでも夕食までには毎晩ちゃんと家に帰るですよ。」

「奥さんはさぞかし料理が上手なんですよね」と私が言うと、

「ええ」という返事でした。でもそれが理由で早く帰るわけではないようでした。遅くなっても食べられるはずだからです。その人は言いました。「私が早く家に帰るのは、息子と一緒にいられるからです。14歳の息子は私と同じくらい背が伸びてきているんですよ。あと2、3年したら私を追い越してしまうでしょう。その時が来たら、私の愛と尊敬が通じて、むこうも私に対して愛と尊敬の念を抱いている時しか、あの子は私の言うことを聞いてくれない、そんな気がするんです。だから、今私は毎晩、ボール遊びをしたり、宿題を一緒にしたりす

るし、そうでなければその日にあったことを聞いてやるんです。今は、子供と一緒に過ごすひと時が、お金や、お金で買える何のものにもまして大切に思えるんですよ。」

最近、私たちの示す模範が、良かれ悪しかれ、子供たちの行ないや人生にどのように反映されるのか考えていました。例えば父親が母親を喧嘩したり、乱暴な言葉をはいたり、母親を傷つけるようなことを言ったりするのを耳にする子供はどんなことを考えるのか心配になります。父親が日曜日に、ハンティングに出かけたり、庭仕事をしたり、安息日に買い物に出かける時、子供はどこに価値観を置くのでしょうか。父親が監督やホームティチャー、日曜学校の教師、果ては子言者に至るまで批判しているのを聞いたとしたら、子供の心にいつまでも消えることのない印象を残しているのではないのでしょうか。たとえそれがわずかであっても、影響を及ぼしているのではないのでしょうか。

父親が制限速度40キロのところを60キロで、あるいは50キロのところを75キロで走る時、14歳のアロン神権者は国の法律をどう思うのでしょうか。不正直な行ないで、子供の注意を引くことのないほど小さいものなどあり得るのでしょうか。父親が、神のみ名をみだりに唱えたり、神を冒瀆する言葉を連発するのを聞いて育った子供は、成長した時それが真の男の姿、メルケゼデ

ク神権者の姿であると思うようになるでしょうか。

神権者の標準に反する行ないがあっても、ふつう息子は父親を愛し、父親こそ一番偉大な人だと思っているのではないのでしょうか。ですから息子は、父親のようになりたいと思うのかもしれませんが。そう考えてみると、そのような少年は神権や権威や従順を尊重するようになるのでしょうか。もし父親が間違ったシグナルを常に送っていたとしたら、信仰や証、献身、神権指導者に対する信頼を伸ばすことができるのでしょうか。

少年は皆、自分の父親は間違ったことをせず、自分も父親のようになりたいと思う時が必ずあります。そこに悲劇があります。父親があまりよくない模範を示しても、それどころか間違っている時でさえ、息子にとって父親は「お父さんだからこそ」、依然として偉大な人なのです。

多くの場合、信仰の篤い息子は信仰の篤い父親から生まれ、不信仰な息子は不信仰な父親から生まれます。これを聞いて皆さんは驚かれますか。もちろん、信仰の強い改宗者がたくさんいますから、例外もあります。これは喜ばしいことです。しかし、十中八九、息子は父親の模範に従うことになるのです。

時には、6歳の子供が愛犬を洗うために父親のお気に入りのアフターシェープ・ローションを使ったり、12歳の子供が、ボーイスカウトで習った縄の結び方を練習するのに父親の新品のネクタイを3本も使ったり、初めてのデートから帰ってきた16歳の息子が車のへこんだフェンダーを見せながら「父さん。なんでこうなったのかな」と言ったりします。そんな時には、この子供

たちは本当に天からの授かりものなのかと疑いたくなることもあるでしょう。しかし、私は皆さんに、子供たちが本当に祝福であることと、皆さんには子供に対して神聖な責任があることを理解していただきたいと思います。そのために、幾つかの提案をしたいと思います。

もし信仰や証や従順が、予言者の言うように大切なものであるなら、私たちは息子にこの確信を植えつけようとする時、その方法についてもう一度考えてみる必要があるでしょう。このことをいつも心に留めておくことが大切です。なぜなら、自由意志は最も基本的な福音の原則だからです。無理やりに信じさせることはできません。信仰や、証や、従順を押しつけることもできません。信仰へ導くことはできても、信仰を強要することはできないのです。

私が、英雄と考えるモルモン経中の偉大な宣教師は、この永遠の原則を理解し、実践しました。アンモンは大成功を収めました。ほかに数ある例の中でも、ヒラマンの率いた2,000人の若者は、彼の努力の結晶と言えます。ヒラマンは、人は改宗する前に、すなわち真実の言葉を信じる前に、メッセージを受ける備えができていなければならない、と教えました。こうしてみると、息子を改宗へと導くために、父親にできることは数多くあります。父親が大切な原則を心に留めてこれを実践するならば、お互いの心が和らぎ、父親と息子の間にあった障害は取り除かれるでしょう。ここで、私たち父親の言葉を素直に受け入れられるよう、子供の心を備える方法について考えてみましょう。

まず第1に、皆さんの示す模範がもたらす影響について考えて下さい。兄弟の皆さま

ん、私たちのことをじっと見ている人々のことを思う時、神権の力というものを忘れないで下さい。祝福と、導きと、教えを与える力、赦し忘れる力、家族に——息子に積極的な指示を与える力、これが神権の力であり、これは義しい行ないから生じるものです。按手を受ければそれでよいというものではありません。神権の力というものは、義しい生活を送った結果として、それを受ける備えのできた人々にもたらされます。

今晚を境に、私たちそれぞれの生活の中にある小さな矛盾した事柄を抜き取ってしまおうではありませんか。一人一人が、どのようなことになっても、生活の中でその清めの道を歩み続けようではありませんか。もし、私たちの言葉に行動と矛盾したところがあれば、その言葉は行ないのけたたましい音にかき消されて決して人々の耳に届くことはありません。

第2に、子供の心は話に耳を傾けてくれる父親がいたら、もっと備えられ、素直になるということ。私が子供だったら、自分の父親にどんな人になって欲しいと思うのでしょうか。説教ばかりするのではなく、こちらの言うことをもっと聞いてくれる人だといいなと思うことでしょう。世の中の父親というものは長々と説教をするばかりで、教えるのは片時という人が多いようです。父親に自分の話を聞いてもらった少年の心には、時として素晴らしい変化が生じます。自分が特別な存在なのだ、自分がどこにでもいる平凡な12歳、あるいは16歳の少年ではないのだと思い始めます。自尊心を植え付けることができるのです。現在教会が早急に必要としていることのひとつは、正しい自尊心を持つ若い男性を増やすことです。彼らこそこれからの神の王国を担う人々です。父親と息子の語らいの時には、

どちらが多く話していますか。息子と非常に上手なつき合いをしているある父親は次のように言っています。「父親は息子に、口ではなく、もっと耳をかす必要があります。」

第3に、父親が息子のために時間をとって初めて、子供は聞く心構えができるようになるということ。すでに申し上げたワシントンのタクシーの運転手の言う通りです。リチャード・L・エバンズ長老は次のような意義あることを言っています。

「……物には必ず優先順位というものがある。子供がしきりに尋ねてくる時、これに返答することは非常に大切なことである。子供は私たちにいつでもたずねてくるわけではないし、いつでも素直に教えを受け入れるわけでもない。またいつでも耳を傾けるわけでもないからである。往々にしてこちらの都合や時間はまったく無視して、相手の都合と時間に合わせなければならない。しかし、誠実に真心込めて答えたならば、その後も続けて質問してくるだろう。つまらない質問でも、相手に信頼のおけることがわかったならば、後日さらに大切な問題がもち上った時にも信頼を寄せてくることだろう。」(Thoughts for One Hundred Days, 5 vols., Salt Lake City: Publishers Press, 1972, 5:114—15)

子供の心を備える道はほかにもあります。批判することのない父親の姿を息子に見せて下さい。直接息子に対する批判であれ、教会の指導者、教師、隣人、さらには自分の妻に対する批判であれ、人を批判する姿を見せることのないようにして下さい。特に、少年の母親を批判することは絶対に慎んで下さい。父親が息子に与えることのできるものの中で、母親を愛していると伝えることほど貴いものはありません。人の批判をするのは難しいことではありません。あら捜しは簡単です。反対に、だれしもが

持つ弱点に目をつぶり、必ずそこにある光ったところを捜し出すことは、主の眞の弟子でなければできないことです。

少年には忍耐のある父親が必要です。怒るにおそく、赦すに早い父親、そして自分もかつて子供だったことを覚えていて小さな息子に大人のように振る舞うことを期待しない父親、そんな父親が必要とされています。

最近の土曜日の夕方のことですが、ある若い家族がレストランで食事をしていました。父親と母親、そして6歳と10歳くらいのふたりの男の子の4人家族でした。6歳の子供が失敗をしました。すると父親はその息子をなじったり、小突いたりして、はた目もはばかりぬけんまくで叱りつけました。それから食事が済むまでというものは、他のテーブルはどこも休日の楽しい雰囲気でも華やいでいるのに、彼らのテーブルではだれもしゃべろうとはしませんでした。その子供はひと口食べるごとに、そっと父親の方をのぞき見ては顔をうかがうのです。その少年の顔には心配と恐れの色が表われていて、態度にはおおよそ子供には似つかわしくない重々しきがありました。

子供には必要な時注意してくれる父親が必要です。しかしそれ以上に、どのように振る舞おうとも受け入れ、かわいがり、愛してくれる父親、十代の若者を大人のように扱ってくれども、大人のように行動することは期待しない父親というものが必要なのです。少年期の振る舞いの向こうに立派な成人としての将来を見、さらに進んで永遠の行く末をかいま見ることは、立派な父親でなければできないことです。

「エルバート・ハーバードのスクラップブック」から私たちにとって模範とすべき一節を引用しましょう。

「人の真価を測る場は、仕事場でもなければ、教会でもなく、ましてやいかかわしい場でもありません。人の値打ちは家庭の中で測られます。そこで仮面をぬいだ彼を見て、いたずら小僧か天使か、やくざか王か、はたまた英雄かべてん師かがわかります。その人が世間の人からほめたたえられようと、腐った卵を投げつけられようと、私は一向に気にしません。ある警察官がどんな誉れを受けようと、何の宗教を信じようと、私にはどうでもよいことです。しかしその人の子供が父親の帰りを恐れ、妻が5ドルのお金を夫に願う度にびくびくしなければならぬとしたら、たとえその人が朝な夕なに祈ったとしても、その人は最もたちの悪いべてん師と言えましょう。……一方、子供たちが先を争って父親を出迎え、夫の足音を聞いた妻の顔が晴れやかに輝くとしたら、その男性は汚れがなく、その家庭は天国であることがわかります。……私は女性を泣かせるよりは、男性をのしる人間を赦します。妻にあなどられるよりは全世界を敵にまわした方がましです。子供に恐れられるよりは、王の怒りを買った方がよいと思っています。」(W・C・ブラン、"A Man's Real Measure", in *Elbert Hubbard's Scrapbook*, N. Y.: Wm. H. Wise & Co., 1923, p. 16)

兄弟の皆さん、神権が聖なるものであることを証します。この神権は、私たちの生活はもとより、他の人々の生活をも祝福するために与えられています。聖なる真理を教える時に、心を備えることの大切さを忘れないで下さい。私たち一人一人が清めの道を歩み、愛する者たちの妨げとなるのではなく、力となることができるようにしようではありませんか。イエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。



アロンの神権

副管長 ゴードン・B・ヒンクレー

「汝^レら、われと同じ業に働く僕らよ。救世主の御名によりて、われ汝らにアロンの神権を授く。こは天使の導きと恵み、悔改めの福音、罪を赦すために水に沈むるバプテスマなどの鍵を握る神権にして、まことにレビの子孫が主の御前に再び義しきに^適いて捧物を捧ぐる時まで、この世より決して再び取り去らるることなし。」
(教義と聖約第13章)

御存じのように、これは教義と聖約第13章の言葉です。1829年5月15日、バプテスマのヨハネはジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリの頭に手を置いて、この言葉を宣言し、アロン神権を授けたのでした。

私は、執事への聖任を間近に控えた12歳の時に、父からこの聖句を暗記するように言われ、実際そうしました。以来、私はこの聖句を忘れたことがありません。

今晚、この会場には大勢の青少年が集っています。では皆さん、このタバナクルに集っている皆さんも、他の会場でこの大会の話に耳を傾けている皆さんも、立ってこの言葉を暗唱しましょう。

「汝ら、われと同じ業に働く僕らよ。救世主の御名によりて、われ汝らにアロンの神権を授く。こは天使の導きと恵み、悔改めの福音、罪を赦すために水に沈むるバプテスマなどの鍵を握る神権にして、まことにレビの子孫が主の御前に再び義しきに^適いて捧物を捧ぐる時まで、この世より決し

て再び取り去らるることなし。」

この言葉を知っていて暗唱できた人を、ほめたいと思います。暗唱できなかった人は家へ帰ったら教義と聖約を開き、この言葉を読んで暗記するようにして下さい。これは、皆さんが保持している神権の憲章であり、アロン神権が正当かつ真正であることを明らかにしている聖句なのです。

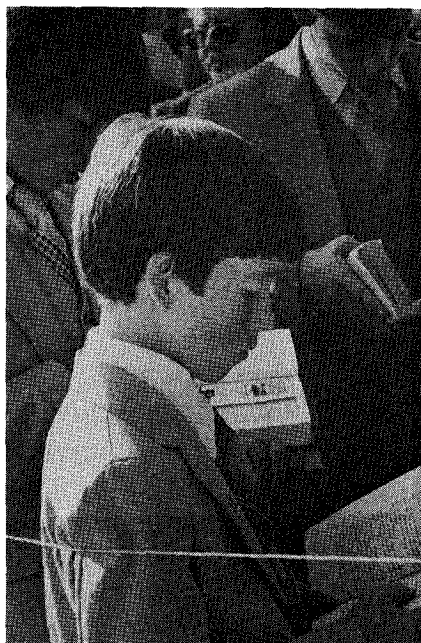
さて、それでは、バプテスマのヨハネがこの神権を回復した時に言った言葉の中から、幾つか特別なものを取り上げてお話ししたいと思います。皆さんに授けられている神権には、それに伴う力があります。もし、まだ気付いていない人がいたら、この力については是非とも知っておいていただかねばなりません。

まず、「われと同じ業に働く僕らよ」という言葉に注目しましょう。

アロン神権を保持し、それを行使する時、皆さんはバプテスマのヨハネと同じ業に働く僕なのです。そのことを理解していませんか。このバプテスマのヨハネこそ、この世に生きていた時にヨルダン川で、世の救い主であり神の御子であるイエスに水でバプテスマを施したその人なのです。興味深いことですが、ジョセフとオリヴァはまだ年若く、世の人々からさほど注目されていなかったにもかかわらず、ヨハネは「われと同じ業に働く僕らよ」と語りかけています。ヨハネは、王が臣下の者に話す時のよ

うに上からものを言うような調子では話しませんでした。あるいは裁判官が被告を前にして話すような調子でも、学長や校長が生徒に上から下の者へ、ものを言う時のような調子でも、話しませんでした。それどころか、復活したヨハネは、このふたりの若者を自分と同じ業に働く僕として話しかけたのです。私にとって、このことはとても素晴らしいことです。そこには、私たち神の神権者のすべての者を結ぶ素晴らしい真の兄弟愛の精神が言い表わされているからです。私たちは皆、僕です。教会や社会での地位や役職にかかわらず、また貧富の差や肌の色にかかわらず、私たちは皆等しく僕であり、聖なる神権政体の一端を担う者として、互いに兄弟同士であり、神の息子なのです。

このことは、私たち一人一人にとって意



味のあることです。いかなる場合においても、私たちの品位を傷付けたり、卑しめたりするものではありません。それどころか、主の教会にあって主のみ業に働く責任を遂行するすべての人を高めてくれるのです。皆さんも私も、このタバナクルの壇上に席を占めている兄弟たちも、様々な場所で教会に集っている兄弟たちも皆主の僕であり、聖なる神権を有し、自分の携わる業の中で神権を行使する権限を持っているのです。皆さん、特に青少年の皆さん、このことを決して忘れないで下さい。

次に、ヨハネが何の権威によって語っているかに注目して下さい。彼は「救世主の御名によりて」と言いました。私たちが生まれつき備えている力や権能によってこの神権を行使することはできません。神権を行使する時は、常にメシヤの権能によって行使するのです。では、メシヤとはどなたのことでしょうか。メシヤとは、神の御子、イエス・キリストです。ヨハネも、私たちがいつも言うように、「イエス・キリストのみ名により」と言ったものと思われま。青少年の皆さん、決して忘れないでほしいのですが、たとえ聖餐のパスであれ、ホームティーチャーの責任であれ、また聖餐の祝福をする時やバプテスマを施す時であれ、神権を行使する時はいつも、主の聖なるみ名の下に、主の聖なる権能によって、主の僕として働いているのです。

このことをいつも心に留めておかなければ、皆さんの生活に大きな変化が起こるでしょう。神権を持つ者として、イエス・キリストのみ名により仕えるべきことをさとするならば、不正直なことはできません。また、麻薬やアルコールやタバコで体を汚したり、みだりに主のみ名を唱えたり、不道徳な行

ないをしたりもできません。皆さんは神権を有し、イエス・キリストのみ名によって働くことを許されています。どうか、今晚この時から、いついかなる時にもこの神権を行使するにふさわしい生活をするようにして下さい。

この権能を賦与するに当たって、次にバプテスマのヨハネはこの神権の力について語りました。ほかにも幾つかあげていますが、ヨハネは「天使の導きと恵み……の鍵を握る」ということを言っています。

ウィルフォード・ウッドラフは非常に長命を保ち、多くの経験を重ねた人でしたが、大管長時代に、アロン神権を持つ青少年に向かってこう語りました。「諸君に知っておいてほしいのです。全力を尽くして自らの召しを遂行するならば、その人が祭司であろうが使徒であろうが、何ら変わりはありません。祭司は天使の導きと恵みの鍵を持っています。私は使徒として、七十人として、長老として働いてきましたが、祭司の職にあった時ほど主から多くの守りを受けたことはありませんでした。」(Millennial Star, 53:629)

愛する青少年の皆さん、よく考えて下さい。皆さんが持っている神権には、天使の導きと恵みの鍵を伴うものなのです。すなわち、私なりに言い換えれば、神権者としてふさわしい生活をするなら、実に天の軍勢の導きと、守りと、祝福を受けることができるのです。思慮深い人なら、この素晴らしい祝福を拒むようなことは決してしないでしよう。

同じ説教の中で、ウッドラフ大管長はこう言っています。「私はこの峡谷の地に足を踏み入れてから、またウインター・クウォーターズに戻りました。ブリガム・ヤング

大管長の命によってボストンに派遣されたのです。……旅の途中、ある晩、私はウィリアムズ兄弟の庭に馬車を止めました。オルソン・ハイド兄弟も、私の馬車の横に彼の馬車を止めました。私の馬車の中には妻や子供たちがいました。私は馬を馬車から解いてやり、夕食をすませ、馬車の中の床へもぐり込みました。ところが数分とたたない内に、みたまが私に語りかけました。

『起きて、馬車を移動させなさい。』私は妻に、起きて馬車を動かさなければならないことを話しました。妻は『何のために』と尋ねましたが、私は『わからない』と答えました。妻はそれ以上何も尋ねませんでした。『わからない』という答えて、彼女には十分だったのです。私は起きて馬車を30メートルほど動かし、前輪を家の角に向けて止めました。それからあたりを見回り、また床につきました。すると、さっきと同じようにみたまの声がしました。『樫の木につないで馬を移動させなさい。』馬は、馬車から200メートルほど離れた所につないでいました。私はそこへ行き、馬をヒッコリーの茂みに連れて行って、つなぎました。そしてまた床にもぐり込みました。

それから30分ほどして、たつまきが起これ、樫の木は根元から60センチメートルほどの所で折れてしまいました。その木は垣根を3、4箇所なぎ倒し、前庭のオルソン・ハイド兄弟の馬車のすぐそば、前に私の馬車が止めてあったちょうどその所に倒れました。もし私がみたまの声に聴き従っていなかったなら、どうなっていたことでしょう。もちろんのこと、私も妻も子供たちも、間違いなく死んでいたでしょう。それは静かな細い声でした。——地震が起こったわけでも、雷が落ちたわけでも、稲光がした



わけでもありませんでした。ただ静かで細い、神のみたまのささやきでした。その声
が私の生命を救ったのです。それは、私に与えられた啓示のみたまでした。(Millennial Star, 53 : 642—3)

これは、後に教会の大管長になった、偉大で賢明な信仰深いひとりの人の証です。神権を受け、「天使の導きと恵み」を受ける資格を持っている人なら、この話の中で彼が語ったと同じ祝福を受けることができます。

もちろん、皆さん御存じでしょうが、神権を持つ末日聖徒としてふさわしい生活をしていなければ、この素晴らしい祝福にあずかることはできません。

次にヨハネがジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリに語った言葉は「悔改めの福音」です。

この中の大勢の方々は教師か祭司であり、

ホームティーチングの割り当てを受けています。皆さんには、この責任の中で悔い改めについて教える権能があるのです。すなわち、担当する末日聖徒が福音の原則に対してさらに忠実に生活できるように励ますことができるのです。私の家にも、祭司の職を持っている青年が父親と一緒にホームティーチャーとして来てくれています。彼には、回復されたイエス・キリストの福音の原則に対してこの私をもっと忠実に生活するように励ます機会と責任があるわけです。

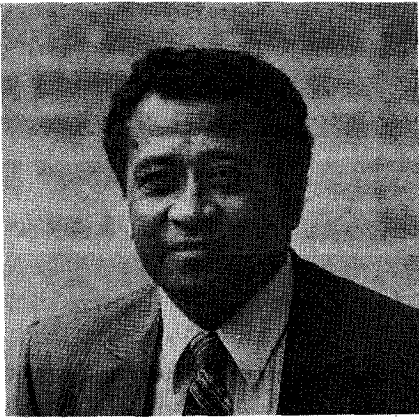
悔い改めを教えること、罪に立ち向かい、主のみ前に正しく歩むよう励ますこと、それは主のみ業に働く私たちの大きな責任です。私たちの福音は、悔い改めの福音です。皆さんには、自らの持てる神権の下に、この悔い改めの福音を教える責任と権能があります。もちろんもうおわかりでしょうが、その責任をよく果たそうとするならば、自分自身が模範となるような生活をしなければなりません。

次にバプテスマのヨハネは、「罪を赦すために水に沈むるバプテスマ……の鍵」を握るアロン神権について語っています。

祭司の皆さんは御存じのことと思います。祭司は罪を赦すために水に沈めるバプテスマを施す権能を持っています。皆さんは、この権能の素晴らしさについて考えたことがあるでしょうか。

男女を問わず自らの罪を真に悔い改めた人は、それらの罪が赦されて、新たに生まれ変わることができるのだという気持ちで、水に沈められるバプテスマを受けるにふさわしい者とされるのです。

人にバプテスマを施すということは、小さなことでも、ささいなことでもありませ



ん。若い祭司の皆さん、皆さんは主のみ名によって聖なる権能の下に、バプテスマという驚くべき方法によって、人を過去の罪から清め、新たなよりよい生活へと導き入れる働きをします。皆さんにはこの神聖な権能を行使するにふさわしい生活をするという非常に重大な責任があります。

それでは最後に、ウィルフォード・ウッドラフ大管長の言葉を、もう一度取り上げたいと思います。

1897年2月28日、日曜日の午後のことでした。その日、ウッドラフ大管長の90歳の誕生日を祝う会がタバナクルで開かれたのです。この大きな建物の席は一杯になり、通路という通路に人があふれました。きょうもこの会場は一杯ですが、これどころの騒ぎではありませんでした。おそらく1万人以上の青少年、皆さんと同じ年頃の、ものすごい数の青年男女が詰めかけたものと思われます。ウッドラフ大管長の体は衰弱し、声も力強くはありませんでしたが、今私立っているこの説教壇の前に立ち、特に青少年に向かって話し始めました。

「私はこれまで、少年期、青年期、そし

て老年期と人生を生きてきました。皆さんと一緒にいられるのも、もうそう長くはありません。皆さんに、幾つか勧告を残しておきたいと思います。皆さんは教会、そして神の王国の中で役職に就き、聖なる神権の権能を授かっています。天の神は、今日この時代に皆さんを指名し、召し出されました。この点に注目して下さい。青少年の皆さん、幹部の兄弟たちの勧告に耳を傾けて下さい。神に近く生活し、若い時から祈り、祈ることを習慣とし、神の聖きみたまを求め、度々交わるようにして下さい。そうすれば、皆さんは神のみたまにより啓示を受け、霊性を磨いていくことができますでしょう。……

天の神は、みこころにより、今日まで私を生き長らえさせて下さいました。神は私に、悪に導くあらゆる言葉や行ないを拒絶する力を授けて下さいました。皆さん、タバコやアルコールを初め心身をむしばむものを口にはいけません。神を敬って下さい。そうする時に、皆さんは世の人々の知り得ない、皆さんの頭に授けられた使命を遂行していくことができますでしょう。神の祝福がありますように、アーメン。」(マサイアス・F・カウリー、*Wilford Woodruff: Fourth President of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints*, Salt Lake City: Deseret News, 1909, pp. 602—3)

今宵、私はウィルフォード・ウッドラフ大管長の素晴らしい勧告を繰り返してお話し、永遠の父なる神が生きておられること、イエス・キリストは神の愛したもう御子であること、今までお話してきた神権が確かにこの地上にあること、そして私たちはその祝福にあずかっており、その権能と責任を授かっていることを証致します。

神がアロン神権を持つ青少年を祝福したまい、天の神の慈悲と親切によって与えられた神聖な素晴らしい召しと権能の尊厳を守りつつ生活できますように。

さて、ここでまったく話題を変えて、先輩の兄弟たち、特に監督会で働いている兄弟たちに少しお話したいと思います。聖餐会について、少々お話したいと思います。

私たちには聖餐会を執り行なう責任がありますが、聖餐会が霊的なものであり、福音が教えられ、証、特に世の救い主に関する証がなされる場であるという点を見逃してしまうと、人々からその大きな祝福を取り上げてしまうことになります。

聖餐会は娯楽の時間でもなければ、福音にかかわりのないお話をする時間でもありません。聖餐会は私たちの霊性をはぐくみ、永遠の計画に関する驚嘆すべき主の啓示と、私たちの救い主であり贖い主である主御自身について理解を深める時間です。

聖餐会では、主について証し、主の生涯とその歩み、特に贖いの犠牲について教えるべきです。

1831年8月7日にジョセフ・スミスに与えられた啓示の中で、主が御自身の教会に集うすべての人々に次のように言われたのは、聖餐会のことを心にかけておられたからではないでしょうか。

「汝なおさら充分に世の汚れに染まざる様、祈りの家に行きてわが聖日に汝の聖式を捧ぐべし。……されどこの主の聖日に於ては、いと高き者に汝の捧物と聖式とを奉りて、兄弟たちに向い主の前に於て汝の罪を告白するを忘るべからず。」(教義と聖約59:9, 12)

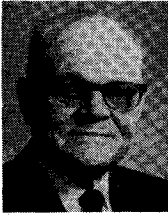
主の民が自らの内に、今日至る所で荒れ狂う誘惑に抗する霊的な力と能力をはぐく

んでいなければ、どうして世の汚れに染まらずにいられるでしょうか。そして、そのような力をはぐくむには、どこへ行けばよいのでしょうか。この啓示が言わんとしていることは、はっきりとしています。主の民は聖餐会で主を礼拝し、主と交わることによって、自らを訓練し、世の汚れに染まらずに生きたいという望みをはぐくむのです。

聖餐会は常に、霊的な意味での祝宴でなければなりません。また、瞑想と内省の時間、主に讚美の歌を捧げる時間、主や永遠の御父と交わした誓約を新たに作る時間、そして、敬虔な態度と感謝の心をもって、主のみ言葉に耳を傾ける時間でなければなりません。

聖餐会に責任を持っている皆さんにお願いします。聖餐会が今お話したような会となるよう、プログラムの作成にもう少し力を注いで、皆さんの聖餐会が霊を活気づけるような会になるようにして下さい。また、聖餐会に出席する皆さん、特に青少年の皆さんにお願いします。この聖なる集いが敬虔な雰囲気の中で行なわれるようにして下さい。

世の汚れに染まらないようにすることは、決して易しいことではありません。私たちは皆、あらゆる助けを必要としています。主は、そのために必要な指示を与えて下さいました。その指示は、はっきりとしていて、曖昧なところはまったくありません。私たちがその指示に従うことができるようお祈り致します。聖なる神権を持っておられる兄弟の皆さん、この業は神様のみ業です。皆さんの上に主の祝福がありますように。私たちが仕える御方、主イエス・キリストのみ名により祈るものです。アーメン。



神の神権

第二副管長 マリオン・G・ロムニー

私は皆さんと共にこの大会に臨んで、数々の説教に楽しく耳を傾けてきました。その間中、私は主のみたまが私たちと共にあるのを感じています。

神の神権を有するという事は、重大なことです。私は今宵この神権者大会において、このことをお話ししたいと思います。神の神権とは、力です。それは、この世と、来るべき世にあって、効力のある神聖な儀式を執り行なうために、主が私たち神権を持つ者に天よりお与え下さったものなのです。また、この世における最も偉大な力があります。私は長年の間、神権を有し、執事の時から現在召されているこのメルケゼデク神権の職に至るまで、その特権を享受してこられたことを非常にうれしく思っています。この世を救うものは神権です。人の作った組織でもなければ、人の立案による組織でもありません。神権は天から啓示され、私たちに与えられた力であり、人が永遠の生命を得て天の御父のみ前へ立ち戻るための助けをするものです。

この建物が神権を持つ人々で一杯になっている光景は、まったく見事です。メルケゼデク神権を持っておられる私と同じような年配の方々、アロン神権を有している若い皆さんもいらっしゃいます。私は皆さんが、主が授けて下さった神権の権威の重

大さを心に留め、御自分が持つておられる神権の職の中で主に仕えられるよう、願ってやみません。

私は、執事の時代から、現在メルケゼデク神権を持つに至るまで、4分の3世紀の間、神権を保持してきましたが、いつもそのことに喜びを感じてきました。神権は私にとって昔からずっと神聖なものでしたし、今も神聖なものです。どうか、皆さんも神権について私と同じ気持ちを持たれますように。皆さんにとって恥になるようなこと、また主のみ前で話すことができないような恥ずべきことをしてはなりません。私たちは、主とまみえるにふさわしく、福音に従った生活をしたならば、いつの日かその特権にあずかれるのです。自分自身の生活が、福音の教えと神権につける義務にふさわしいものであるということを、主が知られるように自分で認識できるとしたら、大きな感謝の念が湧いてきます。

本当に楽しい集会でした。ここに来ることができ、今宵ここで多くの説教に耳を傾けることができ、うれしく思います。青少年の上にも、成人の神権者の上にも、また老いた人々にも若い人々にも主の祝福があるように。そして、今宵ここに集った皆さんの上に主の祝福があって、福音の教えに従って生活し、主が与えて下さった神権の職

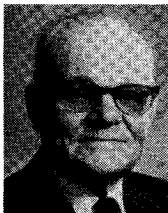
務を遂行することについて意識を持ち、それを実際に行なうという決心をされますように。この世でなした行ないについて報告するよう呼び出された時、主が私たちの行ないを嘉納したもうに違いないという確信を持つことができるなら、その日は私たち一人一人にとって素晴らしい日となるでしょう。その日には、神権を保持し、忠実にその義務を果たし、主を求める青少年と成人の神権者は、この世を越えて永遠の世に入り、さらに進歩することができるのです。

前にも申しましたように、今宵、私は楽しくこの集會を過ごしました。皆さんが出

席して下さったことをうれしく思っています。どうか、明日もひとり残らず大会において下さいますように。

皆さんに私の祝福を残していきたいと思います。また、神権の力は神の力であることを皆さんがよく理解なさいますようお願い致します。自分自身、また愛する人々や主を落胆させるようなことをしたり、生涯神権の義務に忠実な人々に与えられる祝福を受ける権利を自ら損なうようなことをしないで下さい。皆さんに私の祝福と証とを残し、イエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。





神への感謝

第二副管長 マリオン・G・ロムニー

兄 弟姉妹の皆さん、本当に申し訳ないのですが、私には皆さんの姿があまりよく見えません。しかし、前の方にだれかがいるというのはわかります。目は見えなくとも、感じることはできるのです。きょうは、少しの間、感謝ということについてお話ししたいと思います。恩を感じることは徳高いことであってよき称賛的になりますが、忘恩の罪は非難的になります。

次のような言葉があります。「思知らずな人間というものは、木の下でドングリを食べるイノシシのようだ。上を見上げて、それがどこから来たのか知ろうともしない」(ティモシー・デクスター、*The New Dictionary of Thoughts*, Garden City, N. Y. Standard Book Co., 1961, p. 308)

イエスは10人のライ病人を癒してやったのに、ひとりしかお礼を言いに戻ってこなかったのを見て、恩を感じない人について、御自分の気持ちを述べておられます。ルカはその時の様子をこう記しています。「イエスはエルサレムへ行かれるとき、サマリヤとガリラヤとの間を通られた。そして、ある村にはいられると、十人のらい病人に出会われたが、彼らは遠くの方で立ちとどまり、声を張りあげて、『イエスさま、わたしたちをあわれんでください』と言った。イエスは彼らをごらんになって、『祭司たちのところに行って、からだを見せなさい』と言われた。そして、行く途中で彼らはきよ

められた。そのうちひとりには、自分がいやされたことを知り、大声で神をほめたたえながら帰ってきて、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。これはサマリヤ人であった。イエスは彼にむかって言われた、『きよめられたのは、十人ではなかったか。ほかの九人は、どこにいるのか。神をほめたたえるために帰ってきたものは、この他国人のほかにはいないのか』(ルカ17:11—18)

キリストは最後の晩餐の折に、感謝をするということの模範を示されました。「一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、祝福してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、『取れ、これはわたしのからだである』。また杯を取り、感謝して彼らに与えられると、一同はその杯から飲んだ。」(マルコ14:22—23)

古代の聖典にも近代の聖典にも、主に對する嘆願、そして賞賛と感謝の言葉が数多く見られます。

詩篇の作者は、こう歌いました。「主こそ神であることを知れ。……感謝しつつ、その門に入り、ほめたたえつつ、その大庭に入れ。主に感謝し、そのみ名をほめまつれ」(詩篇100:3—4)

(モルモン經のモーサヤ書に登場する)ベンジャミン王は、人々にこう諭しました。「お前たちはどのようにお前たちの天の王に感謝を捧ぐべきであろうか。私の兄弟たちよ、よく言うておく。お前たちがたと

え全身全霊の力をつくして感謝と讚美とを捧げ、お前たちを造りお前たちを助けてお前たちを養い、お前たちを守りお前たちを喜ばせお前たちが互いに平和に暮すことを許したもうた神をたたえても、また、たとえ始めからお前たちを造ってこれに息を与え、以て毎日毎日お前たちを生かし、生きて動き意志のままに行うことを許し、時々刻々お前たちを支えておられたもうお方に全身全霊の力をつくして仕えても、お前たちはそれでもまだ益にならない僕である。」(モーサヤ2：19—21)

大分前のことですが、ジョセフ・F・スミス大管長はこう言いました。

「今日の地に住む者の最も大きな罪のひとつは、恩を知らないという罪である。また、神と神の統治する権利を認めないことである。私たちは、並はずれて賜に恵まれた人や、優れた知性を持った人を見ることがある。このような人は、偉大な原則を進展させる器である。その人も世間も、この人の偉大な才能と知恵を、当人の誉れに帰している。彼は自分の成功を自分の活力と労力と知力によるものとする。彼はすべての成功に神のみ手があることを認めない。神を全く無視して自分自身の誉れにする。これはほとんど全世界に共通したものである。科学、芸術、機械学、そして現代の物質文明の発達における近代のすべての大発見に対して、世間はこのように言う。『私たちがやったのだ。』個人も、『私がやった』と言って、神に誉れを帰そうとはしない。今、私は予言者ジョセフ・スミスを通して与えられた啓示を読もう。上記のこのため神は、地上の民を喜んでおられない。すべてのことに神のみ手を認めないので、人々に怒りを示しておられる。」(「福音の教義」p.

263)

〔ロムニー副管長は、この箇所まで準備した原稿を読んできたが、ここから次のように話した〕

皆さん、私はよく準備して書いた原稿を持ってきているのですが、読むことができません。しかし、機関誌に載せる時には残りの部分も入れていただくようにします。私たちは、自分の才能や達成してきた事柄は主の恵みによるものであることを認め、主が与えて下さったすべてのものに感謝しなければならぬと、啓示の中で教えられました。原稿の残りの部分を読めば、それらの啓示の言葉を通して、私が皆さんにお伝えしたいと思った事柄をよく理解していただけるはずで、私は、主のみ業に働く特権を感謝しています。また、私は今自分に与えられている機会の重大さを思い、多少なりとも主のお役に立ち、残りの人生を通して感謝の思いを表わしていければと願っています。イエス・キリストの御名によって、皆様方すべての上に私の祝福を残していきたいと思えます。アーメン。

〔以下は、ロムニー副管長が準備された説教の残りの部分である〕

偉大な人は常に、神の偉大さと、自分が神によって生かされている存在であることを認め、そして絶えず神に感謝を捧げます。

1863年のアブラハム・リンカーンが書いた決議文の言葉について考えてみましょう。

「我々は最も素晴らしい天の恵みに与ってきた。平和と繁栄のうちに長い年月を過ごし、教と富と力において、他のいかなる国も成し得なかつたほどの発展を遂げた。しかし、我々は神を忘れてしまった。平和のうちに我々を守り、繁栄と富と力とをもたらしてくれた慈悲深い御方のみ手を忘れ

てしまった。そして、自らの心を欺いて妄想にふけり、すべての祝福は我々自身の優れた知恵と徳によって生まれたと思ひ込んでしまった。揺るぎない成功を勝ち得たために有頂天になり、自己満足に浸りきり、主の贖いと慈悲の必要性を感じなくなってしまった。また、高慢になって、我々をお創りになった神に祈らなくなってしまった。

今、我々は、憤っておられる御方の前にへりくだり、……罪を告白して、哀れみと赦しを願い求めなければならない。」(ジョン・ウェスレー・ヒル、*Abraham Lincoln — Man of God*, Fourth ed., p. 391)

予言者ジョセフ・スミスは、リパティアーの牢獄に苦悶の日々を送っていた時に受け取った何通かの手紙に、次のような返事を書いています。

「昨晚、数通のお手紙を受け取りました。……いろいろお知らせ下さって、ありがとうございます。長い間、連絡がありませんでしたので、お手紙を拝読した時には、さながら私共の心の中にさわやかな風が吹きぬけるような思いでした。」(*History of the Church*, 3: 293)

私もそうですが皆さんも、これらの文を読んで心を動かされたことと思います。しかしながら、感謝の念を養う上で、これらの引用文が最も強力な動機づけとなるわけではありません。私たちは、感謝の念を忘れないように、主から命じられているのです。

1831年の3月、教会が組織されてから1年とたたない時に、主はカートランドの聖徒たちに次のように言われました。

「すべて何事も惜むことなく与えたもう神に願うべし。また、『みたま』の汝らに誡したもうところを汝らの為すはわれ正しく

望むところなり。すなわち、汝ら全く聖きところを以てこれを為し、わが前に正しく歩み、汝らの救いの末に就きて考え、祈りと感謝とを以て何事をも為し、かくして悪霊または悪魔の教えまたは人の造りたる戒めに陥らざる様に為さんことを。そはある教えは人より出で、また他の教えは悪霊より出ずればなり。……汝ら如何なる祝福を受くるとも、『みたま』によりてこれを神に感謝せざるべからず」(教義と聖約46: 7, 32)

それから5カ月後、主はミズーリ州ジャクソン郡のシオンの教会員に次の戒めを与えられました。

「汝心を尽し、勢力と意思と体力とを尽して主なる汝の神を愛すべし。また、イエス・キリストの名によりて神に仕うべし。汝己れの如く汝の隣りを愛せよ。汝盗むなかれ。また姦淫を犯すなかれ。また、人を殺すなかれ。また何事にてもこれに類することを為すことなかれ。すべての事に就きて、主なる汝の神に感謝すべし。」(教義と聖約59: 5—7)

この聖句からも明らかなように、すべての物事について主に感謝するということは、単なる儀礼的なことではなく、他の戒めと同様、その実行を求められる戒めなのです。

後の啓示の中で、主は次のように述べておられます。

「およそすべてを感謝して受くる者には栄光を与えられん。而して、この世のものもまた彼に加えられることすなわち百倍よりも多からん」(教義と聖約78: 19)

「われ誠に汝らに告ぐ、わが友よ」この呼びかけにはいつも心を打たれます。主は皆さんや私を友と呼んでおられるのです。「われ誠に汝らに告ぐ、わが友よ、怖るなかれ。汝ら心に慰めを得よ。然り、汝ら

いよいよ喜びて何事にも感謝すべし」(教義と聖約98:1)

「もし汝心楽しき時は歌を唱い樂を奏し舞踊を舞い、讚美と感謝の祈りをもて主を讚め称えよ」(教義と聖約136:28)

今私が読んだ最後の戒めは、ウィンター・クォーターズで予言者ブリガム・ヤングを通して与えられたものです。当時、聖徒たちは大平原を横切る途上にあり、非常に苦難にあえいでいました。しかし、主は聖徒たちに賛美と感謝の念で心を満たすように命じられたのです。

私が読みあげてきたこれらの戒めは、感謝する心をはぐくむという厳肅な義務について教えています。私たちは、すべての祝福に対して感謝の念を持ち、それを表わさなければなりません。

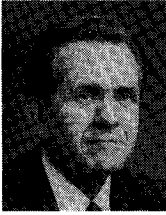
私たちのために大きな代価を支払って下さった主イエスに対して、私たちはいくら感謝しても感謝しきれぬものではありません。死すべき弱い肉体しか持たない私たちには、私たちのために死に打ち勝とうとして、主が十字架上で耐え忍ばれた苦しみを完全に理解することはできません。私たちに罪の赦しを得させるために、ゲツセマネで受けられた苦しみについてはなおさらです。主は、こう言っておられます。「その苦しみたるや、われ神、すなわちすべての中最も大なる者なりといえども痛苦のために身をふるわせ、あらゆる毛の孔より血を湧かせ、身と霊と筒つながらる苦しめ、すなわちこの苦きさかずきより吞まずしてしりごみするも可ならんことを欲したり」(教義と聖約19:18)

しかし、主は私たちのためにその苦しみに耐えて下さいました。主以外に、そのような苦しみに耐えられる人はいません。こ

の世のいかなる人も、また何人東になってかかっても、その苦しみに耐えることはできないのです。イエスが私たちのためにして下さいたことを理解する人は皆、主を愛し、その恩に報いるために何らかの形で愛を表わさなければなりません。

リチャード・L・エバンズ長老は、かつて次のように語りました。「私たちは感謝して創造主の限りないみむねを学び、感謝して百分の一と献金を捧げ、神が与えて下さったすべてのものに感謝しつつ、熱心に終始一貫した働きをしなければなりません。また、創造主の愛と摂理と目的とを心にとめて、その戒めを守らなければなりません。この創造主は我らすべての者の父にして神、そして天と地とを組織し、^{つと}司る御方である。この御方なしにこれらのものは何ひとつ存在し得なかつた。すべてのものについて神に感謝せよ。生命とそれを支えてくれるものについて、人生を意義あるものにしてくれる最愛の人々について、信仰と、現世に生きる目的と、現世に生き永らえることについて、常に、そして、とこしえに感謝せよ。すべてのものについて神に感謝せよ。深く、さらに深く感謝せよ。」(“Thanks: for the Organization and Operation of the Earth,” *Improvement Era*, Feb. 1968, p. 74; KSL “The Spoken Word” broadcast, Nov. 19, 1967.)

兄弟姉妹の皆さん、私の証を述べたいと思います。主は感謝を捧げるように求めておられます。もし主のこの勧告に従うならば、私たちはこの地上で最も幸福な民となることができるでしょう。主に感謝を捧げることこそ天の御父のみもとへ帰る道を開く方法だからです。心を込めて、イエス・キリストの御名により証致します。アーメン。



聖典

十二使徒定員会会員 ボイド・K・パッカー

の真の教会の中で、人に知られることなくひそかに押し進められたある業について、お話ししたいと思います。その業はすでに旧約の時代に始まっていましたが、エゼキエルが予言したように、今この時代に成就したのです。エゼキエルは次のように述べています。

「主の言葉がわたしに臨んだ、『人の子よ、あなたは一本の木を取り、その上に「ユダおよびその友であるイスラエルの子孫のために」と書き、また一本の木を取って、その上に「ヨセフおよびその友であるイスラエルの全家のために」と書け。これはエフライムの木である。あなたはこれらを合わせて、一つの木となせ。これらはあなたの手で一つになる。』」（エゼキエル37：15—17）

木とは、もちろん記録、すなわち書物のことです。古代イスラエルでは、木版や棒に巻きつけた巻物に物事を記録しました。エゼキエルは、ユダの記録とエフライムの記録が私たちの手の中でひとつとなると予言しました。この予言の成就に関わるふたつのことが、印刷所の中で起こったのです。

まず最初は、ニューヨーク州パルマイラ村の大通りに面したある建物の2階でのことでした。1829年6月、ジョセフ・スミスとマーテン・ハリスは印刷所の経営者エグバート・B・グランディン氏を訪ね、新しい聖典の出版について話し合いました。当時グランディン氏は23歳、ジョセフ・スミス

より3カ月年下でした。彼はわずか3カ月前に本の印刷を請け負うという広告を出したばかりで、その上、彼の小さな店には手動式の鋳鉄製印刷機しかなかったので、ジョセフ・スミスらの注文に応ずることは大変なことでした。

他の印刷所では、その書物の印刷を引き受けてはくれませんでした。それに、この年若いグラディン氏も宗教心は持っていましたが、とても猜疑心の強い人でした。しかし、マーテン・ハリスの農場を担保にすることで契約がまとまり、契約書が取り交わされて、1829年8月に印刷が始まりました。

この仕事が始まると間もなく、オバダイヤ・ドグベリー・ジュニアという人がこの書物の一部を盗んで、ザ・リフレクターという週刊新聞に嘲りの記事と一緒に掲載し始めました。

こうして1830年3月、モルモン経が印刷所からジョセフの手元へ届けられ、発売の広告が出されました。人々の反応はひどいもので本は一向に売れず、マーテン・ハリスは農場を失う結果となりました。

これが聖典にかかわる新たな時代の幕開けでした。予言者ジョセフ・スミスと彼に従う人々は、今日に至るまで、このモルモン経がイエス・キリストを証するもうひとつの書物であると主張しています。しかし、異なった霊に動かされて、オバダイヤ・ド

グベリーと彼に同調する人々は、今日までモルモン経を非難してきました。

こうしてそれから148年後の1977年6月、ある印刷所でこのふたつの木を合わせてひとつにする作業が、再び始まったのです。

聖典出版に長年の経験を持つジェームズ・モチマー氏とブリガム・ヤング大学宗教学部の学部長エリス・T・ラスムッセン博士が、英国のケンブリッジにあるケンブリッジ大学出版部を訪ねました。この由緒ある出版部では、エグバート・グランディンがパルマイラに印刷店を開く293年も前から聖書の印刷をしていました。

彼らは宗教関係の出版の理事をしているロジャー・コールマン氏と会い、従来のものとは非常に異なった編集の方法をとった欽定訳聖書の出版について話し合いました。この出版社の人々も、約150年前のエグバート・グランディンとまったく同じように彼らの要請に対して懐疑の目を向けました。

ケンブリッジ出版部は、1611年に初版を出して以来、今日まで欽定訳聖書の出版を手がけていましたが、それまで一度もこのような注文を受けたことはありませんでした。彼らは、本文にはまったく手を加えないけれども、脚注、引照、章の序文、索引などは全部入れ替えると言ったのです。したがって、そのまま使えるのは66の書の章と節の番号だけでした。

それだけではありませんでした。そのようなことは注文のほんの手始めで、この版には、他の3つの聖典すなわちモルモン経、教義と聖約、高価なる真珠との引照も組み込むということでした。モルモン経、教義と聖約、高価なる真珠など、出版社の人々にとっては、聞いたこともないような本でした。

注文はまだありました。彼らは、新しく考案した方法で脚注をつける、すなわち、従来は各章毎にアルファベット順についていたのに対し、今度は（各節の最初の言葉から）数えきれない程の節に、たくさん脚注をつけるというのです。

技術的な問題が山ほど出てくることは、目に見えていました。コンピューターの助けを借りることも可能でしょう。しかし、それにしても常に人の手が必要です。他の聖典との引照を、聖書にどうやって入れればよいのでしょうか。3つもの聖典との引照ができるようにするためには、何万という脚注が必要になります。ということは、何十万もの情報の組み合わせができるということです。考えるだけでも大変な仕事です。技術的な問題ひとつをとってみても大変なことで、これが正確に、正しく対観できるように、しかも聖書と矛盾がないようにできるとは到底考えられません。

ところが、その会合には非常に敏腕なデレク・ボーエンという編集校訂家が出席していました。彼は第二次世界大戦の際に聴力を失っていたので、その後は聖書の編集、植字、印刷などに専念していたのです。彼は、おそらく、このような企画を指揮できるただひとりの人物であったと思います。

これまで私は印刷に関する問題ばかり述べてきましたが、実際に何万もの脚注を収集し編成するためには何百人という人を要します。実は、この仕事は数年前から始められていました。コンピューターなしでは、明らかに不可能な仕事でした。

注文はまだ続きました。この聖書には、用語索引、何百もの項目を取り上げた項目別索引、聖書辞典、地図をも入れ、その上体裁が従来のものとは違うのです。章毎に

見出し文が入ります。この見出し文には、新旧約両聖書との矛盾がありません。

この企画が実行に移されてから数年して、私たちは、進行状況を尋ねてみました。集積した項目をアルファベット順に並べるといふ、うんざりするような骨の折れる作業が、どの位進んでいるか知りたかったのです。すると、「天国(Heaven)と地獄(Hell) (Hの項目)を、通過し、愛(Love)と肉欲(Lust)(Lの項目)をものともせず、今は悔い改め(Repentance)(Rの項目)に向かって前進中です」と返事をしてきました。

項目別索引の項目も、2倍位あったリストを半分に削って、やっとのことで750にしました。それは、実用性を考慮してのことでした。この聖書は毎日使用するのに手ごろなサイズでなければならなかったからです。

この仕事の上には、みたまの助けがあり、参画した人々は、この仕事がいかに祝福されたものであるかをよく口にしました。そこには、人を謙遜にする霊的な経験があったのです。

黙々と、7年以上もの間この業に力が注がれ続け、やっとのことで末日聖徒版欽定訳聖書が世に出ました。モルモン経、教義と聖約、高価なる真珠についても、すでに同様の作様が始められていました。多くの年月をかけて原稿を作り上げ、初期の頃の版の誤字誤植も訂正することができるようにしました。

この3つの聖典も、モルモンに関心を寄せる研究者や熱心な教会員だけではなく、その他多くの人々の目に触れることでしよう。また、聖書研究者たちは冷静で公平な目をもって研究し、末日聖徒に敵対し末日聖徒を非難する人々は怒りの目を注ぐでし

よう。ですから、微細な点までも訂正されていなければならなかったのです。

末日聖徒版聖書が出版されてから2年の後、この3つの聖典は今までに例のない正確なものとなって世に出ました。

そして、その3カ月後、聖書編集の長を務めておられたデレク・ボーエン氏が英国の地で亡くなられました。

また、御存じのことと思いますが、幹部の兄弟たちの指示により、今後モルモン経には「イエス・キリストに対するもうひとつの証」という副題が付くことになりました。

ユダの木、すなわち記録(新旧約聖書)それにエフライムの木すなわち記録(モルモン経——イエス・キリストに対するもうひとつの証)は、このような過程を経てひとつに合わせられたのです。一方を読めば他方も読むことになり、一方から得た知識は他方を読むことによってより明確なものになります。2本の木は、本当に私たちの手の中でひとつになりました。こうして今日、エゼキエルの予言が成就したわけです。

年月を経るに従って、この聖典に触れる人々は、次々と主イエス・キリストを知って主のみこころに従う忠実なクリスチャンとなっていくことでしよう。

古き世代の人々は、このような聖典には触れることなく育ってきました。しかし、今では次の世代の人々が成長しており、彼らは、歴史上かつてだれも目にし得なかった啓示に触れることができます。今や、ヨセフの木とユダの木が彼らの手に置かれました。彼らには、過去の人々には到底なし得なかった研究ができるのです。彼らはイエスがキリストであるという証を持ち、そのように宣言し、主を擁護する力を持つよ

うになるでしょう。

何百人という人々の献身的な働きがなかったら、このような業はなし得なかったでしょう。このような人々の中には、ヘブライ語、ギリシャ語、ラテン語、新旧約聖書を研究する学者たちもいました。その上彼らはこの業に携わるにふさわしい人々であって、イエス・キリストの福音から多大の影響を受けていました。その業は、彼らにとってはこの世でなした最も偉大な貢献となることでしょう。

世代を経るにつれて、この業はキンボール大管長が教会を管理された時代の輝かしい業績として、史上に残るようになるでしょう。

聖典を世に出す業の中でも、非常に直接的な業ですが、教義と聖約の中に新しい啓示がふたつ加えられました。このようなことは、百年以上もなかったことでした。それに、この作業が終わらないうちに、神権に関する栄光ある啓示が与えられ、この時満ちたる神権時代に主が聖徒たちにお与えになったその他のすべての啓示に加えられ、製本されるべく間に合ったわけです。

しかし、これはまだほんの手始めなのです。なぜならまだ英語の版しかできていないからです。スペイン語への翻訳は、すでに始まっています。他の言語への翻訳もおおいおい始められることと思います。

この出版事業と同時に、もうひとつ偉大な業が続けられていました。教会のカリキュラム全体の組み替えがなされたのです。子供用のテキストも、青少年や成人用のテキストも、聖典中心、イエス・キリスト中心に改められました。著作活動、カリキュラム、教授法、その他このような業に関連ある仕事の専門家が大量加わった真の義勇

軍が、長年の間働いて下さり、ついにこの業が完成したのです。

私たちが聖典に錨を降ろし自らを聖典につなぎとめようとしているかと思えば、逆にやっきになって自らをつなぐ錨の鎖を断ち切ろうとしている人がいます。そのような人々は波の間に間に漂いながら河を流れ下るかのように、思想をあちらへこちらへと変え、聖典を人の哲学に合うように解釈し、改訂していつています。その反対に私たちは、同じ河を流れに逆らって上流へ上流へと泳ぎ上がってきました。私たちは神と相交わり啓示を受けるために、河の水源にまで泳ぎ上がろうと決意を固めています。なぜなら、教義と聖約の中で主が求めておられるように、「あらゆる人々」が「主なる神すなわち世の救い主の名によりて語」(教義と聖約1:20)ることができるように努力しなければならぬからです。

内にも外にもこの教会を監視している人がいて、私たちのすることに非常に興味を示しています。そのような人々は教会をつぶさに観察して、組織力、教会の財源、組織の変更、政治的社会的論点などについて考え、自分の観察から結論を引き出します。そして、自分の見解を書いては新聞雑誌などに発表し、それが教会の現況に関する正確で客観的な報告だと主張するのです。しかし、そのように教会を監視し決めつけているうちに、彼らは私たちがここ数世代の間に行なった最も重要な事柄を見落としてしまったのです。

彼らの中には、私たちは道を外れており、クリスチャンではないとする人々もいます。彼らは、彼ら自身がほとんど関心を持たなかったもの、したがってほとんど知りもしなかったもの、すなわち聖典と啓示に目を向け

るべきでした。そうすれば、項目別索引にはイエス・キリストに関して58の項目があり、18ページにわたって小さな活字でぎっしりと文字通り何千もの参照聖句が載っていることがわかったでしょう。

その参照聖句は4つの標準聖典からのものであり、この標準聖典には世界史上一度も収集し得なかったほどの量の主イエス・キリストの使命と教えに関する聖典から得た情報が収められているのです。

この4つの聖典は、私たちが主イエス・キリストを受け入れ、敬虔な態度で礼拝し、証を持っていることを断言しています。参照聖句を一つ一つ読んでいく時に、皆さんは部屋のドアを押し開けて部屋の中を見るように、そこがどなたの教会であり、だれの権威によって何が教えられているかを知ることができるでしょう。そこでは、すべてがイエス・キリストのみ名に、すなわち神の御子であり、救い主、贖い主であり、私たちの主である御方に基を置いているのです。

私はユダの予言者エゼキエルの予言を引用して、この話を始めました。旧約聖書のこの2節には、10の脚注がついています。そのうちのひとつは、私たちに「モルモン経——イエス・キリストに対するもうひとつの証」へと導いてくれます。聖書世界から見て地球の裏側では、ヨセフの血統の予言者リーハイが、次のような予言をしていました。

「それ故に、汝の子孫は記録を書き、またユダの子孫も記録を書くべし。しかして、汝の子孫の書き誌す書と、ユダの子孫の書き誌す書とは、相合して偽りの教えをうち

破り、争論を鎮め、汝の子孫の中に平和を起し、また末日に於て汝の子孫にその先祖とわが誓約とを知らしめん。」(IIニーファイ3:12)

このひとつの脚注が、ふたつの聖典を堅く結んでいるように思われます。しかしながら、10の脚注のうちの5つは、それを読めば項目別索引を引かざるを得なくなりません。項目別索引には、その外に611もの参照聖句が出ており、この一論点に関して私たちの知識を広げてくれます。まさに、ちりの中から語る声のようです。

何本もの糸がより合わされて、私たちの手の中にあるユダの木とエフライムの木、すなわち主イエス・キリストに対する証の書物を縛ることのできるような縄ができたのです。

重ねて申しますが、主イエス・キリストの使命と教えに関して、これほどの量の情報が聖典から集められたことは、世界史上例を見ないことでした。

私たちが主について軽々に語らず、余り度々口にしないからと言って、誤解しないで下さい。主について余り度々口にすることは、主を知らない人のすることです。

ユダヤの兄弟たちも、昔、主を知っていました。ユフライムの、私たちの兄弟たちも同じです。主の聖徒、予言者、使徒らにとって、もう主は遠い存在ではありません。

主は生きておられます。イエス・キリストは私たちの救い主、贖い主であり、主であります。私は使徒として、以上のことをイエス・キリストのみ名により証致します。アーメン。



成熟の意味

七十人第一委員会会員 デレク・A・カスパート

主はギベオンで、ソロモンの夢の中に顛れて、こう言われました。「あなたに何を与えようか、求めなさい。」(列王上3:5) ソロモンは主に答える前に、自分にとって最も必要なものは何なのか、深く考えました。それは権力や威光でしょうか。それとも、富や財物、名声や栄光でしょうか。

ソロモンの答えについて、よく考えてみましょう。「わが神、主よ、あなたはこのしもべを、わたしの父ダビデに代って王とならせられました。しかし、わたしは小さい子供であって、出入りすることを知りません。……それゆえ、聞きわける心をしもべに与えて、あなたの民をさばかせ、わたしに善悪をわきまえることを得させてください。」(列王上3:7, 9) そこで、「神はソロモンに非常に多くの知恵と悟りを授け、また海べの砂原のように広い心を授けられた」(列王上4:29) のでした。

知恵、悟り、広い心は、成熟した人のしるしです。このような特質を求めた時、ソロモンはもう「小さい子供」ではありませんでした。

しかしながら、成熟するということは、単に知恵を得るということではありません。救い主は、このようにおっしゃらなかったでしょうか。「心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう」(マタイ18:3) このことを

考え合わせてみると、成熟するということは、私たちに必要な幼な子の特質を取りもどすとともに、子供にはない成人の特質を伸ばしていくということになります。きょう、私は、成熟というものの10の特質についてお話したいと思います。その中の5つは幼な子の持つ特質、残りの5つは大人になるにつれてはぐくんでいく特質です。

1. **罪がないこと** 生まれたばかりの赤ん坊やほんの小さな子供に罪がないことを否定できる人が、どこにいるでしょうか。救い主は次のように教えておられます。「幼な子らを……わたしのところに来るのをとめてはならない。天国はこのような者の国である」(マタイ19:14) 末日の啓示の中でも、主はさらにこのことを明らかにしておられます。「人のあらゆる霊は、太初に罪なきものなりき。而して神は墮落より人を贖いたもうたるにより、人はみな再び幼児の有様となり、神の前に罪なしとなりぬ」(教義と聖約93:38) そうです。この不和と欺瞞に満ちた世の中であって、私たちは皆、清くなり罪のない状態になるようにチャレンジされているのです。

2. **謙遜** 「この幼な子のように自分を低くする者が、天国でいちばん偉いのである」(マタイ18:4) 子供の謙遜な祈りや証を聞くのは、何と素晴らしいことでしょう。アフリカの南部で、柱と屋根だけのアフリカ式の家を借りて集会を開いた時のことで

す。私は、小さな男の子がホサ語でジョセフ・スミスの物語を詳しく話し、証を述べるのを聞きました。その時のことは、今も忘れることができません。

私たちの住む世の中では、人々が大挙して正義に背を向け、自己の快樂を追い求め、己れのプライドや空しい野心を満たそうとやっきになっています。私たちに与えられているチャレンジは、神のみ前に謙遜になり、ベンジャミン王の言葉にあるように「幼児のように従順で謙遜で忍耐で愛情に富み、幼児がその父に従うように、主が負わせたもうすべてのことに喜んで服従」(モーサヤ 3:19) することです。

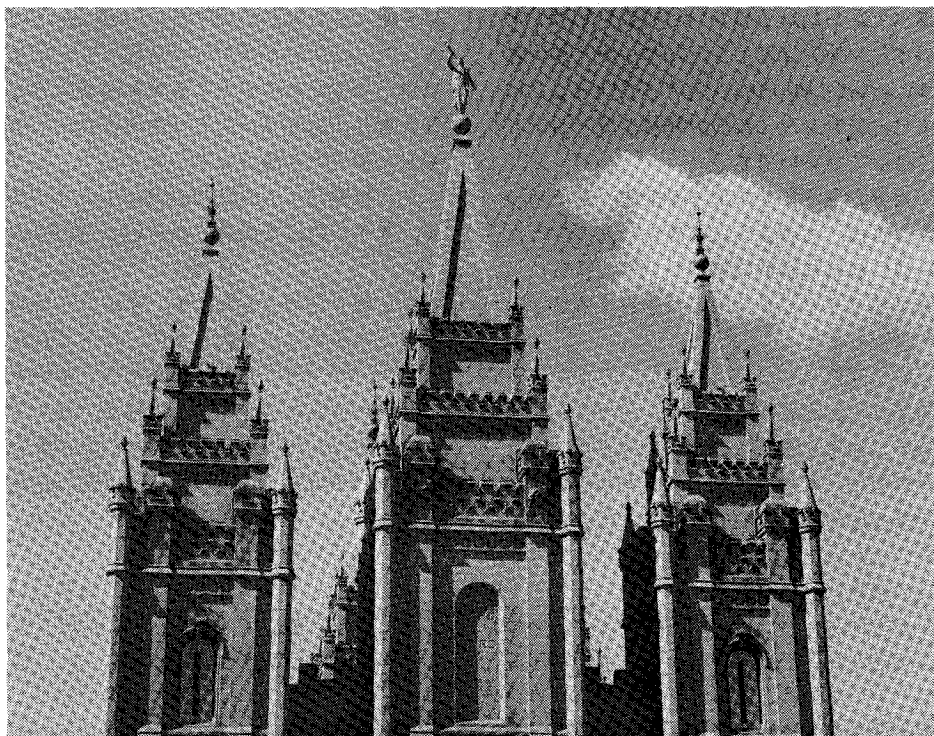
今では世界中の至る所で、人種や文化的背景の異なる様々な人々が各々の国の困難を打ち破って真理を受け入れ、へりくだってバプテスマを受けています。彼らが困難や苦難を克服していく様を目にする時、私たちの霊は何と活気づけられることでしょうか。少し前のことでしたが、私はジンバブエの教会の立派な青年と面接しました。彼の国から最初の宣教師を送り出すための面接でした。その青年はピーター・チャャ長老といって、小児麻痺のために生涯松葉杖をつけて歩かなければならない体でしたが、喜び勇んで伝道の召しを受けたのでした。

3. 純真であること 子供は物事を複雑に考えません。また、ものを遠回しに言ったりしません。使徒パウロは、コリントの聖徒に次のように勧告しています。「ただ恐れるのは、エバがへびの悪巧みで誘惑されたように、あなたがたの思いが汚されて、キリストに対する純情と貞操とを失いはしないかということである。」(IIコリント11:3) パウロは深い学識のある人であったに

もかわらず、改宗した後に次のように語りました。私はこのくだりを読む度に深い感動を味わいます。「……わたしはイエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは、あなたがたの間では何も知るまいと決心した……」(Iコリント 2:2) 最近のことですが、私はガーナを訪れ、同じ感動を味わいました。そこでは地方部大会が開かれていて、現在地方部長を務めている優れた外科医のエマニュエル・キッシ博士が、福音の単純な真理を教えておられたのです。

そうです。私たちは子供のように純真であるよう努力しなければなりません。そして、自分の子供たちにも、イエス・キリストに対する純真で揺るぎない証を持てるように教えなければならないのです。そうするならば、子供たちは、このまっすぐで狭い道からそらせるような誘惑に陥ることはないでしょう。マシュー・カウリー長老はよく次の言葉を口にしました。「人生とは美しいまでに純真であり、純粋なまでに美しいものです。」(“Learn to Live”, address delivered at Brigham Young University, 19 June 1953)

4. 信仰 我が家の子供たちは病気の時や、慰めや助言がほしい時、祝福を求めてきます。つまり、信仰を表わして来るわけですが、そのような時はいつも、私も妻も、とてもうれしく思います。そのようなことは、これまでに何度もありましたが、一例をあげれば、子供が耳の痛みを訴え始め、ひどく苦しんだことがありました。私が祝福を施すと、娘はおとなしくなり眠り始めました。そしてそれからは、耳の痛みなどまったく訴えませんでした。本当に素晴らしいことですが、主が福音を完全に回



復して下さったので、父親は様々な方法で家族を祝福することができるようになったのです。私たちの愛するキンボール大管長がチャレンジされたように、幼な子の信仰をもってすれば、「見果てぬ夢も夢ではなくなり」「手の届かぬ星にも手が届く」ようになるのです。主の持ちたもうた強い信仰は山々を動かし、その幼な子のような信仰は、何となくさんの奇跡を起こしたことでしょうか。

5. 愛 無条件の愛、無私の愛です。幼い子供に顔を見上げられ、「お父さん、大好き」と言われて、いやな気持ちになる父親がいるでしょうか。また、枕の上に「お母さん大好きよ」と書いた短いメモを見つけて、心にほのぼのとしたものを感じない母

親がいるでしょうか。多くの国々で、私は子供たちの愛らしい声を聞く特権に恵まれてきました。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」(ヨハネ13:34)という救い主の言葉が、今も私の耳にこだまします。

イエスは、罪がなく、謙遜で、純真であり、強い信仰を持った完全な模範でした。イエスは私たちの罪をその身に引き受け、貴い命を投げ出され、自ら墓の中からよみがえって、偉大な愛を示されました。「神は愛である。愛のうちにいる者は、神におり、神も彼にいます。」(Iヨハネ4:16)世界中至る所へ宣教師たちはふたり一組となって出かけていき、主イエス・キリストを信じる信仰と悔い改めを宣べ伝えます。今まで

述べてきた幼な子の5つの特質をすべて失わずにいる人はほとんどいないかと思えます。しかし、悔い改めて生活を変えることにより、だれもがこれらの特質を取りもどすことができるのです。

自分の生活にそのような変化をもたらしたならば、主のように成熟した人になるために、私たちは前に述べた5つの特質を土台としてさらに5つの特質を身に着けなければなりません。

6. 知恵 ソロモンは正しい裁きができるように知恵を求めました。私たちも同じように知恵を求める必要があります。私たちの中に、本当に賢い人はあまりいません。自分を取り巻く物質的な世界に目を奪われているからです。知恵というものは物事の真の価値と、何が大切であり何が大切でないかを悟ることによって得られます。知恵は霊的な特質です。なぜなら、識別と理解力の上に築かれるからです。深遠な知恵、それは予言者の知恵です。予言者の知恵に耳を傾ける人は皆、祝福を受けるのです。

主はこう勧告しておられます。「富を求めずして知恵を求めよ。」(教義と聖約6:7) 私たちはこの総大会で、みたまに導かれた方々の説教の中から知恵の真珠を手に入れました。すべての人がここで話された数々の真理を研究し実践していられることでしょう。

知識は、それ自体危険なものになる可能性を秘めています。知識を求める人は、同時に知恵を求めなければなりません。知恵は成熟のしるしです。知恵というものは、普通、年齢と経験を重ねることによって得られるものですが、必ずしもそうとは限りません。私がスコットランドで伝道部長をしていた時のことです。主が多くの若い宣教師の理解力を増し加えられたので、彼ら

は年齢に似合わない素晴らしい成長を遂げました。それからまだ5年も経っていませんが、今ではその中の6人が英国諸島で監督となり、ふたりがステーキ部長会に入り、優れた指導力を発揮しています。

7. 指導力 これは教会内ばかりではなく、すべての面での誉れある指導力を指しています。子供は、言葉にしても行ないにしても親を見習うものです。主はモーセを通じてイスラエルの親たちに、こう言われました。「きょう、わたしがあなたに命じるこれらの言葉をあなたの心に留め、努めてこれをあなたの子らに教え、あなたが家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、これについて語らなければならぬ。」(申命6:6-7)

子供を正しく教え導くには、この聖句にあるように、親は成熟していなければなりません。家族は社会の基本単位であり、国の基です。子供たちは、全能の神御自身から私たちの手にゆだねられた神聖な授かりものです。私たちは親として、そのことを認識しなければなりません。私たちの息子や娘は、神の霊の子供です。神は私たちに、子供たちを愛し、いつくしみ、教え、導くように望んでおられるのです。

両親と子供が定期的に神のみ言葉を読んで研究することは、あるいはそこに書かれている基本的な原則に従って生活し、天父が私たちに期待しておられることを果たして行くことは、何と大切なことでしょうか。

8. 責任感 子供は8歳になるまで、自分の言葉や行ないに責任を持つことができません。この8歳という年齢は主が定められたものですが、ほとんど、どこの国の法律でもそれが認められています。しかし、責任が持てるようになったということは、成

熟したということではありません。責任を持つということ、他人の信頼に応えられるようになる、責任のある行動ができる、自分を管理する人々に対して、最終的には主御自身に対して自分の言動に責任が持てるということです。

救い主は伝道しておられた時に、この原則について教えられ、私たちは自分の言葉に対してさえも責任を持たなければならないと言われました。「あなたがたに言うが、審判の日には、人はその語る無益な言葉に対して、言い開きをしなければならないであろう。」(マタイ12:36) 敵は絶えず私たちの気をそらし、正しい生活を妨害し、自分の行動に対して責任を負えるようになるのを妨げようとします。私たちは絶えず強くあるべきです。決して警戒を怠ったり、主から与えられた原則を曲げるようなことをしてはなりません。

9. 信頼される人になる 子供というものは、今笑っていたかと思うと、次の瞬間には泣いています。また周囲の状況や環境の変化によって、すぐに友達を変えたり、世の中に対する見方を変えたりします。しかし、成熟した人は、そう簡単に意見を変えたりはしないので、人からも信頼されます。使徒パウロは、成熟した人についてこう言っています。「もはや子供ではないので、だまし惑わす策略により、人々の悪巧みによって起る様々な教えの風に吹きまわされたり、もてあそばれたりすることが」(エペソ4:14) ない。

私たちは、子供たちが精神的に、あるいは実際に連れ去られてしまうことがないように、警告を与え、教え、外敵を追い払い、守ってやらなければなりません。世の中には、主のものではない声や教えが氾濫して

います。しかし、「キリストを強く信じて疑わず、……強く進む」(II コリント31:20) ならば、私たちは信頼される人になることにおいても、堅実さや霊的な忍耐力においても成熟することができるのです。以上に述べた特質を身をもって示して下さるキンボール大管長に、私は深く感謝しています。キンボール大管長の模範は、私にとって素晴らしい助けになりました。これから霊的な成熟を目指そうとする皆さんにとっても、その模範は大きな助けとなることでしょう。

10. 自制心 さて、10番目の特質、自制心についてお話したいと思います。ニーフアイ人の予言者アルマは、こう勧告しています。「一切の欲を抑えて愛に満ちよ。」(アルマ38:12) 神の御子イエス・キリストは、世に打ち勝たれて、私たちの救い主、贖い主とられました。サタンを試みに遭ってもびくともせず、あざけられ、ののしられてもくじけず、そして死に臨んでも、動揺されることはありませんでした。主は完全に成熟しておられたのです。

私たちも主のように、清く、謙遜で、純真で、確固とした信仰と愛を持つことができますように。また、知恵を備え、人から信頼され、まず自らを制し、人々に対しても指導力を持つことができますように。そして、主が来られる時にそのみ前で、その意にかなう申し開きをすることができますように。私たちの主こそ、生きてましますキリストです。この教会は活動を続けてやまない主の教会です。主は生ける予言者を通じて、語っておられます。この喜ばしい証を私たちの主であり救い主であるイエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。



決意の時は今

十二使徒定員会会員 ハワード・W・ハンター

聖典を読んで研究してみると、従順になるように、正しい生活をするようにと主が何度も民を励まされ、それを条件に多くの約束をして下さっていることがわかります。イスラエルの歴史は、様々な誓約に満ち満ちています。誓約は旧約聖書の中核をなすテーマのひとつであり、神が予言者や民と交わしたもうたものであります。

主は、ノアと誓約を交わしたまい、その時から、全人類に対する誓約のしるしとして空に虹がかかるようになりました。(創世9：13参照)

アブラハムとその一族は、割礼を聖なる儀式として受け入れ、割礼によって誓約を交わしました。(創世17：10-11参照)また、シナイ山では全イスラエルに大いなる誓約のしるしとして、安息日が与えられました。

今日、私たちはヨシュアの生き方から大切な事柄を学ぶことができます。それは、主と交わした誓約を守り、主の命令と指示に従うことがいかに大切かということです。

ヨシュアは主の命に従い、モーセ亡き後、イスラエルの民を約束の地へと導き、イスラエルの支族を指導しました。40年来の指導者モーセを失ったばかりの膨大な数の流浪のイスラエルの民を導く責任を負ったヨシュアに、主はこう言われました。これはヨシュアと民への慰めの言葉ではなかったかと思えます。

「わたしは、モーセと共にいたように、

あなたと共にあるであろう。わたしはあなたを見放すことも、見捨てることもしない。強く、また雄々しくあれ。あなたはこの民に、わたしが彼らに与えると、その先祖たちに誓った地を獲させなければならない。」(ヨシュア1：5-6)

さらに続けて、主はこう言われました。

「ただ強く、また雄々しくあって、わたしのしもべモーセがあなたに命じた律法をことごとく守って行い、これを離れて右にも左にも曲ってはならない。それはすべてあなたが行くところで、勝利を得るためである。」(ヨシュア1：7)

また、主はモーセに与えられた律法についても言われました。

「この律法の書をあなたの口から離すことなく、……ことごとく守って行わなければならない。そうするならば、あなたの道は栄え、あなたは勝利を得るであろう。」(ヨシュア1：8)

そしてヨシュアとの語らいを終えるに当たって、ヨシュアに慰めを与え、神の律法に従うならば祝福が得られることを思い起こさせる意味で、すでに言われたことをもう一度繰り返して言われたのでした。

「わたしはあなたに命じたではないか。強く、また雄々しくあれ。あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない。」(ヨシュア1：9)



ヨシュアには、その使命を果たすための勇気が必要でした。一々、主の助けが必要だったのです。上記の聖句にあるように、主は助けを与えると約束なさいました。その主を信じて、主がすべきことを教えて下さると信じてヨシュアは前進したのです。ヨシュアは主に従順であれば、万事首尾よく事が運ぶことを知っていました。どのような経過でそうなるのかは、はっきりとはわかりませんでした。今や、必ずそうなるという確信を持つことができたのでした。

聖典には、イスラエルの支族はヨルダン川へと旅し、川岸に3日の間野宿し、対岸の市エリコへ行く準備を整えたと記されています。その時、ヨシュアは民におもしろいことを言いました。

「あなたがたは身を清めなさい。あす、主があなたがたのうちに不思議を行われるからである。」(ヨシュア3:5)

ヨシュアは、戦に勝てるか否かは、民が喜んで主のみこころに従うか否かにかかっ

ていることを知っていました。この時、主はヨシュアに言われました。

「きょうからわたしはすべてのイスラエルの前にあなたを尊者とするであろう。こうしてわたしがモーセと共にいたようにあなたとともにいることを彼らに知らせるであろう。」(ヨシュア3:7)

そして、ヨシュアは、モーセがイスラエルの指導者であった時と同じように、これからも主が奇跡を行なわれることを知りました。民の先頭を祭司たちが契約の箱をかついで行き、ヨルダン川に足を浸すと、川が干上がり、「すべてのイスラエル」は「かわいた地を渡って行」(ヨシュア3:17)きました。

ほどなくして、主はヨシュアに、行く手に立ちはだかるエリコの市を滅ぼすようにと命じられました。エリコの市は頑丈な城壁に囲まれていて、それを攻め落とすなどということはとても無理なことでした。少なくとも、無理なことのように思われまし

た。しかし、どのような軍略を用いたらよいかもわからないままに、必ず勝てると信じ、ヨシュアはすでに受けていた主のみ使いの指示に従いました。ヨシュアはどのようなことにも従順であろうと、決意していたのです。ヨシュアは指示されたことを行なうこと以外、何も考えてはいませんでした。それに、主が必ず約束を果たして下さることを知っていました。主の指示はどう考えてみても奇妙でしたが、ヨシュアは胸の内にある信仰に駆り立てられて、それを実行したのでした。その結果は、もちろん、勝利でした。イスラエルの民は長い間モーセの指導の下にあった時も、ヨシュアやその他主の命令と指示に従った多くの予言者たちの指導の下にあった時も、同じように奇跡を経験してきました。

エリコに近づいたヨシュアとその民は、主の導きに忠実に従いました。聖典には次のように記されています。「石がきはくずれ落ちた。そこで民はみな、すぐに上って町にはいり、町を攻め取った。」(ヨシュア 6 : 20)

記録によれば、イスラエルが諸々の敵との戦いを終えた後、すでに年老いたヨシュアは全イスラエルを呼び集めました。死を前にして、ヨシュアはイスラエルの民に、これまで戦いに勝つことができたのは神が味方して下さったためであること、しかしもし、主に仕えず、その律法に従わないならば滅ぼされるであろうことを話しました。また、イスラエルの主なる神がどのようにしてアブラハムにカナンを旅させ、「その子孫を増」(ヨシュア 24 : 3) されたのかも話して聞かせました。ヤコブとその子らがエジプトへ向かったくだりも話しました。主がモーセとアロンをどのようにとりはか

らわれたか、彼らの先祖たちがいかにしてエジプトを脱出したのかも語り聞かせました。そして、それまで剣も弓も使わずにどのようにして戦いに勝ち、国を征服したのかも話しました。(ヨシュア 24 : 12 参照) 彼らを勝利に導いて下さったのは、ほかならぬ主でした。剣や弓に頼らぬ勝利でした。ヨシュアは、民に言いました。

「それゆえ、いま、あなたがたは主を恐れ、まことと、まごころと、真実とをもって、主に仕え、あなたがたの先祖が、川の向こう、およびエジプトで仕えた他の神々を除き去って、主に仕えなさい。」(ヨシュア 24 : 14)

そして、偉大な軍人であり霊的な指導者であったヨシュアは民の決意を促すと共に、自分と自分の家族の決意を明らかにしました。

「あなたがたの仕える者を、きょう、選びなさい。ただし、わたしとわたしの家とは共に主に仕えます。」(ヨシュア 24 : 15)



この言葉には、すべてを神にゆだねる人として、主の望みたもうことを行なう予言者として、従順なるがゆえにこれまで幾度も祝福を受けてきた神の人としてのヨシュアの全き決意がうかがわれます。

ヨシュアは、イスラエルの民がどのような決定を下そうと、自分は自らが正しいと信ずることを行なうと言いました。民がどう決心しようと、自分は主に仕えたと宣言したのです。人に惑わされることはありませんでした。主のみこころを行なおうというヨシュアの決意は、何が起ころうと、だれがどうしようと変わらなかったのです。ヨシュアは意志の強い人で、その目は常に主の戒めをじっと見つめていました。彼は、従順に徹すると心に決めていたのです。

主は何にも増して、主の勧告に従おうという揺るぎない決意を喜ばれます。

旧約聖書の偉大な予言者たちの物語を読めば、心を揺るがせることなく従順に主に従うことが、いかに大切かがわかります。

アブラハムがひとり息子のイサクを犠牲として捧げるよう命じられて、疑いを持つことも心を揺るがせることもなく主の命に従った時、主はどんなに喜ばれたことでしょう。聖典には、アブラハムに対する主のみ言葉が記されています。

「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れてモリヤの地に行き、わたしが示す山で彼を燔祭としてささげなさい。」(創世22:2)

次の節には、ただこう記されています。

「アブラハムは朝はやく起きて、……その子イサク……を連れ、……神が示された所に出かけた。」(創世22:3)

ずっと後のことですが、リベカはアブラハムの僕から、自分と一諸にアブラハムの

家へ行ってイサクの妻になって下さいと頼まれた時、その僕の言葉と行ないには主のみ手があることを悟って、何の疑いも抱くことなく、ただこう答えました。「行きます。」(創世24:58)

それから一世代後のことです。ヤコブはカナンの地へ戻るようにとの命を受けました。そのためには、長年働いて得たものを残して行かなければなりませんでした。ヤコブは羊の群れを放してある野にラケルとレアを呼び、主が語られたことを話して聞かせました。ラケルの答えは単純率直で、その言葉の裏には並々ならぬ決意が現われていました。「何事でも神があなたにお告げになったことをしてください。」(創世31:16)

聖典の中には、いかに主の戒めを重んじるべきかを教えてくれる言葉や物語がたくさんあります。ヨシュア、アブラハム、リベカ、ラケルの模範に従いたければ、ただ、主に従っていき、そのみこころを行なえばよいのです。

今、主に仕えようとする決意することは素晴らしいことです。なぜならこの日曜日の朝に、世の煩いや誘惑から幾分か離れ、より深く永遠の事柄に思いを馳せる時、私たちは普段にも増して、自らの生活に大きな幸福をもたらしてくれるもののことを、はっきりと考えることができるからです。夜の暗闇が襲い来り、誘惑の嵐が吹きすさぶ時にどう対処すべきかを、今、この朝の陽光の中で決めておこうではありませんか。

何をなすべきかについて今決める力を持つことができるよう、お祈り致します。また、今、主に仕えようとの決心ができるようお祈り致します。イエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。



家族を永遠のものとするために

十二使徒定員会会長 エズラ・タフト・ベンソン

結 婚は文明の強固な基であり、かしら石であります。国家が個々の家庭の水準を上回るものになることは決してないでしょう。

結婚、そして家庭生活は、神が定めたもつたことであります。

永遠の見地に立って見れば、救いは家族で行なう事業です。神は親に子供を養育する責任をお与えになりました。この責任は、最も神聖な責任です。

今日、私たちを取り巻く社会には問題がたくさんあります。中でも目立つのは、性倒錯、同性愛、麻薬、アルコール中毒、破壊行為、ポルノグラフィ、暴力などです。

このような容易ならぬ問題は、皆、家庭の失敗の産物です。世の初めから神が打ち建てたもつた原則と、その原則を踏み行なうことを軽視した結果、起きてきた問題なのです。

世の親たちは幸福と成功を得るために主が与えて下さった原則から離れていき、今や世界中の家族が問題にあえぎ、傷を負っている有様です。家族に対する責任を放棄し、とらえどころのない、いわゆる「自己充足」を追い求める親が少なくありません。また、親としての責任を放り出して物欲に身をゆだね、子供のために自分の楽しみを後回しにすることをしる親すらいるのです。

私たちは、今、家族を人間の価値観によ

って作り変えようとする謀略がめぐらされていることに気付かなければなりません。テレビや映画に描かれる家族や愛のあり方が、神の戒めとは正反対であることも、よくあります。

皆さんは、家族というものに今までと何も変わったところはないとお考えでしょうか。それでは、どうか次の事実を目を向けていただきたいと思います。

現在では、3組の夫婦のうち1組が離婚しています。

また、伝統的な家族形態、すなわち夫と主婦専業の妻と子供たちという形を守っている家族は、アメリカ全体でわずか14パーセントに過ぎません。(1980年国勢調査)

現在、全労働者の約半数は女性です。

加えて、これら女性労働者の56パーセントが就学前の子供を抱えており、60パーセントが10代の子供の母親です。

アメリカ合衆国一国をとってみても、6歳以下の幼児が8百万人から1千万人も保育所などに預けられています。

さらに、全アメリカの5分の1近くの子供が片親の家庭で育てられています。

子供を育てる母親がいなくなれば、社会は立ち行かなくなります。母親の手は、子供の正常な発育に欠くことのできないものなのです。

今日の社会では、耳ざわりのよいキャッチフレーズが罪深い行為を正当化するため

に用いられています。姦淫や同性愛を「性の自由」、墮胎を「選ぶ自由」、婚外交渉を「有意義な関係」と言ってみたり「自己の充足」と言ってみたりといった具合です。

この傾向が続けば、若者の情緒障害、離婚、うつ病、自殺などは増える一方でしょう。

家庭は、永遠の価値を持つ事柄を教える最適の場所です。家庭生活がしっかりしたものであり、イエス・キリストの福音の原則に基づいていれば、このような問題は、そう簡単に起こることはありません。

今朝、私が皆さんにお伝えしたいと思っているメッセージは、私たちの家庭に愛と安らぎと幸福を約束する、神が定めたもうた原則に立ち帰ることについてです。幸せで強い家族関係を築くための3つの原則についてお話したいと思います。

第1に、夫婦は目標、望み、行動において正しい思いを持ち、しかも一致し、ひとつとならなければなりません。

結婚は神のみ前に取り交わされる神聖な誓約であるという認識がなければなりません。夫婦はお互いに対してだけではなく、神に対しても義務を負っているのです。神は、その誓約を重んじる夫婦に祝福を約束されました。

愛と信頼と平安のためには、結婚の誓約を堅く守ることが是非とも必要です。神は姦通をはっきりと禁じておられます。

互いに愛し合っている夫婦であれば、愛と誠実さとは、相関関係にあるということに気付くはずです。そして、この愛が、子供の情緒をはぐくんでいくのです。家族生活は、幸福と喜びに満ちたものでなければなりません。子供が過去を振り返る時、心温まる思い出や交わりが浮かんでくるようにな

ればなりません。

結婚の誓約にも当てはめることのできる、主の簡潔な教えに耳を傾けて下さい。まず「汝ら互いに相愛するように心がけよ。貪るなかれ。而して福音の命ずる如く、互いに物を頒つようになれ。……不潔なるを止めよ。互いに欠点を探すを止めよ。……」(教義と聖約88：123—124)

次に、「汝ら誠心を以て妻を愛してこれと結び合うべし。その他の者に愛着することなかれ。……汝ら姦淫することなかれ。」(教義と聖約42：22, 24)

3番目に、「争いを好む心ある者はわれに属く者にあらずして悪魔に属くものなり。悪魔は争いを生む親にして……」(IIIニーマイ11：29)

聖典の中には、他にもたくさん訓戒があります。

夫婦の関係を維持するには、是非とも忍耐と自制が必要です。夫婦は、言葉と感情を抑えることを学ばなければなりません。

家庭における祈り、また夫婦がふたりでする祈りは、皆さんの絆を強くすることでしよう。そしてお互いの考えや目標、意見がだんだんとひとつになっていき、やがては同じ目的、同じ目標を目指すようになることでしよう。

主に信頼し、予言者の教えや聖典から導きや助けを受けるようにして下さい。特に見解の相違が深刻になったり、問題が持ち上がった時には、そうすることが大切です。

逃避するのではなく、共に難関を乗り越える時にこそ、霊的な成長が得られます。今日の社会では、むやみに個人主義が強調されていますが、それはエゴイズムや分裂を助長するばかりです。「一体となる」よう

にという主の教えは、今日もなお生きています。(創世2:24参照)

幸福な結婚の秘訣は、神に対して、また夫婦が互いに仕え合うことにあります。結婚の目標には、個人の成長だけではなく、一致、すなわち夫婦がひとつとなることにもあるのです。一見矛盾しているように感じられるかも知れませんが、相手に仕えれば仕えるほど、自分自身の霊性が高まり、私たちは情緒的にも成長することができるのです。

最も重要なのは、正しい一致を目指して努力することです。

第2は、主の愛と教えによって子供たちを育てることです。

今日のような世の中で、心の明るい温和な子供を育てることは、生易しいことではありませんが、できないことはありません。現にそれをしている親はいます。

親が己れの責任を自覚すること、それが鍵となります。

子供にとって何にも増して必要なことは、自分が愛され、必要とされ、価値を認められているということを心で感じ、理解することです。

子供は、永遠という視点から見て、自分がどのような存在であるかを知る必要があります。そして、自分には永遠の父なる神がついていて下さり、その方に頼り、祈り、導きを受けることができることを知っておく必要があります。また、自分がどこからやって来たのか、人生の意味は、目的は何なのかを知ることも大切です。

主に祈ること、主に導きを求めること、受けた祝福に感謝することを親は子供に教えなければなりません。子供たちがまだ小さかった頃、ベッドの傍らにひざまずい

て、どう祈ったらよいか教えてあげた時のことが思い出されます。

また親は、善悪を見極めることも教えなければなりません。子供は神の戒めを学ぶことができます。また、学ばなければなりません。盗み、うそ、人をだますこと、むやみに人の物を欲しがることが悪であることも学ばなければなりません。

また、家で働く方法も学ぶ必要があります。正直に働くならば高潔さと自尊心が得られることも学ぶ必要があります。また、勤労と、良い仕事をする事の喜びも学ばなければなりません。

また、余暇を健全に建設的に過ごすように導いてやらなければなりません。テレビの見過ぎは有害です。特にテレビのわいせつな番組に気を許してはなりません。今の育ち盛りの子供たちは、週25時間以上もテレビを見てると推定されています。

地域社会には、家族にとって健全な娯楽を振興するという責任があります。地域社会が容認するものが、今日の若者が成人する頃には、社会的な標準となっていきます。

家族は、共に働き、遊ぶ時間をもっと増やさなければいけません。家庭の夕べを毎週開くようにして下さい。そして、遊んだり、家族みんなで家の仕事をしたりするとよいでしょう。また、寸劇をしたり、ピアノを囲んで歌ったり、ゲームをしたり、特別に作ったおやつを食べたり、家族みんなでお祈りしたりして下さい。家庭の夕べのこのような活動は、あたかも鉄の鎖のように家族を、愛と、誇りと、家風と、道徳心と、忠実さで結び合わせます。

安息日には、家族そろって聖典を勉強することを習慣にしましょう。



毎日家族が集って、聖典を読んだり、讃美歌を歌ったり、家族の祈りを捧げたりするひとときを持つのもよいでしょう。

第3に、親は、子供が福音の儀式を受けることができるように教えなければなりません。

家庭で教える最も大切な事柄は、霊に関わる事柄です。両親は、自分の子供たちが福音の儀式、すなわちバプテスマ、確認、神権への聖任、神殿結婚などの儀式を受けられるように教えるよう、命じられています。また、安息日を尊び、大切に、聖く過ごすことも教えなければなりません。とりわけ大切な親の役割は、子供たちに何にも増して永遠の生命を得たいという希望を持たせ、熱心にその目標を追い求めるようにさせることです。

永遠の生命は、福音の律法と儀式に従った時に初めて得られるものです。

両親が自らその救いの儀式を受け、神殿結婚の模範を子供たちに示すならば、自分たちの結婚生活を幸福なものにするだけにとどまらず、やがては子供たちもその模範に従うようになるでしょう。

そのような家庭を築く両親は、主が言われたように「祈りの家、断食の家、信仰の家、学問の家……秩序の家、神の家」(教義と聖約 88：119)を築くのです。たとえど

んなにつましい貧しい家庭であっても、そのような家庭には愛と、幸福と、平安と、喜びが満ち満ちていることでしょう。そして、子供たちは正義と真理の内に成長し、主に仕えたいという望みを持つようになるでしょう。

ある大管長は、両親に対して次のような助言を与えています。

「毎日、家族と共に一日に二度祈り、家庭を変えるようにしなさい。……あらゆる食物を祝福したもうよう祈りなさい。……10分間主のみ言葉を読むようにしなさい。……あなたの家庭を、愛、平安、主のみたま、親切、慈愛、他人のための犠牲で豊かに満たしなさい。粗野な言葉……を退け、心の中に神のみたまを宿しなさい。霊と力により、実践によってこれらを力あるものとし、子供に教えなさい。……家庭環境(が)……福音の真理に添っているならば、百人の内ひとりとして迷う子供はいないであろう。」(ジョセフ・F・スミス「福音の教義」p. 292)

この教えと模範に従うならば、家庭内に深刻な問題が起こるわけがないこと、それにとえ起きたとしても、それを解消することができることを、私自身も証致します。

家族生活という喜びを与えて下さったことを、神に感謝しましょう。何度も申し上げてきましたが、良き家庭なくして真の幸福はあり得ません。人生において、人に最も素晴らしい感化を与えてくれる場所、そして、最も素晴らしい人と人との交わりを教えてくれる場所、それは家庭なのです。

皆さんが神の教えに従う時、神の祝福があり、愛と一致により皆さんの家庭が強くなりますように。イエス・キリストのみ名により、お祈り致します。アーメン。



高価なる真珠

七十人第一定員会会員 J・トーマス・ファイアーズ

愛する兄弟姉妹の皆さん、皆さんの前に立って、イエスがキリストであることを証するのは何という素晴らしい特権でしょうか。

東洋の古い伝説に、高価な真珠を売ろうとした宝石商の話があります。その宝石商は高価な真珠を見栄えがするように展示しようと思い、最も美しい木材を使って、特別な宝石箱を作ろうと考えました。彼はそのような木を捜し求め、自分の手元へ届けてもらい、美しいつやがでるまで磨かせました。そして、箱の四角には真ちゅう製の上品な留め金を取り付けて補強し、内側には赤いベルベットを張りました。そして最後に、ベルベットに香水をふきつけ、高価な真珠をその箱の中に入れました。

こうして真珠はショーウィンドーに飾られました。しばらくすると、金持ちの男がやって来ました。男はショーウィンドーを見て心を引かれ、店の中に入って宝石商と交渉を始めました。やがて宝石商はその男が真珠よりも宝石箱を求めていることを知りました。その男は宝石箱の美しさに見とれて、高価な真珠が目に入らなかったのです。

最近のことですが、教会員でない友人が数人、遠方から私の家を訪ねてきて、一週間ほど滞在していました。その中のひとり、非常に高い教養の持ち主でした。彼は、初めは聖職に就くことを志していましたが、後にそれを断念して心理学者になることを

決意し、その分野で博士号をとりました。

やがて彼は卒業して、診療所を設立し、その診療所も今では数名の精神科医と多くの心理学者、それにソーシャルワーカーを擁するまでになっています。彼はまた、州の教育委員会や州立大学の顧問にもなっており、その上大学の学位取得試験の審査にも加わっているような人です。

そのような非常に学識のある人がわが家にやって来ることを知って、私たちは、自分たちが信じていることについて何を見せ、どう説明したらよいか戸惑いました。

まず初めに、私たちはこの堂々たる建物に彼を連れてきました。ちょうど日曜日の朝のことで、彼はこの素晴らしい聖歌隊の芸術的な力に感嘆していました。それから訪問者センターを訪れて、そこに展示されているものを見て回りました。

私はまた教育委員長と会ってもらおうよう手はずを整えました。私たちの教会が、教育の分野にも力を注いでいることを知ってもらいたかったからです。それから彼をブリガム・ヤング大学へ案内し、同じ分野で働いている何人かの人々と会ってもらいました。私たちは彼にこの立派な大学から何らかの感銘を受けてほしいと願っていたのです。そして思った通りになりました。

それから私は彼を舞台裏へ連れて行き、きょうバッカー長老が話された教会のカリキュラム計画の様子を紹介しました。彼は



教育関係の研究をしていたので、あらゆる段階の人々を対象とするカリキュラムの計画に携わった経験がありましたが、私たちの計画を見て大変驚いて、こう言いました。「こんな素晴らしいものは見たことがありません。これはカリキュラム計画のノーベル賞ものですよ。」

このようにして、彼はたくさんものを見て回りました。そして、最後の晩に、私は、「何か疑問に思われたことはありませんか」と尋ねました。

すると彼は言いました。「肉親を失った人々には、どのような慰めを与えるのですか。」

私たちは旧約聖書を開き、それから新約聖書を読みました。さらにもうひとつの証の書であるモルモン経もひもときました。アルマ書や他の書を開いてイエスがキリストであることを示しました。次に近代の聖典をとり出し、教義と聖約の76章と138章を読んで研究しました。高価なる真珠も読みました。

そしてこれらの聖典が互いに関連があり、聖句を照らし合わせることができることについて話をしました。聖典は決して個々別別のもではありません。全部がまとまって初めて完全なものとなるのであり、すべ

てひとつの源、すなわち主なる神とその御子イエス・キリストからもたらされたものなのです。主はあらゆる時代に予言者を通じてそのみこころを人々に示し記録させたもうたので、私たちはかの高価なる真珠のような英智を持つに至りました。

この教会には素晴らしい教えがたくさんあります。いずれも私たちの生活を高め、素晴らしいものにしてくれる教えです。私たちが周りの飾りに目もくれず、その核心を見るならば、そこにひとつのメッセージがあることに気づくでしょう。そのメッセージとはすなわち、主イエス・キリストが時の絶頂に来られたというメッセージです。その時、主は主のみ業を助ける使徒や七十人を召されました。そして十字架にかけられ、墓に納められ、3日目によみがえられたのです。主は今も生きておられます。主が今生きておられるので、私たちは明日も生きることができるのです。私はその友人に、このようにして私たちは肉親を失った人々に慰めを与えるのだと話しました。

兄弟姉妹の皆さん、私の証を述べたいと思います。イエスはキリストであられます。この教会はイエス・キリストの教会です。そしてそこには、イエス・キリストを証するものがたくさんあります。旧約聖書、新約聖書、そしてモルモン経として知られるイエス・キリストを証するもうひとつの書物です。このような証の書物から湧き出る水を思うさま飲んで、皆さんが心の中に持つておられる証を支えることができますように。そして、その証を他の人々と分かち合い、この地上に神の王国を築き、天の王国をも来たらすことができますように。へりくだり、イエス・キリストの聖なるみ名により祈ります。アーメン。



清い信心

十二使徒定員会会員 マービン・J・アシュトン

数 週間前に、友達と会う約束があつて神殿の近くまで来ますと、見知らぬ若い女性が近づいてきてこう言いました。「モルモンが本当はどういう人か知りたいと思いませんか。」

私は答えました。「本当のところを少しは知っているつもりですが。」

するとその女性は激しい口調で言い返しました。「モルモンはキリストの教えに従って生活していないんです。」

「それは一体だれのことですか」と言つて、私はその場を引き上げました。

私は訪問者センターに向かって歩きながら、自分と異なる宗教を持つ人々を中傷し、あざけり、恥ずかしめ、その信用を落とすために時間とお金を費やしている人々の行ないについて考え始めました。時にはそのような行為によって、攻撃された人々は一致し、強くなることもあります。しかし、かなりの場合、内輪もめの種が植えつけられ、時には義人が中傷の犠牲になります。

そのような行為がクリスチャンにふさわしいと言えるでしょうか。イエス・キリストは、中傷的で破壊的な批判に時間を使うようにとは一度も言われたことがありません。主が教えておられるのは、賞賛に値する価値あるすべての事柄を捜し求め、学び、人と交わる時にそれらを分かち合うということです。つむじ曲がりて執念深い人に限つて、否定的で不愉快なことを捜し出し、

言い広めるものです。

私が宣教師としてイギリスに着いた時、伝道部長が貴重な勧告を与えてくれました。私は終生その勧告に感謝するでしょう。伝道部長はこう言いました。「アシュトン長老、この国の人々は長い間、この国で生活してきました。もしあなたが目と耳と心とを開くならば、この地でたくさんのことを学べます。よきことを捜し求めなさい。そして、あなたのやり方と異なるものには寛大でありなさい。」

イギリスでの生活を重ねるにつれて、この勧告の有り難さがしだいにわかってきました。日に日に、偉大な国イギリスとその国民に対する愛と理解が深まっていきました。例えば、冷湿な冬の日には凍えないように、イギリス人と同じことをしました。寒い寒いと不平を言わずに、もう1枚セーターを重ね着したのです。

ロバート・ウェストはこう記しています。「あら捜しほどたやすいことはない。不平をこぼすという仕事には、才能も、自制も、頭脳も必要でないからである。」(Richard L. Evans' Quote Book, p.221)

非難や当てこすり、中傷、うそなどが陰でささやかれたり、大々的に騒がれたりしても、イエス・キリストの福音は私たちに報復や争いをしてはいけなことを思い出させてくれます。「愛する兄弟たちよ。このことを知っておきなさい。人はすべて、

聞くに早く、語るにおそく、怒るにおそくあるべきである。人の怒りは、神の義を全うするものではないからである。」(ヤコブ 1:19—20)

いかなる宗教も、団体も、個人も、あらゆる捜しを基盤にしては永く繁栄することはできません。世の中の人々、特に末日聖徒イエス・キリスト教会の会員にはっきり申し上げます。争っている時間はありません。「もし人が信心深い者だと自任しながら、舌を制することをせず、自分の心を欺いているならば、その人の信心はむなししいものである。」(ヤコブ 1:26)

詩人ロバート・フロストは、教育を「平静と自信とを失うことなく、ほとんどどのようなことでも聞くことのできる能力」であると定義しています。おそらく私たちは、公然とモルモンに反対する人々から解放されることはないでしょう。ですから、すべての教会員はモルモンに反対する人に反対する者になってはいけません。古くからの格言に「生き生かしめよ」(ヨハン・シラー、*The Home Book of Quotations*, p.1119)とあるように、私たちは互いに相手のことを考えて生きていく必要があるのではないのでしょうか。

神から与えられた特権のひとつに、様々な状況の中で自分のとるべき態度を選ぶ権利があります。すなわち、周囲の状況が私たちの行ないを決めるか、あるいは「清い信心」の原則に基づいて私たち自身が生活を管理し治めるかです。「清い信心」とはイエス・キリストの福音を学んで、それを実行することです。自身の生活の一部となっ
てはじめて、本当の祝福がもたらされるのです。

歴史を振り返ってみると、救い主の教え

られた「清い信心」が今ほど必要とされている時代はないと思います。この信心とは、仕返しをすることではありません。また悪い行ないや不親切な言葉を返すことでもありません。清い信心とは、いつくしみ、築き上げる能力であり、そしてられ打ち負かされそうな時でも、ほかの頬を向ける力です。主や主の僕を非難することなく、一生懸命主に仕える人々は幸いです。

私たちが完全でないのに、他の人々に完全であることを期待するのは矛盾した考え方です。聖書にはこう記されています。

「なぜ、兄弟の目にあるちりを見ながら、自分の目にある梁を認めないのか。

自分の目には梁があるのに、どうして兄弟にむかって、あなたの目からちりを取らせてください、と言えようか。

偽善者よ、まず自分の目から梁を取りのけるがよい。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取りのけることができるだろう。」(マタイ7:3—5)

本当の意味で成長するには、自分の目から梁を取り除き、裁きは天の御父にゆだねて、義しい生活をしようとしてひたすら努めることです。

清い信心の定義にそぐわない行為が頭に浮かんだ時は、次の聖句について考えるとよいでしょう。「父なる神のみまえに清く汚れない信心とは、困っている孤児や、やもめを見舞い、自らは世の汚れに染まずに、身を清く保つことにほかならない。」(ヤコブ 1:27)

実に簡潔な言葉ですが、この中に基本的な公式が明らかにされています。すなわち、困っている人を助け、イエス・キリストの福音に従って生活し、この世の誘惑を避けることです。

最も簡潔なこれらの公式を元に、私たちは自分自身の生活を分析し、知恵と自由意志を使って福音の基本原則を応用しなければなりません。イエスは次のように言われました。「われまことに、まことに汝らに告ぐ、以上はわが福音なり。わが教会に於てなすべきことは、汝らすでによく知れり。すなわち、汝らが見たるわが行いを汝らもせよ。これらのことは汝らも行うべきことなればなり。」(Ⅲニ一ファイ27:21)

今年の夏に、友人の家を訪れた時のことです。まだ小さい男の子が新しい三輪車に乗ってしきりにわめいていました。両親も私たちもその子に注意を向けなかったからです。男の子は小さな足で思いきりペダルをこぎながら、「ほら、見て！」と声を上げました。ところが前を見ないで私たちの方を見ていたために、その子はベンチにまともにぶつかってしまいました。母親は子供を慰め、泣きやませようとしてこう言いました。「あの腕白な椅子が悪いのね。あの椅子におしおきしましょうね。」

母親の言葉は一時的に子供の気持ちをまぎらすと思います。しかし同時に、この事故の原因を子供自身ではなく、何かほかのものに転嫁することを教えてしまっています。

私たちは自分の行ないの責任を自分以外のものに求めることはないでしょうか。自分の内面を見つめ、自分自身に責任があることを認めるのはつらいものです。

自らを世の汚れに染まらないようにするには、自分の生活を内面から治め、自分の行動に対して責任を持つことです。そして、たとえ周囲の人が批判やうそを言いふらしても、仕返しをせず、平和をつくり出す者としての役割を果たすことです。また地上

での神のみ業が弱点を持つ人間によって行なわれることを認め、人間としての欠点が表われても幻滅せずに、その人の良い所を捜すことです。さらに、そういった欠点を強調するあまり、基本的に善なるものを見失わせ、証を揺るがせるような主張には反対することです。

清い信心は、洗練された知的な情報と福音の実験的な原則とのバランスを保ちます。末日聖徒は、あらゆる分野の学問を求めめるように勧められています。しかし、優れた知識と学問上の業績は、知恵と正しい判断、それに霊的な導きによって高める必要があります。それは学んだすべてのことを活用して、個人と同胞に利益をもたらすためです。

ある人々は、被造物を鑑賞することによってのみ神を知ることができると考えています。山や川、花、鳥、獣、これらは皆、楽しみ賛美すべきものです。しかし、それだけでは十分ではありません。真の教会では、福音の真理を分かち合い、新しい概念



を自分のものとし、新たな経験を積み重ねます。そうすることによって、自尊心を高め、人を助けるより良い方法を身に付けるのです。

「清い信心」を実践するならば、人を落ち込ませるよりも高めることの方がはるかに報いが大きいことにすぐに気づくでしょう。幸福は人を助けることと切り離せないものです。人の評判を落とそうとする人々、無知な人や無学な人を利用する人々、信心深いふりをして人を巧みにあやつり富を築く人々、こういった人々は清い信心のもたらず喜びを逃しています。

多くの人は、周囲の人々に温かい思いやりの手を差し伸べることにより喜びを得ています。感謝の言葉を述べることでさえできない病人を見舞う友を見るのは、何と心強いことでしょうか。中には、多くの人が快復の見込みのない肉体的、精神的な障害や苦痛に悩まされているのを見て、それを放っておかれる神に疑問を抱く人もいます。しかし、そのような事態が起こると、私たちは人々の温かい奉仕と忍耐から多くのことを学びます。教会の指導者として、伝道や神殿での奉仕はもちろん様々な役職を歴任し、今は特別な責任のないある会員は、月に一度、養護施設を訪問しています。彼はよくこう言います。「毎月これらの素晴らしい人々と会うたびに、心が満たされるのです。」

清い信心とは、伴侶を失って、ひとり寂しく暮らしている人々に愛と関心を示すことです。最近私は、60人以上の未亡人を抱えるワード部の監督に会いました。彼は顔を輝かせて「あの方々をみんな愛しています」と言いました。その監督と副監督は、少なくとも週に一度、ホームティーチャー

の訪問とは別に、未亡人の家を訪れます。彼は「あの方々は私たちの生活の喜びです」と繰り返し言っていました。「これは私たちの手に余る責任だと思いませんか？」と言うこともできたでしょうに。

清い信心にふさわしいもうひとつの行ないは、隣近所で外に出られない人に毎日電話をすることです。穏やかな年老いた未亡人の方がこう言いました。「毎日電話をすれば、彼らの気持ちを高めることになります。そして、もし電話にだれも出なければ、私の訪問を必要としていることがわかります。」彼女の友人の中に電話を持つ余裕のない人がいました。そこで彼女は自費で電話を取りつけてもらい、毎月その料金を支払っているということです。

清い信心には、忍耐と根気が求められます。アルコール中毒から立ち直ったある父親が、よくこのように言いました。「私が立ち直れたのは家族があきらめないでやってくれたからです。妻子だけです。私を見捨てないでいてくれたのは。」「私が立ち直れたのは家族があきらめないでやってくれたからです。」何と素晴らしい言葉でしょう。

清い信心は、恵まれない子供たちの世話をする時にも表われます。神の選ばれた霊たちの中には、貴い親からの世話を受けられない人々がいます。その場合、一定期間の世話をする里親によって、あるいは養父母によって、多くの人に家族関係が提供されます。

清い信心は、正しいことを行ない、その結果に従う勇気を持つことです。正しいことを正しい動機から行なうのです。たとえ義しい生活をし、奉仕を行ない、愛を示し、神の戒めに従っても、人からほめられ認められるためにするのであれば、それは清い

信心ではありません。清い信心は、仲間からあざけられ、受け入れられなくとも、それに耐えます。自分が何者で、何を目標としているか知っているからです。私たちの若人や年輩の人々の多くは、そのような内面的な強さをはぐくんできました。そして、周囲の人々に大きな良い影響を及ぼしています。

周囲の人々を愛するには、他人の気持ちを思いやることです。よく見かけることですが、聖餐のパスを終えた執事が、司会者から家族と一緒に席に座るように勧められました。するとひとりの執事は外に出て、玄関のところに腰かけていました。それに気づいたある父親は、次の週に、自分たちと一緒に座るように勧めました。その執事は自分の家族が教会に来ていなかったのです。いつもばつの悪い寂しい思いをしていたのです。この父親は司会者の言葉を批判せずに、少年の必要に^応えました。このような行ないこそ、すべての教会員に広がって実践されるべきものです。

一人一人の、特に子供たちの安全と保護については、すべての人が関心を持つべきです。私たちは互いの安全を確保するために助け合うことができます。起こり得る危険を察知し、子供や老人に限らず人を傷つけ、盗み、虐待する者に対して進んで立ち上がるのです。

清い信心は議員などの選挙の中でも実践することができます。問題について説明し、討論はしても、つまらない事柄や中傷はしないことです。選挙における真の勝利者は、人身攻撃をせずに敗北を受け入れる人々なのです。

清い信心の表われは、身の周りの至る所で見られます。1カ月程前の葬儀の席で、

私は異国の地で伝道している勇気ある女性について知りました。その女性は、母親が不治の病で危とく状態に陥る直前に、涙を流して主に祈り求めながら次のような手紙を書きました。「すぐにでもお母さんのそばに行きたいのですが、お母さんの教えに従って伝道地にとどまります。そして与えられた責任を果たし、福音を求めている人々を捜します。」

清い信心を定義する簡潔な聖句から、大切な指針が得られます。世の汚れに染まらないようにするには、世の人々を惑わすサタンの邪悪な計画を避けなければなりません。復讐、あら捜し、欺まん、卑劣、偽善、人を裁くこと、排斥、これらの行為はいずれも清い信心とはかけ離れたものです。

感情移入は、自分自身と同胞に対する真心からの愛です。ヘンリー・デビッド・ソーローは、「ちょっとの間、互いに相手の目を通して見ることほど素晴らしい奇跡があるだろうか」と言っています。もしこれができれば、私たちは未亡人や孤児はもとより、キリストの純粋な愛による助けを必要とするすべての人の元を訪れて、援助し、隣人の必要に応えるようになるでしょう。

私たちに上に神の助けがあって、清い信心の原則を学んで実践できますように。互いに高め合うというこの仕事は、全時間をかけて行なう仕事です。卑劣な人、偏見をもった人、争い好きな人、同胞の必要に無頓着な人、このような人に清い信心と言っても、わかってもらうことも、実践してもらうこともできないでしょう。清い信心とは救い主の教えに従うことです。イエス・キリストは生きておられます。この教会は主の教会です。これらのことをイエス・キリストのみ名により証します。アーメン。



喜びをもって生きなさい

十二使徒定員会会員 ニール・A・マックスウェル

兄 弟姉妹の皆さん、私たちは素晴らしいものと恐ろしいものの両方を目にする時代に住んでいます。それらのものを目にする事なく末の日を生きることはできません。しかし、私たちは主であり鑑であるイエス・キリストから、「喜びをもって生きなさい」と教えられています。(教義と聖約61:36; 78:18参照)

イエスは先の時代の人々にも同じように、試練の時には「元気を出さない」と前もって教えておられます。例えば、主が最初の十二使徒に勇気を出すように言われた時、一見して、勇気の出るようなものは何ひとつありませんでした。(ヨハネ16:33参照) ゲツセマネでの言葉に表わせない苦悶が差し迫っていました。ユダの裏切りが間近にひかえていました。イエスの逮捕と罪状認否も近づいています。十二使徒たちは羊のように散らされ、イエスがまね事ばかりの不正な裁判にかけられて、ひどい苦難をお受けになる時が数時間後に迫っていました。「イエスではなくバラバをゆるせ」という群衆の激しい叫び声がもうすぐごだまし、カルバリでの最後の恐ろしい時が来ようとしていました。

それでは、イエスはなぜ十二使徒たちに勇気を出すように望まれたのでしょうか。その理由を救い主はこう答えておられます。「あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出さない。わたしはすで

に世に勝っている。」(ヨハネ16:33)

キリストが世に打ち勝たれたので、贖罪はまさに成就され、死は最終的に打ち負かされようとしていました。サタンは明らかにされた救いの計画を阻止することに失敗したのです。そして、全人類は神の恵みによって不死不滅を授かることになりました。しかもそればかりでなく、得ようとする人には、永遠の生命という豊かな賜が備えられるのです。このように十二使徒に喜びをもたらしたものは、輝かしい真実と根本的な事実でした。つかの間の厳しい現実ではなかったのです。福音についての貴重な見通しが、この福音の喜びを与えてくれるのです。

同じことが別の場合にも言えます。それは投獄されていたパウロに、復活されたイエスが臨まれた夜のことです。イエスはパウロに「しっかりせよ」と言われました。

(使徒23:11) この時、パウロはアナニヤの命令により衆人環視の中で口を打たれたばかりでした。40人のユダヤ人が彼を殺そうと陰謀をめぐらし、パウロは扇動行為で裁判にかけられようとしてしていました。また、間もなく難船を経験します。このような時に、どうして元気であることができるのでしょうか。それは、イエスが言われたように、パウロは悪条件の中にもかかわらず、やがてローマに福音のよきおとずれを伝えることになるからです。

また別の時代の教会員は、予言が成就するまで人質に取られ、もしその予言が成就すべき時に成就しなければ命を奪われることになっていました。しかし主はこの時にも、「元氣を出しなさい」と言っておられます。なぜでしょうか。それはイエスが「われは明日世の中に来らん」と宣言されたからです。(Ⅲニーフай 1:13) その誕生と共に、メシヤのこの世での使命が、ついに始まるのです。

福音に対する喜びは、予言者ジョセフ・スミスの態度に見られます。1842年の秋、武装した暴徒がノーヴーに向かっていているというわさが広まりました。ジョセフの愛するエマはしばしば病に倒れ、快復が危ぶまれていました。一方、ジョセフはジョセフの町に追われていました。この時期、ジョセフはどのような心境にあったのでしょうか。ある時、家に帰ったジョセフは次のように記しています。「エマは病に伏していた。……男の子を産んだが、死産であった。」(History of the Church, 5:209)

このような激しい苦悩と苦難の中でさえ、予言者ジョセフ・スミスは神殿活動について次のように記しました。「さて、われらの受けたる福音の中にわれら何を聞くや。喜びの声なり。……生ける者と死にし者とのための喜びの声、大いなる喜びの^喜嬉しき^信信なり。……汝ら喜べ大いに喜べよ。……山々は喜びの声を挙げよ。汝ら谷よ、皆声高く叫べ。」(教義と聖約128:19, 22-23)

世の中から受ける失望に比べて、イエス・キリストの福音からは、本当に大切なことについて何と貴重な見通しを得られることでしょうか。

1820年代の後半、まだ回復された福音に触れていなかった青年ブリガム・ヤングは、

いくらか落胆していました。世の中で目にする多くのことに不満を感じ、自分はすべきことをしていないのではないかという思いにかられていたのです。その時、彼の愛する兄弟フィニアスが、先見の明あるこのような勧告を与えました。「たゆまず頑張りなさい。主は私たちのために何かを備えて下さっているのですから。」(ヒーパー・C・キンボール, 1845年1月8日, Brigham Young Papers, Historical Department, The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints) そこからモーセに匹敵する彼の歴史が始まったのです。

兄弟姉妹の皆さん、このように私たちは根本的な理由から、すなわち差し迫った状況にはまったく左右されない理由から、喜びを得ることがおわかりになったと思います。例えば、もし私たちの生活態度が人の賞賛や利率の水準、選挙あるいはスポーツ競技の結果によって変わるようであれば、私たちはあまりにも人や環境に左右されていることとなります。またこの人生での恵みに対する感謝の気持ちは、死を迎える時の状態によって変わるものではありません。なぜなら、イエスの前に進み出て行って、自分がどのように死んだかを話す人はよもやないからです。

そうではなく、イエスが私たちに求めておられることは、神が全人類のために、また個人のために明らかにされた目的を熟慮した上で信頼することです。私たちは主によって明らかにされた過程を歩むことに喜びを得るべきです。

とはいえ、末日に起こる苦難を過少評価してはなりません。ヨエルとゼパニヤはともに、末日を「薄暗い日」(ヨエル2:2; ゼパニヤ1:15)と呼んでいます。これが

らの時代は絶望の時代となるでしょう。なぜでしょうか。それは、モロナイが述べているように、絶望は悪い行ないから来るからです。(モロナイ10:22参照)悪い行ないが増えるにつれて、ますます絶望の淵に沈んでいくのです。そして、広く悔い改めが行なわれない限り、絶望は、福音の喜びを知らない人々の間に深まり、広がっていきます。

悲しいことに、私たちは平和をつくり出すように求められていながら、地より平和の取り去られた時代に生きています。(教義と聖約1:35参照)現代の人々はほとんど絶え間なく戦争を経験してきました。1945年に第2次世界大戦が終結してから今日に至るまで、大小合わせると、141の戦争が起きています。南北戦争が今にも始まろうとしていた時、主は、戦争がすべての国民の上に押し寄せ、「多くの人々の死と苦悩とに終る」(教義と聖約87:1)と宣言されました。

さらに、戦争は続いてその極に達し、「すべての国々の最後」(教義と聖約87:6)となるでしょう。その間に、もしも世の人々が望むならば、武器に頼らせましょう。しかし私たちは、「神の武具で身を固め」(エペソ6:11)るのです。そして、このような苦難の最中であっても、私たちは義しければ、死ぬ時は主にあって死に、生きる時は主にあって生きるでしょう。(教義と聖約42:44参照)

悲しいことに、私たちはまた多くの人々の愛がしだいに冷ややかになる時代に生きています。(教義と聖約45:27; マタイ24:12参照)したがって、恐れが増していくでしょう。なぜなら、人が恐れるのは、愛が全うされていないからです。(Iヨハネ4:

18; モロナイ8:16参照)愛が冷えるにつれて、戦争だけでなく恐れも蔓延していくのです。

しかし、パウロが述べているように、私たちは途方に暮れても行き詰まることはありません。(IIコリント4:8参照)なぜなら、霊的な備えがあれば恐れる必要はないからです。(教義と聖約38:30参照)

それにしても、主は聖徒たちの信仰と忍耐を試そうとしていることを少しも隠してはおられません。(モーサヤ23:21参照)私たち人間は主を実に早く忘れてしまいます。聖典にこうあります。「また主がいろいろの艱難でその民をこらし……たまわないと、民は主を思わないことも明らかである。」(ヒラマン12:3)

しかし、主は私たちの苦難に対処し、理解し得る能力を知っておられるので、私た



ちには耐えられないと思えても、実際に耐えられないような艱難に遭わせることはなさらないのです。(教義と聖約50：40；78：18参照) 私たちは逃れられない、あるいは耐えられない誘惑に遭うことはありません。同様に、耐えられない試練に遭うこともないのです。(Iコリント10：13参照)

これまで喜びを持つ大切な理由を幾つかあげましたが、果たして私たちは周囲の圧迫や環境にかかわりなく、喜びをもってられるでしょうか。

ブリガム・ヤング大管長は、目的の地を指して「ここがその場所である」と言いました。神の救いの計画についても、その最終目的を知っていれば、「これがその道である」と言うことができます。

試練や苦難を経験しただけでなく、人の高遠な行く末についても熟知していたヤング大管長は、主が私たちにそうした経験をさせるのは、私たちを神の真の友とするためであると言っています。個々の能力を伸ばし、自由意志を賢明に使い、神を信頼するならば——たとえ見捨てられて独りになったと感じることがあっても——ヤング大管長が語っているように、私たちは「暗闇の中でも義しく」生きることができます。

(Secretary's Journal, 28 Jan. 1857) 暗澹たる苦難の中にあっても、私たちの目に入る福音の光は、喜びを得て、光輝く人々から発せられるものです。

人々が絶望する時に喜びをもって生き、人々がつまずく時に信仰を保ち、見捨てられたと感じる時にも主を信頼する——これらのことはすべて、私たちを愛するがゆえに与えられる神の思慮深い訓練の結果として深く望まれていることです。(モーサヤ3：19参照) これらの経験を神の冷淡さと

誤解してはなりません。こうした訓練は神の計画の一部なのです。

しかし、信仰を持つ人であっても、カプセルに包まれた出来事に携わっている時には、おそらく周囲にうず巻く事柄をすべて理解することはできないでしょう。例えば遠い昔のベツレヘムでのあの夜、ヨセフとマリヤは生まれたばかりのキリストの足を見て、やがてその足が聖地をくまなく歩くことを理解していたでしょうか。またその後、その足にくぎが打たれることを知っていたでしょうか。それは考えられないことです。

愛情の深いマリヤはその小さな手を握りしめた時、また数カ月して幼な子とその小さな手で抱きついてきた時に、その手がやがて最初の十二使徒を聖任し、後に粗末な十字架を運ぶことを知っていたでしょうか。

マリヤは幼な子の泣く声を聞いた時、イエスがラザロの死に嘆かれる声や、ニーファイ人の子供たちに祝福を与えた後に涙される声を耳にしたでしょうか。(ヨハネ11：35；IIIニーファイ17：21—22参照)

また幼な子の柔らかいひざが、ゲツセマネでの壮厳な畏怖を感じさせる祈りの時を含めて、頻繁に捧げる祈りのために堅くなることを先見していたでしょうか。(マタイ26：36—56参照)

また幼な子を入浴させ、体をきれいに洗ってあげる時、後にその全身から血を流される日が来ることをマリヤは予測できたでしょうか。(モーサヤ3：7参照)

喜んで、信仰をもって歩むとはこういうことなのです。たとえ完全に理解することはできなくても、皆さんも私もその事柄を心に留めて、思いめぐらすのです。(ルカ2：19参照)



私たちが苦難の中にある時、主とその予言者は私たちに平安を与えて下さいます。ある時代の主の民がそうでした。彼らは近づいて来る敵に恐れをなしていましたが、予言者が主を思い起こすように言って安心させたので、「その恐れを鎮め^{しづ}め」（モーサヤ 23：28）しました。苦難の中を牛車で横断した若き日のエライザ・スノーのように、私たちはいつも「事をありのまま」に見通して、彼女の言葉を借りれば、「とても恵まれていることに感謝」できるのです。（ヤコブ 4：13；ケネス・W・ゴドフリー、*Women's Voices*, p. 147）兄弟姉妹の皆さん、このような平安と見通しを持つことが必ず必要になります。なぜなら、主がはっきりと指摘されているように、人々を清め、ふるい分ける裁きは、まず神の家から始められ、それから世界に及ぶからです。（Iペテロ 4：

17；教義と聖約 112：25 参照）このふるい分けがどのようなものであるかは、まだ明らかにされていません。「日々自分の十字架を負う」ようなやむことのない、途方もない苦しみと共に何か特別な苦難が来るのでしょうか、正確には私たちにはわかりません。（ルカ 9：23 参照）私たちにわかっていることは、イエスが明らかにしておられるように、誘惑、迫害、苦難という誘惑者の3つの道具が容赦なく使われるということです。（マタイ 13：21；ルカ 8：13 参照）

そして、もしそのような環境の中で太陽の熱が縁の木さえも枯らしてしまうとすれば、その熱はまさしく現実のものです。（ルカ 23：31；教義と聖約 135：6；アルマ 32：38 参照）

多くの人が、義しい行ないの中にも悔い改めないでいる過ちによってふるい分けら

れるでしょう。ある人は最後まで耐えることをあきらめてしまうでしょうし、信仰を捨てた人に欺かれる人もいます。またつまずく人もいます。どの神権時代にもつまずかせる石はたくさんあるからです。ある人は世の煩いに気をとられて、ランプの油を持っていないためにつまずくでしょう。また霊の糧を食べることを繰り返して拒否する人々は、世の中のことに一生懸命になっているうちに勝利を逃すでしょう。世の中の嘲笑に恥ずかしくなって鉄の棒を離す人もいます。(I ニーファイ 8 : 28 参照) 真の聖徒でない、通り抜けるだけの単なる観光客は、この道から離れていくでしょう。また喜びを失って、神に向かって愚かなことを言う人もいます。(ヨブ 1 : 22 参照)

兄弟姉妹の皆さん、すでに非常に多くの教会員が誓約を破り、約束を守らなかったために失意に陥り、家庭の崩壊を招いています。これは事実です。快樂を追求する社会の風潮が高まるにつれて、いわゆる私たちの文明は、エデンの園ならぬソドムとゴモラに近づいていくのです。

そこで、私たちは備えをしようとする時、両親や神権、原則、聖典、神殿、指導者を心して信頼するようにすべきです。プログラムを足場とするような過ちは犯さないようにしましょう。

心に喜びがあるならば、過去への郷愁に悩んでもむだであることがわかるでしょう。たとえ次のような嘆きの声が理解できたとしてもです。

「ああ、私の先祖ニーファイがエルサレムの地から出てきたその昔に私も生きていたならよかったものを。……その時ニーファイの民は容易く勧めに従い、神の命令を

堅く守り、罪惡に誘われることは遅く……ところが見よ、今私は生きて……生涯となってしまう。」(ヒラマン 7 : 7, 9)

兄弟姉妹の皆さん、これが私たちの時代です。これが地上における私たちの一生です。これが私たちがしなければならない務めなのです。

そして、このような時代にあつて喜びを得るには、雄々しくイエスについて証をすることが必要です。(教義と聖約 76 : 79 ; 121 : 29 参照)

最後に、幸福をもたらす計画に苦痛は不可欠なものです。そのような苦痛を感じる時、私たちはその計画が最初に明らかにされた時のことを思い起こすことができます。その時、優れた霊たちはひそかにではなく、声を張り上げて賛成し、喜び呼ばわったのです。(ヨブ 38 : 7 参照) その時どんな気持ちであったかについては、ここでは触れません。なぜなら、私たちはその時、今経験していることをもっとはっきりと見ているからです。

神の助けがあつて皆さんの心に喜びがありますように。これは、私たちが完き喜びを受ける時の楽しい状態に先駆ける気持ちです。(教義と聖約 93 : 34 参照)

歩むべき道を完全に知っておられる御方が次のように約束しておられます。「汝ら……心安かれ。われ汝らを導きて行けばなり。王国は汝らのものなり。……また、永遠の富も汝らのものなり。」(教義と聖約 78 : 18)

私たちを抱えようとして両手を広げて待っておられる御方 (モルモン 6 : 17 参照)、イエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。



救い主の友、僕、息子となる

七十人第一定員会会員 ロバート・E・ウエルズ

この教会は末日聖徒イエス・キリスト教会です。私たちはクリスチャンです。私たちは前の世、すなわち前世における救い主の役割について一般の人々よりも詳しく知っています。またこの世の創造の時に、救い主が天父の指示の下に果たされた役割についても新たな知識を得ることができました。それに救い主がイスラエルの予言者たちと言葉を交わされた旧約聖書の中のエホバであることも知っています。私たちにはイエス・キリストを証するもうひとつの書物であるモルモン経が与えられており、それには救い主に関する輝くばかりの知識と教義が記されています。近代の予言者たちは、私たちが罪の赦しを得るために捜し求める贖い主であるキリストについて、啓示により説明と教えと光明と知識を受けています。私たちはキリストを信じる他のすべての教会に比べて非常に価値ある知識の宝庫を持っています。かと言って、他の人々が抱えているキリストへの信仰を軽んじたり、けなしたりしているわけではありません。ただ小羊であり羊飼であり、そしてイスラエルの聖者である御方（詩篇71：22参照）に対する新たな知識を——彼らの救いと祝福のために——分かち合いたいと望んでいるだけなのです。

昔のニーファイのように、「私たちはもとよりキリストを信じ」「確く信じてキリスト……を待ち望んでい」ます。また、「私た

ちはキリストを信ずる信仰によって生かされて」おり、「キリストのことを話し、キリストのことを喜び、キリストのことを説教し……キリストの与えたもう生命を待ち望」んでいます。（IIニーファイ 25：24—27参照）

これを読んで、私たちが正真正銘のクリスチャンであることをいぶかしく思う人がどこにいるのでしょうか。

以前、南アメリカのコロンビアの密林地帯の上空を飛行機で飛んだことがあります。その飛行機の中で、私は隣の席にいた人に教会について説明していました。私が熱心に福音について説いていると、その友人が話の腰を折ってこう言いました。「モルモンは確かジョセフ・スミスの墓のところに立派な聖堂を建てたんでしたね。」

私は驚いて非を唱えました。「どんな聖堂を建てたとおっしゃるんですか。それにどの墓地のことですか。」

「ほら、ソルトレーク・シティーにある黄金の天使をてっぺんに載せたあの高い建物ですよ。あれは^{たいまつ}壺廟が聖堂で、予言者を礼拝する所なんですよ。」その人が言っているのはソルトレーク神殿のことでした。

私はいささか困惑しながらも、その人が誤解していることがわかりました。私はなぜそのような誤解が生じたのかについては何も言わずに、ただ彼が誤解している点を一生懸命に正そうとしました。

私はその友人に言いました。「ちょっと説明させていただきますが、私たちはまぎれもないクリスチャンですよ。私たちは父なる神とその御子イエス・キリストを礼拝しています。昔も今も、予言者や聖人を拝んだことはありません。予言者ジョセフ・スミスを拝むこともありません。もちろん愛し、尊敬してはいますがね。しかし彼に祈ったりはしません。私たちの教義や哲学の中でも、実生活の中でもジョセフ・スミスが仲保者のような人であるという教えはありませんし、ほかのどの予言者あるいは聖徒も仲保者になり得ることは教えていません。キリストのみが天父との仲保者なのです。」私は強調して言いました。「マリヤもヨセフも、ペテロ、ヤコブ、ヨハネも、そしてアダムやモーセやアブラハムのような古代の予言者たちも決して仲保者とはなり得ないのです。ましてやジョセフ・スミスやブリガム・ヤングのような近代の予言者に向かって祈ったり、拝んだりすることは決してありません。」

さらに続けて、私は、ソルトレークの神殿は予言者ジョセフ・スミス^がを崇めるためのものでもなければ、ジョセフ・スミスがそこに葬られているわけでもないことを説明しました。そして、私たちが予言者たちを礼拝していないことをさらに明確にする意味でこう言いました。「私たちはジョセフ・スミスが埋葬されている所に巡礼することはありません。第1、この私はジョセフ・スミスがどこに埋葬されているのかも知らないのです。」

ジョセフ・スミスの埋葬されている墓を知らないという私の言葉はその友人にとってはそれまで聞いたこともなかったほどの強烈な説明になったようです。彼は啞然として、自分が教会に対して理解していたこ

とが完全に間違っていたことを知ったのでした。それを契機に、私たちが本当にはどのようにして救い主を礼拝しているかについて気軽にざっくばらんな話し合いができるようになりました。その結果、私たちは真正正銘のクリスチャンとして認められたのでした。

私たち教会員は皆、救い主を通して得られる贖いを受けたいと望むクリスチャンであるということに友人や仲間や知人たちが少しの疑いも持たれることのないような生活をし、福音を宣べ伝えなければなりません。

そして、救い主の友となり、僕となり、息子、娘と言われるようにならなければならないのです。この3つの事柄について、もっと詳しく説明してみたいと思います。

まず第1に、救い主の友となることについてお話したいと思います。キンボール大管長は救い主の友として、ふさわしい人だと思います。数年前、キンボール大管長が病院で心臓の切開手術を受けた時のことです。キンボール大管長は手術台上に乗せられ、廊下を通して手術室へと運ばれました。そばにそれを手伝っているひとりの若い看護人がいたのですが、すでに、鎮痛剤を打たれて横たわっている予言者のベッドの取手と、ドアの外枠との間にふとした拍子に指をはさんでしまったのです。この若者は痛さのあまり、思わず救い主の名前をみだりに唱える言葉を使ってしまいました。大管長は驚いて目を開け、優しくこの看護人をたしなめました。「君、そんな風に言わないで下さい。救い主は私の最良の友なのですから。」

私たちは救い主の名前が誤って使われているのを正すほどの関係を自分と救い主との間に持っているのでしょうか。イエスは、

キンボール大管長が救い主に対して抱いている気持ちと同じような気持ちを私たちも抱いていることを御存じでしょうか。

キンボール大管長が真の弟子であることを示す例がもうひとつあります。数年前のクリスマス・イブのことでした。キンボール大管長は私に電話を下さり、私が忙しいかどうか尋ねられました。私はすぐに、「いいえ、何かご用でしょうか」と答えました。するとキンボール大管長は初等協会小児病院へ行って祝福をしたいのだが、そのための同僚が必要なのだとおっしゃいました。キンボール大管長はアメリカ・インディアンの子供と、南米の子供が何人かこの小児病院に来ていることを耳にしていたのでした。私たちは各階を訪れ、南米の国々の子供やレーマン人やそのほかの子供たちにも全員に祝福を授けました。私はキンボール大管長の愛と、子供たち一人一人に寄せる優しい友情に深く心を動かされました。キンボール大管長は病人の友、遠く家を離れた子供たちの友でした。また救い主であれば私たちに示して下さったであろう愛と優しさの模範でした。だからこそキンボール大管長は、「救い主は私の最良の友です」と言えたのです。

さて第2に、救い主の僕になることについてお話したいと思います。このことに関して、ベンジャミン王は次のように述べています。「人はどうしてまだ仕えたこともなく、見も知らず思いもかけない主人を知ることができようか。」(モーサヤ5:13)

主に仕えたこともなく、主も知らず、毎日心や思いの中から主を遠ざけているとしたら、どうして主の僕となることができるでしょうか。

ハロルド・B・リー大管長は救い主を知

っており、長い間その僕として働いた人でした。リー大管長はどのような時にも、救い主がどう言い、どう行なわれるかを知って行動していました。

例えば、大管長となって間もなく教会の新しい予言者として初めて記者会見に臨んだ時のことです。記者たちがリー大管長に向かって、難しい質問を投げかけました。

「ベトナム戦争についての見解をお聞かせ下さい。」御存じのように、当時はベトナム戦争の真っ最中で、参戦支持派もいれば反対派もいました。

リー大管長が、もし「私は政府の見解を支持します」とでも言っていたなら、記者たちは、「それはおかしいことですね。霊の指導者ともあろう御方が戦争に賛成するとは」と言ったことでしょう。

また逆に、リー大管長が「私は米国の参戦に反対です」とでも言おうものなら、記者たちはいぶかしく思い、「これはまた異なることをおっしゃいますね。この教会の指導者は政府を支持するふりをしていながら、実際はそうでないのですか」と言ったことでしょう。

ところがリー大管長は新聞記者たちの質問に対して、主の僕にふさわしくこう答えたのです。リー大管長は靈感を受けて主御自身が語られたその言葉を語る術を知っていたのです。彼の答えは記者たちの心を静め、感動を呼び起こしました。リー大管長はこう言ったのです。「私たちは世界中のキリスト教徒と同じように、戦争を忌み嫌っています。救い主は、『この世ではなやみがある』と言われました。しかし同時にまた、『わたしにあって平安を得る』(ヨハネ16:33参照)とも言われました。」リー大管長はさらにヨハネ14章から引用して次のよ

うに言いました。「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。」(27節)

そして、リー大管長は偉大なひとつの原則を教えました。「救い主が語っておられる平和とは、陸軍や海軍、あるいは武力などによって勝ち取る類のものではありません。また議会で交渉を重ねて作り上げるようなものでもありません。救い主が語っておられる平和とは、主の戒めを守って生活し、主が自分のことを喜んでおられることを知った時のみ、心の中にもたらされる平安です。」リー大管長は平和の君の真の僕として靈感によって答えていました。

第3に、救い主の息子、娘となることについてお話しします。

誤解のないように言っておきたいのです



が、天父は私たちの霊の父です。また、イエスの霊の父でもあります。三体同位ということは、決しておぼろげな仮説ではなく、3人の別個の御方がおられるということなのです。天父はその子供たちを御子に託され、天父の子供たちが御子の御名をその身に引き受け、罪を悔い改め、聖なるバプテスマの水に入って救い主への信仰を現わし、神の王国において永遠に確固たる歩みが続けられるようにして下さいました。

ベンジャミン王は次のように説明しています。

「お前たちの結んだ誓約のためにお前たちはキリストの子と呼ばれ、キリストの息子や娘と呼ばれる。それは今日キリストがお前たちの精神を新に生みたもうたからである。お前たちはキリストの御名を信ずるから自分の心が改まったと言う。従って、お前たちはキリストにより生れてその息子や娘となった。」(モーサヤ5：7)

どうか、この末日聖徒イエス・キリスト教会の全会員がふさわしく生活し、たとえ私たちがクリスチャンではないと言う人がいたとしても、私たちを知る人々がそのような言葉を信じることはありませんように。皆さん、この教会の会員と会った人がだれでも、私たちが救い主のよい友となり、無私の奉仕ができる主の僕となれるよう、日々努力していること、また聖なるバプテスマの水に入り、そのみ名を引き受けることによって御父から救い主にゆだねられた息子、娘になれるよう毎日励んでいることがわかるような生活をしようではありませんか。

以上のことを、心からへりくだり、愛を込めて、私たちの主であり、贖い主であるイエス・キリストのみ名を通して証致します。アーメン。



いかにかすかな光であろうと

七十人第一委員会会員 ボーン・J・フェザーストーン

愛する兄弟姉妹の皆さん。きょうここで大いなる希望と慈悲に満ちたひとつのたとえ話についての私の思いを語ってみたいと思います。救い主はこう言われました。「ある人に、ふたりのむすこがあった。」(ルカ15:11) ふたりの息子の内、弟の方は幾分大人に近い兄の陰に隠れて、いつも冷飯を食わされていたようです。兄だけがいつもほめられているようでした。年や体つきからいつでも兄の方が上であり、当然仕事も兄の方ができます。弟はいつも兄と競争しますが、かなうわけがありません。仕事も全部終えることもなく、すぐに飽きてやめてしまいます。おそらく、いつも引け目を感じていたと思います。結局、弟は「体制」が悪いのだから、いくら頑張っても自分は正しく評価されないと決めつけてしまいます。そして家を出、新しい所で生活を始めることを決心するのです。

たとえ話はこう続きます。「弟が父親に言った、『父よ、あなたの財産のうちでわたしがいただく分をください。』」(ルカ15:12) 明らかに、父親は以前遺産相続について息子たちと話し合っていたのでしょう。遺産は父の自由意志による贈り物でした。息子たちが自分たちの生活を切り盛りできるほどの働きを稼ぎ出していたとはとても思えません。それでも、父親は、「その身代をふたりに分けてやった」(ルカ15:12) のです。このことは事実上、弟が分け前で自分の道

を歩んでいくことを承諾したことを表わしています。父親は息子を愛していました。息子がこの財産をどうするかということも大体の見当がついていました。弟は、「自分のものを全部とりまとめて遠い所へ」(ルカ15:13) 行ってしまいました。

初めは人からほめられるような生活をするつもりでいたのかもしれませんが、しかし、この遠方の地へ来てみると、人々はすぐに彼を歓迎してくれませんでした。友達も知り合いもない苦しい状態に置かれました。真の友達はなかなか得にくいものですが、普通の友達ならお金で買うこともできます。甘いものに群がるハエはどこにもいます。息子は自分の財産を見せびらかし始めました。ハエがたかってきました。息子はお金を投資するわけでも、賢明に使うわけでもなく、放蕩(ほうとう)に使い果してしまっただけです。

(ルカ15:13参照) 酒に酔う者、悪事を働く者、罪深く(みいつい)を行なう女など、その友情もお金がなくなると同時にどこかへ飛んでいってしまいました。

「何もかも浪費してしまったのち、その地方にひどいききんがあった。」(ルカ15:14) 普通の人ですら苦しい時ですから、財産を使い果たしてしまっただけにとつて事態は最悪だったに違いありません。家で教えられたように、仕事を見つけようとしたに違いありません。まだお金があった頃の友達のところをあちこち尋ね歩いたことでしょう。

放蕩息子はますます窮し始め、「その地方のある住民のところに行って身を寄せたところが、その人は彼を畑にやって豚を飼わせた」(ルカ15:15)のです。彼はただ貧しいというよりも、最も卑しい仕事につかなくてはならなくなっていたのです。その困窮状態といったら、「豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいと思うほどであったが、何もくれる人はいなかった」(ルカ15:16)のです。救い主が貧困の厳しさと息子が落ちる所まで落ちなければならなかったことの必然性を対比して述べていることは疑うべくもありません。お金があった頃は自分に群がってくる多くの友達と興じることもできました。しかし今はそのような友達のだけひとりとして、豚に食わせるいなご豆すらくれる者もないのです。

このような失意のどん底の状態を経て、初めて謙虚な気持ちになり、清めが始まるのです。見栄ははぎ取られ、はるかかなたにぼんやりと我が家の燈火が見えてくるのです。

心をへりくだらせるこの失意の中で、若者は「本心に立ちかえって言った、『父のところには食物のあり余っている雇人が大ぜいいるのに、わたしはここで飢えて死のうとしている。立って、父のところへ帰って、こう言おう、父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかって、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇人のひとり同様にしてください』。そこで立って、父のところへ出かけた。」(ルカ15:17-20)

息子は父にいう言葉を、何度も、何度も、繰り返し練習したに違いありません。父親は生涯を忠実に、そして熱心に働いた人で、儉約と誠実の人でした。そのような父親が

息子を見捨てたりするのでしょうか。息子は立ち上がって、父の元にやって来たのです。それも決して短い旅ではなかったと思います。

兄の方は弟が家を出てから、父がいつも弟のことを心配していることがよくわかりました。仕事にもあまり身が入らず、ちょっと働いては手を休めて、遠くの道をながめ、ぼんやりした目で再び帰ってくるといったことの繰り返しでした。兄は自分の仕事のほかに弟の分まで働き、その上これまで父が行っていた仕事までしなければならなくなりました。弟が家を出るまでは、皆はいつも兄の働きに対して感謝しました。しかし今はそんな家族の団らんはなく、歌も踊りも消え、家族で話し合うこともなくなりました。夜になると、父と母は椅子いすに腰をおろし、ただぼんやりと暖炉の火を見つめているだけです。こうして、数日が過ぎ、数週間が過ぎ、そして数カ月が過ぎ去っていました。

救い主はこう述べておられます。「まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいて接吻した。むすこは父に言った、『父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかって、罪を犯しました。もうあなたのむすこと呼ばれる資格はありません。』しかし父は僕たちに言いつけた、『さあ、早く、最上の着物を出してきてこの子に着せ、指輪を手にはめ、はきものを足にはかせなさい。』」(ルカ15:20-22)おそらく、長い旅路を履物も履かずにやって来たのでしょう。着物を着せ、履物を与えなければなりません。さらに父親は、息子の手には指輪を持ってきてはめました。まったく予期せぬ贈り物でした。それは、息子が帰ってきたことに対す



る父親からの感謝のしるしでした。

「また、肥えたる牛を引いてきてほふりなさい。食べて楽しもうではないか。このむすこが死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから。」それから祝宴がはじまった。ところが、兄は畑にいたが、帰ってきて家に近づくとき、音楽や踊りの音が聞えたので、ひとりの僕を呼んで、『いったい、これは何事なのか』と尋ねた。僕は答えた。『あなたのご兄弟がお帰りになりました。無事に迎えたというので、父上が肥えた子牛をほふらせなさいました。』兄はおこって家にはいろいろとしなかつた。」(ルカ15:23-28)

これまで何週間も何カ月も弟の分までも働き、父親の注意が届かなかつたところま

で穴埋めまでして、しかもそれに対して何らのほめ言葉を受けたわけでもありませんでした。その上、父親はといえば弟のことで頭が一杯だったのです。兄も弟のように財産をもらっておけばよかったと考えたかもしれません。きっと無駄使いもせず、利殖していたでしょう。それでも兄は家にとどまり、忠実に仕えたのです。この兄の義しい生活に対しては音楽も踊りもないのに、弟が帰ってくると、これほど盛大な歓迎ぶりです。

父は息子が外にいて、中に入ってこようとしないうのを聞いて、「出てきてなだめ」(ルカ15:28)しました。父親は自分の無神経さに気づき、謝つたのかもしれません。弟にばかり気をとられていて、ほかのこ

ろまで考える余裕がなかったのです。いつものように兄をほめることもなかったのです。兄の努力に対して、踊りや音楽で労をねぎらうことも、宴会を開くこともありませんでした。心の中はいつも弟のことで一杯だったからです。

「兄は父にむかって言った、『わたしは何か年もあなたに仕えて、一度でもあなたの言いつけにそむいたことはなかったのに、友だちと楽しむために子やぎ一匹も下さったことはありません。それなのに、遊女どもと一緒にあって、あなたの身代を食いつぶしたこのあなたの子が帰ってくると、そのために肥えたる牛をほふりなさいました。』」

(ルカ15:29—30)

父親は初めて兄の気持ちに気づいて、こう答えました。「子よ、あなたはいつもわたしと一緒にいるし、またわたしのものは全部あなたのものだ。」(ルカ15:31) 父親はずっと前から自分の持ち物のすべてを兄に与えようと考えていましたが、この時そのことを初めて口に出したのです。

父親はこう言っています。「しかし、このあなたの弟は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのはあたりまえである。」(ルカ15:32)

先日、ラジオの番組である牧師が放蕩息子のたとえ話をしていました。その牧師はこのたとえ話をこう結んでいたのです。「弟は悔い改めたことによって主の前に義とせられ、兄の方はもっと大きな罰をこうむるであろう。」この言葉を聞いて、私は、「愚か者よ、どうして主の教えがわからないのか」と嘆きました。兄は無視され、感情を害し、放蕩に身をくずした弟に愛と憐れみの心を示さなかったことも事実です。しか

し心ある人ならば、兄の罪が浮かれ女と放蕩で、ぜいたくな生活をした弟と比べるべくもないことはすぐにわかるはずで

私は、この素晴らしいたとえ話の中で、主が教えようとされていることがわかるような気がします。それは万人に対する希望の灯です。救い主は主の元に来る者はすべて受け入れ、赦すために両手を広げて立ておられるのです。ゲツセマネとゴルゴタの丘でなされた贖いと救いの苦しみほど偉大な愛はありません。

エラ・ウィーラー・ウイルコックスは「ゲツセマネ」という詩の中で次のように述べています。

昔も今も、この世のすべての道で
ゲツセマネを通らぬ道なし。

遅かれ早かれ、旅する者はすべて
この門をくぐらん。

ひとり暗闇にひざまづき、
恐ろしき絶望と闘う。

「わたしの思いではなく、みこころが
成るように」と言えぬ者、

「この杯をわたしから取りのけてください」としか祈ることができず、ゲツセマネの目的の見えぬ者、

彼らに神の憐れみを。

(ジェームズ・ドルトン・モリソン編、
Masterpieces of Religious Verse, New York
and London: Harper and Brothers, 1948,
p. 184)

死、離婚、背罪、孤独、落胆などによって、私たちはゲツセマネの園へと導かれます。主は両手を広げて、すべての人を受け入れて下さいます。放蕩息子のたとえ話は主の愛を美しく描いています。主の愛と憐

れみは地上のすべての人々を永遠に包むものです。老若男女を問わず、放蕩の旅を終え、不活発な生活からたち帰る者は救い主が両手を広げて待っておられることを知るに違いありません。救い主の贖いは正義を全うし、「彼に来らん」すべての人に憐れみをもたらすものです。(教義と聖約18:11参照)

教会に活発に集っている人ならだれでも、不活発で、見捨てられたり、あるいは罪に汚れた衣を身にまとっている人を知っていると思います。彼らは情け深い両親や優しい兄弟姉妹の心温まる変わらない愛を必要としているのです。イエスは外に出て行って不活発な会員たちを教会に連れもどすすべての教会員たちを祝福して下さいます。

J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は次のように述べています。

「人はだれでも、ちょうど聖壇の光のように、心の中ではぐくんでいく信仰の光を持って生まれてきました。この光が燃え始めると、主は私たちが責任をとれる年齢に達するまでの間、その光が燃え続けるように見守って下さいます。そして責任をとれる年齢に達すると、私たちはそれぞれ、その光をどう養い育てていくか自分で決めなければなりません。私たちが義しい生活をするならば、その光は全身に満ちあふれるまで輝くようになり、健康と力の糧となり、肉体的な健康だけでなく、霊的な光を与えるものとなるでしょう。しかし、義しくない生活をすれば、光は弱くなり、最後にはほとんど消えかかるとまで小さくなるでしょう。しかし、これは私が信じ、また望んでいることですが、主は信仰の光を、いかにかすかな光であろうとも完全に人々の心の中から消してしまうことはないと思っ

ています。主はいかに心が暗くなるようなことがあったとしても、正義のみたまと愛と優しさにより、また教えと模範と福音にそった生活をすることによって再び輝きを増すことのできる光を与えて下さっているのです。もしこのような信仰の弱くなっている人々に手を差し伸べることができなければ、私たちは主が私たちのみ手にゆだねておられる最も大切なことのひとつを怠っていることになるのです。」(Conference Report, Oct. 1936, p. 114)

私たちはこのような光を守る者です。この場に集っているすべての人々が不活発な人に手を差し伸べ、彼らを祝福して下さいます。予言者の言葉に聞き従って下さい。スペンサー・W・キンボール大管長は次のように述べています。「私たちは今この話を聞いておられるすべての方々を、水潤う庭、心地よい木陰へ、また不変の真理の下へと心から招きたいと思う。私たちと共に、確信と安寧と一致を得ていただきたい。ここには冷たい水が湧き出ており、その泉は涸れることがない。

来て予言者の声に耳を傾け、神のみ言葉を聞いていただきたい。」(「大会報告1970—1972」p. 169)

ここに集っていない方々に再び家に戻ってくるようにと、お勧めします。私たちは皆さんが登ってこられる道をじつとながめ、皆さんの帰りを待ち兼ねています。そして、両手を広げ、愛にあふれる心でかけ寄って迎えたいと思います。覆物も着物も、指輪も、肥えたる牛もみなそろえてお迎えしたいと思います。どうぞ私たちの家に帰ってきて下さい。そして共に喜び合おうではありませんか。イエス・キリストのみ名によって申し上げます。アーメン。



「わが喜ぶ愛子を見よ」

七十人第一定員会会員 ジョージ・P・リー

この邪悪と混乱と懐疑に満ちた時代に、真理を知り、イエスがキリストであり、生ける神の御子であるという謙遜で深く、しかも神聖な確信を持つことは非常に価値あることです。私は聖霊の働きと力によって、救い主が神の御子であるという証を得ることができました。他のいかなる確証にもまさるこの証を、私は自分の心の中に抱くことができたのです。それは私の心の中に、贖い主イエス・キリストの存在を克明に記すことになっています。

この静かな、そして安らかな確信は私が子供の頃、みすばらしい小屋の中でひざまづいて祈った時、そして居留地内の熱い砂漠で羊の番をしながらモルモン経を読んでいた時に与えられたものです。私は自分の人生が誕生によって始まり、死によって終わるものでないことを知っています。同様に、キリストの生涯もベツレヘムに始まり、そしてカルバリで終わったものでないことを確かに知っています。主イエス・キリストは御自身のことを次のように述べておられます。

「わたしは、わたしにさせるためにお授けになったわざをなし遂げて、地上であなたの栄光をあらわしました。

父よ、世が造られる前に、わたしがみそばで持っていた栄光で、今み前にわたしを輝かせて下さい。」(ヨハネ17：4-5)

イエス・キリストは霊において神の生み

たまひし最初の子であることを、私は証します。御父と同じように、イエス・キリストは宇宙の偉大な力と英知を持ちたまう御方です。この世が造られるずっと以前に、イエス・キリストは前世で霊として天父と共に住み、統治しておられました。主イエスは私たちがこの世に生まれてくる前に、私たちの成長と訓練のために数々のことを行なわなければなりません。御父の指示の下に、この地球を創造され、この地上に来て贖い主となられる責任を引き受けられたのです。天上の大会議に現われて、「われここに在り、われを遣わしたまえ」(アブラハム3：27)と言われたのもイエス・キリストでした。

またこうも言われました。「父よ、御旨の成らんことを、栄光とこしえに父にあれ、と。」(モーセ4：2)

天父はその愛する子について次のように言われました。「われは、無数の世界を創りたり。而して、またこれらはわれ自らの目的ありて造りしなり。而して、わが子によりてこれらの世界を創りたり。わが子とは、わが生みたる独子のことなり。」(モーセ1：33)

罪を贖い、天への門を開け、私たちを導き入れられる御方は主のほかにいません。(讃美歌82番参照) イエス・キリストこそ、この偉大で崇高な犠牲にふさわしい資格と能力を具えた完璧な唯一の御方なのです。

贖い主がベツレヘムでお生まれになることは、大勢の天使たちと神のみ前から遣わされた権威と権能を持ちたもうひとりの天使によって告知知らされたことを証します。「わたしは神のみまえに立つガブリエルであって、この喜ばしい知らせをあなたに語り伝えるために、つかわされたものである。」(ルカ1:19)

アダムの時代から古代の予言者たちはキリストの降誕についてよく知っていました。キリストの名前、属性、良き働きはキリストが降誕するずっと昔から知れわたっていました。この世に生まれる前、キリストは霊の御方でした。そして誕生と同時に骨肉の体が与えられました。しかも死に打ち勝ち、復活された後は、死ぬことのない栄光に満ちた肉体と、不滅の霊とを併せ持たれる御方となられたのです。イエス・キリストはこの地上での生涯を人々に平安と祝福をもたらすことに捧げられました。邪悪と罪悪のただ中であっても完全な生活を送られました。

ゲツセマネの園での耐えられないほどの苦痛は肉体や霊の苦しみだけでなく、神のみが経験することのできる霊的な苦しみでもありました。この測り知ることのできないほど大きな苦痛の中で、救い主はアダムから世の終わりに至るすべての人々の罪の重荷をその身に引き受けられたのです。人人はその救い主を最も非人道的な残酷な方法で十字架にかけたのです。そして当時の慣例とはいえ、両手両足に釘まで打ち込まれたのでした。苦しみの中で、キリストは、言われました。

「見よ、われは神なるに、人もし悔い改むるならばこの苦しみを受けざらんがために、すべての者に代りてこの苦しみをわが

身に受けたり。されど、人もし悔い改めずば誠にわれと同じ苦しみを受けざるべからず。その苦しむるや、われ神、すなわちすべての中最も大いなる者なりといえども痛苦のために身をふるわせ、あらゆる毛の孔より血を湧かせ、身と霊と両つながらを苦しめ、すなわちこの苦きさかずきより吞まずしてしりごみするも可ならんことを欲したり。」(教義と聖約19:16—18)

この無限無窮の愛と憐れみの中で、キリストは自分を十字架にかけた人々のために祈られたのです。自分をあざけり、はずかしめた人々を赦し、祝福を与えてくれるよう天父に願われたのです。そして、苦痛と苦しみの中で、こう叫ばれました。「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」(ルカ23:34)

この十字架にかけられた同じキリストが霊界で大勢の人々と会って交わり、その霊は再び肉体とひとつとなり、3日目に墓からよみがえられたことを、私は証します。そして地上の人々に姿を現わされてから、復活され、栄光に満ちた御方として天父の元へ昇って行かれたのです。ひとりの天使がイエスについてこう証しています。

「もうここにはおられない。かねて言われたとおりに、よみがえられたのである。さあ、イエスが納められていた場所をごらんください。そして、急いで行って、弟子たちにこう伝えなさい、『イエスは死人の中からよみがえられた。見よ、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。そこでお会いできるであろう。』」(マタイ28:6—7)

アダムの時代から、キリストが十字架にかけられるまでの数千年の間に、何百万という人々が暗き墓に入り、死と生命の終わ



りに甘んじていました。この数千年間、だれも、そこから立ち帰ることはできませんでした。ところが、贖い主が復活した不死不滅の体を持って墓からよみがえられた時、死のとげも墓の勝利もなくなってしまったのです。(Iコリント15:55; モーサヤ16:7-8; モルモン7:8参照)人は罪の獄屋から解き放たれ、死に打ち勝って、キリストは勝利者となられたのです。(モーサヤ15:8; モルモン7:5; アルマ27:28参照)こうしてキリストは天への門を自ら開けて下さったのです。

キリストが復活されてから、すぐに大勢の人々の復活が始まりました。マタイ伝にこう記されています。

「また墓が開け、眠っている多くの聖徒たちの死体が生き返った。そしてイエスの復活ののち、墓から出てきて、聖なる都にはいり、多くの人に現われた。」(マタイ27:52-53)

こうしてよみがえられた主は、私たちが

永遠の生命と完成への道をたどる時の最後の障害を取り除いて下さったのです。ちょうどイエスについて、「もうここにはおられない。……よみがえられたのである」(マタイ28:6)と宣言されているように、やがて私たちも皆そのようになるでしょう。なぜなら、イエス・キリストの^骨骸を失った墓は単なる象徴ではなく、私たちの復活と不死不滅の体を保証するものだからです。イエスを単に偉大な教師、偉大な人道主義者と考える人がいるならば、それは大きな誤りであり、悲しむべきことです。イエスのゆえに、生命は永遠に続き、イエスのほかに天下のだれにも、人を救い、昇栄させる名前は与えられていないからです。(使徒4:12; IIニーファイ25:20参照)

私はまた、復活され、栄光の衣を身に纏われた主が、古代アメリカのパウンテフルの地にある神殿の周りに集まって来たニーファイ人やレーマン人に、その御姿を現わされたことを証します。永遠の父なる神は

人々に向かってこう言われました。「わが喜ぶ愛子を見よ。われはこれに由りてすでにわが名の栄光を示しぬ。わが愛子に聞け。」(Ⅲニーフアイ11：7)

人々は、主イエス・キリストが白い衣を召して、天から降りてこられるのを目撃しました。イエス・キリストは群衆の真ただ中に立ってこう言われました。

「見よ、われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。われは世の光にしてまた世の生命なり。われは御父がわれに授けたまいしかの苦き杯をすでに飲み、世の人の罪をわが身に引き受けて御父の栄光を示したり。」(Ⅲニーフアイ11：10-11)

群衆はイエスの足もとにひれ伏して、イエスを礼拝しました。それから立ち上がり、イエスに近づいてその手足にある釘跡を目で見、手で触れたのです。さらに脇腹の傷にも触れました。そして再びイエスの足もとにひざまづいて、喜びに満ちあふれたのであります。人々は実際にその目と手で確かめ、言葉では言い尽くせない喜びと感謝の思いに満たされたのです。それは栄光に満ちた出来事であり、すべての人々にとって霊的な喜びでもありました。

私はまた、この最後の時満ちたる神権時代が永遠の父なる神の「こはわが愛子なり、彼に聞け」(ジョセフ・スミス2：17)という言葉によって開かれたことを証します。

1820年の春、永遠の父なる神とその御子イエス・キリストは若き予言者ジョセフ・スミスにその御姿を現わされました。長き背教の夜の闇は取り除かれ、栄えある顕現によって世に光明がもたらされる時代がやってきたのです。そのほかにも天からの使いが幾度か予言者ジョセフ・スミスを訪れま

した。そして多くの啓示が与えられました。これらの啓示を与えられたのは、ほかならぬよみがえられた主イエス・キリストだったのです。これまでのすべての祝福、鍵、権利、特権を持つ福音は回復され、神のみ名によって教えと導きを施す権能を持つ聖なる神権も回復されました。キリストの名前を持ち、啓示の岩の上に建てられた教会が回復されたのです。

今日主が回復された福音の原則や律法は、かつて明らかにされた律法や原則と異なるものではありません。末日聖徒はいにしへの聖徒たちがそうであったように、まず神の国と神の義とを求めるものであります。成功と完成に至るために救い主が与えられた定理は、「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」(マタイ6：33)ということです。

主イエスは、まず私たちが義しく、勤勉で、誠実な生活をし、よい人格を築くように望んでおられます。そして、ほかの人にも同じことを教えるのです。すなわち、全世界の人々、家族に福音を教え、バプテスマを施し、彼らを完全にすることによってイエス・キリストを助けるのです。

今日でも私たちが完全になることのできる分野はたくさんあります。例えば、私たちはコーヒー、お茶、タバコ、お酒を断つことにおいて完全になることができます。什分の一を納めることにおいて、私たちは完全になることができます。また聖餐会に出席することにおいて完全になることもできます。正直、貞潔、愛、時間厳守、信頼などの徳やその外の多くの徳においても完全になることができます。きょうひとつの福音の原則を完全に実行できたら、あすは

ふたつを完全に実行できるようになります。あることに完全となることによって、それがほかのことを完全に行なうための踏み台になるのです。

私はまた、よみがえられた主、贖い主が復活された不死不滅の体を持ち、日の栄の栄光と力を持ってこの地上に戻ってこられることを証します。最初にこの地上にこられた時、救い主は誤解され、非難され、侮られ、悲しむことの多い人でした。(イザヤ53:3参照)そしてこの最初の訪れの時に、世の人々の罪を贖われました。しかし2度目に訪れる時には、救い主は勝利者たる王の中の王、栄えある主の中の主として現われることでしょう。(黙示17:14参照)そして救い主は悔い改めなかった罪人たちをさばく裁きの座に立たれるのです。また全能の神としてこの地球を清め、栄えある福千年の統治を始められるのです。(信仰箇条第10条)この福千年の間、主イエスは復活された聖徒たちと共にこの地球を治めます。(教義と聖約29:11参照)サタンは縛られ、人々を誘惑する力もありません。(教義と聖約43:31参照)その千年が終わると、サタンはしばしの間解き放たれ、地球の終わりがやってくるのです。そしてサタンとその軍勢は永久に追放されるのです。すべての人は復活して、裁きを受けるために神の前に立たされます。やがて主イエス・キリストは栄光の冠を受け、永久に統治するようになるのです。(教義と聖約76:108参照)最後まで耐え忍び、永遠の生命を受ける者は日の栄の王国においてイエス・キリストと天父と共に永遠に住むようになるのです。

私はまた、イエス・キリストが「きらめくものから美しいものに至るまでの万象、



小さきものから大なるものに至るまでのあらゆる被造物」(セシル・フランシス・アレキサンダー、ジェームズ・ドルトン・モリソン編、*Masterpieces of Religious Verse*, New York: Harper and Brothers Publishers, 1948, p. 17)を造られた御方であることを証します。イエス・キリストは空と海と地とを治める人であり、約束されたメシヤであります。また死と、そして墓に打ち勝たれた御方でもあります。イエス・キリストはまた、平和の君であり(イザヤ9:6参照)、きのうも、きょうも、いつまでも変わることがない御方です。(ヘブル13:8参照)永遠とはイエスの名のことであり、永劫とはイエスの名であります。まさに基督イエスなのであります。これらのことを聖きみ名によって証します。アーメン。



愛と親切の手を差し伸べよう

副管長 ゴードン・B・ヒンクレー

ここでリグランド・リチャーズ長老からお話を聞く予定でしたが、リチャーズ長老はこの場に出席することができません。この集会の前に電話でお話をしましたところ、是非とも大会に出席して、いつものように、この偉大な神聖なみ業に対する最後の証を述べたいと願っておられました。96年間の彼の人生の中で偉大で神聖な主のみ業ほど重要な位置を占めてきたものはありません。御存じのように、リチャーズ長老は先頃、大手術を受けられ、その傷が今もって癒えておりません。きょうここに集っている方々は皆、この回復された福音を擁護し、この福音を回復して下さった主に対する証を述べる彼の声を聞くことができなくて、残念に思っておられることと思います。

教会幹部の皆さんの勤めにより、タナー副管長が話をされる前に、この大会の要約を少し述べてみたいと思います。

昨日から、私たちは素晴らしい大会を開いてまいりました。朝早く開かれた福祉部会では、ロムニー副管長が自立ということについてお話をしました。まことに、時宜を得たメッセージだったと思います。今日のこのような生活環境の中で、私たちは皆、さらに自給自足を推し進め、自立の精神をはぐくみ、物心共、自分の生活を自分で守るように努力していかなければなりません。福祉部会で話されたほかの話もそうですが、

祝福を受け、益を得るためにこのロムニー副管長の話を何度も繰り返し読んで下さい。

次いで昨日の朝、この大会の開会に当たり、ハイコック兄弟の代読によって、スペンサー・W・キンボール大管長の感動的なメッセージを聞く素晴らしい機会を得ることができました。それは、私たちの心に触れるものでした。私たちは本当に祝福されました。この説教はすべて「エンサイン」に掲載されますので、できるだけ早い機会にお読みになるようにお勧めします。きょう午後の大会で、私たちはこの教会独自の素晴らしい讃美歌を歌いました。「感謝を神にささげん 予言者の導き」(讃美歌170番)と。私たちは心からそう思っているのでしょうか。もしそうならば、予言者の言葉を聴み、それに聞き従わなければなりません。私たちが予言者を通じて与えられる勧告に忠実に従おうとする時、神は助けて下さいます。

その後の部会でも、私たちは福音の教えを受け、励まされ、信仰を堅固なものとすることができました。そして確信を強め、このみ業を一層よく理解し、教会の頭として立っておられる主に対してより確かな知識を得ることができました。

予言者ジョセフ・スミスは多くの素晴らしい、意味深い言葉を残していますが、「これほどの多種多様な人々をどのようにして治めるのですか」というある旅行者の問い

に対して答えた言葉ほど大切なものはないと思います。「私は人々に正しい原則を教え、人々に自らを治めさせる。」(ジョージ・Q・キャンノン、*Life of Joseph Smith the Prophet*, Salt Lake City: Deseret Book Co., 1958, p. 529)

兄弟姉妹の皆さん、私たちは正しい原則を教えられました。ですから、その原則に添って自らを治める決意をして帰途につくではありませんか。

今の世の中には非常に悪がはびこっており、善なる者が悪を打ち破らなければならなくなってきました。2、3日前の新聞を読み、ラジオやテレビのニュースに耳を傾けていた人ならだれでも、親切な治療が受けられるところを劇毒を与えられ、腐敗墮落していったひとりの人の改心の話を心動かされたことと思います。これは人が落ち込んでいく深みがどんなものか示すものであり、同時に善をもって悪に打ち勝つことが今この世の中で非常に必要とされていることを教えるものであります。私たちはさらに善いことを行なう必要があります。善い影響を及ぼす者とならなければなりません。真善美、そして徳が全世界に広がるよう、世の光とならなければならぬのです。

私たちの中にも、悪に屈し、サタンのかつ計に陥る人々がたくさんいます。ここでポルノグラフィについて一言申し上げておきたいと思います。ポルノグラフィは食い止め難い、卑しい、邪悪なものです。ある時は映画に、そしてテレビを通じて家庭に、新聞の売店に登場し、そのほかいろいろの方法を使って、その誘惑に屈する人々を罠にかけ、だまし、墮落させていくのです。兄弟姉妹の皆さん、末日聖徒であれば、

このような食い止め難い悪に対して何の抵抗も感じずに目をやり、読み、そのような行為に走るはずがないことに、私は満足しています。神は、必要とあらば私たちがこの、人を破滅に追い込む有害で食い止め難い力を打ち砕き、断ち切って自由になれるよう自らを訓練しようとするならば、力を与えて下さいます。

私たちは家族を強め、家庭にいつも主のみたまが宿るようにし、家庭の中に愛と尊敬と感謝がはぐくまれるようにしなければなりません。時折、幼児虐待の話を目にしますが、これは恐ろしいことです。これも全世界に蔓延しつつある罪悪です。私は先日、教義と聖約を開き、この幼児虐待のことに思いをはせながら、予言者ジョセフ・スミスを通して与えられた主の言葉を読みました。ジョセフ・スミスはこの時、リパティーの牢獄で悲しく寂しい日々を送っていました。この言葉は教会に対して反対の手を挙げる人について書かれたものですが、もっと広い意味に解釈すれば、救い主が幼な子を虐待する人々に対していった言葉でもあるのです。「実に彼らは禍^{わざ}なるかな。彼らわが小さき者たちを罪に陥^{おと}したれば、わが宮居の儀式より除かるべき者なればなり。

彼らのかごは充つことなく、その家も納屋も破れ果て自らは嘗てこびへつらいし者共に見下げられん。」(教義と聖約 121: 19—20)

幼な子に危害を加える者たちに対する何という厳しい言葉でしょうか。

同様に神権を保持する神権者の中に、いかなる方法であっても妻を虐待し、子供たちの母親であり生涯の伴侶であり、永遠の伴侶となる女性を辱め、傷つけ、不当な扱いをする者がいるならば、たとえその人が

かつて大きな祝福を受けたことがあるにせよ、結局は悪い状態に陥っていくことになるでしょう。主が私たちに責任を課している人々に対して、親切に、そしてその存在を大切に思いつつ接しようではありませんか。マッケイ大管長がしばしば引用される言葉の中に、ないがしろにすることのできない深い意味の言葉があります。「父親がその子供たちのためにできる最も大切なことは、母親を愛することである。」(Richard Evans' Quote Book, Salt Lake City: Publishers Press, 1971, p. 11)

次に、政治的な事柄について一言申し上げます。今年は選挙の年ですが、政治運動に関していろいろと耳ざわりな声があがっているようです。人々は自分たちを代表する政府の議員を自由に選挙によって選ぶことができます。これは健全な素晴らしい制度です。政治に関わる方々は個人を攻撃するのではなく、政策を論じ合うようにしていただきたいのです。政策については自由に、公然と、しかも率直に力強く意見を交換するようにして下さい。しかし、繰り返し申し上げますが、個人の人格を中傷することは決してしないようにしていただきたいと思います。

「オセロー——ヴェニスのムーア人」の中で、シェイクスピアは次のように述べています。

「これが財布なら、盗んだ奴も詰らん話で、……まあ下らん物です。

ところが、いい評判を盗まれたとなると、盗んだ奴は一向得をししないのに、こちらだけは大損ということになりますからな。」

(第3幕、第3場、木下順二訳)

私たちに対して悪口を言う人々に対して、愛と親切の手を差し伸べましょう。アシェ

トン長老が指摘されたように、確かにそのような人々がいないわけではありません。そのような時、私はいつもエドウィン・マーカーの次の詩を思い出すのです。

人は丸い円を描き、
僕のことを閉め出した。
異端者、反逆者、あざけらるべき奴だとき。
しかし愛というものにや
この僕という人間にや
そいつに打ち勝つ機智がある。
僕と愛とで円を描き、
奴らも円に入れてやろう。

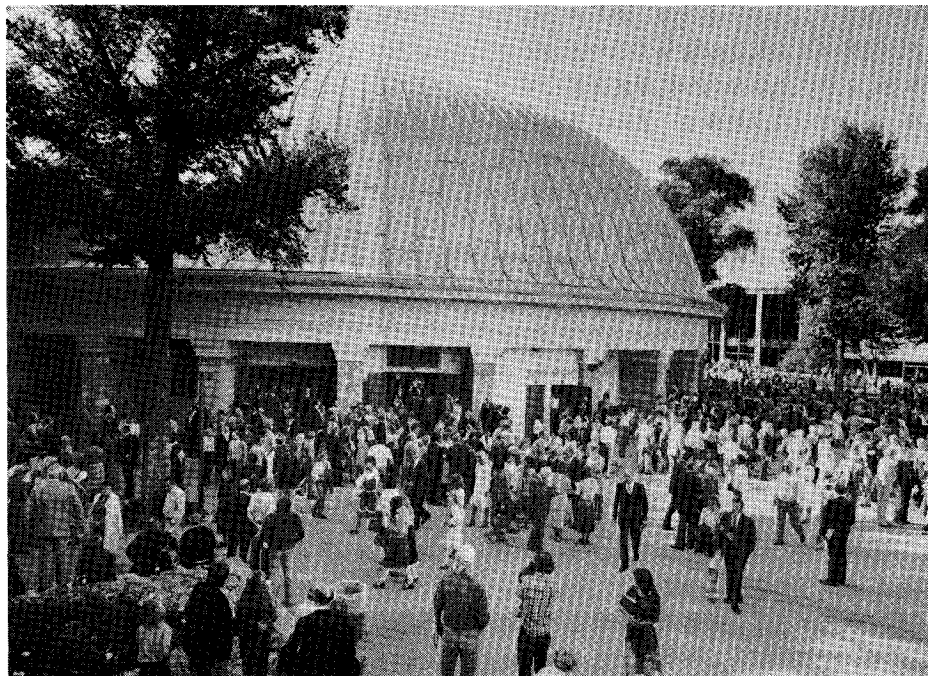
(ハイゼル・フェルマン、*The Best Loved Poems of the American People*, Garden City, N. Y.: Garden City Publishing Co., 1936, p. 67)

私たちは、「だれかがあなたの右の頬^{ほお}を打つなら、ほかの頬をも向けてやりなさい」と言われたキリストの精神に倣い、善をもって悪に打ち勝とうではありませんか。

私たちは非常に困難の多い時代に住んでいます。オマー・ブラッドリー將軍が引用した言葉を読んでみましょう。「私たちは原子力の神秘は理解するが、山上の垂訓は受け入れない。……私たちの世界は核という巨人と倫理という幼な子の住む世界である。平和よりも戦争を、人を生かすよりも殺すことを私たちは教えられている。」(ルイス・フィッシャー、*The Life of Mohatma Gandhi*, New York: Harper and Brothers Publishers, 1950, p. 349)

この福音の力を世界中に広めるためには、なすべきことがたくさんあります。皆さん、私たちに課せられた使命を喜んで果たそうではありませんか。

主はこの福音をあらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民、およびあらゆる



世の人々に（教義と聖約 133：37 参照）宣べ伝えるようにと命じられました。これは必ず果たさなければならぬ義務であると私たちは感じています。福音を宣べ伝える時には、無理じいするのではなく、愛と思いやりをもって宣べ伝えて下さい。この思いやりと愛の精神こそ、私たちが証をする御方の本質をなすものだからです。

私たちは、これからも世界中の国々に住む人々を強めるこのみ業を推進していくつもりです。信仰の弱い者に励ましを与え、言葉と模範によって彼らを教えます。慈愛の精神と互いに愛し合う心をもって共に働きます。また、今後も、人々が集まり、心をひとつにして主を礼拝し、互いに強め合うことのできる礼拝の場を全世界に建てていくつもりです。

加えて、私たちはこれからも死のとばりの向こうに去って行った人々に手を差し伸べるという他に類するもののない愛のみ業、すなわち神殿のみ業を行なっていきます。これほど大きな愛の行為がほかにあるでしょうか。このことは、私たちすべての者のために身代りの犠牲となって命を捧げられた主の精神に、他のいかなる業よりも近いものです。この愛のみ業はキリストのみ名によってなされるものであり、その救いは万人に及ぶものです。

神がすべての人々を祝福され、その目と耳を開いて、私たちが証しているこの偉大な永遠の真理を見、聴き、学び、そして理解し、その真価を知ることができるよう、イエス・キリストのみ名によってへりくだりお祈り致します。アーメン。



与えられた勧告を実践する

第一副管長 N・エルドン・タナー

兄 弟姉妹の皆さん、本当に素晴らしい1日でした。私はこの有名なタバナクルで開かれた末日聖徒イエス・キリスト教会の総大会に出席して、説教を聞きました。ラッセル・バラード兄弟が捧げた祈りが、この大会において確かに答えられたと思います。

祈りについて非常に大切なことは、私たちがどなたに対して祈っているか理解し、その祈りが私たちにとって最善の方法で答えられると確信することです。主に祈りを捧げる時、祈りによってこの教会が地上にもたらされたことを思い起こしましょう。ジョセフ・スミスは少年の時に、次の聖句を読みました。

「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせず惜しみなくすべての人に与える神に願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。」(ヤコブ1:5)

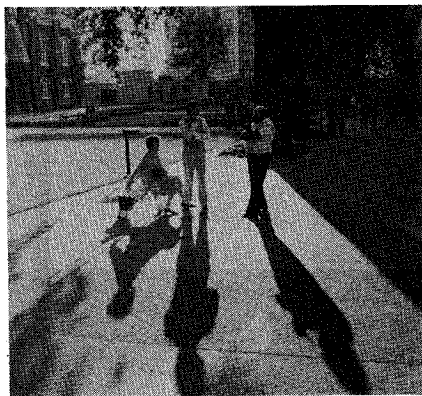
私たちは、祈りが答えられること、また必要なものを主に願い求めることができるということがどんなに素晴らしい祝福か理解しているでしょうか。

大会の初めに、キンボール大管長の美しいメッセージがD・アーサー・ヘイコック兄弟によって代読されました。そのメッセージから考えさせられることは、私たちがこの

地上において救い主の教えに従うために努力しなければならないということです。長年にわたりキンボール大管長と共に交わり、大管長から学び、霊的な影響を受けてきたことは、私にとって大きな喜びです。

美しい合唱団の歌声を聴く時に、全世界に知られ、多くの聴衆のために歌う合唱団を持つことが、どんなに恵まれたことかと思えます。

兄弟姉妹の皆さんと親しく交わり、今はこの場に集い、みたまを共に受けることができ感謝します。この大会からお帰りになったら、一人一人の方がこの場で聞いたことを思い起こし、それがよりよい生活の助けになることを理解されるよう祈っています。この大会を契機に前進しようではありませんか。この大きなタバナクルで語ら



れた勧告を実践しようではありませんか。

主は私や私の家族や教会員である私たちに豊かな祝福を与えて下さいました。それらすべての祝福に心から感謝します。きょう、この場で聞いたような説教のできる組織は世の中にはありません。それらは最高の説教であり、私の知るかぎり最も素晴らしいものでした。

このような大会に出席できることを感謝します。また、自分の生活を改善し、世の人々に良い影響を与えようという決意を持ってこの場を離れられることを感謝します。これが主のみ業であることを証します。福音は真実です。私たちがその教えに従って生活するならば、他のいかなる方法でも得られない大いなる喜びにあずかることがで



きます。

主の祝福が最後まで私たちと共にありますように、イエス・キリストのみ名を通して祈ります。アーメン。





明日に備える

管理監督 ビクター・L・ブラウン

私は、「今日の試練に答え、明日に備える」というテーマでお話するように指示されました。そこでこのテーマについて深く考えた結果、次のような結論に達しました。すなわち、私たちが十分な備えをして今日の問題に対処するならば、明日になってあわてて準備する必要はないということです。

マタイ伝に記されている「十人のおとめ」のたとえ話はこの点を強調しています。

「そこで天国は、十人のおとめがそれぞれあかりを手にして、花婿を迎えに出て行くのに似ている。その中の五人は思慮が浅く、五人は思慮深い者であった。思慮の浅い者たちは、あかりは持っていたが、油を用意していなかった。しかし、思慮深い者たちは、自分たちのあかりと一緒に、入れものの中に油を用意していた。花婿の来るのがおくれたので、彼らはみな居眠りをして、寝てしまった。夜中に、『さあ、花婿だ、迎えに出なさい』と呼ぶ声があった。そのとき、おとめたちはみな起きて、それぞれあかりを整えた。

ところが、思慮の浅い女たちが、思慮深い女たちに言った、『あなたがたの油をわたしたちにわけてください。わたしたちのあかりが消えかかっていますから。』すると、思慮深い女たちは答えて言った、『わたした

ちとあなたがたに足りるだけは、多分ないでしょう。店に行って、あなたがたの分をお買いになる方がよいでしょう。』彼らが買いに出ているうちに、花婿が着いた。そこで、用意のできていた女たちは、花婿と一緒に婚宴のへやにはいり、そして戸がしめられた。そのあとで、ほかのおとめたちもきて、『ご主人様、ご主人様、どうぞ、あけてください』と言った。しかし彼は答えて、『はっきり言うが、わたしはあなたがたを知らない』と言った。

だから、目をさましていなさい。その日その時が、あなたがたにはわからないからである。」(マタイ25：1—13)

このたとえ話についてよく考えてみると、この話に出てくる十人のおとめは皆、その入れ物の中に油を持っていました。そのうちの5人の思慮深いおとめは、いつでも十分になるように余備の油を持っていました。ところが、残りの5人は愚かにも、目先のことしか頭にありませんでした。そのため、花婿が着いた時には油が足りなくなっていたのです。

また、このたとえ話から、危急の時に対応するために必要な備えとは、簡単な日常の仕事の積み重ねによってできるということも学ぶことができます。花婿が着いたからと言って特に大げさな準備が必要なわけ

でもありませんでした。準備は今日の問題に対処できるよう慎重に、しかも組織立てて行なう必要があります。主の靈感に従って、ひとつずつ着実に準備していかなければなりません。

デビッド・O・マッケイ大管長はひとりの鉄道技師の話をよくしていました。ハロルド・B・リー大管長の話の中から、その話を引用してみたいと思います。

「ある闇夜に、運転手が汽車をある駅に止めました。すると、ひとりの臆病者の客が来て、『あなたは400人から500人ほどのお客の命をあずかって、この暗闇の中に汽車を走らせて怖くなることはありませんか』と尋ねました。運転手は明るく光を照らし出しているヘッドライトの方を指差して答えました。『お客さん、一旦この駅を出たら、1フィートとして暗い所を走ることはありません。ヘッドライトの光が1,000ヤードも先を照らしているのが見えるでしょう。あの光が届く最先端の所まで私がこの汽車を運転します。そうして汽車がその地点まで来ると、ヘッドライトはそこからもう1,000ヤード先を照らしているんですよ。』マッケイ大管長はさらにこう付け加えました。『そこで申し上げたいのですが、この不確実な暗闇の時代であっても、この福祉プログラムは一時として暗闇を走ることはありません。来る10月が、私たちの光の第一到達点です。私たちはこれから6カ月間、何をしたらよいか話をしてきました。そこに着く頃には、光は私たちのもと先を照らしてくれるでしょう。こうして私たちが歩く所はいつも光に照らされています。どうか皆さんは人々にこの光に従うよう指導

して下さい。そうすれば、たとえ破壊者の力がこの世に及ぶことがあっても、人々はシオンの丘で安全に暮らすことができるでしょう。』(Welfare Agricultural Meeting, 5 April 1969)

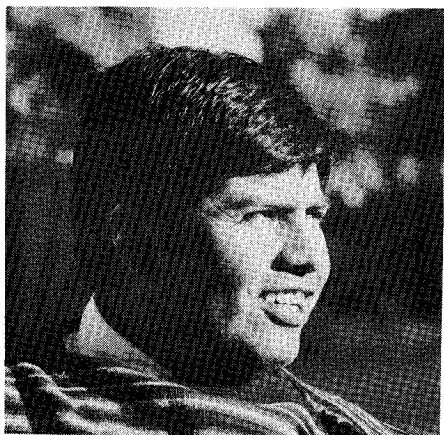
私たちが教会幹部の勧告に従って、毎日を質素儉約に努め、正しい生活をするならば、いつかやって来る試練に対して大きな調整をする必要もないはずです。

福祉活動プログラムは「終わりの日」のために計画されたものであると考えている人が大勢いますが、これは正しくありません。福祉活動プログラムの原則は、私たちがよく備えられた生活をし、人生に伴う重大な問題を上手に乗り越えていくための支えとなるように意図されたものなのです。

おとめたちは自分たちの明かりが必要な晩に、花婿が着くということを知りませんでした。同様に、私たちが病気や失業などの大きな試練がいつ待ち受けているかわかりません。

今日の新聞やテレビの報道を見ると、世の終わりがすでに来ているような錯覚に陥ることがあります。例えば、地元の新聞の見出しや記事を見てみますと、殺人や戦争、倒産、失業など世の中の問題を描いているものが全体の3分の2を占め、よい影響を与える記事を掲載する欄などほとんどないほどです。現状は抜き差しならない状態であるとすでにあきらめてしまっている人もいます。

私たちが困難な時代に直面していることは確かです。失業者は増加し、個人や会社だけでなく、国家までも破産の危機に遭遇しています。戦いと戦いのうわさがちまた



にあふれています。(教義と聖約 45:26 参照) 人間の残忍さには目に余るものがあります。道徳に対する価値はソドムとゴモラの段階まで下落してしまっています。このほかにも、数えあげればきりがありません。

このような問題が今日存在するのは、かつて私たちが十分に備えなかったからです。これらの試練はよく準備している人にとっては克服できない問題ではありません。聴く耳を持った人々にとっては決して耳新しい問題でもありません。次に、私たちが受けた助言を幾つかあげてみたいと思います。

1935年、ジョージ・アルバート・スミス大管長は次のように述べています。

「私たちがこのようにして礼拝のために集っているこの日(安息日)もこの偉大な国では『遊びの日』と化しています。つまり多くの人々は、その昔神が与えられた安息日の戒めを破る日に指定しているのです。私は、人類をむしばんでいる悲しみと苦悩の多くは、人々が安息日を聖く守りなさいという勧告を無視してきたことに帰因していると確信しています。」(Conference Re-

port, Oct. 1935, p. 120)

1937年に、J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は次のように勧告しています。

「災いを避けるように、借金を避けなさい。現在、負債を負っているものはそれから逃れるようにしなさい。」(Conference Report, Apr. 1937, p. 26)

またハロルド・B・リー大管長は1970年に、次のように述べています。

「教会の指導者は、この30年間食糧貯蔵をし、万一の時に備えるよう勧告してきました。私たちは皆その教えを耳にしたのですが、多くの者が勧告を無視してきました。そしてひとたび災害が起こると、これらの怠惰な人々はあわてて銀行に駆け込み、貯金をおろして、食糧を買い込むのです。」

(Welfare Agricultural Meeting, 4 April 1970)

最後に、スペンサー・W・キンボール大管長は1974年にこう述べています。

「地は結婚と家族なくして善とされず、また存続し得ない。老若を問わず結婚をせずに性的関係を持つことは、主の目に憎むべきことである。悲しむべきことに、多くの人々はこれらの偉大な真理に目を閉じている。

夫婦は互いに愛し慈しまねばならない。夫婦は特に不信仰、不道徳によって家庭を破壊に陥れてはならない。」(「聖徒の道」1975年2月号, p. 83)

ここにあげた幾つかの勧告に忠実に従っていたならば、私たちがどれほど多くの今日の問題を避けたり、効果的に対処することができたろうか。

次に、今日あるいは明日の問題に対して

どう備えたらよいか考えてみましょう。特に両親の皆さんには、どのようにすれば子供たちが適切な教育を受けられるか教える責任があることを強調しておきたいと思います。

次の聖句から見ても明らかなように、主の教えは極めて明確です。

「また、シオンまたは組織せられたるシオンのステーキ部内にて子供を有する両親あらば、その子供八才の時、悔改め、生ける神の子キリストの信仰、バプテスマと按手による聖霊の賜などの教義を教えて理解せしめざれば、罪その両親の頭に留るべし。

また両親はその子供たちに祈ることと、主の前に正しく歩むこととを教えざるべからず。」(教義と聖約68：25, 28)

主の前に正しく歩むということの中には、生活のあらゆる面において、信頼できる人間になるということも含まれます。子供が学校、特に高校に行く時期になったら、多少難しく思えても将来の教育や就職のためのよき備えとなる選択をするように勧める必要があります。

どの段階までの学校教育を受けるにしても、子供たちは、自分が行なうすべてのことにおいて、最善を尽くすことの大切さを学ばなければなりません。どの会社でも上層部には空いている役職があるのですが、下の方にくると人がひしめています。配管工、医者、教師、弁護士、農業経営、大工など、職業としてどのような分野を選ぶかは問題ではありません。若い内に最善を尽くすということを学んでおけば、人生の様々な責任を果たすための、非常に良い備えをすることになります。

私たちは子供たちに、ものの考え方、学び方を知るための場としての学校教育の大切さを教えなければなりません。正規の学校教育だけが教育でないということを、子供に教えると共に、自らも思い起こす必要があります。教育には終わりということがありません。それは一生を通じて続けられるべきものなのです。

世界的に有名な教育者モーティマー・アドラー氏はあるインタビューの中で、自分の教育が始まったのは、わずか25年前からのことであると答えたそうです。質問者はいささかの驚きを込めて、こう聞きました。「しかし、先生がシカゴ大学に長くおられたことは、良く知られていることです」と。

「その頃は学校で学んでいましたが、自分自身で勉強することを始めたのは、正規の学校教育を終えてからなんです」とアドラー氏は答えたそうです。

教義と聖約88章の中で、主は私たちにこう教えておられます。

「またわれ汝らに一つの誠命を与う。すなわち汝ら互いにこの王国の教義を教ゆべし。

汝ら熱心に教えよ、さらばわが恩恵は汝らに伴い、かくして汝らの理解する必要がある理論と原理と、教義と福音の律法と、神の王国に就けるすべての事は更に完全に教えらる。

また天にも地にも地の下にも関わりあること、またすでに起りたること、今有ること、近く必ず起らんとすること、また国内にあること、国外にあること、また戦争、諸国民の葛藤、地上に下る審判、而して国

国と王国とに就ける知識などもまた然り。

これ、汝らがわが汝らを召したる天職と、わが汝らに委任したる使命とを全力を尽して遂行するために、われ再び汝らを遣わす時に汝らすべての事に用意あらんためなり。

そは、必ずしもすべての人信仰なきが故に、汝ら努めて求め、互いに知恵ある言葉を教うべし。然り、汝ら最も善き書より知恵ある言葉を探し求めよ。また正に研究と信仰とによりて学問を求むべし。」(教義と聖約88：77-80, 118)

自分自身また子供たちを信頼できる、また自立できる人間とするためには、それなりの準備が必要です。教育はこの準備をするための、重要かつ基本的な手段となります。

教育の場合も、他の準備と同じように、系統だった過程を踏むことに注目して下さい。1年生の次が2年生、2年生の次が3年生というように、高校を卒業したり、大学や専門学校での勉強が終わるまで続きます。結局、現在の問題のために適切な備えをすることが、将来への最善の備えになるという基本的な前提に帰結するのです。

両親は子供たちに、賢明な財政管理をし、負債を避け、自分自身と自分を取り巻く環境に誇りを持ち、信頼できる人間になること、また、自分がもらう賃金にふさわしい正直な労働をすることを教えなければなりません。そのほかに、福祉活動の諸原則も教えておくべきです。これらの原則の中には「終末論」的な非観的な考えはかけらもありません。

物質的な必要も大切ですが、霊的な必要性を満たすのは、それよりもはるかに大切なことです。生命を保つために、衣食住や

他の必要を満たさなければならないというのは、言うまでもないことです。しかし、それらのものに十分恵まれていながら、永遠の生命を保つ上で欠かせないものは持っていないという場合もあり得るのです。主はいろいろな方法でこのことを教えられました。そのひとつに、金持ちのたとえ話があります。

「そこで一つの譬を語られた、『ある金持の畑が豊作であった。

そこで彼は心の中で、『どうしようか、わたしの作物をしまっておく所がないのだが』と思ひめぐらして

言った、『こうしよう。わたしの倉を取りこわし、もっと大きいのを建てて、そこに穀物や食料を全部しまい込もう。

そして自分の魂に言おう。たましいよ、おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食え、飲め、楽しめ』。

すると神が彼に言われた、『愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか』。

自分のために宝を積んで神に對して富まない者は、これと同じである」(ルカ12：16-21)

14年前の4月の総大会で、デビッド・O・マッケイ大管長は次のように言いました。「教会の会員、そして世界中の人々が、福音と、自分の内にある霊を養うことについてもっと考え、人生における真実の事柄にさらに多くの時間を用い、朽ちていくものに費やす時間を少なくするよう、心から願うものです。」(Conference Report, Apr. 1968,

p. 114)

靈的な備えをするにも、これまで述べてきたと同じ、一定の順序というものがありません。私たちの将来は、今得ている事柄の上にはしか築けないのです。しかし、現在の靈的成長の結果を味わうために、将来まで待つ必要はありません。もし常に主の教えに従うならば、闇の中を歩む必要はありません。それどころか、命の光を持つことができるのです。(ヨハネ8：12参照)

私たちは両親として、物質的な備えと靈的な備えについて教え、自らも実践しなければなりません。主と油注がれた僕の勧告に従わないで自責の念に苦しむというようなことのないように、最善を尽くして努力しましょう。キンボール大管長の「実行」という教えと模範に従おうではありませんか。

主もこのように言われました。「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるの

である。」(マタイ7：21)

20年、30年後に、「1980年代に、与えられた勧告に従っていさえしたら、今抱えている問題の多くは避けることができたのに」などと言って、現在を振り返ることのないようにしましょう。教会幹部の言葉に従い、今日の問題に対して福祉活動の原則を応用し、明日への備えとしようではありませんか。それによって、幸福と喜びと自信を持って前進することができるのです。

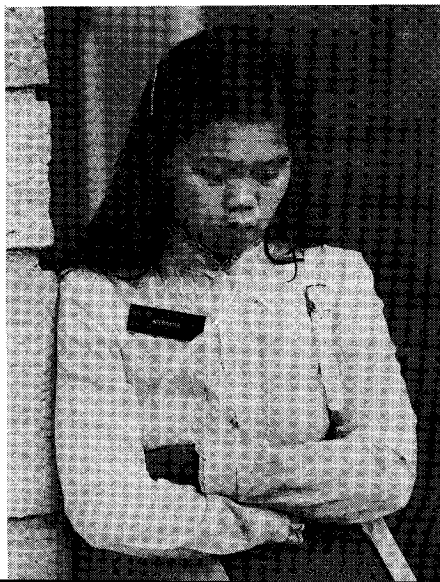
イエスは言われました。「もしだれでもわたしを愛するならば、わたしの言葉を守るであろう。そして、わたしの父はその人を愛し、また、わたしたちはその人のところに行き、その人と一緒に住むであろう。

これらのことは、あなたがたと一緒にいた時、すでに語ったことである。

しかし、助け主、すなわち、父が私の名によってつかわされる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、またわたしが話しておいたことを、ことごとく思い起させるであろう。

わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたと与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。あなたがたは心を騒がせるな、またおじけるな。」(ヨハネ14：23、25—27)

私たちの周囲のすべてが混乱していても、この平安は私たち一人一人の心の中に安らぎをもたらしてくれます。この平安はすべての物質的な事柄を超越するものです。私たちが、今日の試練によく対処し、自信をもって、明日に向かって進むことができるよう、主イエス・キリストのみ名によって祈るものです。アーメン。





教会福祉の原則の応用—家庭における 様々な問題を解決するための鍵

中央扶助協会会長 バーバラ・B・スミス

ヨ ハネによる福音書には「初めに言があった」とあります。(ヨハネ1:1) またジョセフ・スミス訳では「初めに、福音は御子を通して教えが宣べられた。福音は言であった」となっています。(ジョセフ・スミス訳ヨハネ1:1) さらにこうあります。「御子に福音があった。そして福音は命であり、命は人の光であった。」(同ヨハネ1:4)

悲しいことに、だれもが自分たちに与えられたこの光にあやかっているわけではありません。福音を信じている人が皆その輝きを人生に取り入れているとは限らないのです。

自分の人生は輝きなどからは程遠いものだと思っている女性がいました。彼女の夫は、仕事の都合で1週間に3日は出張するのが常でした。残された彼女は、ひとりで家事や育児に励まなければなりません。彼女は19歳で結婚したせいもあり、子供の世話をすることはもとより、自分に対処する自信さえ皆目持っていなかったのです。

彼女は、我が子の要求や家事を負担に感じるようになりました。そしてイライラがつつのり、子供に対してますます厳しくなり、その態度に自分でさえも恐れを抱くまでに至りました。孤独感と恥ずかしさと無力さを感じた彼女は、絶望のどん底に落ちることがたびたびありました。福音は彼女にどんな光をもたらしたのでしょ

うか。彼女は御主人共々、自分は教会の良い会員であると思っていました。しかし、子供たちが泣きわめいたり、洗濯物がだんだんたまっていったり、母親に手紙の返事を出す暇がなくなったり、今週夫の会社で開かれるパーティーに行くためのドレスが、ミシンの上に置きざりにされているような状態で、教会の良い会員であることがどれほど違いをもたらしたと言えるでしょうか。こうした日常のフラストレーションは、彼女の心が失意にさいなまれていることを雄弁に物語っています。福音の祝福からは程遠い生活なのです。

しかし幸いにも、この女性の場合、いろいろな問題を解く上で福音の原則をどのように適応したら良いのか教えてくれる人がいました。子供たちのことに懸念を抱く彼女に^ミ応えて、訪問教師が子供用に特別な玩具を持ってきてくれました。訪問教師たちは、大人が子供と一緒に楽しくけいこできるような遊び道具を慎重に選びました。訪問教師はゲームを通して子供たちの気持ちをつかむ方法も時間をとってその母親に教えました。彼女は、子供たちが楽しそうに、また素直に反応してくるのに驚かざるを得ませんでした。子供たちは、母親と共に過ごせる遊び時間を楽しみに待つようになりました。彼女は、遊びを通して子供たちの必要を満たしていることや、子供たちも母親に対しリラックスした気分になってきて

いることにやがて気がつきました。

こうして共に行なう活動を通して親子の絆が生まれ、やがて子供たちは、自分の衣服の始末や、おもちゃのあと片づけ、昼寝など、彼が言う事に喜んで従うようになり、それにより彼女は、他のことを行なう時間の余裕さえもてるようになりました。また子供たちへの思いやりも深くなり、子供たちの心配事にも敏感になりました。そして毎日子供たちに特別な注意を向けるようになりました。こうして家庭に愛が、単なる教えとしてではなく、お互いの必要を満たす手段として存在するようになったのです。

これまで教えられかつ学んできたように、私たちにとって福音の言葉とは始まりなのです。約束された光をもたらす上で、単に「知っている」ということは十分ではありません。すべての言葉に従って生活する必要があります。世界的に発展する私たちの教会では、「翻訳」ということがよく言われます。今日ではコンピューターが利用され、何百人という言語のスペシャリストがこの大切な仕事に従事しています。しかし、私たち一人一人が責任をもって行なわなければならない翻訳とは、福音の言葉を行動や態度や習慣に変えていくことです。

愛という福音の原則は行動を示すものであり、「互いに愛しあいなさい」(ヨハネ13:34)ということと深い関連があります。この言葉が努力への決意に変わり、今まで自分を愛してくれる人を傷つけたり、悲しませたり、当惑させたりする原因となっていた態度が改まったならば、これこそが家庭の問題を解く鍵になるのです。これから申し上げる手紙はある妻が夫に宛て書いたものですが、原則を言葉以上のものにする

必要のあることを強調しています。

1951年バレンタイン・デー

ビルへ

これまで23年間一緒に暮らしてきましたが、きょうほどあなたを愛していると思ったことはありません。あなたは、いつも愛情を口に出して示してくれましたが、私とその愛情を確信できたのは、最近あなたが家族を神殿に連れて行く準備を始めてからです。

私たちは一緒におもしろいことをたくさんしました。でも本当にひとつになっていないということから、私にはいつもわびしさというのか、どこかわりきれないものがありました。でも今は、大きな期待と喜びで一杯です。福音を一緒に学んだり、共通の友人と楽しく過ごしたりするのはもちろんですが、何にも増してうれしく思うことは、我が子や、孫やひ孫たちと共に永遠に一緒にいられるようになったことです。

あなたがこれまでどうしても捨て去ることのできなかつた酒やタバコを、苦しみながらもびたりとやめたのを見て、あなたに対してますます尊敬の念を抱くようになりました。

あなたの息子や娘も私と同じです。あなたのことを本当に誇りとするばかりでなく、あなたに対して心から感謝しているのです。

愛を込めて エレン

夫婦の不幸がすべて、だれの目にも明らか悪癖から来ているとは限りません。日常生活の忙しさにかまけている間に、不幸がそと、目に見えないように広がることがよくあります。ここで、結婚してからずっと教会と我が子のために献身してきたある夫婦のことを考えてみましょう。やがて年月がたち、子供たちも成長して彼

らの元を離れて行きました。教会の責任にもそれほど時間を取られません。そうなる
と突然、それまで他人の問題解決にばかり
気を取られてきたこの夫婦が、自分たち自
身の問題に遭遇するのです。子供のことに
かまけて、お互いのことに心を配る余裕が
なかったのです。周囲の人々に惜しまず愛
情を傾けはしたものの、お互いへの愛や思
いやりを率直に表現してこなかったのです。
互いの豊かな経験に基づいた円熟の人生を
迎える時期になって、自分たちの関係がよ
そよそしいものであることに気づいたので
す。彼らは互いに満たされないものを感じ、
それが批判や不平となって表われました。
しかし、ここで彼らに解決への道を教えて
くれたのが、長年にわたって教会から得て
きたものでした。昔受けた福音の光をもう
一度受けたいと、心から願い求めたので
す。

福音の原則を、今度は自分たちの問題を
解決する手段として、新たに見直すことに
より、ふたりは互いに相手の役に立つには
どうしたらよいのかを悟りました。円熟と
いう時期に至ってお互いに愛情を表現し合
うことが満足感をもたらす、特に報いの多
いことを彼らは認識したのです。庭の手入
れのようにふたり一緒に働けるような仕事
を選んだり、意義のある教会活動に参加し
たり、家族の記録や歴史を整えたり、貴重
な資料の保管の仕方を学んだりしました。
つまり彼らは、すでに福音の中から必要な
原則を身につけ、自分たちの問題を処理す
るのに十分といえるほどの原則をそこに
見出すことができたのです。

G・K・チェスタートンには、「一本のチョコ
ーク」と題した随筆の中で、英国南部の片
田舎に行った時のことを書いています。い
ろいろな色のチョークで絵を描くつもりで

行ったのに、残念なことに白色のチョーク
がないことに気がつきました。チョークを
売っている店まで戻るのには遠すぎるし、
旅行も台無しになってしまったと思ってい
たところでしたが、ふいに自分が座ってい
る岩こそチョークのもとになる白い石灰岩
であることがわかったのです。(ロバート・
K・トーマス編、*The Joy of Reading*, Salt
Lake City: Bookcraft, 1978, 35—40)

そうです、サセックスの草原の中で、白
いチョークが何千本も作れるような石灰岩
の上に腰をおろしていたのです。それは化
学者が大海の真ん中で実験のために塩水を
探し求めているのと同じですし、あるいは
広大なサハラ砂漠で、砂時計に入れる砂を
捜しているのと同じです。問題というもの
は、応々にして解決への鍵を自分たちがす
でに持っていることを自覚することにある
のです。必要なのは、その鍵の効果的な使
い方を知ることです。

これは生活の中でよく見られるものです。
例えば、貧しいながらも、近所の人々にク
リスマスプレゼントをあげたいと思ってい
た婦人がいました。安価な容器でさえも買
えなかったのですが、彼女には独立独行の
精神がありました。手近なものを利用して、
記念になるようなかわいらしいプレゼント
を作ったのです。お昼のお弁当を入れる茶
色の紙袋に白紙で屋根や入口や窓を付けて、
そこに「お隣さん、メリークリスマス」と
書いたのです。ホームメイドのドライ・ア
ップルを詰めた茶色の紙袋の家は大好評を
博しました。すでにあるものを工夫して利
用した例はほかにもあります。ある母親は
男子用の古いズボンを使って子供たちに立
派なジャケットを作ったそうです。いずれ
の場合も他の人のために一生懸命働こうと

いう意欲と愛、それに独立独行の精神が、問題を解決し、必要を満たす上での鍵となつています。

問題によっては、過酷で人を無気力にしようものも多くあり、恐れや罪悪感や心痛の原因となります。人が問題解決の糸口を見いだすことができるか否かは、私たちが神権会や扶助協会などの集会でいたわりと理解を込めたフレンドシップを示すことにかかっている場合が多いのです。同情を込めて肩にかかってくる腕や、励ましを与えるようなほほえみこそ、悲嘆に暮れた心や踏みにじられた心に、やり直す気持ちを起こさせてくれるものであることがよくあります。そんな時に私たちは、他の人も問題を抱えて苦しんでいることを理解させることができます。また福音の原則に従って生きることによりはぐくまれる家庭の力や人格の強さが、人生の問題を乗り越える力を



与えていることを彼らに教えることができます。

一番小さい子供がわずか4カ月の時、父親に捨てられた家族がありました。難しい離婚とあって、心を引き裂かれるような状態であったにもかかわらず、勇気のあるこの母親は、篤い信仰を持ち、たとえ片親でもできるだけのことを行なうのだと固く決心していました。

他の多くの人がそうであるように、彼女も、福音が行動に結びついた時にそれが多くの問題解決への鍵をもたらすばかりでなく、問題を防ぐ力も与えてくれることを知りました。どうしても人の手を借りなければならぬような難事でも、解消することは可能ですし、行動を伴った福音からは、かえって力と幸福がもたらされるのです。

この母親は、子供たちをそばに呼び集めて、現状を説明しました。家のローンの返済や他の支払いが遅れているのに、収入はまったくありません。もちろん他の人に助けを請うこともできます。しかし彼女は、家族と一緒に働く気さえあつたら、家を売らなくて済むし、再び明るい家庭を取り戻すことができると思いました。子供たちもそう思いました。働ける子供は皆、収入を得る手段を見つけました。芝生を刈ったり、新聞配達をしたり、子守りをしたり、空カンを集めたり、家事手伝いをしたりしました。年長の子供がガス料金、別の子供が電気料金を責任を持って支払う一方、母親は自分の収入を家のローンの返済に回しました。他の出費は、極力避けるようにしました。

時がたち、家のローンの返済も追いつき、他の支払いも月々行なえるようになり、それどころか、小さく安価な家屋を購入して修繕し、収入が入るまでに至りました。こ

れにより、母親が外で働く必要もなくなりました。こうして子供たちは、自分たちが働いて得た収入を家族の物質的な必要を賄うために注ぐ必要がなくなりました。財政的な圧迫から解放された母親は、子供たちに、もし続けて働きたかったら働いて大学へ行ってもよいし、伝道に出てもよいし、旅行して皆一緒に世界を見て歩くこともよいと提案しました。子供たちは引き続いて働き、そのお金を貯金しました。彼らは働くことや家族の貴さを覚えました。彼らはほかの人が夢に見るような土地にも母親を連れて行くことができました。

これはすべて教会の責任を遂行している間に行なったことでした。彼らは、過去数年間に経験したことで最も報いのあることが霊的な成長だったことをまず第一に認めています。この家族は、愛と労働、奉仕、独立独行、奉獻の原則を実行に移すことによって、達成することの尊さ、目的に向かって一致すること、そして互いに絆を強くし、また主とのつながりを深めることを知ったのです。この家族の絆の強さは、一緒にいた人ならすぐに気づきます。

人生には問題がつきものです。福音は答えを見い出す手段をもたらししてくれますが、だからといっていつでもすぐ解消されるわけではありません。しかし、困難に向かって努力する時、そこから力が生まれます。私たちは、自分の持てる限りの力をふりしぼって葛藤する時に、応々にして天父の存在を身近に感じるようになるのです。

リーハイの妻サライアは、家と財産を捨てて荒野に出立しなければならないというせつない経験をしました。彼女が味わった試練について私たちは知らされていませんが、エルサレムで安楽な生活をしていただ

けに、徒歩での旅行やテント住まい、野外での料理などは、辛い経験だったのではないのでしょうか。金板を手に入れるために行った愛する息子たちのことを、帰る途中で死んでしまったのではないだろうかと案じる彼女の苦悶が書かれています。困難にもかかわらず彼女は家族を愛し、また家族のために働きました。彼女は無事に帰ってきた息子たちを見て、夫に荒野に逃げるように命じられたのが確かに主であることを悟りました。また息子たちが無事であったことから、主が共におられるという確証を見いできました。だからといって彼らの環境が変わったわけではありません。あいつも変わらずテント生活が続きました。しかし主が彼らを導いて下さっていることを理解した彼女には、喜びと慰めがありました。光の中にあつて、彼女はさらに多くの問題に対処していくことができたのです。

私たちは、福音の知識の深淺を問わず、絶えず学び続けることができます。しかし、学ぶことはほんの始まりに過ぎません。完全な祝福は私たちが原則を採り入れ、それに従って生活し、それを私たちの生きる道とする時にやってきます。原則に従って生活したならば、その原則が光となることが約束されているのです。

ひとたびその光の存在を身をもって体験するようになると、私たちはたとえ暗黒の霧の中でも光によって導かれるのです。この光を家庭に取り入れたらどうでしょう。子供たちにとって、そのまた子供たちにとって導きの灯となるに違いありません。私たちが希望の輝きをもって進み、問題を克服し、神と人の愛を享受することができますように。へりくだり、イエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。



家族が共に働くことによりもたらされる祝福

ソルトレーク・ユニバーシティ
第2ステーク部ステーク部長 ディーン・ジャーマン

家族が共に働くことによってもたらされる祝福の中には、物質的なものと霊的なものがあります。アダムに与えられた戒めは霊的なものでした。それは、主がアダムに、俗世にかかわる戒めを与えたることなしと言われたからです。(教義と聖約29:35参照)したがって、この世の初めから設けられた労働も、霊的な原則だったのです。

子供たちに働くことを教えたいという気持ち私の心に湧き上がってきた要因は幾つかあります。その第1は、子供の時、賢くまた素晴らしい両親の下で育った私が享受した体験です。家族が共に働く計画が始まったのは、私が9歳の頃でした。ある晩、父が靴磨きの道具一式を持って帰ってきました。壁に固定できる靴型のついたものです。父は兄と私に一生懸命働くことの大切さを話し、1足15セントで靴を磨いてお金を得るように勧めました。もちろん両親の靴はいつもピカピカでした。しかし絶好のチャンスは、両親がお客を家に招待した時でした。招待された人々の中に入り、靴を磨いて欲しいかどうか尋ねるのです。そんなわけで、私の家では、靴下だけで座ったり、おしゃべりしたりしている人々の姿をよく見かけました。

それから何年かしてから、父がある晩、

別のアイデアを持って帰ってきました。

「クリスマスの飾りを売ってみたらどうかね」と言うのです。このようにして、もうひとつの冒険が始まりました。一軒一軒回って注文を取り、業者から安く購入して売ります。それから数週間、両親は、時間をさいて私たちのこの仕事を助けてくれました。

大学時代、働くことには単なるお金以上の価値があることに気がつきました。私の心に忘れたい印象を与えた言葉が3つあります。その第1の言葉は、私がユタ大学に行っている時に耳にしたものです。インスティテュートのディレクターであったローウェル・L・ベニオン兄弟が、子供を育てる上での基本的な考え方について話をしてくれました。ベニオン兄弟は大きな野菜畑を持っていました。何を育てているのか尋ねられると、彼の口からはありふれたトマトやトウモロコシ、ニンジンなどの言葉は出てきませんでした。彼の答えは「息子たちを育てているんです」というものだったのです。

第2の言葉はブリガム・ヤング大学のある学生のもので、それは、その学生が高校時代の友人の中でどうして彼だけが教会に今も来ているかと尋ねられた時の言葉でした。彼は、それは牛のせいですと答えま

した。その友人たちが放課後、暇を持て余していろいろな問題を起こしていた時も、彼だけは毎日家に帰ると牛の乳しぼりをしなければならなかったのです。その時は腹の立ったこともあったけれども、それ以来ずっと賢い両親と牛に感謝しているということでした。

3つ目の言葉は、伝道を終えて帰ってきたひとりの伝道部長の述べた言葉でした。伝道部長によると、宣教師の多くが赴任してきてもその働き方を知らないというのです。時間を上手に管理し、物事を自発的に行なうことができないというわけです。

労働の原則が少しずつはっきりしてきました。結婚をした時、私は3つの目標を達成しようと考えました。1. 子供を育てる手段として仕事を活用する。2. 自由な時間があまりないようにする。3. 主に効果的に仕えることができるように子供たちを備える。この3つでした。

素晴らしい伴侶と結婚し、私たちは子供に恵まれました。何年かたち、私たちは10人の子供の親になりました。あに凶らんや、8人までが男の子です。子供たちが成長するにつれ、彼らが家計の手助けをしなければならぬことが、私たちにはわかっていました。そして、上の子たちがスキーを習いたいと言ってきた時にそれが現実の問題として浮かび上がってきました。そこで、ある年のクリスマスに、中古のスキーとポール、そしてブーツを買いました。クリスマスの朝、スキー用具を手にした子供たちは大喜びでした。そして、その後の出費についてはすべて自分たちでまかなうことを約束させました。

妻も私も、お金を施しとして与えることはよくないことであると信じていましたから、子供たちに自給自足の精神を養わせるためにはどうしたらよいかいつも考えていました。それから間もなくして、宣伝用の資料を5千軒に配布する仕事が回ってきました。私たちは放課後とか夕方、土曜日などに働きました。宣伝資料をページ順にそろえる仕事は、家族全員で行ないました。妻と私が車の運転を買って出、子供たちを励ましました。この仕事も何回が続けました。子供たちも収入を得るようになり、私たちは一緒に楽しみながら働くことの喜びを知るようになりました。

それから2年後、私たちは宣伝資料の配布をやめて、電話帳の仕事をするようになりました。夏が来るたびに、私たちはよく電話帳をバンに積んで出かけたものでした。暑い最中に、長い時間をかけて場所や住所を捜すのですが、なかなか見つかりませんでした。電話帳は重く、ある所では長く、急な上り坂を歩いて行かなければならぬこともありました。怖い犬がいたこともありました。それでも楽しく仕事をすることができました。時には子供ふたりが一緒に行き、ひとりが犬と遊び、もうひとりが電話帳を持って行くというようなこともありました。

ある夏のことでした。子供のひとりが、仕事をしていて足を折ってしまいました。2、3日すると、その子はこのアルバイトからのけ者にされるのに我慢できなくなりました。スキーが大好きな子でした。間もなくこの子は車の後ろに乗って、家ごとに電話帳を取り出す役目をし始めたのです。

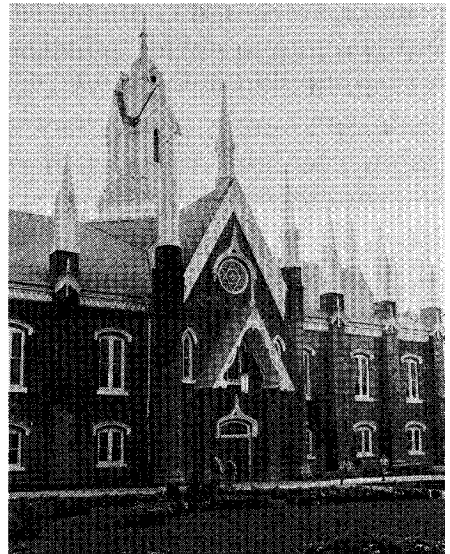
1日の仕事が終わると、おかしかったことや自慢話などに花が咲き、そしてみんなぐっすりと眠ることができました。そうです。私たちは楽しみながら、しかも何かを達成した喜びを味わっていました。

次に行なった仕事は、長男が伝道に出る前の年に始めた芝刈りの仕事でした。私たちは1962年型のトラックと、芝の手入れに使う幾つかの機具を購入しました。最初の年、長男は時折、弟を連れて行く以外は、ほとんど自分ひとりで仕事をしました。その次の年には、運転免許証を持った子がいなくなったということで、私も仕事に駆り出されることになりました。広告を出したり、値段を交渉したり、照会を受けたりして、客を増やしていきました。私が初めて芝を刈った日のことです。最初、芝の縁取り用の機械が動かず、町の反対側まで行って修理をしなければならませんでした。修理を終えて帰ってくると、今度は芝刈り機が1台故障し、再び町の反対側まで出かけなければならなくなりました。ようやく仕事にとりかかってしばらくすると、2番目の子供が私を見上げて言いました。「夏中こんなことばかりすることになるのかなあ。」

それでも私たちはこの仕事を続け、今年で4年目を迎えようとしています。その間に、ユーモアを持つことの大切さも教えられました。スプリンクラーを壊したり、地下室を水浸しにしてしまったり、思わぬ雨に見舞われたりしたこともありました。またトラックのエンジンが焼きついてしまったり、機具が故障したり、私が庭にあった大切な盆栽を引き抜いてしまったこともありました。また交通の激しい道路でトラックの前

輪がゆるんで外れたこともありました。そうかと思うと、機械が順調に動き、トラックも調子がよく、天気もよくて、すべて予定通りに運んだというのに、だれかがトラックの後ろの扉を締め忘れてしまい、次のお客さんの所に行くまでに、機具がひとつずつトラックから滑り落ちてしまったというようなこともありました。

どうしてこんなことをするのかと尋ねられるかもしれません。その答えはこうです。(1) 我が家のティーンエージャーは皆、かなりの伝道資金を持っていること。(2) 子供が皆、12歳になったら働くものだと思っていること。(3) 日曜日には働かないこと。(4) 子供たちが大切な技術を身につけていること。(5) 予算を立ててお金を使うことや、欲しい物と必要な物を区別することを知っていること。(6) 父親の私が子供と肩を並べて一緒に働くことによって、子供たちにいろいろなことを教える素晴らしい機



会を得たこと。以上のことがあげられます。

それだけではありません。言葉では言い尽くせないものも多くあります。2週間前の日曜日、母親の指示の下に、男の子たちは座らされて、家族として一緒に働くことの大切さについての感想文を書くように言われました。

18歳の男の子はこう書いています。「僕は、物心つくようになってからずっと一生懸命働くことがどんなに大切かを教えられ、また我が家の名前を汚さないためにも自分の責任をよく果たすように教えられてきました。振り返ってみると、多くの決断をさせられたことが、自分の人格や性格の形成に非常に役立っていることがわかります。人と会うことにより自信が付き、自己を表現することが上手になりました。何よりも大切なことは、家族と一緒に働くことにより、愛と尊敬の中で家族がより緊密になったことです。」

これまで4年間にわたって芝刈りをしている13歳の子供は、次のように書いています。「家族で働くことにより、働き方を覚えることができました。一生懸命に働けば働くほどいい気持ちになります。兄弟や両親との間に親しいつながりがあることに感謝しています。」

16歳の子は次のように書いています。「家族の仕事を通して、正直で信頼される人になることの大切さを教えられました。家の名前を汚さないようにするためには、犠牲を払わなければならないことがわかりました。」

最後に、15歳の子供はこう書いています。「家族の仕事を通して、お金の管理の仕方

を学ぶことができました。洋服やそのほかの物を買う時も、それを買うためにどれほどの仕事をしなければならぬかわかっているのです、お金を大切に使うようになりました。両親が買ってくれていた時には、正直に言って、家にはお金があり余るほどあるものだとつい思ってしまい、物を大切にすることを忘れていました。このほかにも、働くことによって満足感が得られるだけでなく、体を真っ黒に焼くこともできます。」

母親は次のように言っています。「時間を持って余している若人を多く見かけますが、うちの子供は、自分たちを待っていてくれる人がいることを知っているので、本当に幸せだと思います。仕事のために、時には自分の欲しいものも犠牲にしなければならないこともあったようです。」

最後に、私の感想を述べさせていただきますと、家族の仕事によって、我が家の愛と平安と一致が一段と高まったような気がします。近所の方の中には、うちの子供の仲が良いことをほめて下さる方が大勢います。子供たちが少しずつ自立していくのを見ていると、自分でも驚くほどです。そうです。労働は霊的な、私たちにとって欠くことのできないひとつの原則なのです。愛する予言者は次のように教えておられます。「人生は決して楽しく、浮かれ騒ぐばかりのものではない。」

このように、私たちが家族で共に働き、そして祈りと聖典の勉強を欠かさず行っていくならば、天からの祝福が私たち地上の家族に必ずもたらされることを証します。イエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。



経済的な試練に立ち向かう人に 与えられる祝福

十二使徒定員会会員 ジェームズ・E・ファウスト

数年前、私が関係したある高等評議員会の、思慮深く優秀な一員だったジェームズ・T・エルクソン監督は、次の非常に印象に残る意見を述べられました。「今の世代の人々は、経済的な逆境から来る祝福を知らな過ぎる。」今朝私は、経済的な圧迫によるチャレンジを甘んじて受ける人々にどのような祝福がもたらされるかということについて話したいと思います。

不況と一時的景気後退の区別は、経済学者にもなかなか難しいようです。ある人はこのように定義づけています。「一時的景気後退とはベルトを引き締める時期のことで、不況とはベルトを引き締める余裕さえもない時のことである。」(*Braude Speaker Encyclopedia*, p. 46)

世界中の国々が、経済的にますます困難な時期に入ってきています。失業したために、一生懸命働いて手に入れた財産を失った人もいます。食糧や衣料品の欠乏に直面している人もいます。しかし大抵の人は、一生に一度や二度は経済的に困難な時期に遭遇するものです。伝道の書には次のように書かれています。「……必ずしも速い者が競走に勝つのではなく、強い者が戦いに勝つでもない。また賢い者がパンを得るのでもなく、さとき者が富を得るのでもない。また知識ある者が恵みを得るのでもない。しかし時と災難はすべての人に臨む。」(伝道の書9:11)

救い主は天父について語られる時に、このことを立証されました。「天の父は、悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さるからである。」(マタイ5:45)

災いが転じて祝福となった例があります。それを理解するために、福音の神権時代から例を見てみましょう。次にあげる例は、人類一般にあまねく意義のあるものですが、同時に、私たち個人に対しても、人生において試練に直面した時に教訓を与えてくれます。

ゲツセマネにおける救い主のあの大きいな苦しみやその後のはりつけは災いでした。しかし、人はキリストの贖いの犠牲により、死と地獄から贖われることになりました。また散らされたイスラエルは、忠実な血を世界中にまき散らし、そのために多くの国々が今日、福音の計画にあずかることができるようになりました。ニーファイ人の歴史は試練と災いと受難の歴史ですが、それを通して得た経験により、力と発展がもたらされました。

主は、試練や逆境から学ぶことがどれほどの価値を持つか御存じです。

人は年を追う毎に新しい体験をします。チャールズ・ディケンズは「二都物語」の背景について、はしがきの中で次のように書いています。

「それはおよそ善き時代でもあれば、およそ悪しき時代でもあった。知恵の時代であるとともに、愚痴の時代でもあった。信念の時代でもあれば、不信の時代でもあった。光明の時でもあれば、暗黒の時でもあった。希望の春でもあれば、絶望の冬でもあった。前途はすべて洋々たる希望にあふれているようでもあれば、また前途はいつさい暗黒、虚無とも見えた。」(中野好夫訳「二都物語」上巻, p. 7, 新潮社)

英国レスターのある古い教会堂の外壁に、非常に印象深い言葉が刻まれています。

「1654年、国全体にわたってすべての物が破壊され、あるいは汚されていた時にあって、ロバート・シャーリー男爵は、この教会を創設し、建立した。最悪の時にあって最良の事を行ない、多難な時に最良の事を望んだ唯一の人物として賞賛を受くるに値するものなり。」

国家間の経済の動向はさておき、経済的な困難は、いつだれにでも振りかかってくるものです。個人的な財政上の困難を避ける保証などというものなどありません。財政的な困難は、洪水や火災、地震などのような、自分の手ではどうすることもできないものが原因している場合があります。事故や病気が、思いもよらないような多額の医療費をもたらすこともあります。また家族の者の不幸が私たちの助けを必要とする場合もあります。失業やインフレーションは、一生懸命働いてためたお金もたちまちのうちに消してしまいます。

経済的な圧迫には、個人的なチャレンジが伴うことがあります。失意やフラストレーションは、応々にして不幸につきまわってきます。経済的な問題は、時には家族の関係にも緊張をもたらすことになり、欲し

い物や必要な物でもなしで済まさざるを得なくしてしまいます。またある人にとって災いでも、他の人にとっては良い機会になることもあります。シェークスピアは「お気に召すまま」の中で次のように述べています。

「逆境が人に与えるものこそ美しいかな。それは蝦蟇にも似て、醜く、毒を含んでこそおれ、その頭には、めでたい宝石をば匿している。」(筑摩書房、阿部知二訳「シェークスピア全集II」より)

経済的なチャレンジが後々にも響く結果になるか否かは、人生に対する私たちの姿勢により異なります。ある作家は次のように言っています。

「同じひとつの物質から、ある胃腸は滋養を吸収し、ある胃腸は毒を吸収する。それと同様に、人生における同じひとつの落胆は人の気持ちを鍛え洗練する場合と、はじめにしてしまう場合とがある。」(ウィリアム・マシューズ、*Webster's Encyclopadia of Dictionaries*, New American Edition, Ottenheimer Publishers, Inc., p. 864)

リブランド・リチャーズ長老は、希望を失った若人から何を目標に生きたらよいのかと聞かれた時の様子を、次のように語っています。

「井戸の中に入ったふたつのバケツの物語を覚えているかな。ひとつのバケツは上がってきた時に、次のように言ったそうだ。『本当に冷たい、わびしい世の中だなあ。何べん一杯になって上がってきたもいつでも空で下って行かなければならないんだから』と。するともうひとつのバケツが笑いながら言ったそうだ。『僕の場合は別さ。空っぽで何べん下ろうとも、いつでも一杯になって上がってくるのさ』と。」(リブラン

ド・リチャーズ, Conference Report, April 1951, p. 40)

非常に教会に熱心だったジョセフ・スタッキー兄弟は、しばらく病んだ後、奥さんと、伝道に出ている長男を頭に7人の子供を残して、1927年のクリスマスイブの夜、亡くなりました。その後ふたりの子供と、彼女が養育していた甥^がが亡くなりました。もうひとりの息子も伝道に出て行きました。息子の伝道は、彼女が、夫の生命保険から月々入るわずかばかりのお金で生活するかわら、内職に裁縫をしながらやり繰りしたものでした。

そうした困難な時期に、ワード部の困っている会員に対して小麦粉が配給されました。その仕事に、若い青年が何人か携わることになりました。小麦粉の袋がスタッキー姉妹の家にも運ばれました。しかし自分以上に小麦粉を必要としている家族がワード部にあるのではないかと思った姉妹は、家族に自立の精神を教えるようにしているからと言って、配給を断りました。教会の資格ある会員は、監督による教会からの援助を気軽に受け取る必要があるのですが、スタッキー姉妹はここで、玄関にやって来たこの若い青年に教訓を与えたかったようです。小麦粉を配るこの若い青年こそ彼女の実の息子だったのです。生き残った子供たちは皆大学に行き、立派な人になりました。彼らは皆、「あるものでまかなえ。さもなければ、それなくして済ませよ」というモットーに従って生活しました。

ある賢人は、「主は、難儀の高地の中から、最良の兵卒を手に入れられる」と言っています。(C・H・スパージョン, Sorrows Discipline, #9) 経済的な逆境を克服するところから得られる祝福としては、次のよ

うなものがあります。

まず第1に、これは多分最も大切なことですが、私たちの信仰と証が強められるということです。信仰の強い教会員は、経済的な圧迫の中にあって「早くわれを求めし者」を主が助けて下さることを知っています。(教義と聖約54:10)しかし、早くから信仰生活を始めなかった人でも、もっと熱心に主を求めようと決意することができます。私たちは主のみ手があって私たちを助けてくれていると感じるようになります。また困難な時にあって、人生における優先順位を再評価したり再び秩序立てたりする機会を得ることもなります。何が最も大切なのかを知り、信仰と証を強めるために道が開けるのです。

第2に、謙遜になる必要性を学びます。主に頼ることにより素直な心がはぐくまれ、それが謙遜さを培う要因となるのです。

第3に、何とか生きていくために家族全員が団結することを強いられることから、お互いに協力することや愛し合うことを学びます。

第4に、個人の威厳と自尊心を得ることができるといことです。だれかが言いました。「人生に大きなハードルがあることを喜べ。そしてまた、ハードルが、ほとんどの人が乗り越えがたの高さより高いものであることを喜べ。それらがおびただしい数にのぼることをも喜べ」と。

第5に、私たちはこれまで以上に強くそして粘り強くなります。エドモンド・パークは次のように述べています。「困難とは厳しい教師である。またそれは親のような守護者であり立法者でもあられるお方の最高法令により定められたものであり、そのお方は、私たち以上に私たちのことを知り、

私たちを愛しておられるお方である。私たちと苦闘を共にするそのお方は、私たちの勇気を高め技量を磨いて下さる。私たちに刃向かうこの困難こそ、私たちを助けてくれるものなのだ。」(“Reflections on the Revolution in France,” *Edmund Burke*, Harvard Classics, 50 vols., New York: P. F. Collier & Son Co., 1909, 24: 229—300)

第6に、私たちは忍耐を修得します。時時、経済的な逆境は私たちが思う以上に克服に時間を必要とすることがあります。逆境を克服するために努力する間に逆境に耐えることを学ぶ人は、忍耐力を増し、したがって環境に左右されることがなくなります。経済的社会的苦難の中にあつて、モルモン経の中のある一部の人々は「悪魔の誘惑に並びかれないよう」忍耐強く災いに耐えることを戒められました。(アルマ34: 39)

第7に、逆境に遭遇しなかったならば決してはぐくまれなかったと思われるような才能や技量を利用することにより、以前には到達できなかった高きに到達することができます。経済的に欠乏した状態に陥ることにより、豊かな学習経験への道が開かれるのです。

第8に、主を信頼することを学ぶことにより、恐れを克服することができるようになります。「もし汝らに備えあらば^怖ることなからん」とあります。(教義と聖約38: 30)

経済的な苦境に対処する方法は数多くあります。時には、望みよりも少量のものでがまんしなければならぬこともあります。ある人は次のように言っています。「私がある小さな教会の前を通った時、大きなポスターが掲げられていました。それには大きな字で『いちご祭』と書かれ、その下に小

さな文字で『不況のため、すももを出させていただきます』と書かれていたのです。」(*Braude Speakers Encyclopedia*, p. 5)

カレン・ニールソンは1844年、デンマークのアールボルグの近くで生まれました。農家の娘でした。彼女は幼くして、優れた酪農の技術を父親から直接教え込まれました。

1861年、カレンはバプテスマを受けましたが、改宗に父親が反対したため、再び家に戻ることができなくなりました。1862年、彼女はスカンジナビアの聖徒の一団と共にデンマークを去り、ユタに移住しました。数年間ユタ郡に住んだ間に、彼女はベンジャミン・フランクリン・バーニーと結婚し、ふたりはセビエル盆地に定住するように召されました。

カレンは10人の子供をもうけてからしばらくして、夫に先立たれました。何人かの子供がまだ家に残っていた時でした。彼女は頼れる親族もなかったので、デンマークの農場で得た知識に頼ることにしました。父親から学んだ飼育技術を使い、乳牛の品種改良に励みました。間もなく、彼女の乳牛はその地域で最良の品種として認められるようになりました。このようにして彼女は、必要なものをまかなうことができるようになったのです。カレンは、80歳を優に越えるまで朝夕牛の乳しぼりを行ない、息子や孫たちの助けを借りて仕事にいそみしました。彼女が残したものは勤労の模範であり、私たちの人生が自分の努力にかかっているという知識でした。彼女は、決して逆境から顔をそらすようなことはしませんでした。それどころか、逆境によって強められたのです。

私は、経済的な逆境を克服しようと努力

する時にもたらされる9つの祝福についてすでに申し上げましたが、ここで経済的な圧迫を克服する上で助けとなる6つの方法について提案したいと思います。

1. まず神の国を求めなさい。この求めるといふ動作には、什分の一を納め、断食献金も惜しみなく納めることが含まれます。従順になることにより、物心両面にわたって祝福されるのです。神の国をまず求めるということは、使徒ヤコブが言った「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」という「尊い律法」（ヤコブ2：8）を守るように努力することも含まれます。また、神の国を求めるといふことには、神聖な戒めを守ることも含まれます。霊的な力強さというものは、祈りや聖典の勉強、また「主が負わせたもうすべてのことに喜んで服従」（モーサヤ3：19）する気持ちなどのように、様々なところから得られます。こうした基準に合致した生活をすれば、心が平安になるのです。

2. 家族の力および家族の資力を結束する。家族の資力となるものの筆頭は霊的な力であり、それは共に祈ることによりさらに強められます。家族が協力して予算を立てることは、家族会議を設けることと同様に特別な団結をもたらします。ストレスが多い時は、思いやりの心が特に必要であり、感謝されます。また使える金額に限度がある時は、将来のために貯金する必要のあることなど、お金を上手に使うことを子供たちに容易に教えられるものです。またこの世間的な財産や富に心を傾けることなく、永遠の見地から物事を眺めることを家族に教えることができるでしょう。また家庭は人を助けるために個人の力を結集する場ともなります。それに、親族からの援助を心か

ら感謝して受け入れる方法を覚えることも大切なことです。

3. 信仰を实践する。救い主は「信ずる者にはどんな事でもできる」（マルコ9：23）と、また「何事も結局は好都合となるべし」（教義と聖約90：24）と言われました。大切なのは「何事」に対しても従う態度です。積極的な態度を維持し、快活でいることも助けになります。「これ皆汝に善からんため、汝に経験を与えんためのものなり」（教義と聖約122：7）と信じることは、霊の安定剤を服用しているようなものです。

4. 仕事をする時に融通性を持つ。セオドア・ルーズベルトはこう言いました。「人は働かなければならないからと言って、同情は必要ではない。人生がもたらす報酬の中で、やりがいのある仕事を一生懸命行なう機会ほど素晴らしいものはない。」（*The Reader's Digest Treasury of Modern Quotation*, New York: Reader's Digest Press, 1975, p. 169）経済的に困難な世の中においては、少ない賃金でも働かなければならないことがあります。私たちは、他の職場でも働けるだけの技術を身につけなければなりません。過去に訓練を受けた分野とはまったく別の分野で第二の職業に就き、新たな喜びと満足感を味わっている人も大勢います。また家族の者は、適切な仕事を見つけることにより、収入を補う道を見つけなければなりません。働く機会を得る上で選り好みをしなすことは、何とか暮らしを維持していくための手段となります。一日骨身を惜しまず仕事に励んだために解雇を逸れた人も大勢います。そのように努力すれば、私たちの威厳や自尊心を奪ってしまう政府からの施しも拒むことができるのです。デビッド・グレイソンはこう言っています。

「私が見いだした幸福とは、ほとんどどの場合でも骨身を惜しまず働くことの見返りとして得られるものである。」(The Reader's Digest Treasury of Modern Quotations, p. 171)

5. 借金を避ける。「ペストを避けるように借金を避けなさい」とJ・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長は教えています。(J・ルーベン・クラーク・ジュニア, Conference Report, April 1937, p. 26)これは、異常なまでの高金利が続く現代にあって、特に健全な勧告と言えましょう。借金とその申し子である利子は、情容赦のない酷使者のようなものです。今から1年半前、このタバナクルで次のように言うクラーク副管長の声を録音で聞きました。

「借りる人は皆、利子はどれほどなのか理解しなければならぬ。それは昼夜を問わず、借りる人につきまとう。」(Conference Report, April 1938, pp. 102—103)

6. 出費をひかえる。南ユタのある小さな農村の住民が、わずかな収入でどのようにして生活しているのかという疑問に対して、ジョージ・ライマンはこう語っています。「彼らはお金を使わないで生活しているのです。」またレベンソンは次のように書いています。「偉大な思想家たちは、何世代にもわたって、将来どこかに通貨のない社会が生まれることを夢見ていた。私たちの中には、その点で時代の先端を行く者が多い。(レベンソンはクレジットカードのことを暗示している：訳注)」富が永遠の祝福を約束することはありませんし、経済的な苦しみも永遠の契約を無効にしてしまうこともないのです。

ニール・A・マックスウェル長老は次のように述べています。

「不況は厳しいものです。しかし、だからと言って不死不滅の真実性が変わるものではありません。再降臨は必ず起こるものであり、予知の不可能な株式市況によって左右されるものではないのです。ガンにかかったからと言って、神殿でのエンダウメントが解消されるわけではないのです。……

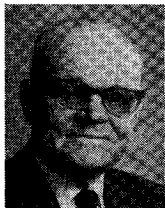
私たちの生涯を左右する大切なことは、損なわれず、輝きをもって存在しています。いろいろな約束も、変わらず私たちの前にあります。要は私たちに掛かっているのです。」(“Notwithstanding My Weakness”, Salt Lake City: Deseret Book Co., 1981, p. 57)

地からたくさんの実りを得た金持ちのたとえ話をする前に、イエスはこう言われました。「あらゆる食欲に対してよくよく警戒しなさい。たといたくさんの物をもっていても人のいのちは、持ち物にはよらないのである。」(ルカ12:15)

主は言われました。

「……これを以てこの事に就きてもはやわれを煩わすことなかれ。されど汝知るべし。正しき業を行う者はよき報いを得、すなわちこの世にありては平和を得、次の世にありては永遠の生命を得ん。」(教義と聖約59:22—23)

経済的な苦難の火で精錬されることにより、私たちには永遠の祝福がもたらされ、家族は一致団結することによって救われて昇栄の機会を得るのです。このことをイエス・キリストのみ名により証します。アーメン。



日の光栄に至る自立の本質

第二副管長 マリオン・G・ロムニー

兄 弟姉妹の皆さん、私は、これまでに何度もこの福祉集会で話をするように頼まれてきました。そのためか、かつて私の親しくしていたある老人と同じような話し方をしなければならないのではないかと思います。この老人は一部の人から話をやめる潮時を知らない人だと思われていました。あるワード部の集まりでも、長話をするので意見を求めない方がいいと敬遠されていました。しかし、ワード部の人々も、さすがに彼だけを無視するわけにもいかず、ついに意見を述べてもらうことにしました。そこで、どうしたらそのように長生きをして奉仕ができるのか一言で話して下さいと頼みました。老人は立ち上がってこう言いました。「息を抜かないことだ。」きょうの私の話はこれほど簡潔ではありませんが、要点だけを話すように心がけたいと思います。

私は福祉の原則に含まれる簡潔な真理を大切にしています。これはこの世が始まって以来、すべての聖い予言者たちが教えてきたものです。私はこの真理について話すことに飽きることを知りません。きょうは皆さんに、自立の原則と、それが霊的成長に及ぼす影響についてお話したいと思います。

時の初めから、人は自活し、それによって自立するように勧告されてきました。主

がこの原則をそれほど重要視されるのはなぜでしょうか。その理由を知るには、自立の原則と人の自由とがいかにか密接につながっているかを理解しなければなりません。

このテーマに関して、アルバート・E・ボウエン長老はこう語っています、「主は御自身の民に、それが外的な要因によるものであれ、精神的な束縛から生ずるものであれ、抑圧された状態を抜け出すように望んでおられるに違いありません……ですから教会は、働く力のある人をいつまでも他に依存した状態に置いたままにする制度をよしとはしません。与えることの真の目的は、それとは逆に、人々が自立できる地点まで到達し、束縛を免れるように助けることであると、教会は主張しているのです。」(*The Church Welfare Plan, Gospel Doctrine manual, 1946, p. 77*)

現在、社会の中では善意ある人々の手によって、困窮した人々を援助する数多くのプログラムが実施されています。しかし、こうしたプログラムの多くが、人々の自立を助けるのとは対照的に、単に援助を与えるだけの先の見通しを欠いた目標を掲げています。私たちは、働く力のある人々の自立を目指して努力を続けていかなければなりません。

私は以前にリーダーズ・ダイジェスト誌

から次の記事を切り取っておきました。前にも引用したことはあるのですが、繰り返して引用するだけの価値があると思います。

「私たちにもなじみの深い隣町セント・オーガスティンでは、かもめの群れが豊かな食物を前に、飢え死にしている。魚は豊富にいるが、かもめたちは魚を捕る方法を知らないのである。彼らはすでに何世代もの間、エビ漁船が引き揚げた網から投げしてくれるくずエビをあてにして生きてきた。ところが、その魚船団が他の漁場へと移ってしまったのである。……

エビ漁船はかもめたちに生息しやすい格好の場所を提供していた。かもめたちはわざわざ自分で魚の捕り方を学ぼうとはしなかったし、子供たちに魚を取ることを教えようとしなかった。代わりに、エビのつまった網のところへ子供たちを連れていったのである。

思いのままに大空を飛び、時には自由の象徴そのものとも言われるあのかもめが、『勞せずして得る』という誘惑に負けたために、今や飢えて死のうとしてしている。自立

が施し物の犠牲になったのである。

このかもめに似た人間が大勢いる。彼らは何ら悪びれることなく、合衆国政府という『エビ漁船』が引き揚げる税金の網からおいしい食物をついばんでいる。しかし、政府の支給品が底を突いたらどうなるだろうか。次の世代を担う子供たちはどうなるのだろうか。

愚かなかもめにならないようにしようではないか。私たちは……自給自足する能力や、必要な物を作り出す技能、儉約の精神、それに真に自立を愛する心を持ち続けなければならない。」(“Fable of the Gullible Gull”, *Reader's Digest*, Oct. 1950, p. 32)

むさぼることや不当な利益を得ることが習慣となって広く現代社会をむしばんでいます。そのために、財産をさらに増やす力を持っている裕福な人までが、政府に対して利益の保証を求める有様です。選挙になれば、立候補者は政府の予算を有権者のためにどう使うかを公約し、それによって当選が決定することがしばしばあります。こうした風潮が世間一般に受け入れられ、実際に行なわれるようになれば、いかなる社会であれ、そこに住む人々は奴隷と化してしまうでしょう。

私たちは、政府の庇護を受けるだけの者となるわけにはいきません。たとえそうする合法的権利があるとしてもです。そこには自尊心を初め、政治的、物質的、靈的な自立を失うというあまりにも大きな犠牲が伴うからです。

一部の国々では、勤勞所得と不勞所得を区別するのが非常に難しい状況にあります。しかし、原則はいずれの国においても同じ



です。すなわち、自立を目指して努力し、自分の生活を他の人々に依存してはならないということです。

過ちを犯しているのは政府だけではありません。教会の多くの両親たちは、家族の蓄えから与えるばかりで子供たちを甘やかし、「愚かなかもめ」を仕立てていないでしょうか。子供に物をあてがうだけの両親は、国民に失業手当を施すだけの政府と同じ過ちを犯しています。事実、そのような両親の態度は、政府の対策以上に深刻な害を及ぼす可能性があります。

監督や神権指導者が、ワード部の会員を「愚かなかもめ」に仕立てる過ちを犯していることもあります。一部の教会員は、経済的、情緒的に監督に依存するようになっています。その出所がどこであろうと、施しは、施しです。教会や家族のとする行動はすべて、会員や子供たちを自立へと導くものでなければなりません。政府の計画は必ずしも私たちの思い通りになるわけではありません。しかし自分の家庭や自分たちの集まりであれば、私たちが管理できます。もし、これらの原則を教えて実践するならば、いかなる国にあらうと政府の対策に潜む好ましくない効果に立ち向かっていくことができるでしょう。

私たちの中には、どんなに自立したくてもそれができない人もいます。ヘンリー・D・モイル副管長は、こうした人々のことを心に描きながら、次のように語りました。

「この偉大な原則は助けの必要な人々や貧しい人々に援助の手を差し伸べることを拒むものではありません。体を動かすことのできない人、老人、病人は配慮の行き届

いた世話を受けますが、働く能力のある人は、自らの努力によって道を開くことができるのであれば、最善を尽くして働き、他の人に依存せずに自立します。すなわち、逆境を一時的なものとしてとらえ、自己の能力に対する信頼をもって正直に働き、自分と家族を自立できるまでに引き上げ、そしてあらゆる場において、援助が必要な部分を最小限に抑え、受けた援助に対しては最大限の努力を払ってその埋め合わせをするのです。

確固たる信仰と真の勇気を持ち、不動の決意を抱き、胸の内に自立への愛を燃え立たせ、自らの業績に誇りを抱いて歩むならば、乗り越えられない障害に出合うことなどめったにありません。

謙遜な心と祈りの気持ちで、神を畏れながら勤勉に生活するならば、私たちの内に信仰が培われ、その力によって恵み深い天父の祝福を呼び寄せることができます。そして文字通り、困難は消え去り、私たちの独立と自由は確立され、維持されるのです。」

(Conference Report, Apr. 1948, p. 5)

自立は最終目的ではなく、それに至るための手段です。したがって、完全に自立している人が、その他の望ましい特質をことごとく欠いている場合もあります。富を得れば他人の援助をまったく必要としなくなり、自立することもできます。しかし、そこに何らかの霊的な目標がなければ、その人の身と霊をむしばむことになりかねません。

福祉プログラムは霊的なものです。1936年、このプログラムが始められた時、デビッド・O・マッケイ大管長は、次のような洞察力に満ちた所見を述べました。



「私たちは、霊的な特質の育成に最大の関心を寄せなければなりません。霊性とは人が身につけることのできる最高のものであり、『人間を万物の霊長と呼ぶための至高の賜』すなわち人間に^ま具わっている神性のことなのです。それはまた、己れに打ち勝ち、無限無窮の御方と心を通わすことのできる意識でもあります。ただ霊性だけが、人生で最高の満足をもたらすことができるのです。

衣服の乏しい人々に衣服を与え、食卓の貧しい人々に十分な食糧を与え、職がなく絶望と戦っている人々に仕事を与えること、これらは確かに意味のあることです。しかし、結局、教会〔福祉計画〕からもたらされる最大の祝福は、霊的なものなのです。外見的には、すべての行為が物質的な事柄に向けられているように思えるかもしれませんが。衣服の再生、果実や野菜の缶詰、食料品の貯蔵、入植のための肥沃な土地の選定、これらは皆、この世的な事柄に見えます。しかし、そこに浸透しているものは、そしてそれらの行為を促し聖別しているも

のは、まさに霊性なのです。」(Conference Report, Oct. 1936, p. 103)

教義と聖約の中には、次のように記されています。

「この故に、われ誠^{まこと}に汝らに告ぐ。われにかかわるすべては霊のことなり。われは何時たりとも、いまだ嘗て俗世の事にかかわる律法^{りつぽう}を与えたることなし。如何なる人にも、人の子らにも、わが造りし汝らの先祖アダムにも与えたることなし。

見よ、われはアダムに自ら自由意志を行うことを許したり。われは彼に誠命^{まことのみこと}を与えしが、俗世にかかわる誠命^{まことのみこと}を与えたることなし。わが誠命^{まことのみこと}は霊に関わるものなればなり。」(教義と聖約29：34—35)

この聖句から、この世的な戒めというものは存在しないことがわかります。また、人間は「己れの事を自ら為す者」でなければならぬということもわかります。しかし、人間は自立しなければ、己れのことを自ら行なうことはできません。このことから考えてみると、独立や自立は私たちの霊的成長を左右する重要な鍵であることが理解できます。自立を脅かされるような状況に陥った人は、自由が脅かされていることに気づくでしょう。すなわち、他への依存度が高まれば、行動する自由がたちまち失なわれていくことに気づくのです。

今までお話ししてきたことからおわかりのように、自立は行動する完全な自由を得るための前提条件です。しかも、その自由を使って正しい選択をしなければ、自立の中に霊的なものは存在しません。それでは、霊的な成長を遂げるには、自立した後は何をすればよいのでしょうか。

自立を靈的なものとするための鍵は、自立に伴う自由を用いて神の戒めを守ることです。聖典の中で明らかに命じられているように、貧しい人々に与えることは、豊かに持つ人々の義務です。

ヤコブはニーフアイの民に向かって次のように言いました。

「あなたたちは自分の兄弟を自分自身のように思え。かれらと皆親密にして、あなたたちのようにかれらも富者になるように惜しまずにあなたたちの財産を与えよ。

財産を求める前にまず神の王国を求めよ。

あなたたちがすでにキリストに望みをもってから宝を求めたならばその通りに宝が手に入るであろう。しかし、その時あなたたちがその宝を求める目的は、裸でいる者に着物を着せ、飢えている者に食を与え、束縛されている者を救って自由にし、病んでいる者と悩んでいる者とを救うなど、およそ善事を行うことである。」(ヤコブ2：17—19)

主は今日の神権時代において、教会が発足してわずか9カ月足らずの時に次のように言われました。

「^{しか}而してわれ汝らの救われんために一つ^{いまい}の誠命^{めい}を与う。そは、われ汝らの祈りを聞き貧しき者の訴えを聞きたればなり。われは富める者を造りたれど、一切の人はわがものにしてわれは人を偏^{かた}より見る者にあらざるなり。」(教義と聖約38：16)

この啓示は1831年1月2日に与えられました。その翌月に主は別の啓示を与えて言われました。

「汝らもしわれを愛すれば、われに仕えわがすべての誠命を守るべきなり。

見よ、汝ら貧しき者のことを思い起し、……己が財物を神に奉獻せよ。」(教義と聖約42：29—30)

その同じ月に、主は再びこの問題に言及されました。啓示を受けた長老たちが、多少怠慢であったことは明らかです。彼らは即座に行動に移していませんでした。

「見よわれ汝らに告ぐ。汝ら貧しき者、乏しき者を訪れて救いを施さざるべからず。」(教義と聖約44：6)

貧しい人との世話をするという私たちの責任については、聖典にたくさんの戒めが記されています。ですから、これ以上詳しくお話するつもりはありません。私には何か理屈に合わないように思えるのですが、私たちは自分のためになるこれらのことを行なうのに、絶えず主から戒めていただかなければなりません。主はこう言われました。

「自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の命を失っている者は、それを得るであろう。」(マタイ10：39)

私たちは人に仕え、人を助けることによって「自分の命を失」います。しかし、そうする時に、永遠に尽きることのない真の喜びを味わうのです。奉仕とは、日の光栄の王国に入る資格を勝ち取るために、この地上でがまんして行なうようなものではありません。それは、日の光栄の王国に昇栄した人との生活を形造る大切な要素なのです。

奉仕が天父のみ業を達成するものであることを知りながら、また天父のおられる所に住んで天父のようになりたいと願っているながら、なぜ私たちは互いに仕え合うように戒めてもらわなければならないのでしょうか。ああ、私たちの心が清められて、こ

れらすべてのことが自然に行なわれるようになる時、それは何と輝かしい日になることでしょう。その日には戒めなど必要ありません。なぜなら、だれもが経験を通して、真の幸福は無私の奉仕に携わる時にもたらされることを知っているからです。自立に伴う自由を活用して、施しや奉仕を行なうではありませんか。

奉仕に必要な条件について考えてみると、あるいは神がまさに奉仕の御方であることについて考えてみると、自立することがいかに重要であるかがおわかりになると思います。自立していなければ、私たちが持つて生まれた奉仕への願いを実行することはできません。何も持っていなければ、どうして与えることができるのでしょうか。食糧棚が空では飢えた人に食物を施すことはできません。財布が空ではお金に困っている人を援助することはできません。心が飢え渴いていては、人を理解し支えることはできません。学んでいなければ、教えることはできません。そして何よりも大切なことは、靈的に弱くては、靈的な導きを与えることはできないということです。



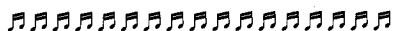
豊かな人と貧しい人との間には、相互依存の関係があります。施しという過程を通して、貧しい人は強められ、豊かな人は謙虚になります。そして、両者が共に清められるのです。貧しい人は貧困という束縛から解放されて、物心両面にわたり、自分の持つあらゆる可能性を自由に伸ばすことができます。また豊かな人は、必要以上のものを分け与えることにより、施しという永遠の原則を実践するのです。完全に立ち直って自立した人は、助けを必要とする人人に手を差し伸べます。こうして奉仕の輪は広がっていくのです。

だれにでも自立している部分と人に頼っている部分とがあります。したがって私たちは、各々が力を発揮できる分野において、人を助けるために尽力しなければならないのです。同時に、本当に助けが必要な時には、妙なプライドは捨てて、援助の手を有り難く受け入れなければなりません。もしそれを拒むならば、助けを与えようとしている人から、清められる機会を奪うこととなります。

繰り返して申し上げますが、自立の原則は、福祉プログラムのすべての原則がそうであるように靈的なものです。これは終わりの日のプログラムではなく、今日の私たちのためのプログラムです。教会の使命に関する話の中で最近強調されている3つの使命のひとつは、聖徒たちを整えることです。これこそ福祉プログラムの目的です。今が私たちの生活を整える時です。これらの真理を常に心に留めておくことができますように、イエス・キリストのみ名により祈ります。アーメン。



海外からの末日聖徒の音楽家が日本の交響楽団のオーディションに合格し、活躍している。昨年7月号のローカルページで紹介したチェネク・J・ヴァルバ兄弟は、読売交響楽団のゲストコンサートマスター（第一バイオリンの首席奏者）として、また、今月号で紹介するロイス・ジョンソン姉妹は、新星日本交響楽団の第一バイオリン奏者として、他の日本人の音楽家の中でそれぞれ異彩を放っている。



新星日響の第一バイオリン奏者ロイス・ジョンソン姉妹。(右下)ジョンソン御夫妻



新星日本交響楽団のバイオリニスト

ロイス・ジョンソン姉妹の証

日 本は私にとって特別な所です。最初に訪れたのは1982年の5月でした。婚約者に会うために訪れた私は、その時2カ月半ほど滞在し、日本の各地を見て回りました。美しい風景が大変に印象的でした。特異な日本の文化と日本の民には、多くの観光客を引き付ける何かがあります。私もすっかりとりこにされてしまいました。また、伝道活動が広く行なわれ、日本の人々が真の福音を受け入れて、それに従って生活している様を目にした時には本当に感動しました。今、私は短期間の滞在ではなく、長期間にわたってこの日本の地に住み、多くのことを学ぶ機会があることを、とてもうれしく思っています。

日本に来る前、私はカリフォルニアサクラメント交響楽団のバイオリニストとして活動していました。そして婚約したのです。

彼とはマンハッタン音楽学院に通っていた時に、ニューヨークワード部で知り合いました。彼はコロンビア法律学校で学んでいました。日本仙台伝道部で伝道して帰った彼は、日本で働きたいという強い望みを持っていました。それはとりもなおさず、彼と結婚すれば、サクラメント交響楽団での恵まれた地位を捨てて、東京に行かなければならないということでした。

どちらをとるべきか、私は本当に悩みました。天父に導きを求めて、真剣に祈りました。祈ろうとすると、私のわがままな心

が、結婚することによってあきらめなければならぬものを一つ一つ数え上げるのです。

答えが得られないまま数カ月が過ぎた頃、どうしても東京に行かなければならないという強い気持ちを感じました。長いこと離れていても、結婚の約束をしたその人が本当に永遠を共にしたい相手なのか確かめようと思いました。そして、ふたりの問題が解決できれば、東京で音楽活動ができるようになる、そんな望みも持っていたのです。

彼は、私たちが東京で送ることになるかもしれない生活がどんなに素晴らしいものか、私にいろいろ見せてくれました。でも時々、わがままな心が頭をもたげ、カリフォルニアにいた方がいいときさやくのです。

個人的に、また婚約者と一緒に真剣に祈り続けて1カ月、主のみたまがついに答えを下さいました。結婚して東京に住みなさいと。心が決まった今、次の問題は東京で仕事口が見つかるかどうかということでした。

彼がすぐに手配してくれ、私は東京の交響楽団でオーディションを受けることになりました。

最初のオーディションは新星日本交響楽団でした。外国で受ける最初のオーディションということで、私は本当に不安でした。それに、オーディションの日程がつまっており、マスターしなければならぬ曲がたくさんあったからです。立っては何時間も練習し、ひざまずいては主に助けを求める毎日でした。

ついにその日がやってきました。オーディションホールに入ってびっくりしました。アメリカとはずいぶん違って、オーケストラの前で演奏し、彼らの審査を受けるのです。あまりの不安に押しつぶされそうでしたが、

私はベストを尽くそうと心に決めました。不安をかき消すために、全身全霊を傾けて演奏に没頭しました。緊張の15分が終わった時、われながらよくできたという満足感があり、うれしくなりました。でも家に帰るとその喜びも消え去り、再び不安がつのってきました。

不安と期待の日を送っていると、楽団のマネージャーから面談したいという連絡が入り、そこで楽団は全員一致であなたの採用を決定したと告げられました。私は胸が一杯になり、心から主のみ守りと助けに感謝しました。

9月の初め、ワシントン神殿で結婚した私たちは、東京で新生活をスタートしました。毎日がこれまでになく幸せで喜びにあふれています。

プロの音楽家になるには、幼いうちから練習を始めるのが普通です。私の場合、バイオリンを習い始めたのは少し遅くて7歳の時でした。そのために1日の大半を練習室で過ごしました。私の時間の使い方と心を配ってくれる両親、絶えず努力することの大切さを教えてくれる教会があったことを今、心から感謝しています。

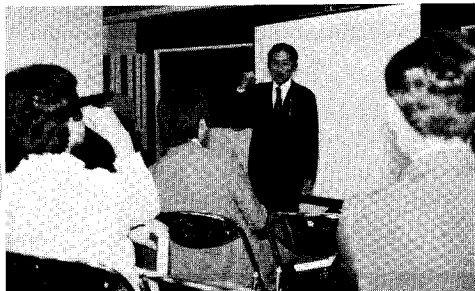
主は私に数々の素晴らしい機会を与えて下さいました。この教会はまさしく真実の教会です。なぜなら、教えに従うことによって、私はたくさんの祝福をいただき、この上ない幸福を味わっているからです。

主は私たちを心から愛して下さい、私たちが熱心に学び、努力するよう望んでおられます。そして、最善を尽くす時に、私たちの想像もできないほど大きな祝福を与えて下さいます。(1958年生まれ、東京南伝道部東京支部)

日中友好の花

中国語同好会主催

「日本と中国の
会員の集い」



「善意に満ち
純情であり
正智を持つとする人間
それこそは地球の花だ」

(劉 多鶴子著「杭州の青年」より)

もし、こんな花で地球を埋め尽くせたら
どれほど素晴らしいことでしょう。去る11
月3日の教会の一室には、こんな花が咲き
ほこっていたのです。その日、私たち町田
ステーキ部の中国語同好会の有志は、日頃
の活動のひとつの成果として「日本と中国
の会員の集い」を催しました。そこには、
いろいろな意味で中国に関心を持つ人々が
集まり、一人一人が福音を通しての「友好」
を感じることができました。

40人余りの参加者は「美しい中国をたず
ねて」という映画を観て、ひたすらに偉大
な中国に目をみはるばかりでした。雄大な
国土、極められた文化、その画面から見え
るものは、わが国の古い時代に影響をもた
らしたものも少なくありません。すっかり
中国に行った気分になった私たちは、幾人
かの方々のお話や証を聞いて、心の中にじ
っとしていられない感動を覚えました。

まず最初に上海から来られた周桂華兄弟

写真左：仲原姉妹と中国語同好会講師の胡
先生。写真右：元中国駐在外交官であった
渡部祝福師の話にも熱が込める。

の証に、私たちは鼓舞され、喜びを分かつ
ことができました。周兄弟は、御家族と一
緒に日本に住んで2年近くになります。少
し中国なまりのある日本語での証は、彼の
胸の内にあふれる主のみたまで満ちていま
した。「私は、アメリカに住んでいる人も、
中国に住んでいる人も皆、本当の兄弟と姉
妹だと思えます。神様の子供です。この教
会が中国の隅々にまで行き渡ったら、本当
に素晴らしいと思えます。みんな待ってい
ます。僕は、伝道はみなさんの義務だと思
います。私たちはほんとに兄弟姉妹です！」
神様の息子や娘であることを再三繰り返し、
証して下さった周兄弟の心も私たちの心も、
本当に親しい温かい思いで一杯になりました。

続いて中国留学と元中国駐在外交官とし
ての経験をお持ちの渡部正雄祝福師が、周
兄弟の証をさらに励まして、力強いお話を
して下さいました。渡部祝福師と周兄弟の
肩を組んでの中国語の会話を、参加者

は言葉こそ理解できなくとも、その熱い思いを理解することはできました。いつしか会場は、中国と日本という国の隔たりや、側面的関心を乗り越えて、本当に天の家族という気持ちでひとつになっていました。

恵まれてこの催しに花をそえて下さったふたりの方がいらっしゃいます。おひとり、画家であり、日中友好センターの中国に日本語教材を送る会々員でもある登坂多鶴子女史です。冒頭の詩は、この日登坂女史がご厚意によって参加者に寄贈して下さいました「中国中国中国」という詩集からの引用です。登坂女史が折にふれ絵のお仕事で訪中された時のことが書かれており、私たちが中国とその民を知るのにより助けとなるものです。もうおひとは、この催しの後から継続して行なわれている中国語研究会の講師を引き受けて下さった胡先生です。胡先生は、モルモン経の日本語訳をなさった佐藤龍猪兄弟が東京神殿の宣教師として在日しておられた時、佐藤御夫妻を通じて紹介を受けた方です。登坂女史も胡先生も教会員ではありませんが、人の値の大なることを知っておられ、兄弟愛をもって平和を望むことにおいて福音を実践していらっしゃる方々です。

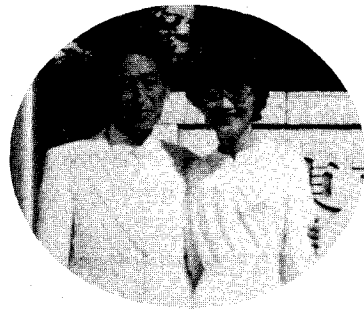
この催しは文字通り福音に添った楽しい集いとなり、だれもが天の家族の思いを味わうことができました。今、私たち同好会のメンバーは、この催しをきっかけに、もっとみこころになつた者となるよう努力し成長したいと願っています。天父が私たち霊の子供をどこにいても一人一人愛して下さいていることを心から証します。(レボ

ート：町田ステークス部町田第2ワード部・仲原 攝)
☆中国語同好会の活動に関心のある方は、〒194 東京都町田市小川4-4-11・仲原攝姉妹あてに御連絡下さい。



画家の登坂女史と会話を楽しむ渡部姉妹

神殿と私



東京神殿宣教師

横浜ステークス部横浜第2ワード部

渡部 正雄

「^{レボ}而して、祈りの家、断食の家、信仰の家、学問の家、栄光の家、秩序の家、神の家なる一つの家を建つべし。」(教義と聖約 88：119)

主に召され栄えある神殿宣教師として、

愛する姉妹と共にハワイ神殿に2年、東京神殿に2年奉仕させていただいた今、数え切れぬ恵みと証に、感謝の涙にむせびつつ、予言者ジョセフ・スミスを通じて指示されたこの聖句が主のみ言葉であることを強く感じます。

十二使徒であったジョン・A・ウィッツオー長老は、主の宮居である神殿について次のように説明しておられます。

「神殿の中で霊的な能力が創造され、それが全世界を祝福するために送り出される。主の宮居からの光は、教会内の各家庭を照らす。神殿から人の家へ通ずる道はまばゆく光り輝いている。神殿に連結している各家庭は明るく生き生きとして平安がある。神殿は教会員の幸せと啓発のためにあるのである。神権の鍵は神殿内に現われ、人生における多くの問題に^{こた}へるため、いと高きところから^{ちから}能力が与えられている。神殿内の諸儀式は深遠で意義深く、人生の真理を完全に包含している。生存の神秘を解き、福音の理解をより容易なものとする。」

私は約33年前、仙台の広瀬川でバプテスマを受けて会員となったのですが、その2年前からカトリック教会に1年、メソジスト教会に1年通いました。しかしいずれも改宗には至らず、この教会の宣教師に会って1カ月目で改宗しました。それには3つの主な理由がありました。すなわちこの教会に神殿があり、神権があり、生ける予言者がおられたことです。それですから、改宗以来神殿で働きたいと念願しておりました。

私は日本人として生まれ育ち、神道を学

び、神社に参拝し、戦時中は出征し戦死するつもりでしたが、なぜか多くの学友、戦友が亡くなったのに自分は本意ながら敗戦の故郷に復員しました。生きていることが恥ずかしく、つらかったのです。ただ、亡き戦友を^{まも}りたいという気持ちだけが念頭にあったのです。ですから死者のために働ける神殿を知った時には生き返ったような喜びを感じました。私は教義と聖約が1番好きでよく読みましたので、改宗した時、私には3つの念願がありました。それは、教会の史跡巡りをしたいこと、できるだけ多くの神殿を訪ねたいこと、そして家族が神殿内で永遠にひとつに結び固められること、この3つです。「求めよ、さらば与えられん」の聖句通り、改宗して19年目、1968年にこの夢が全部実現しました。特に最後の望みは、その8月、ソルトレーク神殿において、第11代大管長、当時の十二使徒定員会会長ハロルド・B・リー長老によって私共一家が永遠に一体に結び固められるということを実現しました。今日、自分が直接キンボール大管長の接手によって委任されたこの尊い権能をもって、この同じ尊い聖なる儀式を執行させていただいていますことを感謝しつつ、日夜主の助けを祈っている次第であります。

私たちの贖い主、救い主であられる主は「われにわかにはわが神殿に来らん」(教義と聖約36：8)と告げておられます。

愛する兄弟姉妹の皆様、共に神殿に参入して主の再臨に備えましょう。(わたべ・まさお 1914年生まれ、横浜ステーキ部祝福師)



ガンの宣告を受けて

「およそわれにありて医^いさるべき信仰ありて、死の命を受けざる者は医^いさるべし。」(教義と聖約42:48)

山口地方部小野田支部

木村 梅子

夫と娘夫婦から、最近体の調子が悪いようだから、病院に行って診察を受けてみてはどうかと勧められ、2月25日、夫に付き添われて山口大学医学部へ行ききました。

診察して下さった医師から、貧血がひどく、このままでは生命の危険も考えられるので、すぐに入院するようにと言われました。数日中に入院ということになりましたが、一旦^{いっしょ}帰宅し、その夜は夫と娘婿に^{かん}灌油の儀式を施してもらいました。

翌26日は何事もなく、いつものように働き、孫たちとも遊びました。ところがその夜10時頃、トイレの中で、普通ではとても考えられないひどい出血が始まったのです。大量の鮮血と血の固まりが、お産の後の時のようにほとぼり出てきました。

私の叫び声を聞いて、夫と娘が飛んで来てくれましたが、出血はどうしても止まらず、そのまま20分ほど過ぎたように思えます。このまま私が死んでしまったら、家族はどうなるだろうかという考えが頭をかすめました。病院に運びこまれたのは10時40分頃でした。医師も大量の出血に驚き、すぐに入院するようと言いました。

診断によると、子宮頸ガン第3期ということで、治療法としては、よくなるかどう

かは請け合えないが、放射線療法以外にはないということでした。

私はそれまでに、2度ほど生死の境をさまよった経験があります。いずれの時も主の助けを得て、生き長らえることができましたが、この時はさすがに、現世における自分の使命は終わったのではという気持ちになりました。そして、そう考えると、よく今日まで生かしてきて下さったという神への感謝の念が湧いてくるのですが、反面、このままではまだ主のみもとに行く資格はない、もっと主のみ業に働かなくてはという後ろ髪を引かれるような思いも起きてくるのです。

このように、思いが様々に乱れていた時です。たとえ今天に召されたとしても、それが主のみこころなら、霊界でも主のみ業に仕える機会が与えられるのではという気持ちになり、心の中に希望と安らぎが広がっていきました。そして、それからは絶えず、主のみこころのままになるようにと祈り続けました。

しかし、医師の診断の結果を聞いた夫の落胆は非常に大きく、このままでは信仰を無くしてしまうのではと思われるほどでした。私は夫の心に平安を与えたまえと主に祈り続けました。そして、忠実なら永遠に

夫婦であると神殿で結び固められた時のことを思いだして頑張るって欲しい、たとえ死によってひと時別れることがあっても、必ず次の世で会うことができる、それまでの間、私は霊界で働かせていただきながら待っていると、真心込めた手紙を夫に書きました。私の願いは聞き届けられ、夫は明るく立ち直ってくれました。夫のその様子を見て、私の心には、主は確かに生きておられるという強い確信が湧いてきました。

山口医大では、ほかに放射線療法を必要とする患者が多く、治療機器の使用予定がなかなか立たず、3月1日に小野田市の市立病院へ移りました。ここでも、医師、看護婦の方々から手厚い看護を受け、あまりのもったいなさに、ひとり涙することもありました。

岡本伝道部長が私の名を神殿の祈りの名簿の中に入れるよう手配して下さい、多くの兄弟姉妹が祈って下さっているということを夫から聞かされた時、私は我が身の幸せをつくづく感じました。

3月20日からコバルト照射を始めましたが、10回目を終えてようやく出血が止まりました。主事医は夫に、普通の人には放射線照射をすると、下痢や嘔吐などの副作用があるが、私の場合はそれもなくて、急速によくなっており、不思議なくらいだと言ったそうです。

3月21日、岡本伝道部長が遠く岡山の地から、わざわざ私を祝福するためにやって来て下さいました。3人の神権者が私の頭に手を置き、祝福の言葉を述べるのを聞いた時、世のちりにも等しい自分の上に注がれる愛を思い、涙が止まりませんでした。そしてその日から、下腹部の痛みもほとんど

ど消え、ガン末期特有の激しい痛み、下痢、嘔吐などもなく、本当に安らかな毎日を過ごすことができるようになりました。

今私は、主が生きておられるということ強く確信し、きょうの日を主によって生かされ、守られていることへの感謝と共に、この世を去った後もなお、自分のなすべき仕事があるという望みと喜びを心の中に感じています。(きむら・うめこ)

信仰を確立させるために

—仕事もたらす祝福—



牛乳販売店経営

大阪ステーキ部大阪第1ワード部

藤井 利広

教

会に行き始めたのは16歳の時でした。その頃私が住んでいたのは新興住宅街で、新しい家が次から次と建ち、日曜日には、いつもたくさんの引っ越し風景が見られました。

私の家は牛乳の販売店をしていましたが、それらの新築の家をお得意様とするために

は、当然日曜日にセールスに行かなくてはなりません。でも私は、安息日は教会に集うことが大切だと思っていましたので、母の言葉を聞かず、安息日のセールスはしませんでした。結果としてあまりお得意様を得ることはできず、新しく建った家に他の販売店の牛乳受箱が取り付けられているのを見る度に複雑な思いを味わいました。

日曜日にしないとなると、平日にということになりますが、その訪問先も新しく建てられた家ではなく古くからある家になります。しかし、そういう訪問先は牛乳嫌いの方か、他のメーカーの牛乳を取っている人がほとんどです。初めてセールスに行った時のことは今でもよく覚えています。ドアをノックしてから、その家の方が出て来られるまで、私は胸をドキドキさせながら、何から話し始めたらよいのか一生懸命考えていました。いざ話す段になると、思うように言葉が出てこず、どもるようにしてしか話せませんでした。中には、そんな私を見て、かわいそうにという気持ちから牛乳を取って下さった方もいるのではないかと思います。

私は恥ずかしいという気持ちと闘いながらセールスを始めましたが、いつも心の中には、自分の信仰を確立させるためにはまず仕事を成功させなければならないという思いがありました。ドアをノックする前には心の中で短いお祈りをしていました。しかし、自分ひとりの力でここまでやってこれたわけではありません。考えてみると、多くの人々の助けがありました。ある教会

員と一緒にセールスをしてくれました。今も3人の教会員が私の仕事を手伝ってくれています。セールスを専門とする人と知り合いになり、その人の力で多くのお得意様を得ることができたこともあります。16歳の頃を振り返り今の状態を考えると、本当に奇跡のような気がします。神様からの祝福と多くの人々の励ましがあったからこそ、ここまでやって来れたのだと思います。

今までは牛乳販売専業でやってきましたが、9月7日にパンの販売店を開きました。開店するに際してはいろいろと考えることがありました。牛乳の販売だけでも多忙なのに本当にやっていけるのだろうか、子供たちにどのような影響を与えることになるのだろうか。少しは金銭的な利益をという考えもありましたが、それがすべてではありませんでした。牛乳販売店だけでも十分なのですが、そのままでは少しの成功に甘んじてしまいそうな気がしたからです。

仕事を成功させるためには、努力が必要ですし、より謙遜な態度を身につけ、自然に人々に頭を下げるようにもなります。また自分の能力を100パーセント発揮しなければ、とても成功はおぼつきません。私が新たな仕事を始めたのは、そのような状態の中に自分をおき、さらに充実した日々を送りたいと考えたからなのです。

時々、なぜこんなにも忙しい日々を送るようになってしまったのかと、妻と顔を見合わせることもあります。初心を振り返りながら毎日を送っています。(ふじいとしひろ 1947年生まれ、大阪ステーキ部高等評議員)

読者の ひろば



資料としての「聖徒の道」

●創刊号から34年分の収集

求 道者の時（1973年）に、教会員が手にしているのを見たのが、「聖徒の道」との最初の出会いでした。おもしろそうだったので、さっそく借り、一気にその日のうちに読んでしまいました。

そしてその時から、「聖徒の道」の魅力に取り付かれてしまいました。予言者のメッセージ、福音の知識と証、福音の実践の仕方、世界各地の教会員の活躍などを読んでいくうちに、急に多くの霊的指導者、教師、友人と出会ったような気がしました。

それ以来、毎月「聖徒の道」が届くのを心持ちにすると同時に、資料としての価値にも気づき、バックナンバーもそろえ始めました。その結果、複写も含めて「LDS メッセージャー」（1949年12月創刊。「聖徒の道」の前身）、「聖徒の道」（1957年6月号から「聖徒の道」に改題）が合わせて34年分集まりました。残念ながら1954年1、2月号だけは、まだ未入手ですが、そのほかは創刊号から全部そろいました。

現在、これらの34年分の「聖徒の道」は、

私にとって、福音の知識の源泉のひとつとして、また、古い会員との共通の話題を得る手掛かり、教会歴史の貴重な資料、来日する教会幹部についての子備知識として威力を発揮しています。（新潟地方部新潟第2支部・大関洋一・27歳）

「聖徒の道」は紙上教会

表 紙は何を意味しているか、毎月楽しみに見えています。1982年3月号と5月号は、家族をひとつにする土台となっています。

最近ページ数の増えたローカルページでは、各地で活躍している人々の経験や証を知ることができますので、うれしく思っています。夫の仕事にはよく転勤があり、引越の度に何かと不安が先に立ちます。北上でバプテスマを受けてからは、まだ一度も転勤していませんが、所属する支部が変わることについては、不安も徐々に解消してきました。まだ会ったことのない人々の証や教を「聖徒の道」で読むのは、安息日に教会に集うのと似ています。

訓練の多い現世において、生きる予言者

の言葉を伝え、証を強め、私たちを結ぶ絆の役目を果たしている「聖徒の道」が、多くの人々に読まれ、生活の糧となるよう願っております。読む前の祈りは、私の理解力を増してくれます。(盛岡地方部北上支部・高橋美根子・34歳)

細く狭い道を照らす「聖徒の道」

私と「聖徒の道」との出会いは、今から6年半前にさかのぼります。当時求道者としてレッスンを受けていた私は、姉妹宣教師から一冊の小冊子をプレゼントされました。そして、毎朝夕お祈りすること、モルモン経を読むこと、そしてこの「聖徒の道」を読むことをチャレンジされたのです。

それ以来、毎月届く「聖徒の道」を楽しみにしています。まっ先に読むのがローカルページです。知り合いの人の証が載っていたりすると、「たとえ住む所は違っても、みんな各々の地で頑張っているんだな」と感じ、うれしくなると同時に励ましを受けています。通勤の時、電車の中や駅のホームで読みますが感動的な内容の時は、涙が出て困ることもあります。今までの信仰生活の中で、たくさんの助けを与えられてきましたが、その多くは「聖徒の道」から得てきたように思います。

最近、ある事で悩んでいた時、大管長会メッセージを見て驚きました。まさに私に対する主の言葉でした。私個人に向けられた主のメッセージのような気がして、むさ

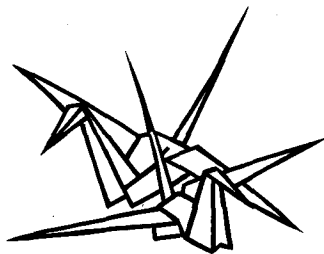
ぼるように読んだことを覚えています。そして、今何をなすべきか、また主の望んでおられることが何かを、よく理解することができました。

霊的に沈んでいる時、とても聖典を開く気になれずにいる時、「聖徒の道」は私に勇気を与えてくれます。再び光の中を歩むための助けとなってくれます。これからも「聖徒の道」を友として、この細くて狭い道を歩み続けていきたいと思っています。(東京東ステーキ部浦和ワード部・沢口まさ子)

カナダからのお便り

毎月「聖徒の道」を送って下さってありがとうございます。いつも月の中旬頃になると、そろそろ「聖徒の道」が送られてくるのではと郵便屋さんが来るのを心待ちにしています。

トロントにいる私には日本の教会の様子はあまり良くわかりませんが、「聖徒の道」のローカルの欄を見るとおおよそのことは理解できます。日本の教会はとても大きく



成長しているようですね。建物などもカナダの教会と比べて決して見劣りしません。

時々、ここトロントの教会員で日本に行かれた人に会うことがありますので、その兄弟姉妹たちから日本の教会員は、とても教会活動に熱心で礼儀正しい民だと聞いています。

自分の英語力の不足を思い知らされる時が多々ありますが、日本の教会員に遅れを取らないよう、出来る限り活動に参加し、とても楽しくやっています。(さいた・みえこ)

霊的成長への刺激剤

つも心を引き締めて、「聖徒の道」を読ませていただいています。中に載せられている言葉の一言一言が、私の胸を刺します。霊の成長のためにしなければならないこと、身につけなければならないこと、その他、たくさんの教えが書かれていて、私は読む度に、自分の霊的な成長の遅さと、日頃の聖典の勉強の足りなさを痛感しています。

そして、何より私が便利に使わせていただくのは、聖餐会での話の責任を受けた時です。その話の原稿を作成するに際して、いつも「聖徒の道」に載せられている指導者の話を参考にさせていただいています。とても助かります。どうぞ、これから先も、私たちのために、「聖徒の道」の制作に頑張ってください。(大阪堺ステーク部堺第2ワード部・北田美恵子・20歳)

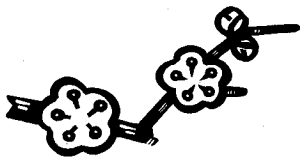
編集室から

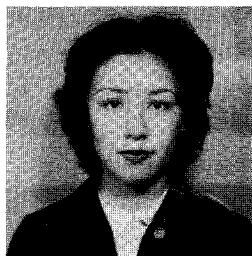
◎兄弟姉妹の皆様、新年おめでとうございます。晴れやかに元朝の第一歩をしるし、希望にあふれる新年を迎えられたことと幸いです。主イエス・キリストの福音を实践するものとして、皆様と共に信仰を高めて、さらに主のみ業に精進したいと祈念しています。

◎「聖徒の道」のローカルページが16ページに増えて、各地の話題や証などを以前よりたくさん紹介できるようになりました。特定のユニットに片寄った掲載にならないようにするためにも、ステーク部/地方部/ワード部/支部の広報委員の働きかけと、記事の収集に御協力をお願いします。

◎3月号掲載分締切は、1月20日(TDC必着)です。投稿には必ず連絡先(電話番号)を記入して下さい。宛先:〒158 東京都世田谷区上用賀4-9-19/TDC「聖徒の道」編集室。

◎「聖徒の道」がより多くの人々に読まれ、人々の信仰を鼓舞するために活用されるように、各ユニットの「聖徒の道」係を中心に、新会員を初め、まだ購読されていない人々に働きかけて購読をお勧め下さい。





「什分の一に関して思う四つの事柄」を読んで

●双子である私の場合……

大阪ステキ部大阪第1ワード部

平田 富美子

10月号の「聖徒の道」に『什分の一に関して思う四つの事柄』という記事が載せられていましたが、その記事を読んで以前の私の状態を思い出しました。

私は10年前に教会員となりました。まだ青少年の頃でした。宣教師から什分の一のレッスンを受けた時、「神様から頂いたすべての物の内たった10パーセントだけ返せばいいんだ。そんなこと簡単だ。それに神様にお返しするのは当然だ」と何の疑いも感ずることなく、レッスンを聞くことができました。そして毎月、欠かさず什分の一を納めることができました。しかし社会人となり、初めてお給料をいただき、什分の一を納めることになった時は、学生の頃とは、ずいぶん什分の一の額が違うのに驚きました。当たり前のことなのですが、納める額が急に千単位から万単位になったことで、青少年時代に思っていたほど甘くはないのだと感じました。それでも神様の戒めは必ず守ろうと社会人一年生の時に決意を新たにしました。

入社して三年目に私の姉が伝道に出ることになりました。(姉といっても私と姉とは双子なのですが…) 姉も働いていましたので一年半宣教師として働くだけの伝道資金

は持っていました。ですから援助する必要もなかったのですが、私は何か助けてあげたい、何か手伝いたいという気持ちがありました。以前「聖徒の道」で「宣教師の伝道資金を援助する人も共に伝道している」という内容の記事が載せられてあったのを思い出し、私も姉と共に伝道し、宣教師の家族として神様から祝福を受けたいと思い、毎月仕送りすることを決めました。姉が伝道に出た翌月から送金を欠かさず行ないました。お給料から什分の一を納め、貯金し、送金しても他の必要経費をまかなうには何の問題もありませんでした。

しばらくして、私の友達で姉と同じ頃に伝道に出たひとりの姉妹が伝道資金に困っているというのを聞きました。私は彼女をも何とかして助けてあげたいと思い、伝道資金を援助することにしました。ふたりの宣教師に送金をしてもまあ何とかやっていけるだろうと安易に考えたのが間違いの元でした。お給料から什分の一、貯金、ふたりの宣教師への送金を差し引くと、私の手元にはほんの少しのお金しか残らなくなりました。実際その残りのお金で1カ月をまかなうのは思っていたほど易しくはありませんでした。かといって送金額を減らす

気にもなれませんでした。貯金かというと、毎月自動的に天引きされるので途中でやめるとも言えず、私は残業して少しでも収入を多くしようと思いました。今まであまり残業したことのない私が遅くまで会社に残っているのを見た上司は「平田さんもやっとまじめに働く気になって残業しているんだね」といって笑っておられました。しかし女子社員ということで多くの時間残業することもなかったので、思うように収入を増やすことができませんでした。頭をひねっていくら節約しても苦しくなるばかりの状態の中で、私の心の中にとっても怖い考えが浮かんできました。

「神様は財政管理の中で貯金をしなさいと言われていたのだから私が貯金を続けることは間違っていないはずだわ。ふたりに送金することも、宣教師を助けているのだから結局は神様のみ業を助けていることになるので私は間違っていないわ。

じゃあ什分の一はどうかしら……

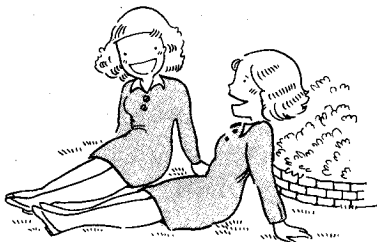
什分の一は神様の戒めで、その戒めを守めることは当然のことだけど、今の私は神様の僕であるふたりの宣教師を助けていて、その余裕がないだけなのだからふたりの宣

教師への送金が終わるまで什分の一は納めないでおこう。どうせ1年半経てばまた元のように納めることができるのだもの。神様だってきっとわかって下さるはずだわ」とまったく自分に都合の良い理屈をつけて正当化しようとしたのです。霊の父である神様よりも、肉の目に写る身近にいる私の姉と友達と私自身を愛そうとしたのです。

私は翌月から什分の一を納めないでおこうと思い、これで私も楽になれるだろうと、しばらくは気分よく過ごしていました。何日かして、ふっと、前世での私はどうしていたのかなあ…、私の現世での目的は何なのかなあ…と考える機会がありました。私は私と姉がどうして双子として生まれてきたのかを考えてみました。それまでは、ただ偶然に双子として生まれてきただけで、世界中に双子はいくらでもいるのだし、別に不思議がることでもないと思っていました。しかし、前世での私を思うと、双子の片方である姉を切り離すことはできませんでした。きっと神様のみ側で姉と共に一緒に過ごしていたのだらうと思いました。この現世に送られて来た時、神様は「お前達は、ふたりで助け合い、ふたりでないと出来ない何かを学んで私の元へ帰って来るのですよ」と言われたのだと思います。私は高慢にも「今、私は姉の伝道資金を援助して助け合っているのだから、神様の望み通りに行っているわ」と思いました。

私は頭の中で来世での様子を自分ながらに思い巡らしていました。私は次のような情景を考えていたのです。

裁きの日に神様とイエス様のみ前に、私



と姉は多くの人々と共に白い衣を着て立っていました。すでに裁きを受けて、正しい人は右側に、悪人は左側へと、分かれていました。

姉の番がきました。イエス様が姉にこう言われました。「あなたは私の戒めに忠実であり、現世において多くの人々を私の元へ導きました。あなたは1年半の伝道で私への忠誠と愛を示しました。あなたは右へ行きなさい。」

続いて私の番になりました。イエス様は私に、「あなたもお姉さんと同じ右の方へ行きたいですか」と尋ねられました。

私は自信たっぷりに「私も右の方へ行きたいです。私は現世で姉や友達の伝道を助けました」と答えました。

イエス様はとっても悲しそうな顔をされました。「確かにあなたはお姉さんや友達の伝道を助けたかもしれませんが。しかしそれが私とあなたにとって何のかかわりがあるのですか。あなたのお姉さんや友達は自分の信仰を行ないにより私に忠誠を示しました。でもあなたは、私よりもお姉さんや友達を愛し選んだのです。いくら人を助けたとしても、私とあなたとの間につながりがないければその行ないは無に等しいのです。基本である戒めを守らない人はいくら他の事柄で優れていても何の益にもならないのです。残念ですが、あなたは左の方へ行かなければなりません。双子の片方であるお姉さんは右にいます。前世、現世を共に歩んで来たふたりがこれからは永遠に離れ離れになるのです」と言われました。

私はその時思わず我に返り「こわい!!」

とつぶやきました。私は何があっても自分の戒めを破ってはいけなかったと思います。何が何でも自分の戒めを守らなければならなかったと思います。翌月、自分の戒めを納めながら、「もう決して無駄使いは許されないぞ!!」と自分に言い聞かせました。

でも案ずるより生むがやすしです。思わぬ収入があったり、前以上に節約について学び工夫することを学ぶことができました。姉が宣教師に召されて半年後、私もステーク宣教師として働く機会がありました。

姉は東京で、私は大阪で宣教師として働く喜びを感じることができました。姉に負けてはいられないと思い、良いライバル意識をもって私も大阪で頑張ろうと努めている内に伝道の大切さ素晴らしさを少しでも学ぶことができました。宣教師を送り出した家族に、神様は多くの祝福を下されると聞いた時は、もっと物質的な目に見えるような祝福だと思っていました。

確かに宣教師を送り出す家族、また宣教師を助ける人には神様は惜しみなく祝福を下さいます。私にとって、姉の伝道を通して、伝道の大切さ、素晴らしさを感じることができたことや、自分の戒めの大切さを痛切に感じることはまさしく神様の祝福であることを証します。

もしあの時自分の戒めを納めずにいたら、今もきっと何かの理由をつけて納めていなかったと思います。教会に集っていても証を得ることもできず「みたま」を感じることもなく裁きの日には神様の左に行くようなことになっていたと思います。今の私はまだまだ不完全ですが、神様が戒めを破る

と行く末はどうなるかを教えて下さったことを胸に刻み、末日聖徒として励んでいきたいと思ひます。

神様の祝福は目に見えるようなものではなく、思ってもみない形で与えられるものであることを学びました。什分の一を納めることにより天の窓が開かれ、あふれる恵みを下さることを証します。

地上に宝を蓄えるより天に宝を蓄える喜びを増し加えていきたいと思ひます。(ひらた・とみこ・24歳)

「あっ！ 慎吾ちゃんとお母さんだよ」—我が子の成長記録がテレビに—

去る3月15、16の両日に、NHKから放映された「お母さんの勉強室」—子供の成長記録、アルバム作り—という番組に、長男悟志の記録が採用されました。短い時間でしたが、家族そろって楽しく見ました。

病院で自分が抱っこされている写真が映し出されたのを見て、彼いわく、

「あっ！ 慎吾ちゃんとお母さんだよ。」皆で、大笑い。悟志はまだ2歳9カ月ですから、自分が赤ちゃんの時の写真を見て、弟の慎吾と区別がつかないのも無理はありません。

この放送を通して、熊本の父を初め、兄弟姉妹、各地の友人、知人に私たちの顔を見せることができました。テレビでのお里帰りもなかなかのものでした。

子供たちの記録として、私が作っているものには、育児日誌、写真、テープ、ベビーブック、スケッチブック（少しですが、描いています）などがあります。

これらの記録を作ろうと思ったきっかけは幾つかありますが、特に、自伝を書こうとした時に、幼い頃のことがよくわからなかったこと、また、亡き母への感謝と恩返しというような気持ちもあったのです。出産という大事を6回も果たした母に対する『御苦労様でした。そして、ありがとうございました』という気持ちを、子供たちに愛を注ぐことで表わしたかったからです。

これからも、その他の記録と同様に、子供たちが自分の手で書ける日が来るまで育児日誌を続けたいと思っています。私がこうしてペンを取っている今も、子供たちは自分たちのことを書かれているとも知らず、スヤスヤと眠っています。

私は、記録することの大切さを教えているこの教会が、真実の教会だということを証致します。そして、教会員として家族生活を送れますことを、心から感謝しています。(盛岡地方部盛岡支部・高屋敷多喜子・31歳)



◀ 悟志くん（長男）と慎吾くん（次男）

▶ テンプルスクエアに集う大会の聴衆。左はタバナクル、後方は北訪問者センター。



